
ガイア

伊紋央子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガイア

【Nコード】

N7898F

【作者名】

伊紋央子

【あらすじ】

この世に生まれたひとりの風の精霊。その精霊が母に頼まれ、地球上においての仕事を全うしようと奮闘する。輪廻転生の物語。

第一章 第一話 始まり（前書き）

この小説は、著者：伊紋央子が、自身のホームページで発表していたものを転載したものです。

この小説内で使用している宗教関連事項や過去に発表された漫画や小説、ゲーム等より抜き取ったと思われる部分があるかと思いますが、決してパクリではなく、伊紋の完全な独創です。

この物語はフィクションです。

第一章 第一話 始まり

真つ暗な闇の中で、私は生きていた。ここはどこなのか？そして私は何者なのか・・・

耳を澄ますと、なにやら楽しげな笑い声が聞こえた。いったいここは何処なのか、どうして私の周りにはこんなにも闇なのか・・・なにもわからないで居た。

急に、辺りが明るくなった。見てみると、そこには沢山の”目”があつた。小さい目や大きい目が一斉に私を見ていた。なんだか怖くなつてしまい、私は目をつぶろうと思つたが、目が動かない。どうしてだろうと考えていたら、目の持ち主が言つた。

「ねえ。ママ。これ、本当に私に？とつても綺麗なお人形さん！大事にするね！ありがとう！ママ！パパ！」
そうか・・・私は”人形”なのか・・・

私は、この姿になる前から、自分の使命を持つていた。もともとの私の魂は、地球から生まれた。太古の時に、地球は私を産み落とす、そしてこう告げた。

「長い年月が過ぎた頃、私は朽ち果てるであろう。それを救えるのは、ただ一人。私を作つた神の生まれ変わりである人物だ」と。

そのころはまだ、恐竜の住む時代。人間の存在もあるかどうかというときであつた。私は信じられなかつた。生まれ出でたばかりの私でさえ、この地球がとても綺麗な”生き物”であるとおもつていたのである。しかし、その”地球”自身は、この先の自分の身に起るであろう出来事を遠く見透かしていたのかもしれない。

生まれたばかりの私は、風の精霊であつた。仲間とともに、私

を産み落とした母なる地球の周りを延々と巡る運命であった。まだこのときは、私にとってはどうしてこの世に生まれたのかさえ考えられないほど平和であった。

年月が流れ、私は再び母なる地球に召し出された。地球は言った。「私はこれから長い眠りにつく。お前はこれから”限りある命の者”として生まれ変わる。その間にはいろいろな出来事があるだろう。その目ではつきりと見、私の滅びの原因を追求し、そして我が身体の救世主を見つけ出すことが、お前の使命になるであろう」

私はその言葉の意味さえ理解できず、おぼろげに聞いていただけであった。私の身体が”限りある命”になる？今の私は老いもない、ただの精霊であるのに、どうして母なる地球はこんなことを言うのか？解らなかつた。しかも、”限りある命”というのは、どういう存在なのか？それすらも理解できないでいた。

母なる地球が、それからしばらくして長い眠りについた。地球は今までと変わらず、美しい身体をしていた。しかし、私が空から眺めているうちに、所々から今までと違う、『変化』が見られるようになった。動物の誕生である。

動物達は、自分達の習性に基づき、いろいろな生活習慣を持って、個々のルールを自分たちでつくり、営んでいた。私にしてみれば、動物達の誕生はむしろ、喜ばしいことのように思えた。なぜなら動物達は、我が母なる地球を汚すような行いはしなかつたのだから。

時として私は動物達の傍を通り、動物達の会話を聞いた。動物達はまるで我が母から生まれ出でた者のように堂々とし、私をすぐに受け入れてくれた。そしておぼろげながら、我が母の存在もわかっているようであった。私とその仲間、動物達のことを仲間として時には助け、時には助言をし、母の思し召しを説いた。動物達は熱心にそれを聞き入れ、自分達なりの生活習慣の中に少しづつ取り入れていった。

動物達の誕生から、また長い年月が流れた。母なる地球の至るところで変化が起こった。人間の誕生である。動物達は、人間達とも共存をするべく、人間達の先導者として、知識を説こうとした。しかし人間達は、動物達を恐れ、近づこうとはしなかった。人間達は、自分達のわかる言葉を使い、動物達はその言葉が理解不能であったため、人間達の先導者としての地位を失った。

人間達は、私たちとその仲間さえをも恐れた。しばしの間、暗い洞窟の中で暮らしていたが、ある時突如、私たちの仲間である動物を”狩り”の対象とし、その肉を食らうようになった。

人間達の営みの中で、沢山のものが生まれた。その内の1つが”火”である。人間達は、動物達より能力が発達しており、草も動物も木の実も、自分達で考え、行動を起こし、体験し、生活に役立てていた。その中にはいつも、”火”の存在があった。動物達は、自分達が今まで見たこともなかった”火”に興味を示したが、人間達が同類の動物を狩り、その肉を火にあぶって食らう姿を見、次第に火に対する興味が薄れ、興味から恐怖へと変化していった。

長い年月、動物達と人間をその目で見ていて、ある時ふと気が付いた。動物も人間も”限りある命”であるということ。あの時、母なる地球が私に告げた言葉が次第に膨らんで来た。

『お前はこれから”限りある命の者”として生まれ変わる。』
しかし、そのときでさえも、精霊の命は限りなく、延々と生き続けるものであった。これから生まれ変わるとは、いったいどういうことなのか・・・私は胸の中に広がる疑問と、ある種の不安を抑えきれなかった。

私がそう考えるようになってからわずかしかたないうちに、ついに母なる地球の懸念が現実が起ころうとしていた。人間達がお互いに争い始めたのである。

それと時を同じくして、精霊達にも変化が起こった。精霊達の身体が段々薄れていくのである。どうしてそうなったのか、その原因

は何処にあるのか、それすらもわからぬまま木の精霊も、大地の精霊も、空の精霊も、我が同胞の風の精霊も、だんだんと姿が薄らいでいき、体は消え、そして魂だけが天に上り始めた。その変化は最初はわずかに起こり、そしてそれがだんだんと広がっていった。やがて精霊達は、いつ自分の存在も薄れてしまうのか見当もつかぬ恐怖に怯えて生活するようになっていた。

私の存在は、仲間が薄れていく中で、まだ変化は見られなかった。変化が現れる以前と同じように生活が出来ていた。私は不思議でならなかった。なぜ自分の存在はまだ消えようとはしないのか。母なる地球はまだ私が”限りある命”として生き返ることを望んでいないように思えた。

仲間が次第に消えうせ、天に上る姿を見ていると、とたんに恐怖と哀愁の気持ち湧いてくるようになった。自分はいつ、この世から消えうせるのか、それとも最後まで残るのだろうか、取り残された私はこれからどうすれば良いのか、毎日夢うつつにそんな事ばかりを考えていた。すでに仲間の半数は消えうせ、その魂はその後どうなったのかさえわからずにいた。

そんなことを考えている時、母なる地球上に住まわっている動物や人間達の姿を垣間見た。動物と人間達の間で、”病氣”なるものが蔓延していたのである。私はこの時、今までの人間達の愚行から、当然の報いであろうと思った。自分達のした行いのせいで、この”病氣”は発生したと考えたのである。動物達は、”病氣”を運命と受け入れ、儂くも死んでいった。しかし人間達は、運命として受け入れられず、時には死してなお、この地に留まりつづけ、拳句の果てには天からの御使いさえをも跳ね除け、ただただ自分の軀みくろの上を飛び交う存在に成り果てる者も出てきた。その存在があまりにも増えたため、私は一度ならずとも、その存在と話合うために接触を試みた。しかし、私自身は長い年月の間で人間の言葉がある程度理解できるようになってはいたものの、話をすることはかなわず、ましてや人間達は私の存在をむしろ否定していたので、受け入れようと

はせず、ただただいつものように自分の軀の上を飛び交い、嘆いているばかりであった。

人間との接触を試みたせいなのか、はたまた運命のいたずらなのか、私の身体にもようやく変化が起こり始めた。気力がうせ、空を飛び交うこともできず、母なる地球の美しい色も、なぜか突然色褪せて見えるようになった。この時点で、私以外の精霊なる存在は皆消えうせていた。私が最後に取り残されたのである。そんな私を励ましてくれたのは、動物達であった。自分達は、この世に生を受けた時から”限りある命”であり、それは運命なのだ、と言った。私は動物達と話合っているうちに、自分の使命を思い出した。ようやく自分は母なる地球に必要な存在になれるのだ。そう考えるうちに、気力がうせていく様も、なんだか心地よいものに思えてきていた。

とうとう、私の”風の精霊”としての存在が消えうせる日が来た。動物達は嘆き悲しんでくれたが、私はなぜかこの時体の隅々まで高揚し、これから起ころうとしていることが楽しみであった。

天からの御使いが舞い降り、私に告げた。

「あなたが最後の存在です。さあ、これからあなたは”限りある命”として生まれ変わります。我々に付いてきて頂きたい。」

私はそう言われ、素直に従うことにした。天からの御使いについていくと、そこは人間が存在する以前の母なる地球の姿があった。とても美しく、緑も豊かで、はるか遠くからは綺麗な川が流れていた。とある宮殿の前まで来たとき、以前の仲間達と出会った。仲間達との懐かしい再会を果たし、私の心はさらに高揚した。仲間達とのしばらくぶりの会話で、ふと気になる点があることに気がついた。

なんでも、生まれ変わる前には、ここを通るもの全員があめしい川の水を飲まなければいけないというのだ。その水をなぜ飲まなければいけないのかは、仲間達も知ってはいなかったが、その言葉

を聞いたとき、私は言い知れぬ恐怖が心の中に広がるのを感じた。

宮殿の門番の所まで来たとき、私は思い切って話かけてみた。

「あの川の水を飲まなければいけないというのはどういう理由からか？」

宮殿の門番は言った。

「あの川は”レテの川”といい、忘却の川なのだ。これからあなた方は今までの記憶をすべて消し、新たに生活をするために、この水を飲まなければならない。もし飲まなくとも、あの川を渡る時に川の水に触れるだけで、今のあなたの記憶は消されますが。」

私は突然、^{おの}慄いた。私の今の記憶を消されれば、”限りある命”として生まれても、母なる地球からの使命をまっとうすることなく死んでしまうのではないのか？なにも出来ず、朽ち果ててしまうのか？

見ると、他のかつての仲間達は、そんなことはまるで考えていないかのように、言われるまま”忘却の水”を飲み干していた。皆には私が受けたような使命は与えられていないのか？頭の中で葛藤しているうちに、とうとう私が水を飲まなければならないときが来てしまった。この時、私は、自分でも思いつかないような行動に出た。かつての仲間が皆、忘却の水を飲み、先導されて、生まれ変わる為の洞窟を抜けて行こうとしていたとき、私は水を飲ませる番兵にこう言った。

「私は”母なる存在”より、使命を言い渡されている。この水を飲み、今の記憶を消すことはできない。私だけこの水を飲まず、この水に触れることなくあちら側に行かせてはもらえないか」

番兵は、面喰らったように私を見、そしてこう言った。

「私はこの地を治める神より、この役割を与えられている。神はいつでも私達の行動を把握しておられる。しかし、今はちょうど神はお留守のようだ。母なる存在の地球より賜った使命がおりなら、うまくここを通して差し上げよう。しかし、ただでとはいかない。あなたのこれからの運命の1つを私に頂きたい。」

私は、この番兵の意味を理解する間もなく、承知した。そしてレテの川に触れることなく通り過ぎ、今、ここに存在するのである。

女の子は、私を手にとり、持ち上げた。丸いかわいい目で私を見、そしてこう言った。

「あなたのお名前を付けなきゃね。うーんと・・・ルイスってのはどうかしら？」

私は、思わず返事をしようとした。しかし声が出ない。そもそも私は”人形”という存在のことすら解っていなかった。手足を動かさうとしても一向に動かない。面食らっている私に、女の子はこう言った。

「ルイスちゃん。エミリーのかわいいお人形さん。今日は一緒に寝ましょうね。」

そうか。この子の名前はエミリーというのか。この子は・・・もしかして”人間”か？どうして私はこの子と同じように”人間”としての生を受けなかったのだ？もしや、レテの川の番兵との取引とは、こういうことなのか？ふつふつと疑問が湧いてきた。そんなこととも露知らず、エミリーは私を抱えてベッドに入った。

エミリーと一緒に、姿形が違う人間が2人、付き添って来た。

「エミリー。お誕生日おめでと。今日から8歳だね。良い夢を見てお休み。」

そういって、やさしくエミリーにキスをした。この人間は華奢な身体つきで声も高く、耳に心地よい響きであった。もうひとりの人間が言った。

「さあエミリー。今日はもう遅い。お人形さんといつまでも遊んでいないで、今日はもうお休み。」

この人間は、先ほどの人間と比べて声が数段低かった。エミリーは、

二人の人間に向かって言った。

「は〜い。パパ。ママ。お休みなさい。」

「お休み。」

パパと言われた男がそう言った。傍らでママと言われた女が微笑んでいた。

エミリーはしばらくベッドの中で、私に一方的に話をしていた。人間というものはこんなにもおしゃべりなのか、と面食らっているうちに、私はこの子の会話から、いろいろなことがわかってきた。

私はビスクドールという”人形”であること。今日はエミリーの誕生日だったので、パパが買ってきてくれたのだという。その前には、おもちゃ屋のショーウィンドウの中でこの子は私を見ていたらしいが、私のその時の記憶はまったく無かった。私のような人形は、人間が作り上げたものであること。私の体は『陶器』で出来ている事。とても慎重に作られた、精巧なる技術が詰まっていること。とても高価であること。そしてなにより、私は美しいらしいこと。しかしそう言われても、私は自身の姿形を見たことがないのであまりピンとこなかった。

話をしているうちにエミリーは、静かに息をして、眠りについた。私は眠ることすら出来ず、なにをし、なにを考えればよいのか解らないで居た。

その時、エミリーの体のあたりから不思議な光が現れ、その光がだんだんと大きくなっていった。その光の中では、エミリーが楽しそうに私と遊んでいる風景が現れた。いろいろな景色が見え、エミリーと一緒に空を飛んでいた。私はこの現象にとっても興味を覚え、光に近づこうとした。そのとたんに私の身体は空中を駆け、光に吸い込まれてしまった。

私は自分自身がどうなったのか解らずただただびっくりしていた。エミリーは私を抱き上げ、やさしく言った。

「あら。ルイスったら、ベッドから落ちちゃったのね。よしよし、痛くないよ。」

私は思わずエミリーに言った。

「ありがとう。でも大丈夫。何処もなんともないらしいから。」
言った後でびっくりした。エミリーもびっくりしていた。しかししばらくしてエミリーはニコツとして言った。

「あはは。ここは夢の中なのね。びっくりしちゃった。夢の中なら、なんでも出来るものね。でも、よかった。エミリーもルイスとお話をしたかったの。」

私はこの現象を理解出来ないで居た。どうやらここはエミリーの夢の中らしい。私はこの子の夢の中に吸い込まれていたのだ。私の能力とは、こういうことが出来ることなのか。面食らってばかりの私にエミリーはいろいろな場所を見せてくれた。この子の夢の中とはいえ、なんとも鮮やかで繊細な景色なのだろうと感心するばかりで、この子がいろいろ話していることもほとんど聞こえていなかった。不思議なことに、夢の中での私は大地を感じ、風を感じ、手足を動かすことが出来た。痛みや触られたときの感触もあった。まるで、”風の精霊”として生きていたときのように、すべてを感じることができた。この日はエミリーと一晩中（とはいってもエミリーは寝ているのだが）遊んだ。身体を動かすことが、久しぶりのような気さえしていた。

明け方近くなり、だんだん景色が遠のいていった。エミリーの脳が目覚めの準備をしたのである。この短い時間の中でだけしか身体を動かすことが出来ないことをさびしく思えた。このひと時が過ぎてしまえば、私はまた人形に戻ってしまう。手足も動かさず、

しゃべることもかなわぬただの人形に・・・

夜明けが訪れ、エミリーの目覚めの時が来た。家の一階ではママが朝食の支度をしてる音が聞こえた。私はエミリーの夢からあつという間にはじき出され、人形に戻っていた。エミリーの傍らに光っていた不思議な光は、次第にエミリーのそばで縮んでいき、そして消えた。

陽が高くなり、ママがエミリーの部屋のドアを叩いた。エミリーはまだ寝ている。

「エミリー！起きる時間よ。学校に行くんでしょう？早く支度しなさい。」

大抵の子供と同じように、エミリーもベッドの中でごそごそと動いて、また眠りについてしまった。ママが今度はさっきよりも激しくドアを叩いて言った。

「エミリー！起きないと学校に遅刻しちゃうわよ！」

エミリーは、ようやく目覚めた。そして眠そうな目を擦りながら、私に向かって言った。

「ふふつ。昨日は楽しかったわね。今日もまた遊びましょうね。」
エミリーはもそもそと着替えて一階に下りていった。

私は昨夜の不思議な体験を思い浮かべては、首をかしげた（実際に首が曲がるわけではないが）。わからないことがあまりにもたくさんありすぎて、私はなにかから考えればよいのかわからずにいる。頭の中は半ばパニック状態になりかけていたのかもしれない。そして一呼吸置いた後むしように眠くなり、意識が遠のいていった。

気が付くと、私は光の中にいた。エミリーが学校に行った後、ママがエミリーの部屋のカーテンを開けたのだ。まぶしい日の光が懐かしくさえ思えた。ママは忙しそうにエミリーの部屋を片付け、

掃除をし、洗濯物を持っていった。

再び部屋に沈黙が訪れた。体を動かしたくても動かない。声を出したくても出せない、そんな葛藤の中で、次第にざわざわとした音が聞こえるようになった。そう、最初は私はその音を『音』だと思ったのだが、よく聞いてみると、どうやら『声』のようだ。そして動かぬ体をねじるようにして辺りを見てみると、なんと、エミリの部屋の中に”居る”人形たちの声であることがわかった。人形たちは、どうやら私が珍しいらしい。ひそひそとお互いに話をしては私を見物しに来ていた。私は不思議でならなかった。私はエミリの夢の中でしか体を動かすことができないのに、どうして私のほかの人形たちは自由に動くことができるのか。声が出るようなら声に出して問い掛けてみたかった。しかしやはり声が出ない。胸の中で渦巻くたくさんの質問に気が付いたように、一人のふくろうのぬいぐるみが私に近づいていった。

「あなたはどうか動けないらしいな。われらは本当は、人間が居ない時に限り動けるんだよ。人間は、むしろ人形が動いたところを見たことがないから知らないだけなんだ。われらは人間が居るところでは動けない。しかし人間が居ないところでは、人間と同じように動けるし、話もできるんだよ。あんたもやってごらん。きつとできるはずだから。まあ、最初のうちは、体がこわばっていて、なかなか思うようにはいかないだろうけどのう。」

このふくろうのぬいぐるみは古ぼけていて、かなりの長い年月、この部屋で暮らしていたんだろうということがわかった。と、ふいに下の方からもはつきりとした声がした。

「オウルじいさん。こいつはもしかすると本当に動けないのかもしれないよ。僕は話に聞いたことがあるんだ。こいつが居た人形の店でただ一体だけ、手足も体も動かせない人形がいるって。こいつは

もしかするとそれなんじゃないのか？」

そう下からの声があったとたんに、部屋中がざわめきはじめた。先ほどのオウルじいさんが言った。

「ふむ。そういえばそんな話を聞いたことがあったな。そうかもしれぬ。しかし、いくらそうだとしても、まさか話しさえもできないとは思えん。声は出ないのかね？出してみようかと努力してごらん。」
私は心の中でこうつぶやいた。

「体を動かすことも、声を出すことも何度もやってみたが・・・出来なかった。私は本当に声が出るのか？体が動かせるのか？」
心の声を聞き取ったように、オウルじいさんが言った。

「ほっほっほ。そうか。何度かやってみたか。しかしのう、人間の居るところでは、その努力もかなわぬことじゃ。わしらは人間が居ないところでしか動けぬのでう。だから、今一度やってみたらどうじゃ？お若いの。」

私は再度やってみることにした。こわばった体をなんとか動かそうとし、声を出そうとした。しかしやはり出来なかった。

「ふむ・・・やはり・・・」
オウルじいさんが言った。

「時々そういうやつがあるよ。魂に傷を持った生き物・・・いや、わしらは実際には生きてはおらぬがのう。わしらは人形として生まれたが、不思議なことに、こうして動くことが出来る。これは神がくださった我々への贈り物だと思つとる。わしらの魂は人間と同じ魂でな、もちろん天に召されることもあるが、大抵の場合は体が朽ち果てるのが先で、体が朽ち果て、魂を入れておけなくなったときに、その体からはじき出され、わしらの魂も天に召されることになるのじゃ。それまでは何十年も何百年も生き続けることになるのじゃ。大事にされた人形は、それだけ長生きするということじゃ。わしなぞ、もうかれこれ20年は生きておる。エミリーのママが子供

のころに生まれたのでう。」

私はこのオウルじいさんの言葉を聞いて、とたんに悲しくなった。では、私はなにもできぬ運命にあるというのか？私は知らなかったのだが、レテの川の番兵と交わした『取引』というのは、まさにこのことだったのだ。では、私は動けず、声も出せず、これからどう生きていけばよいのか？なにもかもがわからなくなった。

そのとき、エミリーの部屋の中に居る人形たちが、私の置いてあるたんすの上に乗ってきた。機械的な飛行能力があるおもちゃを自在にあやつり、興味深々で、一目見ようと押しかけてきたのだ。その中で、ひときわ小さい熊の人形が甲高い声で言った。

「大丈夫。心配しないでいいよ。僕らは君の思っていることがわかる。心が通じ合えるんだと思うんだ。そんなに思いつめないで。」

「おっと。僕の名前はデイジニアっていうんだ。ジュニアと読んでくれ。よろしくな。ところで君の名前は僕はもう知ってるよ。ルイスって言うんだろ？昨日エミリーが君に名前を付けたのを僕は聞いてたからね。」

他の人形たちもうなずいていた。そうか、私は声を出すことも、体を動かすこともかなわないが、人形たちと心が通じ合えるのか。なんとなくほっとした。私は他の人形たちにわかるよう、レテの番人との取引を心に描いてみた。オウルじいさんが驚いたように言った。

「そうか。そんなことがあったのか。じゃが、わしらはこの先天に召されたときはまた、レテの川の水を飲むじやろう。すべてを忘れてな。あんたはきつと、なにか大事なことがあるのじやろうのう。しかしわしらの記憶は永遠にあるものではなく、次第に薄れていきよるが、覚えている間だけでもお前さんを助けてやれるかもしれない。ただ、お前さんはまだこの世の中のことを何一つわかつちやいない

じやろう？動けぬ体というのも、世間を見るための試練であると思えば、そんな悪いものではないかもしれんぞ。ふおっふおっふおっ。

「
オウルじいさんが愉快そうに笑ったとき、他の人形やぬいぐるみたちも同じように微笑んでいた。どうやら私はここで新しい『仲間』を見つけられたようだ。そう思ったとき、ふっと気分が軽くなったのがわかった。」

第一章 第二話 仲間達

相も変わらず私だけ動けぬ体のままの生活が続いていた。

私は他のぬいぐるみや人形たちの会話から、人間たちのいろいろなことを学んだ。エミリーが通っているという『学校』のことや、『学校』がどういうものであるかなどである。

ジュニアが言った。

「エミリーは、空想が好きな女の子なんだ。でも、それが災いして、クラスのいじめっ子たちにいじめられるらしい。人間ってのは、意地の悪いやつがいるもんだよね。僕たちは、話が出るのと同時に、その人の気持ちもある程度解る。だからお互いの気持ちがすれ違うようなことってのは、ほとんどないよね。人間ってのは、面倒な生き物だよ。」

「気持ちのすれ違いが生じているにも関わらず、人間ってのは、お互いに納得するまで話合おうとはしないらしいよ。どこかで妥協し合って生きているように見えるね。あたしはそれが一番嫌だわ。」

隅にいた女の人形が突然口をはさんだ。

「そうさ。バービーのいう通りなんだ。ほんと、人間に生まれなくてよかったよ。」

と、続けてジュニアが言った。オウルじいさんがなぜか得意げな態度でジュニアに言った。

「ほっほ。ジュニアよ。おまえさんも前世では人間だったかもしれないのじゃよ。」

「なんだよ！じいさん！僕の前世を知ってるのか！」

「そうかもしれないぞ。ほっほっほ。」

ジュニアとオウルじいさんの言い争いの中、私は窓の外を眺めた。今日は天気がとてもよく、気持ちのよい日であった。私がいつも置かれている場所はいく窓辺ではないのだが、目の前の窓から外が少しだけ覗くことが出来るので、時々気が付くと私はいつも窓の外を眺めていた。しかし、人間たちの動向が窓からみえるわけではなく、ただ空を眺めているに過ぎないのだが、それでも私はいつも窓の外を眺めては気持ちが安らぐのだった。

日が傾き、夕暮れに近い時間になった時、エミリーが学校から帰ってきた。暗い面持ちで・・・人形たちはそれぞれ自分たちの場所に戻っていった。

部屋に着くなり、エミリーは椅子に座り、黙り込んでいた。そして大きなため息をつき、しばらく物思いに耽っていた。夜になってもまだ、エミリーは黙ったまま、机に突っ伏して黙っていた。あたりが完全に真っ暗になった時、ようやくエミリーは立ち上がった。そして部屋を出て、下の階へ降りていった。

ジュニアが言った。

「また・・・また学校で嫌なことを言われたんだな。」他の人形達は黙ったままだった。

しばらく下の階でエミリーは自分の両親を探していた。声を張り上げ、寂しさを紛らわすように。しかしどこからも返事がなかった。そして突然静かになり、エミリーは自分の部屋に戻ってきた。

「そっか・・・今日はパパとママの結婚記念日で、二人だけで外で食事をするって言ってたわ。」

がっかりしたようにエミリーは言った。そして、私の方に向き直り、私を抱き上げ、そのまま下の階へ降りていった。エミリーは私に微笑みかけ、そして言った。

「あゝあ。つまらないことを考えていたせいでおなかがすいちゃった。ね。ルイスもいっしょに食べよう！ママが用意してくれた夜ご飯を。」

そしてエミリーは、まるでままごとをするかのように、私の口元に食事を運び、楽しそうにママが用意してくれたご飯を食べた。その間中、ずっとエミリーは私に語りかけていた。

「ママの料理は最高なのよ。ほら。ね。おいしいでしょう？ふふっ。ルイスといっしょに居ると、エミリーも楽しくなるわ。今日の嫌なことも忘れちゃうわね。」

そういうと、突然また暗い顔をした。そして私に愚痴をこぼした。私はその話を聞きながら、なんだか急にエミリーがかわいそうになった。昼間に聞いたジュニアやバービーの言葉がよぎる。

『人間の中にも意地の悪いやつがいるもんだ。』

しかし、愚痴を言い終えると、まるですっきりしたかのように私に今度は楽しそうに両親のことを話し始めた。両親はとてもエミリーのことをかわいがってくれているらしい。自分の子供というものがどういう存在なのか、私にはわからなかったが、風の精霊であったとき、動物達に感じたような気持ちなのではないかと、過去を思い起こしていた。

私が過去を思い起こし、物思いに耽っていると、突然エミリーが大きな音と共に、崩れ落ち、床に倒れてしまった。私は訳がわからず、ただ眺めているだけだった。私の困惑の気持ち、二階に居る仲間達に伝わったのか、私の耳にオウルの声が響いた。

「どうやらエミリーは病気になったようじゃな。まあ、こんなこと

はたびたびあるのです。びっくりせんでもよい。それより、エミリーをどうにかせんとな。」

そうか。これが”病氣”というもののなのか。だが、一体どうしてこんな風になってしまうのか。私にはまったくわからなかった。しかも私は今エミリーと同じ部屋に居る。人形は、人間が居る部屋の中では動けない。もし、動ける体だったとしても、わたしは何をすればよいのかがまったくわからない。困惑する私の前に、突然オウルが現れた。

「なぜか今だけ、しかもわたしだけはここでも動けるようじゃ。このこは熱がある。こういうときには、タオルをぬらして額にあてがうのじゃ。」

言うが早いか、オウルはさっさと小さいタオルを探し当て、水にぬらしてエミリーの額に当てた。

「お前さんはなにも出来んのじゃろう？前のように、エミリーの夢の中にも入れないのかのお。」

そういつて、オウルもまた床に落ちた。私は慌ててオウルの方を向こうとした。一体なにが起こったのだらう。困惑する私に、オウルは付け加えた。

「わしはぬいぐるみじゃ。ぬいぐるみは水に弱い。水を含んでしまうと、体が重くなり、言うことを聞かぬ。おまえさん、もし、またエミリーの夢の中に入れるようなら、夢の中のエミリーに、がんばれと言ってやっておくれ。ジュニアは今、両親の所へ電話を掛けるのでう。なあに。心配はいらん。人間というものは、いつも不可解な出来事に出会うと、先祖の霊だとか、そういうものに助けられたのだと思ひ込む。ジュニアのこともきつと、先祖の霊だと思つじやろう。」

オウルはそういうと、床に倒れたまま、動かなかった。エミリーの意識が遠のいていくのが解った。そして、以前のように、エミリーの体から、不思議な光が出てきた。しかし、以前なら、その光は現れたと同時にどんどん膨らんでいき、そして夢の中を覗くことが出来たのだが、今度はそうはいかなかった。エミリーが”病氣”だからなのかどうなのか、光は一向に膨らまず、弱い光は次第に薄れていくような感じがした。私は慌てて光の中に入ろうとしてみた。すると、また光の中に吸い込まれるようにして入っていった。私はあたりを見回した。以前とは違い、エミリーの夢の中の空気はよどみ、世界がすべて色あせ、蒸し暑かった。遠くに目を凝らして見ると、エミリーが横たわっていた。私はすぐさまエミリーのところに駆け寄った。

「一体、どうしたというの？大丈夫？すっかりして！」

私がエミリーの耳元で叫ぶと、エミリーは苦しそうに私の方を向き、そして笑いかけながら言った。

「今日の朝、学校に行ったとき、クラスのいじめっ子が私に向かって水の入ったバケツを投げつけてきたの。びしょぬれになったけど、なんとか我慢して授業を受けたの。でも、それが原因で風邪を引いたみたい。体が熱い……」

私はエミリーの体に手を当ててみた。体のどこもかしこも熱くなっており、冷や汗がにじんでいた。

「大丈夫？頑張って！今、ご両親が帰ってくるから。」

私がそういうと、エミリーはにこりと笑い、そのまま意識を失った。

エミリーが意識を失ったとき、私もエミリーの夢の中からはじき出されてしまった。そして、私がもう一度光の中に入ることを望んでいたにも関わらず、光は薄れ、消えてしまった。二階の部屋でジュニアが悔しそうに叫んでいた。

「ちきしょう！どうしていつまでも信じてくれないんだ！！」
ジュニアの声が耳に響いてきた。

「エミリーの部屋にある電話で、両親の所に電話したんだが、駄目だ！取り合ってくれないんだ！こうなったら、僕達でエミリーを部屋まで運ぶしかない。そのままそこに寝かせておけば、もっとひどくなるぞ。」

その時、意識がなくなったはずのオウルが言った。

「いや、ジュニアよ。おまえさんたちで部屋から毛布を持ってきて掛けておやり。そのほうが手間が掛からんだろう。」
そしてまた、オウルも意識が無くなった。

しばらくして、飛行能力のある人形とジュニア、バービー、その他数名で、毛布を下のエミリーの居る部屋まで運んできた。しかし、エミリーの居る部屋まで入ろうとしたとたん、体がこわばり、動けなくなってしまった。仕方なく、部屋の入り口まで運んだ毛布をそのままにして、バービーに助けられながら、二階のエミリーの部屋へと戻っていった。戻る途中でジュニアが悔しそうに言った。

「くそつ。どうしてオウルじいさんだけが動けるんだ！僕達の体が動けばいいのに！こうなったら後はじいさんに任せるしかない。」
その言葉を聞いて、私はなにも出来ない自分の体が恨めしくなった。この体がこの一時だけでも動くことができれば・・・そう思いながら、必死になって動こうとしていた。

その時、突然床に落ちたままの毛布が宙に浮いた。オウルが全身全霊を込めて起き上がり、毛布をエミリーのところまで運んでくれたのだった。そして、エミリーの上に毛布を落とし、そのままたしても床にボトリと落ちた。

私はようやくほっと胸を撫で下ろした。これでしばらくは大丈夫だろう。安堵の気持ちから、私の意識もいつしか遠のいていった。

気が付くと、私はいつものエミリーの部屋にいた。エミリーのベッドの傍らに両親の顔があった。まだ薄暗い時間であった。あれから、両親は半信半疑のまま家に戻り、そしてキッチンで倒れているエミリーを見つけ、ベッドに運んだらしい。エミリーはまだ、苦しそうな息遣いで居たが、両親は額のタオルをひっきりなしに濡らしてはエミリーの額に乗せていた。夜の暗い空に太陽が昇るころ、ようやく両親は安心したかのようにそろって下の階に降りていった。エミリーを見ると、今まで苦しそうな息遣いだったのに、静かな息遣いに戻っていた。

朝、またママが来てエミリーの額に手を当てた。ママは言った。「少し熱は下がったみたいね。でも、今はお薬が効いてるだけだと思うわ。今日は一日寝てらっしゃい。お医者様にも来て貰いましょう。それにしても変よね。昨日、ママとパパが食事をしているとき、ひっきりなしに電話が来たのよ。あなただけしかあの店にいるって知らないはずなのに。しかも、その電話口の人ったら、「エミリーが熱を出した！早く帰って来て！」とばかり言うのよ。男の子の声だったけど、誰か来ていたの？」

ママのその言葉を聞いて、エミリーも首をかしげた。「ううん。昨日は私一人だったわ。それとこのお人形のルイスだけよ。男の子なんて誰もいなかったわ。」

「そうなの？しかも。ママの大事なふくろくんまでキッチンの床に、それもなぜか水浸しで転がっていたのよ。あなた、なにかしたの？」

「なにもしてないわ。ママ。エミリーはママのふくろうさんと遊んだことないもの。」

「変ねえ・・・そういえば、あなたの額に乗っていたタオルも水浸しで絞っていかなかったみたいだったわ。ふくろうくんのぬれているところも両方の羽の部分だけだったし。まあ、いいわ。ふくろうくんはランドリーで乾かしたし、あなたもお医者様が来るまで、寝てなさいね。」

そういうと、ママは下の階に降りていった。エミリーはふふっと笑い、独り言のように言った。

「きつと、ママのふくろうさんが私を助けてくれたんだわ。ありがとう。ふくろうさん。」

そういって、エミリーは深い眠りについた。

エミリーが寝てしまった後、ジュニアが不満げに言った。

「ちえつ。僕だって、必死に電話掛けたのに。感謝されるのはオウルじいさんだけかよ。」

仲間達はくすくすと笑っていた。ジュニアの言葉が本心ではないことは、みんな解っていた。

午後になって、ようやく医者 came。医者はエミリーの様子をうかがい、薬を処方して言った。

「軽い風邪ですな。まあ、2・3日もすれば、元気になるでしょう。」

それだけ言って、医者は帰った。忙しいらしく、すぐにまた別の患者さんの所に行くのだそうだ。

医者の言った通り、2・3日で回復したエミリーは、元気にまた、学校に行った。ママはまた、忙しそうに家事をやっていた。ここ2・3日、要するにエミリーが回復するまでの間、ママがエミリーの部屋にしょっちゅう来ていたので、私達人形は動くこともかなわずにいた。オウルじいさんも元気になって帰ってきた。

「いやあ、まいったよ。あの『乾燥機』というものは。目は回るわ、

熱いわでのう。もう二度と入りたくないわい。」

みんな、オウルじいさんが無事に帰ってきたことを喜んでいた。私
はこの頼もしい『仲間達』が、とても誇らしく思えた。

第一章 第三話 生命の尊さ

エミリーは14歳になった。学校は地域の学校から私立の学校へと変わり、楽しく通っているらしいが勉強は難しくなったようで、エミリーは以前のように私やジュニア達とはめったに遊ばなくなっていた。しかし時折、私に向かっていろいろと話掛けてくれていた。短い時間だけだが・・・

私もこの世界について、いろいろと解ったことがあった。この世界が今、どうなっているのかや、遠くの国で戦争が起こっていることなどだ。以前よりは私の中での人間の地位は高まったものの、やはり愚かな行為をするものだと思った。

オウルじいさんは、近頃特に物忘れが激しくなった。さつき聞いたことも、次の瞬間には忘れていたといった風であった。仲間達は口を揃えて言った。

「じいさんの命はもう長くはない」

と。珍しいことに、オウルじいさんの場合は、体はまだキチンとしているのに、精神（魂）が老化してきていた。だが、仲間達が言うところによると、魂がどんなに老化していても、体がキチンとしているうちは、魂も解放されずにいるらしいのだ。これは人形たちにとってはとても苦痛なことだという。私は自分が生まれてから何年たっているのか解っておらず、しかも私の意識がはっきりしたのは、この家に持って来られたときだったので、自分がどのくらいの年を生きているのかさえ、解っていなかった。

あるとき、ママが言った。どうやら私の体には、生年月日が記されているらしい。そして、調べた結果、私はこの家を買われてくるまでの間、ショーウィンドウの中で3年を過ごしたらしい。その

3年もの間、私は意識がないまま、ただ飾られていたらしいのだ。

何一つ、変わらぬ日常が大きく変化したのは、その年の秋のことだった。それは私が誕生した日でもあった。仲間達はみんな私の誕生日を祝ってくれたが、そんな中、突然、ママが倒れた。このとき、私は前のエミリーのように風邪という名の病気なのではないかと樂觀視していた。が、けたたましいサイレンと共に、しばらくの間この家の住人は居なくなった。仲間達は不安になった。何が起ったのか解らぬまま、時だけが過ぎていった。仲間達はみんな、これから起こることを予想だにしていなかった。

2・3日すると、エミリーがパパと二人で帰ってきた。二人とも、沈痛な面持ちで、ママの荷造りをしていた。エミリーが私に言った。

「ママ、結核なんですって。入院することになったの。私もしばらくしたらまたママのお見舞いに行くわ。そのときはあなたも一緒に行きましょう。」

私は『結核』の意味さえわからず、ただエミリーの言葉を聞いていただけであった。エミリーの表情から見ると、どうやらその『結核』というものは、病気の種類らしく、かなりの重い病気であるらしかった。エミリーがふたたび荷物を持って出かけると、バービーが口を開いた。

「結核……。私の前のご主人が結核で亡くなったわ。今の医学ではどうすることもできない難病らしいの。私、結核で亡くなった前のご主人の傍にいたことが多かったから、きっと私のどこかにまだ結核の病原菌が残っていたんだわ。」

バービーはそういうと、突然おろおろと泣き出した。ジュニアがバービーの傍に行き、慰めた。

「きつと違うよ。君のせいじゃない。だって君はサナトリウムから帰ってくるとき、全身を消毒されただろう？消毒臭いって、自分

でそう言っていたじゃないか。元気だせよ。君のご主人が亡くなつてからかなりの年月が経つてゐる。きつと今の医学では治る病気になつてゐるはずさ。」

そんな励ましを言つていても、ジュニアにさえ、本当に現代の医学で結核が治るところまで来ているかどうかなど、解らなかつた。しかし、そういつて慰めるより他の方法が見つからない苛立ちが私にも伝わつてきていた。オウルじいさんはぼんやりとした表情で窓の外を眺めていた。

次の日曜日、エミリーは私を連れて、サナトリウムに向かつた。私はこのとき初めて外の景色と空気に触れた。空気は何処となくどんよりとしていて、今にも雨が降り出しそうだった。風は冷たく、もうすぐ冬になる気配がした。外を歩くとき、エミリーは私にしきりに話し掛けた。ママを心配する気持ちがどんどん募り、エミリー自身、どうすることも出来ないでいたようだった。そんな気持ちを抑えるかのように、私にいろいろと話をした。私は黙つて話を聞いているだけだったが、初めて見る外の世界に気持ちが高揚していた。

サナトリウムに着いた。建物の中は消毒くさく、居心地の悪い場所だった。私の高揚とした気分は一瞬にしてふつとび、私はエミリーに抱かれ、ママの病室に向かつた。受け付けを済ませると、私は服を脱がされ、エミリーは全身白ずくめの服を着、顔を覆うほどのマスクをし、帽子を被り、病室の中に入つていった。

ママの病室は、ガラスに隔たれ、直接話しをするのも近くにあるマイクを通してしか出来なかつた。ママはやつれた様子でとても痛々しかつた。ついさつき感じた高揚とした気分になつた私自身を恥ずかしく思つた。しかし、エミリーの顔を見るとママはとたんに顔に血の気が戻り、いつものように元気な話し方になつた。エミ

リーもママの元気な姿に安堵したようだった。

受け付けに戻り、私は全身を消毒され、服を着せられていた。エミリーはママへの着替えやらの届け物を渡し、私を来た時と同じように抱いて家路に向かった。途中、エミリーは私にまたしても話し掛けた。その話だと、ママはエミリーの前でだけ、気丈に振舞っているだけのようだった。なぜ、人間がそのようなことまでわかるのか、以前仲間達が話していた言葉が蘇ってきた。『人間は、人間同士では気持ちを通じ合うことがない』と。しかし、今現在見ている限りでは、エミリーとママの間には確かに気持ちを通じているように見える。それはきつと、心を許しあえた者同士だけが感じるこゝとが出来る直感というものだろうと、後にバービーが言っていた。

家に着くと、パパが仕事から帰って来ていた。外は夕暮れを過ぎ、段々暗くなっていった。エミリーは私を部屋に置き、その足で下に降り、手洗いとうがいをしして食卓に着いた。

私が帰ってくると、ジュニアがものめずらしそうに私を質問攻めにした。サナトリウムはどこなところか、外はどんな感じだったか、そしてママの様子はどうかをいくつか聞かれた。それを見て、バービーが痛々しそうに言った。

「サナトリウムなんて、行くもんじゃないわよ。でも、あたしが行ったところは、外の景色がきれいなところだったわ。それより、じいさんの様子がおかしいのよ。ママが倒れた日あたりから、突然訳のわからないことばかり口走るようになったわ。どうしちゃったのかしら。」

バービーがそういうと、みんな、オウルじいさんの方を見た。じいさんは相変わらず外を眺めていた。なにもしゃべらず、ただただ外を眺めていた。夜半過ぎ、オウルが突然しゃべり始めた。

「おお。そうか。もう長くはないのだな。わしもおまえさんと一緒

に行きたいのう。人形の魂は、衰えるのが早いのでう。人間ならまだまだ先が長いかもしれんが、わしらはそうもいかぬのでなあ。おまえさんの元にわしも行こう。おまえさんと一緒に生涯を閉じるのもよからう。これも運命じゃろうて。」

オウルがそういうと、突然バービーが我を忘れたように叫んだ。

「オウルじいさん！ダメだよ！行っちゃダメだよ！あなた、自分の命を粗末にするつもりかい？サナトリウムに行けば、あなたの体は焼かれる。もうここに戻って来られなくなるんだよ！あたしの以前の仲間もみんな焼かれたんだ！私は体が布で出来ていたわけじゃないから、消毒だけで済んだけど、じいさんは全身布で出来ている。正真正銘のぬいぐるみだ。あなたは絶対にここに戻っては来られなくなるんだよ！絶対行っちゃダメだよ！！」

オウルじいさんはそれつきりひとこともしゃべらず、また、いつものように外を眺めているだけであった。

日に日にママが弱っていくのを私たちは感じた。ママに直接会わずとも、エミリーやパパの態度で解るし、ママの容態のことを二人で話し合っているのを耳にしたりもしていたからだ。私たちでさえ、気持ちが悪んでいくのが解った。オウルじいさんは、相変わらず時々発する言葉がまるでママと会話をしているような感じていたし、言葉を発した後や発する前は無表情で外の景色を呆然と眺めているだけだった。オウルの態度でも、ママの容態がどんな風なのかがなんとなく私たちには解った。

やはり、この時代の医学では、結核というものは不治の病とされているらしい。ママは自分と同じサナトリウム内に居る人たちが次々と居なくなることにある種の恐怖を感じていた。私やエミリーが時々見舞いに行くと、涙を流して喜び、そして、悲しそうに未来の話をした。私もエミリーもその姿を見て、痛々しく思い、段々とエミリーでさえもママのいるサナトリウムに足が向かわなくなっていく

た。

あるとき、久しぶりにエミリーが寝ているときに私はエミリーの夢の中に入りたいという葛藤が生じ、光の中に身を投じた。

夢の中でエミリーは、今までとは違い、とても悲しい雰囲気に包まれていた。私はエミリーの気持ちを察してはいたが、それよりもママの心配の方が大きく、しばらくママの所に行っていないエミリーを勇気付けるためにエミリーと話がしたかった。

夢の中でエミリーもまた、悲嘆にくれていた。私はその姿を見たとき、エミリーにどうやって話し掛ければよいのか解らず、エミリーの傍で立ち尽くしていた。半ば、半狂乱になりかけていたエミリーをどうすれば勇気付けることが出来るのか、なにも考えられなくなってしまうた。エミリーの夢の世界をゆっくり見回すと、最初に来た時には青々と茂っていた緑も、空も、なにもかもがよどんでしまっていた。私は心の中で強く念じた。前のような美しい世界を今一度ここで見られるようにと。するとあたりは急に明るくなり、よどんでいた空気も清浄化し、緑の色も空の色もたちまち美しい色に変わった。まるで魔法でも使ったかのように……。

美しい緑や空に囲まれ、エミリーは呆然としてあたりを見回した。そしてしばらくの間、エミリーは空を見上げたまま動かなかった。私はそのエミリーに、今ここで敢えて話掛けることはしなかった。エミリーの気持ちが次第に晴れていくのが解ったからだ。そして私はエミリーの夢の中から出た。自分の意志で……。人形に戻り、私はそのまま眠りについた。

次の日、エミリーが目覚めてみると、前の日とはうって変わって晴れ晴れとした表情に戻っていた。エミリーのいつもの表情である。顔は前の日とは明らかに違い、青白かった顔が赤みを帯び、目はきらきらと輝いていた。不安はまだ完全に取り除かれた訳ではな

いが、自分がうじうじしていても仕方がないと、ある種の覚悟を決めたようでもあった。そのエミリーの表情を見て勇気付けられたのはパパであり、私たち人形の方であったことは言うまでもない。ジュニアがからかうように私に言った。

「すげえや。一体どんなまじないを掛けたんだ？」

エミリーは、また私を連れてサナトリウムに向かった。そしてママに会うと、ママは突然思い出したかのようにエミリーに言った。

「私のふくろっくんをどうか、ここに連れて来て欲しいの。」

と。エミリーは、ママの容態をパパから聞き、もう長くない命であることを知っていた。そのため、エミリーはこのママの申し出を快く引き受けた。そして次の日にはオウルじいさんはこのサナトリウムに連れてこられた。オウルはうれしそうだった。

しばらくすると、ママはベッドから起き上がることが出来なくなっていた。体力が底をついたのである。しかし、ママの表情はオウルが来て以来、ずっとうれしそうなお表情だった。

ママはいつも私たちが見舞いに行くと、残される家族のエミリーやパパのことを心配していた。そんなママを見て私は、自分の身を省みずエミリーのことを心配するこの人間に圧倒されていた。人間というものは、こんなにも苦しみながらでも生きていかなければならない存在なのか、と。そして人間のこの精神的な強さに尊敬の念を抱いた。私はこのときほど、人間をいとおしく思ったことはなかった。母なる地球が私に下した『限りある命の存在』。この存在には私たち元精霊にはない、最上の贈り物を受けたのではないのかと思うほど、神がかり的な存在に思えた。そして私は悟った。人間は、生と死を見つめながら、愛を感じるのだということ。

日に日に弱っていくママを見、パパもエミリーも不安を隠しきれなかった。そして、いつの日か、サナトリウムに足しげく通うこと

が日課になっていった。私は連れていかれたときには、全身消毒をされ、消毒のにおいに鬱になっていた。しかしやはり主人たるエミリーのことも、そしてエミリーが最も心配しているママのことも忘れることはなく、連れていかれる時でも、それを拒む気には到底なれなかった。

ある、晴れた冬の日、突然オウルじいさんが家にやって来た。しかし様子がおかしい。オウルの体は半分透けて見えた。オウルは言った。

「わしは今、靈魂だけをここに飛ばしている。わしはそろそろエミリーのママと一緒に旅立つ。その前にみんなにお別れをと思ってな。今まで楽しかったよ。ありがとうな。」

みんなは困惑した表情で言った。

「では、やはりエミリーのママは……」そう、バービーが言いかけたとき、オウルがうなずきながら言った。

「うむ。アンナの命はこれで尽きる。アンナはみんなとも会いたがっていたし、この家に戻りたがっていたが、よもやそれもかなわぬこと。もつと別の病気なら、この家を見てから天に召されることもできたであろうに。」

俯いていたジュニアが突如顔を上げて言った。

「じいさん、じいさんだつて、まだ早いんじゃないのかい？ 体の方はピンピンしてるじゃないか。」

すると、オウルが厳しい表情で言った。

「みんな、わかっておるはずじゃ。わしら人形は人間とは違い、人間よりも長生きできるかもしれん。しかしそれはあくまでも見た目だけのこと。精神は人間よりも早く歳をとる。そして老化する。体はそのまま残るが、老化した後の精神はなにも感じず、なにも見えず、ただ闇の中を、行く場所もわからずさまようだけなのじゃ。よもやそれはわしにとつては拷問としか思えんのじゃ。それなら、主人と一緒に天に召されることをわしや、願うぞ。おまえさんたちと

て、同じことを考えておつたじゃろう？」

オウルがそういった後、誰一人として言葉を発することは出来なかった。そして、その判断を自らしたオウルに尊敬の眼差しを向けていた。オウルはもう、この世を去る覚悟をした、だからこそこの言葉が出るのだ、と、誰もが感じていた。

仲間達が黙ったままの間、オウルは家の中を自由に飛びまわり、思い出に耽っていた。まるでエミリーのママに話掛けるかのように、楽しそうに……。

夕暮れが迫ってきたとき、オウルはようやく仲間達の前に再び現れ、そして言った。

「ふむ。ではそろそろ行くとするかの。アンナが寂しがっておるのでのう。みんな、達者でな。」

オウルがこの部屋を出ようとしたとき、仲間達はみんな最後までお別れをした。

「じいさん！今度生まれ変わったら、また会おうぜ！絶対だ！」

ジュニアが涙ながらに言った。ジュニアだけではない。みんなジュニアと同じ思いだった。オウルは最後ににこっと笑いかけ、そして夕焼けの空の彼方に消えていった。

数日後、エミリーと一緒に私はサナトリウムに向かった。今度はパパも一緒だった。医師からの知らせで、ママの容態が急変したというのだ。私はオウルの魂が来た時から、この日が来ることは解っていた。しかし、解っていても、やはりこの日が来なければという思いでいっぱいだった。

サナトリウムに着き、ガラス越しにママの姿を見て驚いた。ついこの前まではやつれていてもまだ顔に赤みがあったのに、今日のママの顔の色はどす黒かった。ママはエミリーの方を向き、にこり

と笑いかけ、涙を流した。そして次にパパの方を向き、か細い声で言った。

「あなたより先に逝くことになって、ごめんなさい。エミリーをよろしく願います。」

その言葉を聞き、とうとう我慢しきれなくなり、パパは号泣し、言った。

「君はひどい人だよ。結婚当時の約束を君は破るつもりなのかい？ 契約違反だよ。アンナ」

パパがそういうと、ママはにこつと笑いかけ、「愛してるわ。」と言って上を向き、目を閉じた。パパは流れる涙をふき取ることも忘れ、ママの近くに行けぬ苛立ちから、隔てているガラスをドンドンと叩き、そしてママに向かって叫んだ。

「解っているよ。私も愛している。いつまでも」

ママが目を閉じ、上を向いたとき、エミリーは私を床にボトリと落とし、パパと同じようにガラスをドンドンと叩きながら泣き叫んでいた。私はその時、ママの魂が体から抜け、オウルの魂と語り合っていたのを見た。その瞬間、急に息苦しくなり、背筋に冷たいものが走った。作り物の体の中で、魂だけが小刻みに震えていた。

次の日、ママの葬儀が始まった。ママの棺の中に、仲良しだったオウルも入れられ、土に還った。葬儀の間中、私は呆然自失の状態で、私以外のものだけが、時間の波に流されているようであった。

葬儀の後、私はママの魂とオウルの魂が家に戻ってきたのが解った。しかし、他の人間達はそのことに気がついていないようで、ただただ悲嘆に暮れていた。私は思い切つて、ママとオウルの魂が天に上る前に話し掛けてみた。

オウルとママの魂は、残される家族の心配をしてはいたが、いつ

までも天から見守つていると言っていた。オウルの魂が教えてくれた。ママの魂は、次に人間として生まれて来れるのは後1000年先のことになるであろうと。そして、その時まで、魂は天にて裁かれ、また忘却の川の水を飲んで、よい行いをしたと判断された魂は生まれ変わる為の準備に入り、また、悪い行いをしたと判断された魂は、地に落とされ、剣山の上を歩かされるような悲痛な罰を受けるのだということだった。そして、当然、ママは地に落とされるようなことはない・・・。

私と話を終えたとき、天からの御使いが舞い降り、ママとオウルの魂を連れて行った。ママは名残惜しそうだったが、私が説得し、浮遊霊になることだけはやめさせた。風の精霊であったときより、すんなりとママは私の言うことを理解し、実行してくれた。私は胸を撫で下ろした。

ママとオウルの魂が天に上った後、部屋の中では、仲間達がしくしくと泣いているのが聞こえた。私はこのとき不思議と涙は出なかった。しかし、エミリーがベッドで静かな寝息を立てて眠りについた時、安堵からか、もしくは今までの高ぶった気持ちが爆発したのか、私はこのとき初めて体の中から熱いものが込み上げてきて、それを抑えることが出来なかった。人間の命とは、こんなにも儂いものだったとは、私は知らなかったのである。そして、この弱い人間に対して、いとおしさを乗り越し、愛情を感じたのであった。

第一章 第四話 離散

私が涙を流したことで、私はエミリー以外の人間たちに、悪霊とまではいかなくても、何かしらの霊が憑いていると噂された。噂を聞きつけ、なぜか祈祷に来る訳の解らない輩まで来た。エミリーはさほどでもないが、パパに至っては私の傍に寄りなくなった。姿形が視界に入ることとを恐れているようであった。私はそれがとても鬱陶しいものに思え、毎日が憂鬱であった。

エミリーのパパが亡くなったことで、エミリーの家族の落胆は大きかった。パパは最愛の妻を亡くしたショックから立ち直ることができず、以前はさほど飲まなかった酒を毎日のように煽るようになった。会社や学校は、しばらくの間は休暇を貰い、後片付け等をせねばならなかったが、ママの死を直視できずにいたのか、それともまだ信じられないのか、一向に片付けが捗らなかった。エミリーはパパよりはまだ現実を見ることが出来ていた。なぜなら、パパが酒を煽っている間も、食事を準備したり、掃除したりと忙しくしていたからだ。だが、やはり夜には眠れない様子で、ひとり密かに泣いていた。そんなエミリーがとても痛々しく思え、連日の憂鬱感と同時に動けぬ体に対する、自分自身への怒りに近いものがこみ上げてくるのだった。

仲間たちは皆、そんな私を見て、私がエミリーに感じているように私に対して痛々しく思えたのだろう。突然バービーが口を開いた。「まったく……。人間って、どうして自分で自分の体を壊すよいうなことをするんだろうね？ ばっかみたい！」

確かにその通りだった。パパは毎日、昼、夜を問わず酒を煽り続けているし、エミリーでさえ、夜の暗がりには怖がり、寝ようとしなないのだから。しかし、そんな言葉とはうらはらに、心の内では家族の

ことをとても心配しているということは、私を含め、人形達には解りきっていることだった。少なくとも私たち人形の間では、心の内もお互いにわかるようになっていたのだから。だからこそ、こんな暴言とも言える言葉を聞いても、私や他の仲間たちからは反論の言葉が出てくるはずはなかったのだ。

当のバービーは久しぶりに言った言葉が、こんな罵りの言葉だったことに、自分で自分を腹立たしく思っていた。そんな思いをかき消すかのように、ジュニアが独り言のようにぼつりつぶやいた。

「俺たちがなにか手伝うことができれば、少しはエミリーやパパだつて気持ちが悪く感じないのかな？」

それを聞いたバービーが、イラついたように言った。

「手伝いつて、何をやるのさ！」

「いや・・・その・・・たとえば、ほら！ご飯を作つてあげるとかさあゝ。なにかだよ。洗濯とかさあゝ。」

「あたしたちは人間の居る前では動けないんだよ！あんだだつて解つてるだろう？どうしろつていうのさ！」

さすがのジュニアもそれ以上は考えが及ばなかったのか黙ってしまった。みんな、どうして人間に生まれて来れなかったのかを悔やんでいるようだった。それほど、この家族を人形たちは愛していたのだろう。

エミリーのママが死んでから一週間が過ぎようとしてたころ、パパが倒れた。急性アルコール中毒らしかった。救急車のサイレンと同時に救急隊員が駆けつけ、狼狽しているエミリーと意識が朦朧もろろとしているパパを担ぎこんで、バタバタと出て行った。

急に家の中が静まり返つたように思えた。そのとき、ジュニアが興奮したように言った。

「なあ！救急車は病院に行ったんだろ？じゃ、この隙にエミリーが帰つてきたときにご飯が食べられるようにご飯の準備をするつての

はどうだい？きつと気持ちが悪く落ち着くよ！」

「この前言った”手伝い”ってやつかい？でも、エミリーだって、いつ帰ってくるかは解らないんだよ。たった一人の家族が入院したとなればね。」

バービーがジュニアを落ち着かせようとして言った。だが、ジュニアはこの隙を逃すまいとしているかのように、台所へ駆け込んで行ってしまった。

「冷蔵庫に入れておけばいいだろ。あそこに入れておけば日持ちするらしいしさ。作ってあげようよ。」

ジュニアのこの言葉を待つまでもなく、バービーやその他、台所仕事が慣れていそうな人形たちが我も我もと台所へ降りていった。みんな、なんだかんだ言っても、なにかこの家の家族に対してやってあげたくなくなっていたのだろう。動けぬ私一人がエミリーの部屋に取り残され、他の仲間たちは台所でわいわいと楽しげに仕事をしていった。中でも取り分け仕切っていたのは、いつもエミリーがままごとの相手として選んでいた赤ちゃんの格好をした人形だった。この赤ちゃんの人形は、エミリーが小学校に上がる前、おままごとの相手としてママが買ってくれたもので、バービーよりもこの家に早く来た人形だった。姿形は赤ちゃんでも、作られてからの年数はかなり経っていたらしく、しゃべる言葉やしぐさはまるで大人の女性のようなだった。そしてさすがにままごとの相手をしていただけあって家事のことも詳しく、料理の腕もかなりのものだった。私がこの家に来るまで、暇を見つけてはママの部屋の料理の本を読み漁っていたらしいことを、後に聞いた。

「料理が出来上がったからといって、すぐに冷蔵庫に入れちゃダメよ。冷ましてからでないと・・・えーと、ラップで蓋をして・・・ほら。みんな、手伝って」

そんなことを言いながら、ときばきと仕切って、料理を完成させ、冷ましてから冷蔵庫へと運んだ。みんな、意気揚揚として戻ってき

た。少しでも、エミリーの助けになればという思いが仲間たちを満たしていた。私はこのとき、この明るい仲間たちを誇らしく思えた。

赤ちゃんの格好をした人形は、エミリーに”ビビ”と呼ばれていた。普段あまり目立つことのない彼女は、今まであまり口を利くことがなかったのだが、今回のことで、私の中でも印象が強く残ることになったのだった。

人形たちの思いが通じたのか、エミリーは夜遅くになって帰ってきた。叔母（パパのお姉さん）が病院に来ていたらしく、叔母といっしょに帰ってきた。叔母はエミリーのことを大層心配し、今夜はゆっくり寝れるようにと送ってきたのだった。慌しく入ってきた叔母は、台所でなにやらごそごそ始めたが、冷蔵庫を見て啞然^{あぜん}としていた。

「あら。エミリーちゃん。あなた、病院に行く前に夜ご飯を用意して来たの？ずいぶんと準備がいいのね。叔母さん、感心しちゃったわ」

エミリーは、何がどうなっているのか解らないといった様子で首をかしげていたが、誰が用意したとも解らぬ夜ご飯を見て、とてもお腹がすいていたのか、もしくはとてもおいしそうに見えたのか、食べることにしたらしかった。叔母はいそいそと持ってきた材料をしまい、冷蔵庫に入っていたご飯を取り出し、レンジで温めて帰っていった。エミリーは、着替えをするために部屋に来たとき、いつもの自分の部屋の様子が変わっているような気がしたのか、私たちに向かっていった。

「くすっ。あなたたちがご飯を準備してくれたのね。ありがとう。そう言っつて、着替えを済ませ、私を抱いて台所でご飯を食べた。その間中、エミリーは私に話し掛けてくれた。

「ルイスもきつとご飯を作ってくれたのでしょうか？ありがとう。おいしいわ。まるで……ママの作ってくれたご飯みたい……」

ご飯を食べながら、エミリーは涙を流した。私は自分が何もししていないのに、こうしてエミリーが私に感謝の言葉をくれるのは、きっと私が涙を流した一件で、私の中の魂のことを確信していたのだろう。そして、それを霊現象とは思わず、何かの運命的な出会いなのではないかと思っっているようであった。

その日はエミリーは久しぶりにゆっくり、ぐっすりと眠りについた。夢を見ることもなく、ただひたすらに眠っていた。

一週間ほどでパパが退院してきた。しかし、以前と比べ、生気が失われたかのような、まるで抜け殻のような感じだったので、私も仲間たちも驚いた。会社から電話があっても応対に出ることはなく、いつもぼーっとしたままだった。そして、時々、火がついたように暴れまわり、家中のものを壊しまくっていた。パパが暴れているときにエミリーが止めても、今度は矛先がエミリーに向かってくるので始末におえなかった。パパが暴れまわったときあまりにもひどい有様だったので、近所の人が警察を呼んでしまったくらいだった。しかし、一旦暴れると落ち着くのか、その後はまたぼーっとしていたのだった。

そして、その後また一週間ほどが過ぎたころ、パパはようやく会社に行った。その後は、ただひたすら仕事のみをする人間になってしまった。家に帰ってきてはなににもする様子はなく、ただひたすらぼーっとし、そして時々発作のように暴れまくった。エミリーにも暴力をふるうようになった。そのことをパパは内心わかっていよううで、その後は仕事を休みを返上してまでこなし、とうとう家にも帰ってこなくなってしまうた。そうになると、残されたエミリーはまだ子供ということ、役所の人間がとつかえひっかえ現れ、エミリーを施設に入れることを説得しにくるようになった。エミリーはがんとして施設に入ることを嫌がっていたのだが、あるときパパが久

しぶりに帰ってきて、涙ながらにエミリーに施設に入るように言った。そして、何度も何度も謝っていた。

「パパがもつとしつかりしていれば、こんなことにはならなかったのに。だが、この家に居れば、ママのことを思い出さずにはいられなくてな。それがとても辛いんだよ。パパは会社を辞めて、また病院に入院することになった。どうやらママが死んだ後、パパの精神のどこかがおかしくなってしまったのだと思う。それを直すためにも、パパ自身が入院を決めたんだ。勝手なことを言つてすまない。だが、エミリーのことはいつまでも、どんなときでも愛しているよ。」

この、パパの一言でエミリーはとうとう決心したらしく、施設に入ることを承諾した。エミリーは承諾するとき、パパに言った。

「わかったわ。パパ。でも、エミリーと約束して。絶対に元のやさしいパパに戻って、元のように、エミリーと暮らすようになるって。」

本来なら、この言葉が子供から出れば、大抵の大人は子供らしい約束だと思うことであろう。しかし、そのときのエミリーの表情は鬼気迫るものがあった。そのため、パパも気持ちを新たに決心したかのように、両手を合わせ、天に向かって目をつぶり、静かに言った。

「絶対だ。天国にいるママに誓う。」と。

こうして、この家族は散り散りになっていった。エミリーは養護施設へ、パパは精神科の病院へとそれぞれ行くのだが、この家はパパの入院費の足しにするために売りに出されることになったため、小物類はすべて処分されることになった。エミリーは人形たちをすべて施設に持っていくと言ったが、ごく少数のものしか持つていけないことを知り、仕方なく私だけを連れていくことにしたようだった。

た。バービーや、ジュニア、そしてビビたちとの別れの際、気を紛らすかのようにジュニアが言った。

「俺たちはこれからオウルじいさんの所に行くことになるだろう。だが、これが永遠の別れじゃない。生まれ変わったら、また何処かで会えるさ。そのときまでのお別れだ。」

この言葉を聞いて、オウルじいさんのことを思い出した。

『生あるもの、必ず没する。しかし、また生まれ出でてくるのじや。それが、魂の輪廻転生なのじや。』

まるでオウルじいさんの声が聞こえてきたかのように、そんな言葉が頭の中でこだました。それは仲間たちみんな同じだったのかもしれない。みんな同じようにあたりをきよるきよるしていたのだから、まるでオウルじいさんを探すかのように。

こうして、エミリーと私は、今までの仲間たちに別れを告げ、養護施設で暮らすことになった。今までとはまったく別の土地に行かなくてはいけなくなり、エミリーは戸惑いを隠せない様子だったが、私が心の支えであるかのように、私を片時も離さなくなっていた。学校も変わり、住む場所も変わって、新しい生活を始めたが、何もかもが解らないことだらけで、まるで私が始めてエミリーの家に来たときのように、エミリーも困惑していた。施設に来たばかりのときには、役所の職員がひっきりなしにやってきては、なにやらいろいろなことを聞いて来たりし、職員が帰ればすぐに施設の職員に質問攻めにされ、とても忙しかったし、鬱陶しかったようだが、一週間もするとだんだんと落ち着いてきたが、必要なとき以外エミリーは部屋から一步も出ることがなかった。そしていつも私を傍らに置き、窓の外の鳥を見ていた。施設に入ってからというもの、エミリーは、同じ施設の子供たちとは話をしようとせず、動物にとっても興味を持つようになつた。そしていつもつぶやいた。

「私も動物に生まれたかつたな。そうすれば、私も今ごろ、自由に

外を歩くことが出来たのに。」

その夜、エミリーが寝ているとき、久しぶりにエミリーの夢の中に入ってみた。エミリーは草原らしきところで、いろいろな動物を相手に遊んでいた。私はゆっくりとエミリーに近づいていき、傍で黙って様子をうかがっていた。エミリーは馬を見ては追いかける振りをしたりしていた。ひとしきり遊んだ後、私の傍まで来て、今までの鬱憤を忘れたかのように、地面にあお向けになって寝転がった。「動物っていいよね。いつも自由だもん。私みたいに、何もかも誰かに監視されているようなことはないだろうしね。うらやましいな。」

エミリーはぼつつと言った。私はエミリーの横に座り、言った。

「いや、動物は自由なように見えても、それぞれの種族の間ではちやんとしたルールがある。それを破ることは自身の破滅を意味するから、ルールを常に守って生活しているんだ。」

私は風の精霊であったときの記憶を元に、さまざまな動物たちの生き様を語って聞かせた。エミリーは、なぜ私がこんなにいるいろいろなことを知っているのか不思議がると同時に、動物たちに関しての興味がとても大きかったため、いろいろなことを質問し、時には私の予想だにできなかったような質問までしてきたりした。そして私から教えてもらった知識を、エミリーは子供ながらのすさまじいほどの吸収力でどんどん吸収していった。エミリーが施設での生活に慣れたところには、すでに施設内のどの子供、どの大人よりも博学であった。

第一章 第五話 再会

エミリーが施設に入ってから、8年の月日が流れた。

この8年間、いろいろなことがあった。エミリーの父親は、エミリーが小学校を卒業するころには精神状態が安定しはじめ、そのころから段々と父親との面会をする機会が増えてきた。面会に行くときも、常にエミリーは私を手放さず、緊張した面持ちで病院に出かけていった。

パパは元気だった。私が、あの懐かしいエミリーの家に連れてこられたときの明るい表情に戻っていた。そしてエミリーを見るととても喜んだ。しかしやはりしばらくはまだママのことが忘れられないといった様子で、時々精神不安定なときがあると医師から聞かされていた。パパはエミリーに言った。

「なあ。エミリー。お前はもうママのことを忘れてしまったのかい？ 一体どうすれば忘れられるんだ？ 教えてくれないか？ パパはいまだにママのことが忘れられないんだよ。とても苦しいんだよ。」
エミリーはパパにきっぱりと言った。

「忘れてないよ。忘れる訳ないわよ。ただ、私たちが元気を出さないと、天国に居るママだってきつと悲しむと思うから。」
そのエミリーの言葉を聞いて、パパはしばらくの沈黙の後、急に笑い出した。始めはゆっくりと、そして段々とお腹の底から声を出して愉快そうに。

「すごいよ。エミリーは。そうだね。パパも元気を出さないといいないよね。ママに心配を掛けちゃいけないよね。」
笑いながらパパはそう言った。

「ルイスがね、夢の中で教えてくれたの。私たちが元気を出さないと、ママの魂はいつまでも天国に行けないんだって。天国に行けないと、今度生まれ変わることも出来なくなるんだって。生まれ変わ

れないと、もうこの先私が生まれ変わってからも、ずっとママに会えなくなるんだって。そんなの嫌だもん。」

「そうか。そんなことをルイスが教えてくれたのか。すごいよ。エミリーにはすごい先生が付いてるんだね。それならパパも安心だよ。」

「關心しているような言葉を言いながら、パパは信じられないといった様子でじつと私を見ていた。しばらくすると、我が子の成長のせいでそのように考えられるようになったのだと思い直したのか、まるで尊敬する人物を見るような目つきでエミリーを見ていた。」

それからというもの、パパは胸の痞えつかが外れたかのように、めきめきと回復していった。医師もびっくりするほどに。

そう、このときまでの間、私はかなりの知識をエミリーに与えていた。エミリーのパパに言った言葉はそっくりそのまま、以前私がエミリーに言った言葉だった。私の前世が”風の精霊”であったことも教えていた。始めはびっくりしていたが、エミリーは本来、妖精や悪魔といった類の話は信じる方だったので、すぐに理解してくれたようであった。私としても、妖精や悪魔が実在するかどうか解らなくとも、そういう目に見えない存在が人間より前に居たことは知識として容れておいて欲しかったので、エミリーのように素直に信じてくれることはとてもありがたいことだった。ただし他の人間には、たとえばパパであろうとも口外しないことを約束させたが。

私の知識を得て、現在のエミリーはすでに『動物博士』になっていた。すでにすばらしい知識の持ち主であったし、なによりエミリー自身、とても（施設の職員を時々困らせるほどに）研究熱心であったため、博士と周りから言われるほどになっていた。

一般の大人にはとても書けない程の、すばらしい論文を書き、若年にして『動物博士』になったエミリーには、いろいろな大学から声が掛かり、学費の心配もなく研究が出来る環境も整えられて、受

け入れられることになっていくほどであった。しかしエミリーは、そのすべての大学を断り、来年度からは、研究を兼ねて、ボランティア活動でマレイシアに行くことにしていた。マレイシアの大地で、いろいろな動物達とふれあい、研究を進める為である。エミリーの現在の研究内容は、動物達の生態を元にしたものだった。そのため、大学で本を片手に研究するよりは、実際の動物の生き様を自分の目で見ながらの方が、研究がはかどると判断したのだらう。そう決心しながらも、ボランティア活動であるため、資金の心配は当然あったが、あるひとつの大学から、その費用はすべて負担するので、その条件として自分の大学に籍を置いてくれないかとの話があり、エミリーは戸惑いながらもその申し出を受けるところにした。その大学は、生物学に熱心な大学だったので申し分なかったのだが、いささか夢のような、現実離れした申し出だったので、密かに探偵を雇い（この費用はエミリーが施設に断ってアルバイトをして稼いだお金で賄った）調べさせたが、どこも怪しいところは無かったとの結果が出たので、エミリーも了解したのだった。

パパは仕事も無事に見つかり、普通の生活に戻っていた。今は我が子の無事と、我が子と居を構える為の資金稼ぎにせいを出していた。稼いだお金の少しを、パパはエミリーの生活費にあてるようにと送ってくれた。こうすることで、自分も力が湧くのだからと、後にパパが言っていた。

エミリーが、ボランティア活動に参加すると決めてからの月日の流れ方は尋常ではなかった。あちこちに準備に出かけたりと、とても忙しく、まるで半年のところが一週間であるかのような速さで流れていった。ボランティア活動はいろいろな活動があるが、やはりそれなりに語学や知識に長けていないといけないので、試験もあった。語学の試験ではエミリーは自信がないと言っていたがすんなりパスしたし、知識（動物の生態を調査する内容だった為、動物や植物の知識の試験だった）はトップの成績で合格した。合格してから

は研修があつた。それでも、今まであまり触れたことのない分野の箇所もあり、それをエミリーは戸惑うどころか楽しみながら学んでいた。

秋になり、いよいよ出発の時が来た。パパが見送りに来てくれたが、別れの表情というよりはむしろ娘の立派な姿を見、これからの活躍に期待した表情だった。エミリーもパパのことは心配事のひとつであつたが、パパの表情を見て安心したようだった。別れ際に二人はお互いの写真を交換した。その写真を見ながら、これからの日々でつらいことがあつても、頑張つて行こうと二人は誓い合つていた。

マレーシアの大地は、秋だというのにモンスーンの時期も終わりに近づいてきているためか、雨の無い日にはじめじめと蒸し暑く感じるようであつた。

到着した日の翌日には早速仕事が待つていた。要員を交代すべく、引継ぎが行われた。私はエミリーの荷物の中で、懐かしい大地のにおいを感じた。仕事場は町からかなり離れた場所で行われた為、地元の人々のようにイスラムの教えを意識するような服装はしなくてもよかつたのだが、用を足しに町に繰り出すときはさすがに服装には注意を払つた。

動物達の研究は、昼夜問わず行われた。だが、エミリーは楽しそうだった。以前の記憶が蘇るようであつた。そう、あれはまだエミリーが施設に連れてこられ、ようやく施設での生活が自分の体に染み付いたであろう時期、施設の庭に珍しいことに一匹のイタチが現れたのだ。エミリーは、興味をそそられ、そのイタチを追つて巣穴まで行き、夜通しイタチの観察をして、大層施設の職員を困らせたときがあつた。そのときでも、ある程度の観察をした後、何事も無かつたかのように施設に戻り大切ななかを得たかのような表情で、啞然とする職員を尻目に見てきたことを書き留めていたくらいである。

私は直にこの大地を見、そして目の前に現れたトラの一群を見たとき、その一群の中に私達に向かつて静かに歩いてやってくる一頭のオスのトラを見た。トラは明らかにエミリーではなく、私を見ていた。私の姿が珍しいのか、しばらくの間私を観察していたが、ふいにどこかから声が聞こえてきたように思えた。その声の主は、目の前に居るオストラだった。

「俺は君を知ってる。いや、実際には今回初めて会うんだが、俺の祖先が君の事を言っていた。ずいぶん昔からの言い伝えなんだ。君は精霊だろう？俺達の祖先と仲良くしていたと聞いているよ。」この言葉には、さすがの私も面食らった。以前の私のことを知っている動物がいたとは思ってもよらないことだったからだ。私は心の中で返事をした。

「よく知っているな。そう。私は風の精霊だった。だが今はこの子の持ち物なのだ。私はすでに”人”ではなく、”物”なのだ。」

「だが祖先からの言い伝えでは、君は俺達も、その辺に生えている草花も皆同じ命、同じ魂だと言っていたと聞いている。なら俺達も君も同じだろう？ただ、生き方が違うだけさ。みんな、この世界の生きとし生ける者は母なる地球から生まれた同胞だろう？違うかい？」

私はこのオストラをじつと眺めた。そして気が付いた。私の魂が風の精霊であったとき、一番私を理解してくれ、そして励まし、時には助け合ったトラの面影が合ったことを。

世代は違うが、まるで古くからの友人と会ったときのような、懐かしい感覚を覚え、とてもうれしくなった。だが、傍らではあいもかわらずエミリーが、さも自分はこれからこのトラに食べられてしまふかのようなこわばった表情で固まったままでいたので、これ以上話することもせず、トラと別れた。トラは静かに群れに帰っていた。その日の夜、私はエミリーの夢の中で、今日の出来事を語っ

た。エミリーは驚いていた。

「さすがは私の先生ね。トラのお友達が居たなんて。今度私も紹介してくれない？私も仲良くなりたいわ。」

エミリーの様子は、決して社交辞令を言っているのではなかった。本気でトラと仲良くなりたいと思っていた。

「それはどうかな。彼らはとても誇り高い種族だから、受け入れてくれるかどうかは解らない。だが、今度会った時には、私の友人として紹介しよう。」

その日はそういつてエミリーを窘めるしかなかった。私は風の精霊だったころのことを思い出していた。美しい大地の中で生活している動物達。そして、動物達を邪魔者扱いしていた人間達。良い思い出と悪い思い出がひとつになって思い起こされた。私は今、動物達のいわば敵を主人にしているのだ。誇り高い種族のトラたちが、エミリーを受け入れてくれる可能性はゼロに等しいと感じていた。

エミリーの仕事も研究も捗り、毎日研究に明け暮れ、早くも半年が経とうという頃、本部から連絡が入った。近況報告のために一時帰国することになった。帰国は1カ月後になる。久々に父親に会える喜びを隠しきれないといった様子だった。その日は雨だったが、気分は晴れ晴れとしていたようだった。エミリーとはうらはらに、私の気持ちはなぜか重く沈んでいた。何かを予感するような感じで、私自身、理由もわからぬ胸騒ぎに戸惑っていた。

不意に窓の外を見ると、あの時のオスのトラが草原の丘の上に居た。雨の中、何かを告げようとしているかのよう。私はそのトラへ向かって言葉を投げかけてみた。口には出せないが、心の中の言葉がああの上のトラにまで届くかどうかやってみた。

「今日はなにかあるのか？朝からやけに胸騒ぎがするのだが。」
すると、丘の上から返事が返ってきた。

「今日の雨はこれからひどくなり、やがてその小屋ごと飲み込むような洪水が起るだろうと、一族の長が言っていた。そこに居ては

危険だ。非難した方がいいぞ。」

そうか。ここに来る前にエミリーが研修で教わっていたのを思い出した。この地方はマレイシアの中でも特に洪水の多い地方。この半年間というもの、一度も洪水が無かったのが不思議なくらいの場所だったのだ。私は背筋が凍るような感覚を覚えた。

そのとき、エミリーが突然声をあげた。トラが丘の上に居るのを見て、喜びにも似た歓声を上げたのだ。ほかの隊員達は鬱陶うつとあしい雨にイラついていて、エミリーの声にもイラついているようだった。そんなことはお構いなしに大雨の中、私を抱え、外に飛び出した。生ぬるい雨を浴びてびしょぬれになりながら、息堰いきせき切つてトラとの久しぶりの対面をした。トラはピクリとも動かなかつた。私はトラに聞いた。

「なぜ、動かない？人間は一族にとって、危険な存在だろう？こいつを襲うつもりか？私の主人を？」

トラは、何事も無かつたかのように平然と言った。

「こいつを襲ってどうなる？ここに俺が居れば、あんたの主人はここにやってくるだろうことは解っていた。だからここに居た。それだけだ。だが、ここにいつまでも居るわけにはいかないな。向こうに安全なところがある。そこへ行って雨をしのごう。」

そういつて、トラは歩いていった。トラの予測どおり、エミリーは歩いていくトラの後を、まるで引つ張られているかのようについていった。雨宿り場所につくまでの間、私は空の向こうから、ぎしぎしときしむような音が聞こえたように思った。私の気持ちを察してか、トラは歩きながら振り返り、私に向かって言った。

「あの、きしむような音は、大地が大雨で緩み、必死で耐えているときの音だ。村や町を襲う洪水になるにはまだ先だろうが、その前にどこかで土砂崩れが起こるらしい。だがこの先ならまだ大丈夫そうだ。安心していいぞ。」

トラは、山の麓ふもとの大木の傍まで私たちを案内した。そして、黙っ

て立ち去った。エミリーはどこまでもトラを追いかけようとしていたが、トラはエミリーに大木の傍に居るように命令することく、エミリーが動く度に唸り声を上げて立ち止まらせた。

エミリーはここまで歩いてくるのに疲れたのか、大木の傍でトラを見送りながら一息つき、そして深い眠りに落ちた。吸い込まれるように夢の中のエミリーに会い、私はエミリーに事の次第を話して聞かせた。エミリーは驚いていたがすぐに納得した。

しばらくして、先ほどのトラは一頭の年老いたトラを連れて戻ってきた。

「お久しぶりです。長老。」

私は思わずこう言った。長老はほっほっと笑うように眉を動かして返事をした。

「やはりあなたでしたか。ほんにお懐かしゅう。私はあなたが精霊の頃、まだ生まれておりませんでしたじゃ。覚えてくださっていたのかのう？」

「いや、昔あなたに似た方が長老でしたので、思わず”お久しぶり”と言ってしまっただけなのです。」

私は慌てて言った。私は、風の精霊だった頃と今とでは、時代が違うことを忘れてしまっていた。しかしその後、こう付け加えた。

「長老。あなたも私に”懐かしい”とおっしゃった。私とどこかで以前お会いしましたか？」

長老はニコリとし、言った。

「いや、わしもあなた様と同じく、あなた様に似たお方と以前お会いしましたのでな。そう言ってしまったのですじゃ。」

「長老。もしやあなたもレテの川の水を飲まなかったのですか？」

私はふと、思いついて聞いてみた。

「いや、そのことに関しては、今は口に出すのは憚はばられますのでお答えは致しませぬが、あなた様と似たような運命とでも申しましょ

うかのう。あまり聞きなざるな。それよりお腹がお空きではないかな？わしら一族の元に案内しますで、あなた様のご主人と一緒にいらっしやいまし。歓迎いたしますのでのう。」

こうして私たちはトラの一族の棲家すまがに案内された。そこにはたくさんさんの生肉と果物があつた。子供のトラも居た。しかし私たちが到着すると、とたんに群れの後ろの方に隠れるようにして行ってしまった。トラたち、とりわけこの一族の間では、位の高いものが常に中心におり、その後ろに力関係の強いもの、そしてその後ろに弱いものと並んで円を描くように座っていた。一族は、得体の知れない私たちを恐れもせず歓迎してくれた。エミリーは、一族の出してくれた果物をおなかいっぱいになるまで食べた。そして（人間の言葉でだが丁寧に）お礼を言った。その言葉が通じたのか、トラたちはエミリーに対しても恭まうやうしい態度で接していた。楽しいひと時であった。

突然、空の彼方が揺れたように思えた。雷が鳴っていた。そして雷鳴と同時に少しずれてか、なにやら大砲のような音がした。最初の大木まで案内してくれた若いトラが、長老の傍に控えたままで言った。

「人間達がなにかの合図をしたようだな。」

「どうやらこれでお別れのようですよ。ご主人とお戻りなされ。」

精霊様

行きに案内してくれた若いトラが、帰りの道を案内してくれた。辺りはすでに水浸しになっており、池のようになっていて水溜りを避けながら、ぬかるむ道を歩いて行った。元の大木の傍まで来たとき、空に煙が上がっているのが解った。トラは鼻をひくつかせながら言った。

「どうやら人間共の家が燃えているようだな。さっきの雷が落ちたらしい。」

「早く戻らねば！」

泡を食ったように私は言った。トラはとつくに承知していたという感じに、一刻でも早く私たちを帰路に付かせる為に骨を折ってくれた。小高い丘についた時、小屋は火事になっていた。水溜りからなんとか水をかき集め、必死になって火を消そうとみんなが水をかけていた。しかし一向に火が弱まる気配はなく、大雨にも関わらずますます火の勢いは強まっているかのようだった。

エミリーは急いで駆けつけみんなの手伝いをした。一番仲の良かった仲間が叫んだ。

「エミリー！ 何処に行ってたの！ みんな心配したんだから！」

「今まだこの小屋に閉じ込められてる人が居るの！ 助けなきゃ！」
この小屋にまだ閉じ込められてる人がいる？ そう聞いて、エミリーは背筋が寒くなった。そして私を無理やりベルトにはさみ、必死で水を集めた。

「消防隊とかは来ないの？」

水をかき集めながら、エミリーは仲間聞いた。

「どうやら町の方でも火災や洪水が発生していて、こちらには来れないみたいなのよ。なんとかしないと中に閉じ込められた人達が・・・仲間が・・・」

エミリーが集めた水を運びながら、仲間は答えてくれた。助けは来ない。それを聞いて突然、思い立ったようにエミリーは自分で頭から水を被り、小屋の中に駆け込んでいった。

小屋の中はあちこちが壊れ、天井の梁が落ちて危険な状態だった。その先で、倒れている人を発見した。火事場の底力とでも言うかのように、エミリーはその人を事も無げに担ぎあげ、外に運ぼうとしたそのとき、新たに梁が落ちてきて、目の前の道が閉ざされてしまった。落ちてきた梁を避けようとして、エミリーは私を落してしまった。それに気がつき、エミリーは私を拾い上げに戻ってこようと

した。私は力の限り叫んだ。

「私に構うな！あちらに逃げ道がまだある！急いで逃げる！」

その言葉は、なぜかちゃんと言葉になつて、轟々とうなる炎の中ではつきり聞こえた。だが、言葉を発した瞬間、私の体は雷に貫かれたような激痛が走った。私は痛みを耐えかね、思わず叫んでしまったが、いつものように声にならなかった。すると外から、壁が壊れる音と同時に、ここまで案内してくれたトラがエミリーを助けに来てくれた。トラはエミリーを引つ張つて外に運び出してくれた。私はエミリーが安全な場所にたどり着いたことを知り、深く安堵した。トラがエミリーを運びだしてくれたそのとたんに、小屋の壁が崩れ、私は一人小屋の中に残された。

火は小屋を燃えつくし、とうとう雨の勢いに押され、沈下していった。私は小屋と一緒に炎に取り囲まれ全身を焼かれたにも関わらず、痛みや熱さは全く感じなかった。しばらくして、雨の勢いも弱まってきた頃、燃え尽くされた小屋の残骸の下から私はトラに発見された。トラは私に言った。

「精霊殿。あなたはまだご主人の傍に帰ることができます。私が運んであげましょうか？」

私はこの言葉をありがたいと思いつつも、これまでのことを走馬灯のように思い浮かべていた。

「いや。私はここまでの命なのだろう。エミリーが私を落したとき、左腕と右足が折れてしまった。私の体は意外にもろいものなのだ。私はこのまま天に上る。エミリーに最後の別れが出来なかったのは寂しいがな。」

そう言うと同時に、トラはぼろぼろになった私の体を持ち上げ、どこかへ運び去った。

気が付くと、私はトラの一族の中に居た。長老が言った。

「短い命でしたな。しかし、あなた様は、これからの方が茨トゲの道や

もしれませんぞ。あなた様のこれからのご武運をお祈りいたしてお
りますじゃ。」

「武運とは……。私はこの後、何かと戦わなければいけない運命
なのか？長老はご存知なのか？」

長老がこれからの私の運命を予言するかのように言った言葉がと
ても気になり、聞いてみたが、それ以上は長老は一言もしゃべろう
としなかった。トラの一族が見守る中、私は暗い闇の底に落ちて行
った。

第一章 第六話 罰

私の意識が暗闇に落ち、気が付くと私は風の精霊だったときのよ
うに、宙を浮いている存在になっていた。空を自由に飛びまわるこ
とが出来、なんとなく風の精霊に戻ったような錯覚に陥り、私は独
り言を言った。

「なんだか悪い夢を見たようだ。長い夢だった。」

そのとき、天からの御使いが私に言った。

「いえ、夢ではありません。その証拠にほら。あそこであなたのな
きがらを抱いて泣いている人が居ます。御覧なさい。」

言われるまま、私は御使いが示す方向を見た。エミリーが私の体
を抱き上げ、泣いていた。すでにぼろぼろになり、あちこちが砕け
散っていた私の体をかき集め、元に戻そうとしているかのようにだっ
た。私はその姿を見て思わずエミリーの傍に行ってみたくなった。

「あの子に最後の別れをして来たい。しばし待ってもらえないか。」
私がそう言うと、御使いはその言葉を待っていたかのような穏やか
な表情を浮かべ、手招きをした。

エミリーは泣きじゃくっていた。魂はすでに人形の体から抜け出
ているというのに、いつまでも私の元の体を抱いたままで泣き尽く
していた。私はエミリーの傍に寄り、そつと声を掛けた。

「すまない。もうエミリーとは一緒に居られない。私の人形として
の命はここまでのようだ。いつまでも元気で。パパと幸せに。」

その言葉が聞こえたのか、エミリーはピタッと泣くのをやめ、しば
し考え深げにした後、ゆっくり深く頷いて私の体を地面に置いた。

「そう。もうお別れなんだ。ルイスの体は土に還るのね。解ったわ。
また会える日を楽しみにしてるわ。」

独り言のようにそう言うと、エミリーは納得したかのように、立ち
去って行った。

私は、天からの御使いに案内され、美しい天上の城に来た。懐かしい風景が辺りにあった。城の傍には忘却の川が流れ、その水を飲む行列が城の入り口から出ていた。美しい光景を見て私が物思いに耽^{ふけ}つているとき、御使いが私に言った。

「あなたは今回、あの城には行きません。この地を治める神があなたに会いたいとおっしゃっています。こちらです。」

案内されたのは、はるか上空のさらに美しい場所であった。重そうな扉を開き、中に通されると、目の前には真つ白なひげを蓄えた一人の神が居た。御使いは恭^{まじやう}しくお辞儀をし、重い扉の外に出て行った。

「お前だな。前回この地に来たとき、門番と取引をし、忘却の水を飲まずに転生したのは。」

地の底から響くかのような重々しい声に、私は正直に答えた。

「そうです。私は我が母なる地球から、使命を言い渡された者。今の記憶を消してしまつては使命をまつとうできないと危惧してのことでした。」

「我はこの地を任されている者。我はお前のことは知っている。その使命もな。だがこの掟は我の定めしもの。それを破ることはまかりならぬ。」

そう言われ、私はついカツとなった。

「では、どうすればいいのですか！私は運命に流され、使命をまつとうできずともよいのですか！それが母の願いなのですか！」

「時が来れば我とて無理は言わぬ。だが、今はまだその時ではない。かの者はまだ目覚めておらぬ。」

「かの者とは？それはどういうことですか。もしか母がおっしゃつた私が探すべき救世主のことですか？」

神はそれ以上、答えなかった。私はいろいろと質問をしたかったが、真つ先に口を突いて出てきてしまつた言葉があった。

「私はどうして先の転生で人間として生まれなかつたのですか？」

神はゆっくりと答えた。留守の間にこの地で起こった出来事さえ、一部始終知ることができるといふ。その為、取り急ぎ戻り、私の姿を探したが時すでに遅く、私は転生している最中だった。転生後のことは、この神には大体の事は把握は出来るものの、たとえ神であろうとも一切その魂を操作することは出来ないのだという。見れば門番との密約のせいで身動きが取れぬようになっていたので、せめてもの慰めにと一番近い人物の夢の中に入る力を与えたのだという。

「それでは、門番との密約のせいで、私は人間に生まれなかったのですか？」

「そういうと、神はまた話し始めた。」

「人間に生まれるには、少々準備が必要なのだ。その為に準備段階としていろいろな物、それは鳥であったりライオンであったり、時には植物であったり、魚であったり、そういうものに転生し、準備が整い次第、順番に人間に転生していくようなシステムになっているはず。お前はまだそのときではなかったのだ。だが、たとえ今回の転生で人間に生まれたとしても、門番との取引によって身動きが取れなかったのは同じこと。何に生まれるかまでは、たとえこの地を治める立場にある我とて、知る由も無いことなのだ。」

「そうだったのか。私は自分の犯した不覚さと無用心さを恥じた。俯いている私に、神は言った。」

「お前はこの地に措いて、重罪を犯した。その手引きをした門番も同様の罰をすでに与えている。お前も同様に罰を受けねばならぬ。」
「そういうと、神は高々と右手を掲げた。それと同時に天から稲妻が走り、私の体を貫いた。あまりの衝撃に私は叫び声を上げた。その場に突っ伏し、しばらくは痺れるような感覚が体を支配し、身動きが取れなくなっていた。そんな私に神はこう告げた。」

「この後、転生してここに戻ってくるまでの運命は、我の手の内に

ある。しかしひとつだけお前の願いをかなえて進ぜよう。これからお前は人間として生まれ変わる。もちろん、今回は忘却の水を飲んで貰うことになるが。その後の運命の一端は我が握っておるが、どう生きるかはお前の自由だ。だが、これがお前に与える罰であることは忘れるでないぞ。」

そう言うと、神は消え去り、気が付くと私はレテの川の番人の傍の床に突っ伏していた。前回とは違う顔の門番が居た。

「どうされました。私はついこの前、ここに配属になったもの。以前ここに居た門番は、なにやら錠を破り、今は地中深くに幽閉されているとのこと。以前の門番のお知り合いですか？」

「いや、なんでもない。」

私はそれだけを言うと、神からの言いつけ通り、忘却の水を飲んだ。忘却の水の味はかなりの美味で、飲んだとたん頭の真白になり、今自分が立っているのか座っているのか、どこにいるのか、歩いているのかさえ解らなくなった。そして罰を受ける為の転生をする為に、暗いトンネルを案内されて行った。

気が付くと、私は女らしき人物に抱かれていた。浅黒い顔の女だった。なにやら揺れているが、それはその女が走っていたからである。女の後ろと目の前には、武器を持った、同じく肌の浅黒い男らしき人物が一緒になって森の中を走っていた。突如、女の横から銃器を持った男が木の陰から現れ、突進してきた。と、同時に、女と一緒に走っていた男がいつせいに木陰に向かって攻撃した。弓を打ち込む者、敵の狙撃手らしき人物にナイフひとつ持って突進する者がいた。敵の狙撃手らしき人物が突然現れた時の衝撃から、女は私を抱いたまま転び、私は顔中がドロだらけになったのが解つた。と、同時に全身に痛みが走り、自分でも気づかぬうちに大声で泣き叫んでいた。女は私を抱き上げ、自分の胸にうずめるようにしてまた走った。

「おい。ガキを黙らせる！敵に居所が解つちまう！とにかく早く走れ！村に着くまでは安心できねえからな。」
女の傍で武器を構えて走っていた男が乱暴に言った。女はうなずくとまた一心不乱に村に向かって走り始めた。村は森の奥深くにあった。村と呼ばれる小さな村の中の一室で、私は顔のドロを落され、きれいにされ、女の乳房に吸い付いていた。女は私をいとおしい物のようにやさしい目で見つめていたが、一言もしゃべることが無かった。

私の生まれた場所は、戦争真っ只中のある国だった。戦争の最前線に位置するこの村は、戦争に借り出された男と、その男達の世話役として女が少数住んでいた。この、戦争の一番激しい地区で、私はこの物言わぬ女から生まれたらしい。私の母親のこの女は、この戦争の時の事故が元でしゃべることが出来なくなっただけ。しゃべる女でさえも、この地区では程度の低い扱いを受けていたが、とりわけこの女はしゃべれなくなってからというもの、男共に最低の扱いしかされなくなってしまった。こんな中、私は男として生まれ、これから先自分達を守るであろう次世代の戦士を生んだということ、幾分は女も男共から守られる立場になれたようだった。だが、男達はそれさえも煩わしいいわづと考え、少しでも自分達の意に添わない行動をすれば、女子供とて容赦なく制裁を加えた。何もかもが地獄のような場所だった。

こんな中で、体力の無い子供は生まれても次々に死んでいった。子供より先に、育ての親が死ぬ場合もあり、その場合の子供の末路も悲惨なものだった。村の中はまるで無法地帯のように、男共が威張り腐って肩で風を切って歩き、女は男共の退屈しのぎと鬱憤うつぶん晴らしのためにそこに居るようなものだった。おもちゃにされた拳銃、身ごもってしまった女は、男共に見つからないように密かに子供を自力で産んだ。だが大抵は見つかってしまい、その場で処分される

か、もしくは見つけた男の奴隷になるかの選択しかできないのだが。

この村に住む者は、誰もが皆、自分の運命を呪って生きていた。こんな中でも、いや、こんな中だからこそかもしれないが、誰一人として、自分の運命を呪ってはいても、自殺をするものは居なかった。地獄の中の住人の気持ちは、”生”という柵しからみに捕らえられているかのような感じだ。この地獄で、私はこれから生きていかなばならないのだ。

忘却の水を飲んだことで、私は以前の記憶を失っていた。普通の人間と同じように、子供時代を過ごした。私は男に生まれたせいなのか、それとも人一倍”生”や”情愛”という思いが強かったのか、子供とは思えぬほどの行動力を発揮し、母親をおもちゃにしようとする大人達から母親を守るために武器を持って立ち向かっていった。そして幾度となく負けては、大人たちに容赦なく制裁を加えられた。それでもなぜかへこたれずに母親を庇かばった。

私はある程度成長すると、大人たちと同じように武器を持って前線へ赴いた。始めの内は、子供が前線に来たことで邪魔者扱いされ、制裁を加えられては村に戻されていたが、私が何度も前線に赴き、何度か手柄を立てるようになると、一部の男共の間で、若きリーダーの誕生かと囁かれる程になった。そうになると、今度は母親は幾分丁重に扱われるようになった。ただし、将来の自分達のリーダーの奴隷というくらいにしか見てはもらえなかったのだが。

母親は私をいつも見守ってくれた。口は利けぬものの、とても心やさしい女性であった。この女性のおかげで、私は地獄のような生活の中に措おまいてても、常に平常心で居られたのかもしれない。

青年に育ったころには、誰もが認める村一番の実力の持ち主になっていた。しかし、年功序列の掟は根深く、自分より歳のいった者に逆らえば、誰であろうと制裁が加えられた。その辺りは子供時代

であろうと、現在であろうと、年月が過ぎようと、変わることもなく続いた掟だった。そんな中で、私は必死に生きていた。いつ終わるとも知れぬ命を抱えながら。

第一章 第六話 罰（後書き）

第一章はここで終わりです。
次回から第二章に入ります。

第二章 第一話 戦士の村（前書き）

【第一章あらすじ】

人形としてこの世に生を受け、少女と共に人間世界のことを知った元風の精霊。少女の成長を暖かく見守りつつも、母なる地球の使命の一端さえも見つけられぬままこの世を去ることになってしまった。

そして次に待ち受けていたのは、過酷とも言える日常だった。

【作者よりひとこと】

この、第二章に関しては、ストーリーが定まっていなくても関わらず、ほぼ無理やり捻り出して書いたもので、わたしのホームページに苦し紛れに載せたものを修正したり付け加えたりしてこちらに転載しています。それにより、もともと下手くそなのに、さらに読みにくい表現やおかしな表現になってしまう部分があるかと思いますが、見直しておかしいと思った部分については、気がついた時に順次修正をしていますので、ご了承いただいた上で生暖かい目で見守っていただければ、作者は泣いて喜びます。

第二章 第一話 戦士の村

私は、転生時に忘却の水を飲まざるを得なくなり、不本意ではあったが忘却の水を飲み、現世ではそれ以前の私の記憶（風の精霊であった時のことや、人形であったときの事）をすべて忘れていた。そして今、私が生きている場所は戦争中のある国のある場所にある村で、どんな立場であろうとも、そしてどんな状態であろうとも、『生きている』事が最大の恩恵であるかのような世界だった。

私は幼い頃から自分の意志で武器を持ち、敵に立ち向かっていた。その行動力は、他のどの戦士よりもすばやく、そして確実だった。なにより今までと違う事は、私には『守るべき人物』が居た。それが私を不撓不屈ぶたふくくつにしていた。幼い時から今まで、それは変わらなかつた。

毎日のように敵の狙撃を恐れ、それを必死に避けながら村から村へと渡り歩き、食料を手に入れたり水を運んだりしていた。毎日のように空を見上げているにも関わらず、澄み切った空に迫り出している入道雲さえ目につかぬほど、張り詰めた緊張の中にいた。歩くときも、走るときも、常に足跡をつけぬよう気をつけながら足を運び、夜には夜襲と男共の暴君ぶりに耐え、寝ているときでさえ安心できぬほど切り詰めた緊張感の中に居た。

ある夜、その日一日中村から村へ渡り歩き、敵の偵察と食料や雑貨を仕入れに出かけ、へとへとになって自分の住んでいる小屋へ戻る途中、一人の女性が私の所に走って来た。マーサだ。隣に住んでいて、自分の母親とは若いときから親しい間柄の女性だった。

「キース！大変だよ！アルダが！！アルダが！！」
それだけを聞いて、私はすぐさま家に向かって走りだした。

家の前には人ばかりが出来ており、私は野次馬達の間をぬって騒ぎの中心に入って行った。母親が倒れており、傍らには鞭を持った男が居た。この男はマッドといい、以前から母親ばかりをいたぶっている人物であり、私にとっては憎むべき相手であつたが、兵士としては私の上官であり、この村の隊長でもあつた。しかし上官であることを鼻に持ち、私以外でも彼の氣にいらなければ誰でも即彼の鞭の餌食になることもあつたため、他の村人からも恐れられていた。

私は自身に沸き起こる怒りを収めるかのように静かに深呼吸し、母親の傍に駆け寄つていった。母親は鞭打たれ、氣絶寸前だつた。「一体これはどういうことですか？」

ただ一言だけ、私はマッドに言つた。マッドは憎憎しげに私を睨みつけ、母親を罵り始めた。

「こいつはこの俺様の服に水をかけやがつたのさ。口も利けぬぐくつぶしのくせに！息子が長のお氣に入りだからと言つて図に乗りやがつて！その思い上がりを叩き直してやっていたのさ！」

とんだ言いがかりだつた。この世知辛い村に於いては、この村の男達は、自分よりも弱い者に対していつもこんな言いがかりをつけては、一日の憂さを晴らすのが日課だつた。ほぼ毎日何処かしこでこのような事態が起つていたが、とりわけ私の母はその槍玉に挙げられることが多かつた。村人は、私が入つていったことでなにやら一戦が始まるのを期待しているかのように、私たちを取り囲んで興味半分で見っていた。

母親は私の腕の中で小刻みに震え、私の顔を見やり、必死の形相で顔を横に振つていた。『私はなにもしていない』と必死に訴えているようだつた。私には母がなにもしていないことは解つていた。それゆえ、私はこの男に対して、憎しみにも似た怒りを覚えたが、自分の上官に逆らうことはこの村では禁忌であり、ここで逆らえば自分で自分の首を締める結果になる。それゆえ、私は何も出来ぬ自

分にさえ腹が立った。そのことを知っているかのように、マッドは私を見やり、にやっといやらしい目つきで睨みつけ、さらに付け加えた。

「俺様がお前の母親の教育をしてやったのだ。お前も俺様に感謝すべきだろう。お前が俺様に言う言葉はなんだ？ 言え！」

ここで逆らうわけにはいかない。しかし母をなんとかして救い出さねば……。私はひとつ大きな深呼吸をして言った。

「母は隊長に謝っています。それで勘弁願えないのでしょうか。」
「周りに居た無責任な野次馬共がざわめいた。まるで私に『逆らえ』と言っているかのように。」

マッドはトマトのように顔を真っ赤にして怒りを露わにしていた。次の瞬間、マッドは私に向かって鞭を振り下ろした。母を庇った私の背中に激痛が走った。

「この親にしてこの子ありとはよく言ったものだ。母親同様、貴様も思い上がっているようだ。この俺様に逆らうというのか！」

マッドはそう言うと、幾度も幾度も私に容赦なく鞭を振り下ろした。激痛に耐えて歪んだ私の顔の下で、母親が涙を流しながら震えていた。鞭の衝撃で私の背中の服は破れ、露わになった皮膚から血が滲んでいた。一頻り鞭が振り下ろされ、疲れからか鞭の勢いが弱まった頃、村の長であり、私のよき理解者である老齢のガラドがマッドに向かつて言った。

「そろそろ勘弁してやったらどうじゃ。お前も気が済んだじゃろう。」

隊長とはいえ、村の長に逆らうことは出来ない。ガラドにそう言われ、マッドはしぶしぶ鞭を収めた。そして私に唾を吐きかけると、自分の小屋へ向かって行った。

私は母親を抱え、背中の痛みに耐えながら長に一礼して家の中に入った。母親をベッドに寝かせ傷の手当てをすると、となりに住む母の友人のマーサがガラドと一緒に来て来た。マーサは私の背中の傷の手当てをした後、台所で私たちに食事を作ってくれた。マー

サが私の世話を焼いてくれている間、私はガラドと話をした。ガラドはかつてはマッドのような暴君であつたらしいが、歳を負う事に自分達のやっっていることの空しさを感じ始め、私が生まれる少し前頃辺りからはとても穏やかな人柄になつていつたらしいと後に聞いた。私が生まれる時、ガラドの奥様に世話になつたことから、私は実の孫同然にかわいがつて貰つていた。ガラドは自身の伴侶にやさしい眼差しを送りながら言った。

「あの男も、自分にとって大切に思える人物が近くに居れば、きつともう少し態度を改めてくれると思うのじゃがのう。しかし、この戦争が終わらなければ、それもかなわぬことなのかもしれぬ。」

「この村の掟を変えることは出来ないのですか？」

私は素朴な疑問をガラドに投げかけた。ガラドは困つたというような表情で私を見つめ、そして言った。

「かつてはキースのように、この村を変えようとした人物が居た。

その者はキースと同様、心根の優しい男であつたが、挑まれた一騎打ちで負けてしまつてのう。そのまま帰らぬ人となつたのじゃ。それ以来、誰も掟を変えようとするものはおらん。わし自身が掟を変えることも出来たかもしれぬが、それでは他の村や村人にも示しがつかんのでの。村の掟を変えるのは至難の業じゃて。」

「この村を出て、他の地で暮らすことは？」

「それは、この村だけではなく、本国をも裏切ることになるぞ。見咎められれば、その場で命が亡くなるじやろう。生きていける補償はないぞ。」

「では、どうすることも出来ないのですか？このまま、責め苦に耐えて行かねばならないのですか？」

「そうじゃ。じゃが、お前なら何とかできるやもしれぬ。掟を変えてなお、生きて暮らすことができるやもしれぬ。じゃがこれだけは約束しておくれ。決してこの老いばれを心配させるような事はせぬと。」

この時、目の前のテーブルに質素な食事が運ばれて来たので、話はそこで終りとなった。ガラドとガラドの伴侶、そしてマーサと母親のアルダ5人で、ただ黙々と生き延びる為の食事をした。人心地着いたとき、ガラドが眠い目を擦りながら部屋を出て行った。マーサは今まで溜まっていた事を吐き出すかのようにしゃべりまくった。「大きな声じゃ言えないけどさ、あたしらの扱いの程度の低さっただらありやしないよ！あたしらをまともに相手してくれるのは村長とキースだけさね。アルダや。あんたはいい息子を持って幸せだねえ。うらやましいよ。あたしも子供を身籠った時、無理して下ろさずに産んでおきやよかつたよ。キース、傷は痛むかい？ああ、でも明日になって、キースがああ嫌な上官に嫌がらせされなきゃいいんだけどねえ。あたしやそれが心配だよ。」

マーサからこの言葉を聞かされるのはいつものことだったのであまり気に留めぬようにしていたが、今日のような事があるたび、いつもなら気に掛けない言葉が私の心に深く、そして黒く浸透していくようであった。

次の日、村中がなぜか慌しかった。どうやらガラドとマツドの所に本国からの連絡があつたようだ。同じ国から派遣された私たちの同胞の、同じようにこの国に来て最前線で戦っていた他の村が敵襲にあつたらしい。そこで私たちの村では急遽、作戦を開始することになったようだった。詳しいことは作戦説明まではあまり聞かされないが、同じ同胞の、敵襲にあつていない村総出で今回の作戦に当たるらしい。私以外の男連中は皆、一様に不満を述べた。と、言うのも、自分達だけで行う作戦なら成功する確率が高いが、他の村との連携作戦では、他の村の連中が自分達の足を引っ張ることになると言つのだ。

作戦のメインの目的は、敵につかまり、捕虜となつた同胞を救出することだった。そのため、救出に向かう人数も多い方が良く本

国は判断したらしい。いつもなら私は、作戦の成功、失敗の心配よりも村の、それも自分の母であるアルダのことを心配する（私がいない間に、村に残った男連中から母が甚振いたぶられることが過去に何度もあったからだ）のだが、今回はガラドを残し全員で作戦に当たる為、その心配は無用だった。但し、女子供しか残っていないこの村が敵襲に合えば話は別だが。

作戦の説明がなされた。急襲を受けた村周辺には罠も多数あるため、いつもの小隊を分割させそれぞれのチームごとに作戦を遂行することになり、私はひとつのチームを任されることになった。チームの中には、統率するもの、攻撃に長けているもの、罠などを仕掛けることに長けているもの、潜入捜査が得意なものが、長によつて均一に振り分けられていた。その中でも統率するものの立場は、チームの仲間の命を預かると同時に、その判断により、作戦の成功・不成功が決まる為、かなりの重責を背負わされることになる。作戦開始から終了までの間の長い時間その重責から逃れることは出来ず、精神の弱いものは長い作戦の間に、精神に異常を来す場合もある程だという。その重大な役割を私がすることになった。

チームのメンバーは、破壊工作専門で、あらゆる罠の設置や解体を得意とするスノウ、スナイパーのシンとライン、偵察隊のラックとアーニー、そして私だった。スノウは私とは幼馴染で、子供の頃はいつも2人で、いたずらをしていた。シンとラインとラック、アーニーは、私たちより少し歳が上ということもあり、本国からの派遣で来たということもあって、村のほかの男同様、傲慢な性格だった。

「ちつ。こんな若造のチームなんてよお。しかも第一部隊だぜえ。一番帰ってこれるかどうか解らないチームなんだぜ。俺は本国に家族が居るんだから、くれぐれも変な行動なんかするんじゃないぞ。リーダーさんよお。」

シンが私に意地悪く言った。シンの行動を見ると、本国に女房、子供が居るとは到底思えない。それほどまでに傲慢な性格の持ち主だった。スノウはシンにわからぬよう、私にぼそつとつぶやいた。「あいつ、仕事の邪魔をしなればいいんだけどな。ああいうやつに限って、失敗して俺たちに罪を被せるんだよな。」

「そう言うな。あいつだって、仕事は完璧にこなさなければ、本国に帰るに帰れなくなるんだからな。」

私はスノウを落ち着かせようとして言葉を返した。私たちの会話が聞こえたのか、シンとその仲間達が私たちの方をジロツと睨んだので、話を区切るかのように私はチーム全員に聞こえるように言った。

「作戦は明日だそうだ。それまでに、各自準備しておいてくれ。」私のこの一言で、みんなは散り散りに散って行った。スノウはうれしそうに私の腕を掴み、まるで無理やり握手させるかのようにして手を握り言った。

「作戦は明日か。またお前と仕事ができるな。よろしく頼むぜ。まあ、お前のことだから大丈夫だとは思うが。頑張ろうな。」

お互いに、明日からの過酷な作戦を無事に終えて、この村に戻って来れるようにと願っていた。

救出作戦開始前の準備の時が来た。まずは第一部隊である私たちの出陣となる。私たちは偵察が主な任務内容だが、第一部隊は最も敵を観察できる立場であると同時に、最も敵の目を引くことになりかねない為後に続く部隊よりも危険であったが、命を捨てるつもりがないことはチーム全員一致した考えだった。私は不安気な面持ちの母の見送りを受け出発した。敵の陣地に入る前に、私は敵襲にあった村を訪ねることにした。ちょうど通り道でもあったので、チームの反対を押し切り、不満をぶつけてくるシンやその仲間達の事も眼中に入れずに村に向かった。

村に近づくにつれ、徐々に木々が焼け落ちていく箇所が多くなつたことに気がついた。焚き火より大きな焼け焦げがあちこちに見られるようになり、木々はてっぺんの辺りがなくなつて不恰好に生えているものもあれば、片腕を落されたかのように枝が鋭利な刃物で切られたような跡もあり、木々の幹には無数の切り傷と穴があり、当時の惨状を物語っていた。

偵察部隊のラックが地面観察しながらつぶやいた。

「敵は相当訓練された部隊らしいな。ここにつくまでの間は、敵が動いた形跡なんか全くなかつたのに、ここはかなりやられてる。敵はかなりの人数だつたに違いない。この作戦はかなり難航しそうだぞ。ちつ。なんだつて俺たちがやつらの救出なんかやらなきゃならないんだよ。本国のやつらも甘いぜ。つかまつたやつらなんかほつとけばいいのに。」

「いや、つかまつたやつらの中に、本国でも重要な地位にいるやつがいるらしい。そいつが誰かは村長と隊長にしか知らされていないらしい。俺でさえ、詳しくは教えてもらえなかつたからな。」

シンが、警戒を怠らずに前進しながらラックに言った。シンはマッドとは昔付き合ひがあつたらしく、シンの姑息な、いわゆる『自分より強い者には媚び諂う』態度のおかげでマッドのお気に入りだつたので、事前に情報をいくつか掴んでいるらしい。まあ、その点では、私もガラドからいくつかの情報を貰っていたので同じ穴のムジナと言えるのではないだろうか。シンの言つた情報はすでに私も知っていたことだつたが、あえてそれを口にする事はなかつた。

スノウが突然、地面に何か気になる箇所を発見した。それは今まで見てきた焼け焦げではなく、かなり広範囲に渡り焼け焦げている場所だつた。焼け焦げの中には、人の形をし、まるでそこに黒ずくめの人間が倒れているかのような跡になっているものもあつた。静かに注意しながら近づき、辺りを見回して一番気になる場所で屈んだ。ラインはその様子を見て、なにをばかばかしいことをやってい

るのかと言わんばかりで何か言葉を発しようとしていたが、それをシンが抑えた。スノウが近づいた地点に、シンも何かを感じたようだった。そしてラックとアーニーも……

スノウの傍にアーニーが、スノウとは別の『気になる』場所を調べ始めた。スノウが調べていた場所から固形の物が見つかった。丁寧、慎重に、汗だくになりながら調べ始めた。

「これは地雷だぜ。これはもう爆発しちまったやつだから安心だが、まだ埋まつてる可能性はあるな。」

スノウは他の場所も調べ始めた。アーニーも同じく地雷を見つけていた。次々に見つかる、まだ役目を果たしていない地雷の芯を取除く作業に全員で取り掛かった。この時ばかりは誰一人として文句も言わずにただ作業に集中していた。もちろん、その間周囲の警戒は怠らなかったが。

私はスノウが作業に取り掛かっているとき、はるか遠くで地面を掘るような音を聞いたような気がして、辺りを見回した。目を凝らしてみたが、何も見えない。しかし風がこちら側に向かって吹くと同時にザックザックと土を掘る音が聞こえた。他のメンバーは誰一人としてその音を感じている者は居なかった。私は最初、空耳が聞こえたのではないか、実は何の変哲もない音が土を掘るような音に聞こえたように感じただけだったのかわからなかったが、しばらくすると、またしても奇妙な音が聞こえてきたので、今度は自分の耳を信じて、円形に陣を組んでいるチームのメンバーに悟られないよう、辺りを回ってみる事にした。

村のすぐ脇に林があり、その中に入っていくと、どこからか土を掘る音がした。やはりあの音は空耳ではなかったのだと私は確信した。いつ敵が現れるかわからないその場所で一体誰が何をしているのだろう。好奇心だけが私を支配していた。私はその音の主が誰かを確かめてみたくなり、警戒しながらそつと音のする方に近づいてみた。

そこには、歳の頃なら10歳かそこらの、男の子供がいた。傍らにはなにやら黒いものが置いてあったが、私の居る場所からは木々が邪魔をしていたので見えなかった。子供は、自分の体よりも大きいスコップを持ち、しゃにむに土を掘り起こしていた。警戒はしていたが、私はその小さい人間にとっても興味が湧き、音を立てず、気配を殺してもう少し近づいてみた。

男の子は涙をその小さな目にいっぱい溜め、涙が流れるのも気にも止めずにすすり泣きながら、しゃにむに穴を掘っていた。傍にあった黒い物体は、あちこちが崩れてはいたが、人の形をしているようだった。

男の子が穴を掘っている時、私は掘り途中の穴の中ほどに、異様な物体を発見した。しかしその男の子には見えていないのか、全く気にもとめずに穴を掘っていた。私にはその穴の中の異様な物体の正体が何であるのかが一目で解り、全身から血の気が引くのを感じた。私は自分の立場やその子の身元を確認するのも忘れ、その子の手からスコップを取り上げようとした。振り下ろそうとしたスコップが自分の意志とは関係なく振り上げられたまま動かなくなったので、ようやく男の子は我に返り、私に気が付き驚いていた。私はスコップを握りしめたまま男の子に言った。

「やめるんだ。あそこに地雷が埋まっている。あれをこのスコップで突付けば、間違いなくお前の命はここで終わる。」

ドロだらけ、汗だらけ、その上涙が流れた所に土や埃が付き、見るからにみすばらしい顔をした男の子が私を見上げ、私の言った言葉を理解しようと頭をフル回転させているであろう表情をしていた。私がスコップを握っている手の力を緩めた隙を突いて（偶然そのときに思い立ったのかもしれないが）男の子は私から弾かれたように離れた。私は男の子の行動を物ともせず、静かに穴の中に埋もれている石のような物体を注意しながら丁寧に掘り出した。男の子はそれが何であるかがようやく解ったように、言われた通りその場で大

人しくしていた。そして私に対する警戒を解き、安心したかのよう
な表情に変わっていった。

「俺を助けてくれてありがとう。」
涙を拭いながら男の子は言った。

「この、黒いものは、あの林を抜けたところで敵にやられて死んじ
まった俺のとうちゃんなんだ。俺はとうちゃんの墓を作っていたん
だ。」

男の子はそういうと、私に向かってにこっと屈託のない表情で笑っ
て見せた。強い子だ……。私はその子の頭をくしゃつとなで、そ
の子に背を向けながら言った。

「この辺りは地雷が多く埋まっているようだ。墓を掘るつもりなら
用心することだな。」

「うん！解ったよ、にいちゃん。俺だって、とうちゃんから武器の
扱いや敵と遭遇したときにどういいう行動をすればいいか、教えて貰
ってたもん。絶対に生きて、やつらに一泡吹かせてやるんだ！それ
までは死ねるもんか！」

明るく言った男の子からは、新たなる決意が湧きあがっているよ
うに思えた。そしてその子を背にし、私は仲間の所へ帰って行った。
戻る途中でシンに出会った。スノウはまだ解体作業をしていたが、
途中で私がいけないことに気が付き、私と同じように、他のメンバー
の作業の邪魔をせぬように私を探していたらしい。私を見つけたと
き、シンは不信感を露にした表情をしていた。

「おい。リーダーさんよ。一体何をやっていたんだ？なんであんだ
は俺たちを置いてこんなところをほっつき歩いていたんだ？」

よりによって、私は一番見つかりたくないやつに見つかり、心臓が
早鐘を打つのを感じたが、そんなことはおくびにも出さず、何事も
なかったかのように言った。

「物音がしたので気になってな。敵かと思って見に行っただが、なん
でもなかった。」

「ほお。なんでもなかったのか。おい！こんな所で油を売る暇なぞ、

俺たちにはないんじゃないのか？ 目的地にさつさと行かねえで、変な場所で油を売っていたと隊長が知ったら、合流した時にあんたはどういう目に遭うんだろうな？」

シンはにやりと笑い、私を軽蔑した目で睨んでいたが、私はシンを無視するかのように、それ以上のことは言わず、仲間達と合流した。スノウ達の作業が終了し、その後で私たちが居ないことに気が付き、お互いに相手が（ラックとアーニーは私が、スノウはシンが）逃げたのではないかと言い合い、取っ組み合いの喧嘩をしたらしい。スノウの顔にはあちこちに痣や腫れがあつた。ラックとアーニーの顔にもまた、スノウと同じような痣や腫れがあつた。

私はみんなに男の子のことを気づかれぬようにして、偵察をしていたと説明し、何事もなかったかのように先を急ぐことを告げた。シンはライン達にこそこそと話をしていた。どうやらシンは私のやつていたことの半分は見ていたに違いないと覚悟した。シン達は話しながらわたしの方をちらちらと見、ほくそえんでいた。

しばらく行くと村が見えた。村は人の気配が全くしなかった。そしてあちらこちらにたくさん敵、味方が事切れて倒れていた。女の子も死んでいた。生まれて間もない乳飲み子や、乳飲み子を抱えた女、幼い子供が自分も戦おうとしたのか、武器を持ったままで死んでいた。家の屋根もほとんどが穴が空いていたり燃やされていたり、屋根だけではなく家そのものを焼かれていたり、焼け焦げただけではなく、剣や斧で攻撃された跡があちこちにたくさんあつた。地面を見ると、あちこちに血痕があり、数え切れないほどの足跡の他、馬の蹄のような跡も沢山残されていた。

「こりゃ、ひでえ。」

スノウが村に入るなり一言発した。

シン達は私の行動がよっぽど気に入らなかつたと見えて、村に来てからも私に脅し文句を欠かさなかつた。

「道草食つてる場合じゃないぜ。隊長のいるチームが俺達より先に目的地に着いたら、お前さんは言い訳できなくなるぜ。こんなことは無意味だ。」

スノウと私はシンの言葉を無視して村の惨状を見て回った。ある一軒の家に入ったスノウが、私を呼んだ。

「キース！ちよつと来てくれ！」

急いでスノウのいる場所に行くと、スノウは地面にへばりついていてた。その地面には、ちよつど私達くらい年の男の指が一本分あるかという太さの筋すじが見つかった。スノウは用心深く、その筋を指でなぞり、厚く積もった土を払いながら筋と筋をつないでいった。何かの紋章のように思えた。その紋章を、まるで額縁にいれたかのように、外側にももう一本筋が見つかった。その筋をたどっていくと四角の底辺あたりの筋に、私達の年の男の指二本分の太さになっている場所があった。スノウがその一番太い筋に指を入れると、ずぶずぶと中まで入っていき、とうとう第三関節あたりまで入ってしまった。慌ててスノウがその指を抜こうとすると、紋章の書いてある部分が少し持ち上がった。

「どつやらこれは何かの蓋みたいだな。」

そう言つて、スノウは土と埃だらけの蓋を持ち上げた。私はスノウを手伝い、その蓋を二人がかりでようやく取り除くと、蓋は紋章を下に土埃を上げて倒れた。そこは地下室になっているようだった。

私達はなぜこのようなところに地下室があるのか訝いぶかりながら、そつと階段を降りていった。

階段の下には、重要な人物が、もしくは位の高い身分の人が仕事をしていたような部屋だった。ちゃんと使われていたところにはとても整理され、小奇麗にされていたのだらうが、敵襲によりかなり争つたようで、あちこちに書類と見られるものが散らばっており、地下室の上の家よりも多く、誰の物とも解らぬ血痕があちこちについていた。血痕付きの書類と思しき紙おほつきれの一枚に、何かのサインと思えるものが書かれていた。私もスノウも、本拠地である戦士の

村で生まれ育ったため、字を習うこともなかったので、散乱した紙の文字を見ても、なんと書いてあるのかは解らなかった。物珍しそうにスノウが一枚を拾うと、シンが紙を覗き込んで言った。

「それは何かの命令書だな。まあ、俺達には関係のないものだ。そんなものに気を取られていないでさっさとここを出ようぜ。さもないと、俺が隊長に告げ口するまでもなく、お前らは仕置きされることになるぜ。」

せせら笑うように言い捨てると、シンはさっさと階段を上って行った。私は何かの役に立つかもしれないと思い、血痕付きの紙の一枚をポケットに入れ、スノウと一緒に階段を上ろうとした時、足の先に何か当たったような感触を覚え、足元を調べた。そこにはやはり紋章のようなものが刻まれた印鑑のような物があった。象牙で作られており、紋章のようなものが刻まれた所とは反対の、恐らくは手に持つ所である場所には、蛇をかたどった飾りが彫られていた。それを私は無造作にポケットの内側にしまい込み、スノウの後を追って階段を上った。

目的地はこの村から約15キロ離れた場所に位置していた。この目的地で一晩状況を確認し、明日からの本来の目的のための会議が行われる予定になっていた。惨劇の遭った村を私達が出たあたりから、急に雲行きが怪しくなってきた。そして5キロ歩くか歩かないかの間に雨が降ってきた。私達は足跡をつけぬよう用心しながら先を急いだ。10キロ歩いた辺りからはすでに辺りは暗くなり、雨足は強くなって、とうとう足跡を気にしなくても雨がすぐに足跡を消してくれるまでになっていた。

びしょぬれになりながら、私達は目的地に着くとすぐさま、敵の目につかぬ場所にテントを張った。ここは敵陣からは目と鼻の先であるため、特にこれからは用心しなければならない。テントを張り終わるとすぐに第二陣、第三陣と仲間が到着し、第三陣の中にマッドが本国の連中と一緒にいた。マッドがテントの中に入ると同時に、

シンもテントの中に入って行った。私達の『道草』を報告するのが目的であることは手に取るように解った。私とスノウは飲み水を確保するために、瓶を雨が一番当たるところに置いた。

シンがほくそえみながら、私達を呼んだ。私はその指示に素直に従った。案内されたテントの中は、今まで明日からの細かな作戦の会議だったらしく、白熱した人の熱気と、長距離の歩行とじめじめとした雨の放つ水蒸気で濛々（もうもう）としていた。その奥には、マッドが私達を睨み付けながら立っていた。シンはマッドの傍で相も変わらずほくそえんでいた。

「お前達、ここに来るまでのことで報告することがあるそうだな。」マッドは横柄にそう言った。私は敵襲に遭った村の調査をしていたことを報告したが、地下室の中にあつた印鑑のようなものことや、何かの書類のような物のこと、そして地雷の犠牲にあつた父親の墓を作っていた男の子の事は隠していた。いや、実際には隠すつもりはなかつたのだが、報告の時にはなぜかそのことは口から出なかつた。私の報告を聞き、マッドはさらに私を睨みながら言った。

「それだけか？そこで何かを拾つたのだらう？俺様が何も知らぬと思つたのか！拾つたものを出せ！」

私は内心ギクリとした。そうか。スノウ以外の者は誰も私が何かを拾つたことなど知るはずもないと思つていたが、実はシンが見ていたのだ。しくじつた。しかし私は平静を保ちながら、地下室で拾つた紙切れを渡した。マッドは紙切れを見るとくしゃくしゃに丸めて床に叩きつけた。

「こんなものではない！他に拾つたものがあるだらう！出さないか！」
やはり隠し通せるものでは無かつた。仕方なく私は印鑑を取りだし手渡した。

「こんなものを見つけていたのか。これが何を意味するものなのかは解らずともよい。だが、なぜこれを拾つたことを報告しなかつた

！」
とうとうマッドがキレた。それと同時に、テント内にいたほかのチームの連中や雨宿りをしていた人々がみな一斉に外に出た。これから何が起ころのかを予測しての行動だった。スノウは青い顔をして私の横に立っていた。私はスノウを片手で押し、テントから出るように合図した。心配そうに私を見つめながら、スノウは自分自身との葛藤と戦っているように見えた。マッドは片手に鞭を持ち、私とスノウを睨みつけながらずっと前に出た。私は覚悟した。そのときスノウが私を庇うようにして前に立ちはだかり、マッドに向かって言った。

「隊長。自分はキースが拾った物の事を知っていました。知っています、隊長に報告しなかったキースに注意しませんでした。自分もキースと同じように罰を頂く身ですか？」

私は驚いた。スノウが私を庇ってくれている。だがスノウの言っている事をマッドがどう受け止めるかによっては、逆効果になる場合もある。しかしそうと解っていたとしても、スノウのこの行動はとても嬉しかった。私とスノウは生き残れる可能性がほとんどないに等しいあの村で生まれ育った。ここまで二人ともが生き残れたのはお互いに友情と言う名の絆で助けあったからこそなのだ。二人ともお互いの事を大切に思っていた。だからこそ、私はスノウの行動が必ずしも正解であるとは思えずにいたが、それとはうらはらに嬉しがつている自分がそこにいるのも事実だった。

「スノウ、いいから行け。」
私がそう言うと、スノウは困惑した表情になった。マッドは私達の行動に余計に腹を立てた様子で、顔を真っ赤にして今にも頭から湯気が出そうだった。

「いいかげんにしろ！二人まとめて叩きのめしてやる！そこへまへ跪ひざまずけ！」

テントに他のチームのメンバーが戻ってきたのは、雨が止み、空

にはまるで昼間の雨模様が嘘だったかのような明るい、それでいて優しい星々の光が戻って来てからであった。私達はその場に跪いたまま、しばらくは動けなかった。テントに戻って来たメンバーは、何事も無かったかのように振舞っていた。私はスノウの手を取り、抱き起こし、テントの外へ出た。優しい月明かりがたった今つけられた傷跡に染みた。私はこういうことはすでに慣れっこになっていたが、スノウにとっては子供時代から久しくなかったことであり、かなり堪えていたらしい。夜の涼しげな風を浴びながらしばしの休息を得ていた。

夜の虫達が奏でる音楽に耳を傾けながら草むらで休んでいる間に、一羽の伝書鳩が飛び立つのが見えた。あれは一体誰に送った手紙なのだろう。どんな内容の手紙を出したのかは解らないが、私にはなんとなく不可解なことのように思えた。

第二章 第二話 裏切り

マツドの伝書鳩が戻ってきたのは、空が白々と明け始めた辺りのことだった。私はスノウの事が気がかりだったため、ほかの兵士が皆テントの中に入っていくのを眺めながら人目につかぬ木の陰に座りこんでいた。この村に来てほどなくしてマツドの命令で信頼の置ける偵察隊が出動したのを見ていた。その偵察隊がまだこの時間でも戻って来ていない。マツドはテントから時折顔を覗かせてはイライラした表情で何かをいいながらまたテントの中に戻っていくという動作を繰り返していた。

しばらくして、ようやく偵察隊が戻ってきた。私の傍で安心したのか、はたまた疲労困憊状態だったためかぐつすり眠りこけているスノウをたたき起こし、二人でテントの中に入って行った。

テント内は人の熱気で暖かく、その奥でマツドが偵察隊の報告を聞いていた。他の兵士は皆、その報告を一言も聞き逃すまいと耳を敬そはだてていた。

報告によると、村人の半数は戦いで死に、もう半数は捕らえられて別の場所に移動させられたらしい。目の前の敵陣に囚われているのは、敵陣近くにあった村の長ともうひとり、別の男だという。移動させられた村人達は、ここより東側の、沼に囲まれた場所付近に建てられた粗末な小屋に閉じ込められているということだった。報告を終え、偵察隊がマツドの傍から離れたとき、シンがマツドに話し掛けた。

「今回の作戦は、もしや本国の政治に関わることなのですか？」
マツドはシン以外の人間に聞かれぬよう、シンにしか聞こえないくらいらいの小さな声で囁いた。

「そうだ。軍事の指揮官でもある本国のガーランド様の直々の命令も来ている。だが、このことはあくまでも内密にな。シン。」

私は二人の会話を良く聞こうと、マッドとシンの傍近くに置いてあった飲み水用の瓶かめに水を取りに行くフリをして二人に気づかれぬように耳をそはだて敬そはだててていた。私の心の中で、言い知れぬ恐怖感が黒く重く押し掛かってくるのが解った。この作戦の裏には何かある。私が不安を抑えきれずに居ると、マッドはテントの外に向かって合図した。作戦開始の前のミーティングをするらしい。

瓶から離れ、一番入り口に近い場所を陣取ると、他のチームの者達はすでに意気揚揚と説明を聞く体制を取っていた。マッドが言った。

「今夜、作戦を遂行する。第一部隊がまずは正面から囿として向かう。そして第二部隊、第三部隊、第四部隊、第五部隊はそれぞれ敵の領地を囲むように配置し、第一部隊が突入すると同時に第二部隊、第三部隊が敵をかく乱させ、残る第四、第五部隊は捕虜を救出する。第六部隊以降の部隊はそれぞれ分かれて第一部隊から第五部隊に入り援護する。ようするに、1チームの人数は、ここに来るまでの人数よりも3倍の人数にはなるということだ。捕虜奪還した後、第一部隊は即座に退却し、沼地にいる捕虜救出に向い、残りの部隊は援護する。以上だ。質問は？」

他の村から来た、見たこともない顔の男が手を上げた。

「おいおい。第一部隊だけが、沼地に行くのか？こつちよりもあつちの方が捕虜の人数が多いのは解っていることだろう？これでは失敗が目に見えているじゃないか。」

マッドは表情を変えずに言った。

「突入後、役目を終えた部隊はそれぞれ分散して第一部隊を援護しに沼地に向かつて構わない。ただし、我々の判断としては、沼地には人数を少なくしての突入の方が、敵の目をくらませやすいだろう」と言う結論を下した。」

これは罠のにおいがする。私は直勘でそう思った。きな臭いにおいがすることは、他の兵士達も感じ取ったらしい。なにか裏があるの

ではないかという思いが私の胸を締め付けた。マッドが続けた。

「とにかく、第四、第五部隊は、目の前の敵陣に囚われている政府官を救出することが先決だ。救出した後、これより10キロ離れた場所に止めてある車に要人に乗せて欲しい。後は車の運転手に任せると良い。おそらく囚われているのは、本国の政府官のマキシム殿だろう。抜かりなく行動してくれ。ほかになにか質問は？」

別の男が手を上げた。

「沼地にはいったい何人くらいが捕まってるんだ？やつらは無事なのか？俺達は死体を運ぶつもりはないぜ。」

「沼地には約20名ほどが捕まっているとの情報が入っている。あの村自体はさほどの人数がいたわけではないからな。ほかに質問が無ければ以上だ。」

マッドは、つつけんどんにそういうと、面倒な質問をしゃがってでもいうかのように、なにやら一人でブツブツ言っていた。私は胸騒ぎがして、それをガラドに報告したいという思いが強くなっていった。だが、この場所には無線機などない。唯一の連絡方法が伝書鳩なのだが、敵の目を引く事を防ぐ為にマッドだけが伝書鳩を持っていた為、私はどうすることも出来ず、ただ何とか連絡方法がないものかと必死に考えていた。

その時、私の思いを察するかのようになり、一羽のカラスと思しき鳥が私の傍に来ていた。この辺にはカラスはたくさん居る。人間のする不可解な事を見ているかのようにしてたたずんでいるのはごく当たり前のことだったが、なぜか私はそのカラスに惹かれ、目をじっと見つめていた。カラスも怯えて飛び立つ事もなく、私の目をじっと見ていた。不思議な感じだった。この鳥はもしかして、私の言いたいことがわかるのか？まさか、そんなはずはない。そう思いながらも私は無意識の内に自分の指を食いちぎり、傍に落ちていた木の葉に血を滴らせ、それを丸めてカラスの足に結びつけようとした。しかしカラスは（当然のことなのだが）足に触られる事に抵抗し、その

木の葉を私の手からもぎ取るかのように嘴くちばしに加えて飛び立ってしまった。カラスが飛び立った後、私の頭は急に冷静になり、なんと馬鹿な事をしたのだらうという思いで胸が一杯になった。自分のしたことことの愚かさを自分の食いちぎった指の痛みで思い知らされたように、自分で自分を恥じていた。

夜も更けた頃、作戦は決行された。この時の私の胸の内は、村に残した母やガラド、その他大勢の罪もない人々を心配すること一杯だった。そしてカラスに対してやったことことの愚かさを思い起こしては、訳のわからぬ胸騒ぎと混じっていた。この複雑な思いを振り切るかのように、作戦遂行に全神経を集中させようともがいていた。

そのとき、またしてもカラスが私の傍で私をじつと見つめていたのが解った。そのカラスは何やら嘴に光るものを咥えていた。私がカラスに気付くと、カラスは咥えている光るものを私の足元にポトリと落としてその場を去っていった。不思議なことがあるものだ、そう思いながらカラスの置き土産を拾い上げると、それは鎖の付いたペンダント型ロケットだった。ロケットの蓋には模様が彫られており、蓋を開けると中には女の人と、女の人に抱かれた子供の写真が入っていた。セピア色に染まったその写真の女性と子供は、私に向かつてにこやかに笑いかけていた。私は蓋を閉め、ロケットを内ポケットにしまった。ロケットをポケットに入れたことことに関しては別に他意は無かったが、ただ、事実としてはカラスがどこからとも無く持って来た物でも、敵が見咎めればきっと私達の存在を知ることになるだらうとの判断からだった。

ロケットをポケットにしまうと同時に作戦開始の合図がなされ、私たちは突撃した。入り口付近で私たちが囿になり、騒ぎを聞きつけて応戦する為ために敵の村の兵士が皆こぞって入り口付近に集まった。敵の兵士が入り口に気を取られているうちに、塀を越え、木を乗り

越えて第二部隊、第三部隊が突入した。敵の兵力は分散され、あちこちで戦闘が始まった。だが、思ったより味方陣が苦戦しているのが解った。この小さな村で、敵がこれほどの数を揃えて待っていたとは信じられないくらいの人数が、あちこちの家から飛び出して来ていた。これでは第四部隊、第五部隊が突入する機会を逃してしまふ。私は自分の第一部隊に合図し、捕虜が囚われていそうな小屋の付近からなるべく離れて道を作り、第四部隊、第五部隊の突入を待った。この敵陣の近くに来るまでのチームより、今の作戦決行時の人数の方がはるかに多い人数でありながら、これほどまでに苦戦するのはどうしても納得のいかないところだった。だが、そんなことを考えるよりも今は私たちの部隊がどう動くか、それだけに全神経を集中させねばならない。私は胸に刺さっている針の傷みを振り切るかのように戦った。

ようやく、第四、第五部隊が突入した。そして捕虜奪還作戦が大詰めに来ていることを知り、私はチームのメンバーに合図をして、村の外に出た。追ってくる敵を尻目に、森の中に入り、スノウが逃がっている途中ですばやく仕掛けた罠に見送られながら、もうひとつの捕虜収容場所の沼地へと足を進めた。その途中、小高い丘の上に差し掛かったとき、私は敵陣の村の様子を振り返って見ていた。すると敵陣の村から一筋の煙が立ち昇っているのが目についた。おかしい。銃火器を装備はしていたものの、捕虜奪還時にあれほどの煙を立ち上らせるような武器を使うことはまず無いと判断していたからだ。それに煙の色や、風に乗って鼻についた匂いは、まさしく小屋を焼き払ったときのものと直感した。私はシンに詰め寄った。「おい！あれはどういうことだ！なぜ小屋が焼かれている？あの焼かれた小屋はまさか、捕虜が収容されていた小屋なのではないだろうか！」

シンは胸倉に捕まれた私の手を振り解き、顔を赤らめてはいたが平静を装って答えた。

「敵の数が思ったよりも多かったからな。きつと小屋のひとつを焼

き払って敵の目をくらませたのだろう。それよりも俺達はこつちの作戦を遂行すべきなんじゃないのか？」

小高い丘の反対側を見ると、1キロほど先に沼地が広がっているのが見えた。そしてその中央に大きめの小屋が建っていた。仕方なく私はその場を離れ、合図をして沼地へ向かった。私の胸にはすでに黒雲が充満しており、疲れのものとは思えぬほどの息苦しさを感じていた。敵陣の入り口に突入した時から比べて、1/2に減っていたメンバーを率い、沼地に程近い森の片隅でしばらく様子をうかがった。目の前の沼地と私たちのいる森の間には、なんの変哲もなさそうな平原が広がっており、捕虜を収容していると思われる沼地の中央の小屋は、不気味なほど静まり返っていた。見ると小屋の後ろ側は沼地と森が隣接している場所があった。私たちは森を通り、小屋の反対側の沼地と森が隣接した場所まで来た。そこで私は再び立ち止まり、みんなに言った。

「おかしいとは思わないか。ここまで来るのに敵が何も攻撃してこなかった。それどころか、畏らしきものも見つからなかった。それにこの場所に敵の気配がまるでない。まるで私たちにこの場所に来させるために野放しにしているかのようだ。これは畏かもしれん。」

第七部隊について、この作戦時だけ第一部隊である私の隊に入っていた偵察担当の一人の男が私に言った。

「俺が偵察に行つて来よう。中の様子だけでも解ればこの先打つ手が見つかるとはならないか？」

私はその男の言葉を信じ、彼を偵察に出した。シンとラックとアーニーはそれぞれひそひそと話しをしていた。辺りを警戒し、敵の気配を探り出そうとしたが、敵の気配は全く無かった。程なくして、偵察に出た男が帰つて来た。

「沼はかなり深そうだが、あれを渡るのは至難の業だ。それに底なし沼の可能性もあるな。用心するに越したことはない。だがたいして大きな沼ではなさそうだから、橋を渡せばなんとか渡れるかもしれん。それと、ここから沼を越えた辺りの壁は脆もろそうだ。壊して中

に入ることが出来そうだと。中の様子だと、報告の20人よりももう少し多い人数が居るみたいだ。人の気配はするのだが、なぜか静まり返っている。」

私の心は決まった。とにかく、中にいる人達を助け出すのが何よりも先だ。沼地を越え、その脆そうな壁を破って中に入り、そのうがった壁から捕虜を救出することにした。しかし言い知れぬ不安と闇が心をいまや完全に支配しており、息苦しさを通り越して空気を吸っているのかどうかもわからぬ状態になっていた。みんなに合図をして一旦その場を離れ、僅かに残っていた数本の木を切り倒し、持っていたロープや、橋を作るのに普通は不適切とも思えるようなものをなんとか使って、数枚の丈の長い板にしてそれを沼地に渡して橋にした。

ギシギシとうねりながら軋む木の板の橋を難なく渡り、小屋のすぐ後ろまで来ると、一ヶ所だけ壁に小さな穴がある場所を発見した。私とスノウと数人で壁を静かに崩した。ドロで固められてはいるものの、木を細く切って編みこんだような壁だった。捕虜には武器は当然持たせてはいないのだろうが、こんなに脆い壁で脱走をいぶか図ろうとする捕虜の事を考えに入れていなかったのだろうかと思っただ。とにかく今は穿うがった壁の穴から中に入り、捕虜を救出することだと思ひ直し、行動に移した。

中に入ると、捕虜がすし鯨詰め状態で居た。みんながみんな、疲労困憊の表情で私たちを空うつろな目で見ていた。私たちの姿を見るやいなや数人の男達が突然大声を上げた。

「ここへ来ちゃいけない！逃げろ！今すぐここから逃げるんだ！！」
数人が一斉に大声を上げた途端、屋根や周りの壁から煙が上がっているのが見えた。私は急いで近くに居た捕虜を穿うがった壁の穴から引きずりだし、目の前の惨状を見た。私とスノウについて来ていた数人の兵士が血を流して倒れていた。その傍でシン・ラック・アーニ

「は血のついたナイフを握り締めて立っていた。傍には油が入っているらしき入れ物もあった。」

「どういうことだこれは！説明しろ！」

私はシンに向かって怒鳴りながら質問した。シンは得意げな顔付きで静かに答えた。

「この作戦では最初から、お前達邪魔者は始末されることになっていたんだ。本国の政府官、ガーランド様の命令でな。冥土の土産に教えてやる。この作戦はすべて、本国に忠実なマッド隊長殿がガーランド様より直々に命を下され遂行されたものなんだ。向こうで火の手が上がったのは、隊長付きの信頼の置けるやつが、ガーランド様にとつて邪魔なマキシムを始末するために小屋を焼き払ったものさ。お前達もここで死ぬんだ。もう火の手が小屋中に広がっているぞ。ざまあみろ！俺達はこれから本国に帰って凱旋さ！じゃ、あばよ！」

シンの言葉を飲み込めぬまま、私は茫然自失となっていた。そこへスノウが捕虜を抱えて私に向かって怒鳴って言った。

「キース！まだこの小屋の中までは火の手は来ていない！今の内に助けられるやつだけでも助けるんだ！」

私はその言葉を聞いて正気に戻った。そしてすぐさま壁を壊し、大きな穴を空けて中の捕虜を救出することに専念した。捕虜は皆、まともな食料も与えられず、閉じ込められたままだったため、立ち上がる気力も体力も底を付いていた。しかし皆一様に『生きる』事をまだ諦めてはおらず、最後の力を振り絞って私たちに付いてきた。

中には女、子供も混じっており、女子供の中にはすでに事切れている者もいた。中は吐き気のするような匂いで満たされ、その匂いに壁を焦がす炎の煙の匂いと混じって、表現し難いほどの匂いになっていた。うだるような暑さの中で、捕虜全員（かろうじて生きているもの）を外に押し出すと、小屋は目の前で怒涛のごとく焼け落ちた。間一髪で私たちは助かったのだ。しかし周りにはその様子を待っていたかのように、敵が私たちを取り囲んでいた。もう逃げ道は

無いに等しかった。取り囲んだ敵は皆、銃を構えており、私たちが一歩でも動けばその場で射殺できるような体制を取っていた。

見たこともない男が私たちを取り囲んでいる兵士の後から歩いて前に進んで来た。私たちの前で止まると、その男は冷酷な声で言った。

「ほう。この状況下でよくこれだけの人数の捕虜を助け出せたな。その手腕は認める。だが残念なことにお前達の命はここで終わる。本国を知らぬお前達は私たちにとってはただの捨て駒でしかないのだよ。考えても見てくれ。お前達のようなごくつぶしを本国の私たちが食わせてやっていたんだ。だが財政が困難になってしまった以上、今までのようにお前達を飼っていられなくなったというわけだ。まあ、恨むなら、この腐った世の中を恨むんだな。さて、君達にとって、最後の時が来たようだ。」

そうして私たちを取り囲んでいた兵士が一齐に銃口をこちらに向け、今にも引き金を引く体制になった。私たちの命はここで費つえてしまうのか？そんな思いを抱えて空を見上げると、澄み切った空に真っ黒なカラスが一羽またしても私に向かって飛んで来た。それを合図にするかのように、銃を構えて私たちを撃ち殺そうとしていた敵兵の背後から、見たことも無いほどのカラスの大群が襲って来た。敵兵は面くらいながら、カラスに向かって四方八方に銃を乱射した。敵、味方お構いなしの殺しあいになっていた。その隙について、背後から誰かが忍び寄ってくるのが解り、私は持っていた銃を構えて後を振り向いた。

そこには私を可愛がってくれていたガラドが銃を持ち、勇ましい格好で立っていた。私は危うく銃を取り落としそうになりながらも、ガラドの背後に居る人たちに目をやった。ガラドの後ろには、私たちが暮らした村の女達が武器を持って援護していた。母もその中に居た。私はスノウやその他の元捕虜達に合図し、カラス軍団に応戦

している敵兵を尻目にその場を離れた。背後から大きな怒鳴り声が響いた。

「おい！やつらが逃げるぞ！追え！早く追っんだ！」

敵兵はカラスに邪魔されて簡単には私たちを追うことは出来ずにいた。その隙を突いて私たちは一目散に逃げた。気が付くと私たちは敵からかなり離れた場所の砂漠の一端に出くわした。

敵兵から逃れ、ようやく人心地つける土地まで来た時、初めて私は安堵の気持ちで空を見上げていた。空は今まで見たことも無いほど澄み切っており、雲ひとつなく、髪を揺らすさわやかな風を顔に受けながら太陽のじりじりとした暑さをまるで生まれて初めて体験したかのように感触を楽しんでいた。母が私を抱きしめてくれ、ガラドが私ににこやかに近づいてきて言った。

「よくここまでやったな。あの状況でこれだけの捕虜を救出出来たのは奇跡としか思えん。いや、よく頑張った。」

ガラドの言葉に照れながら見やると、ガラドの後ろで蒼白な顔のあちこちに火傷を負った一人の男が居た。ガラドがその男と私を会わすかのように道を空けると、その男は私の手を取りながら言った。

「本当に君は立派なことをしたな。君達のおかげで私を始めとする多くの命が救われたのだ。君達には感謝の言葉も見つからない。ありがとう。」

小刻みに震えながら私と握手を交わすと、その男は自分の名前を名乗った。

「私は本国の政府官の一人、マキシムというものだ。君の名前を聞かせてくれないか。そうか。君はキースというのか。本国に無事に帰ることが出来たなら、君はきっと英雄になれるだろう。しかし私も君達も今は本国に帰るのは危険だ。しばらくはどこかでひっそりと暮らしながら策を練るしかあるまい。」

マキシムの一言で私たちのこれから取るべき道が見えたような気がした。だが今はまだ敵の目がどこにあるかわからない。とりあえず

私たちはこの場を離れることにした。

第二章 第三話 ひとときの安らぎ

敵から逃れるため、何日もかけて私たちは砂漠を渡った。その間、水も食料もほとんどない状態での逃避行に、仲間達は疲労と飢えと乾きで次々と死んでいった。息をする事も困難なこの土地で、私たちは神に祈りながらなんとか生き延びていた。仲間が出発時の約半数になった頃、ようやく神の祈りが届いたのか、私たちは砂漠の中にある小さなオアシスを見つけた。

一心不乱にみんながみんな、水を求めてオアシスに入った。ようやく生きる糧を見つけた獣のように、私たちは命の水を飲み干した。飲んでも飲んでも次々と湧いてくる水に狂喜しながら、私たち一行はオアシスで今までの辛く悲しい旅の乾きを潤した。まだ日は高かったが、不思議とオアシスの中の木々の下は涼しく、程よく熟した木の実も見つかった。赤い木の実と青い木の実があり、私たちはそれを頬張った。赤い木の実はとても甘くおいしく、青い木の実は旅の疲れを癒すほど清^{すがすが}しい味がした。飢えと乾きを水と果物で満たすと、途端に疲労と安堵のせいにか、眠くなってきた。私はこのまま全員が寝てしまうのはあまりにも無用心だと思い、見張り役を自ら引き受けたが、小半時もすると瞼の重みに耐えかね、とうとう突っ伏して眠ってしまった。

私達が周りの気配に気がつき起きてみると、すでに高かった太陽が完全に沈んでしまっており、空気は肌寒く、風は砂漠の表面を擦りながら私達に向かって吹いており、辺りは真っ暗になっていた。それでも敵と思われる人の気配はしなかった。ようやく私は安堵することが出来た。母や助かった子供達が無邪気に水で遊んでいる光景を見ながら地べたに座っていると、マキシムが私の傍に腰掛けて言った。他の者たちはそれぞれ、まだ熱が残っていそうな場所

の砂の中に手を突っ込んで暖を取ったり、再び食事をしたりしていた。

「これまでいろいろな事があつたな。そういえば私達の事をまだ何も話しては居なかつたね。少々昔話でもしようか。」

そう言うとマキシムは今までの事を語り始めた。マキシムには美しい妻と可愛い子供が一人居るらしい。家族で平和に暮らしていたが、ある日政府官であつた父が亡くなり、父の志を受け継いだのだという。民衆は政府の暴君に耐えながら暮らし、幸いにもマキシムはそこそこ上流の家庭だつたおかげで日々の暮らしは出来てはいたが、本国では貧富の差が激しく、大抵の人々は貧しさの為に自分の子供を上流家庭の奴隷に売り、少ない収入で日々暮らしている人がほとんどだつた。階級制度が幅を利かせ、上流家庭に生まれて育つた子供達の日々の日課は、貧しい子供達を狩ること、つまりは汚い物を排除するかのようなりんちだつた。町中至る所で暴動が起き、警官は暴動の主が上流階級の者だと、ご丁寧に詰め所へ案内をし事情を聞くのだが、貧しい階級の者が居るとすぐさまボコボコに殴りつけた拳句、強制労働施設へと送りこんでいた。そんな世の中に嫌気が差し、なんとか状態をよくしようと立ち上がったのがマキシムの父親だつたらしい。マキシムは父親を誇りに思い、父の遺志を受け継ぐ決心をしたらしい。

しかしそのことで、同じ政府官で軍事の指揮をとる役目のガーランドに目をつけられた。ガーランドは生まれも育ちもれっきとした上流階級の出身で、王族からも一目置かれるほどの人物だつた。だが、その内面は残忍な性格をしており、自分の邪魔な者はことごとく消し去るやり方で、ほとんど国はガーランドの独裁だつたらしい。マキシムはガーランドに立ち向かう為に実情を把握する必要がある、その為に私達のかつて住んでいた村に程近い村で世話になりながら暮らしていたらしい。だが、先の戦いで世話になつた村長はマキシムを逃す為に犠牲になつて死んだ。マキシムはどうすればよいのか

わからぬまま、途方にくれていたところを、我が村の村長であるガラドに保護されたらしかった。

私はふと、マキシムの話を聞きながら、忘れかけていた記憶を取り戻すかのように、自分の内ポケットを弄まさぐった。自分の体の熱を帯び、温かくなっている鎖つきのポケットの事を思い出し、ポケットから取り出した。すると突然マキシムが私の持っているポケットを取り上げ、涙を流した。どうやらそのポケットはマキシムのもので、中の写真は彼の妻と子供だったらしい。今どのように暮らしているのか、無事なのかそうでもないのかも解らぬ家族を思い、涙を流していた。ガラドが傍に来ていることも気付かぬ程に、ポケットを両手に握り締め、膝に顔を埋めて押し殺したような声を発して泣いていた。

「マキシム殿。今なら我慢なさらず、声を出してもよいと思いますぞ。存分にお泣きなされ。」

ガラドがマキシムを気遣うように言った。改めてガラドの顔を見ると、作戦前の顔よりやつれ、代わりに英気があるように見えた。私は今度は我が村長の話を聞きたくなった。そして質問した。

「長。長はどうしてあの場にいらしたんですか。どうして私達の隊があのような事になった事をお解りになったのでしょうか。」

ガラドは私の目を見て、まるで幻でも見ているかのような目つきで砂漠を見据えて答えた。

「不思議なもので。お前さん方が出発したその日の夕方に、一羽のカラスがわしの元へ来た。そしてこれをわしの目の前に落とすていったのじゃ。」

それは、ほとんど忘れていた私の血痕付きの葉っぱだった。長くポケットにしまっていたせいかなよれよれになってはいたが、あの時恥じも外聞も考えずにカラスに渡そうとし、カラスに何処ぞへ運び去られたかも解らなかつたものに間違いない事はつきりと解った。そうか、あのカラスは長の所へ運んだのか。それにしても偶然とは

いえ、こんなことつてあるのだろうか？私には不思議でならなかった。
「キースはもしかすると、キース自身が考えているよりも動物たちに愛されているのかもしれないな。」

ガラドは静かにそう言った。私は信じられなかった。人間と動物が分かり合えるとも言うのか。しかしあの時、カラスが見せた私への眼差し。あれは私のことを少なからず知っているからこそその眼差しだった。そんな思いがまるで遠い過去を探り出すかのようにありありと思い出された。

「この、血付きの葉を見、遠くで空に上る煙を見てワシはふと、戦わなくてはならないことを悟ったのじゃ。そして村に残ったもの達すべてに戦闘の準備を整えさせたころ、敵襲があった。村には女子供しか残っていないと解っていたのか、兵士の数は少なく、ほとんどなんの作戦もなく突撃してきおった。そしてワシらは戦いながら煙の元を確かめるべく敵の村に向かい、そこでマキシム殿を見つけて救出し、その後お前さん達のいる場所に向かったのじゃ。その時、ワシらの前にあのカラスがいて先導してくれたので、道に迷うこともなくあの場所へ行けたんじゃ。ワシらはカラスに感謝せねばなるまい。あれは、神がワシらに遣わしてくださった『御使い』だったのかもしれん。」

私は長の言葉を信じる事が出来なかった。そんなことがあり得るのか？だが、私達の前にタイミング良く、しかも無事に来れた事は、奇跡としか言えぬほど、神懸りのだと思った。

私達は神がこの世に現存するとは思ってもいなかった。信仰心もなかった。というより、神の存在など考える余裕がなかったと言って良かった。生まれた時から、神という存在がいるという教えも受けなかった。そのため、長が『神』という言葉を使ったとしても、私にはあまりピンと来なかった。

「さて、ここにもいつ、敵の追っ手が来ないとも限らぬ。そろそろ

発たねばなるまいのう。」

ガラドはまるで先を見通しているかのようにぼつりと言った。しかしここに居る皆が皆、そう、私を含めて皆が、まだこのオアシスでゆっくりしたい、願わくばここにしばらく留まりたいと考えていただろう。だが、やはり敵の追っ手が来ないとも限らない事もまた解っていたため、夜の内にこの場を離れる決心をした。

ここを出ても、次に休める場所があるとも限らない。延々と続く砂漠に吞まれてしまうかもしれない。そんな不安を皆が抱いていた。それぞれが、持っていたありとあらゆる物に、オアシスで手に入れた食料と水を確保した。この場所に来たときには自分達の持つているものなど無いに等しかったが、今は皆の荷物がパンパンに膨らんでいた。これで当分の間は生きていける。皆そう感じていた。

砂漠をしばらく歩くと、皆背に担いでいる荷物が肩に食い込み、体の疲れを弥増こましている気がするようになっていた。しかしこの食料と水を今ここで捨ててしまえば、間違いなくこの先の見えない旅が困難になる。心でうらはらの葛藤が渦巻くのが解った。ガラドは先頭に立って歩いているが、何処に何があるのか解っている様子は無かった。ただ黙々とこの砂漠から抜け出したい、その思いだけで歩いていた。それは長に限らず、きつと誰しもがそうだったに違いない。

「オアシスの近くには、村があることが多い。そのうち村が見つかるさ。」

疲れを感じながらも、マキシムは私達にそう言った。自分への慰めなのか、それとも私達を勇気付けるための言葉なのか、マキシム自身もわからなくなるほどの、昼間は灼熱の太陽の下で、また夜にはこれが本当に砂漠の気候かと疑うほど肌寒い夜風の中を、喉の乾きを水で癒し、青い果実と赤い果実で疲れを癒しながら、何処までも続く砂漠を歩いて行った。

オアシスを出た時にはまだ顔を見せていなかった太陽が、あつという間に顔を出し、それと同時に砂漠は熱を帯びた。足はすでに焼けた砂と照りつける太陽の光に耐えきれずに焼け爛れ、皮膚はパンパンに腫れ上がり、割れた皮膚からは血に似た汗のようなものが出ていた。砂は容赦なく割れた皮膚へ進入し、まるで皮膚の中で大暴れしているかのように私達を苦しめた。顔も体も日焼けで真っ赤になり膨れていた。夜は夜で風が砂を私達にぶつけているかのようにして強く吹き、目の前の視界が悪くなっていた。それでもまだ、昼間よりは夜の方が歩きやすかろうと、なるべく昼間はテントを張れる場所を探して休み、陽が傾くと同時に再び出発し、疲れた体に鞭を打ってひたすらに歩いていった。

何日過ぎたのか、何ヶ月過ぎたのかも解らぬまま、ようやく私達はとある村にたどり着いた。その村は私達が今まで見たこともないような家が建ち並び、見たこともないような服装の村人が居た。ここに来るまでの間に、オアシスで補充しておいた水、食料がすべて底を尽き、砂漠に生えているわずかな植物をも食べてしまおうかというときであった。ここまでの長い道のりで、私達の人数はすでに砂漠の入り口に立った時に比べると実に1/3にまで減っていた。途中で熱に浮かされて帰らぬ人となった人が多かったからだが、それでもオアシスを旅立つ時の水と食料があったからこそ、最小限の犠牲でここまで辿り着けたのだと思った。

私達は始め、村の住民に気付かれる事無く、村の近くの森の中に居を構えた。そして水や食料を村で確保しながらの生活になった。村を観察していると、村人達は皆、頭からフードを被り、この暑い土地で肌を出さずにすっぽりと全身を覆うかのような布を身につけていた。村人は皆、一様に暗い表情をしており、まるで何かに怯えているかのような顔つきをした人達ばかりであった。その姿はまるで、私達の追われた村に似通っていた。しかし私達の住んでいた村

とこの村との違いは、この村では男達も皆が皆、暗い表情をしていること、そして男達は皆武器を身に帯びている訳ではなく、女達とも普通に暮らしていることだった。その違いだけを見ても、私はこの村に安堵を覚えた。この村では、自分の母も、長と一緒に付いて来た女達も安堵するに違いないと感じたからである。

この村に程近い森の中に居を構える決心をし、掘建て小屋を何日もかけて作り上げ、ようやく完成となった頃、ガラドが倒れた。老齢と疲労のためだった。母とガラドの伴侶の女性と母の親友のマーサは、一生懸命看病したが、長の容態は一向に回復に向かう様子は見せなかった。私とスノウは幼い時からガラドには大変に世話になっていた。そのため、ガラドの事は父とも祖父とも思っていた。だがこの緊急時に私もスノウもガラドに何もしてやれない事を思い、苛立ちを隠せずにいた。マキシムは村に行き、何かガラドの容態が良くなる薬草は売っていないかと毎日買い物に出かけるが、いつも暗い顔をして帰って来ていた。

ある日、私はマキシムに付き添い、村に買出しに出かける事になった。少しでもガラドの容態が良くなるようなものを自分の目で探したかったというのもあるが、マキシムが私の事を気遣い、気分転換にと付いてくるように言ってくれたのだということもまた解っていた。

村に近づくにつれ、空気がいつもと違う匂いになった事に気が付いた。私が胸のむかつきを抑えるかのように鼻を手で覆っているとき、マキシムが私に言った。

「村に着く前に忠告しておかねばならない。この村は悲惨そのものの村だ。何がこの村を襲っているのかは解らないが、とにかくお前さんが今まで生きてきた村よりも悲惨だと覚悟しておくことだよ。」私達が今まで住んでいた村よりも悲惨とは・・・一体どういう環境なのか、私には想像すら付かなかった。村に近づくに連れて流れて

くる匂いが、私の胸を重苦しく満たしていた。

村に着くと、すべての疑問がはつきりした。村の至る所に死体が捨て置かれ、ハエや蛆虫うじむしが巣くっていた。匂いの原因はまさしくこれであった。そして半病人のような村人達。店を構えてはいても、売る物が何一つない状態で、皆が皆何かに怯えて暮らしていた。その何かとは、この後すぐに判明されるのだが、私はこの村を見て愕然とした。戦争中の村も悲惨なものだったが、それよりもこの村はもっと悲惨に見えた。少なくとも、死んだ者の死体を捨て置く事など、私の生まれ育った村ではなかったことだからだ。無論、私達の育った村でも死ぬ者は沢山いた。しかし村の暴君達は死んだ者を捨て置く事を許さなかった。自分達の行いのせいで死んだ者も多数いたのに、自分達では片付けず、嫌な役目はいつも村の女子供の仕事だった。私達は何も解らず、ただ軀むくろを土に埋める作業を手伝ったに過ぎなかった。だが、この村の住民は、同胞の軀を土に返す事もせず、ただその場に捨て置いていた。そして自分達は自分達の家に閉じこもり、必要以外にはめったに外に出なかった。

村のあちこちに放置されている軀の傍を通り、マキシムの後を付いて、とあるひとつの家の中に入った。家の中は外気と比べるととても涼しげだったが、陰気な雰囲気は家の外と同じだった。マキシムはある人物に一声掛けると、その人物としばらく話をしていた。私は黙ってマキシムの後に控えていたが、時折観察するかのようになりを見渡すと、マキシムと話している人物の後から大勢の人物が私達を物珍しそうに見ていたことに気付いた。村人達は私と目が合うとすぐに下を向き目をそらすので、私を敵と思っているのではないかという思いが胸を締め付けていた。

「やはり、薬草はひとつもないらしいな。」
残念そうにマキシムが私に向かって言った。村人達のことを考えていたため、マキシムのしていることなどほとんど上の空だった私は、

突然現実に戻された。

「マキシム殿。私はしばらくこの村を見て回りたいたいと思いますが、自分でも思いの掛けない言葉が口を突いて出てきた。マキシムはびつくりしたような表情で私を見ていたが、すぐに私らしい考えだというような表情になり、肩をポンと叩くと声をひそめて言った。

「この村に興味を持ったんだね。この村に初めて来た時、私もそうしたよ。だが私は何回もこの村を訪れているが、この匂いだけは我慢ならん。悪いが私は先に帰らせてもらおうよ。ガラドの事も気になるしね。」

私が頷くと、マキシムは吐き気を抑えるかのように口を両手で蓋をして帰って行った。私は村の住民と少し話しがたいと思っただけはいたが、私を避けて通る村人にどうやって話しかければいいのかしばらく考えが及ばなかった。とりあえず私は目に付いた軀を土の柔らかな場所に運び、そこに墓を建てる事を試みた。村人達は訝いぶかしげに私のしている事を眺めていたが、土を掘り、軀を土の中に埋める作業を見て、一人の男性が私に近づいてきた。

「お前さん。そんなことをしてなんになるんだ。余計なことをするな！」

私は啞然とした。私の生まれ育った村では軀を土に埋める作業は私達の仕事でもあり、この仕事をさっさと済ませることによって最悪の事態を免れてきたのだから。しかしこの村の住人は軀を土に返す事を承知していないかのように、みんなが怒りを露わにして私の周りを取り囲んだのが解った。私は自分の心の中で、自分自身を落착かせるように、自分自身に言っただけで聞かせるかのような言葉の中で繰り返した。そして村人に言った。

「あなた達の同胞の軀は、土に埋める事によって神の元に還ることが出来る。その手助けを私はしているんだ。」

「神だと！この世に神などいるものか！もし神が本当に居るのなら、どうして我々を助けては下さらん！神などと言うものなど存在しない！馬鹿馬鹿しい絵空事にすぎん！」

村人にこう言われ、私はなんとなく納得してしまう自分が居るのに気が付いた。私でさえ、『神』の存在など信じている訳ではなかった。それなのに、ほとんど習慣で軀を土に還していただけだったのだから。そう気が付いた時、私の中で何かが蘇るかのような断片的な映像がまるで映画のダイジェストを見るかのようにフラッシュで頭の中に現れては消えるのを感じた。映像は、私自身がなにか大きなものに使命を授かっている時のような、ずいぶん昔のことのようなものだった。その映像が何を意味するものなのかは私には解らなかつたが、わけのわからない映像のことを考えるよりも目の前の村人達のことになによりも先決であり、神などいらないと言う村人達の言葉にはなぜか納得する気にはなれず、苦し紛れにこう答えた。

「軀をこのまま放置していれば、そのうち村の中で病気が発生し、村は滅びるだろうな。それでもいいならこのままにしておくが？」
私は自分が驚くほど、冷静にこう村人に言葉を返していた。村人は私の言葉を聞き、何やら仲間内でひそひそと話をし、ひとつの結論を見出したようで私に向かって言った。

「あんたは何者なんだ。どうしてこの村で流行っている病気の事がわかつたんだ。」

「私の名前はキース。私は旅をしてここまで来た。しかし私の大切な人が今、死の淵にいる。それでこの村の近くに留まっていた。この村に今、何が起こっているのか私は知らない。しかし、この軀をこのままにしておけば、きっとそうなるであろうと思ったから言っただけだ。」

村人達はまたひそひそと話し始めた。そして最初に私に向かって怒鳴り散らした一人の男性がまたしても村を代表するかのよう私の前に立ち、言った。

「もしかすると、あなたは私達の救世主かもしれませんな。よろしい。軀は村人総出で土に還しましょう。あなた様はどうぞ私の家に歓迎しますぞ。旅の話でも聞かせてください。」

務めて明るく振舞おうとしているかのようにして、その男は私を笑

みをつつすらと浮かべて案内して行った。先ほどマキシムと入った家に招かれ、私を招いた人物は先ほどマキシムと話していた人物だったことに気が付いた。生ぬるい、水とも思えぬほど濁った液体を私に恭しく差し出すと、墓を作っていない村人達は私の周りに物珍しそうに座った。だが、取り囲んで座った村人の半数以上が、私に疑いの目を向けている事がありありと解った。

村人は静かに村のことを話し始めた。どうやらマキシムと話をしていた人物はこの村の長で、名前をガランと言うらしい。この村は以前は行商人が犇ひしめくほど人の出入りが多い村で、とても豊かだったのだが、この地域の戦争が始まった辺りから行商人や旅人がほとんど現れなくなり、それと同時にこの辺りで『奴隷狩り』が始まったことから、段々と寂れていったらしい。奴隷狩りに来ている奴隷商人は皆、夜になるとやって来てはこの村でやりたい放題、略奪や窃盗をして帰っていくらしい。村の外に転がっている軀は皆、村を守ろうとして町の奴隷商人に立ち向かい、そのまま帰らぬ人となった者達で、今まで軀を放置していたのは、村人達自身の教訓としてその場に捨て置いたものらしい。そして、その結果（か）どうかは定かではないが、今、村の中では不治の病に冒されている人がたくさんいるとのことだった。この病気は、全身に黒い斑点が出来、高熱が上がり、放置しておけば息が出来なくなって死に至るといふ恐ろしい病気らしい。その病気を治すだるう薬は今はなく、村人達は皆どうすることも出来ずにただ死を待つてる状況らしかった。

私はその話を聞き、病気になつていてる人を見たいと言ったが、その病気は伝染するため、近づかない方がいいと言われた。今は発病した人たちは皆、地下の、元々倉庫として使っていた場所で静かに死を迎える他は道はなく、病人を地下に閉じ込めておけば、まだ病気にかかっていない村人の命は少なくともあとしばらくは無事だろうと言うのだ。

「あんたは神を信じなさるのかね？」

ある、一人の老人が突然私に質問した。村人の中でも老齡の、90を超えているのではないかと思うほど背骨は曲がり、体中の毛という毛がすべて白い老人だった。

この老人の質問に、私はどう答えて良いのか解らなくなってしまった。自分自身でさえ、神の存在など否定する気持ちの方が強かったし、ましてや実際に見たこともないのだから。だが、自分の心の支えを必要とするとき、人は神に祈るのだと言うことは、ガラドから聞いていた。

「もし、貴方様が神という存在を信じるなら、伝えるべき伝説があるのじゃが。」

真っ白な老人が続けて言った。

「今から言うことを信じなさるか。お若いの。」

キースは、ゆっくりと考えを巡らし、そして答えた。

「実を言うと私も、神が本当にいるのかどうかわからないことの方が多いです。しかし私が今まで巡り合った優しい人々、そして影から私を助けてくれる未知なものの存在は感じたことがあります。」

老人は、優しい眼差しで私を見つめ、そして軽やかにホツホツと笑った。

老人は、キースの様子を確かめるかのようにゆっくりと話始めた。なんでも古くから伝わる伝説で、この村から約一日半程山に向かつて行った所の森の中に、ひとつの大木があるらしい。その大木の果実はこの辺りに住む神が喉を潤すための果実なのだというが、その果実のなる木の根元には、街でも手に入りにくい、貴重な薬草が多種咲いているらしいということだ。だが、その木に向かう者を遠ざけるかのように、巨大な竜が大木のある森に居て、まるで果実のなる木を守っているかのように、近づくものすべてを炎のブレスで焼き尽くしてしまうのだという。遠い昔、勇敢な村人が何人もその山へ向かったが、村に無事に帰ってくるものは無く、村人達にはとう

の昔から『禁断の地』と言われているのだ。だが、その『禁断の地』にこそ、ガラドにも、この村の病にも効力のある薬草があるのではないかと言うのだ。

「どうして村人の誰か、腕のたつ者がその地へ行かない？」

「先ほどもお話したように、あそこは我々の間では『禁断の地』。そして我らはこの現状を見、神など存在しないという考えに至った。神が居ないのであれば、禁断の地などあるはずも無く、危険な竜の心配もない変わりに、神が喉を潤すための果実のなる木もなからうという結論に至ったからだ。」

老人が言った。

「話がおかしい。神がおらず、禁断の地がないのならば、それこそ山に入っても大丈夫とは思わないのか？」

「いやいや。現実には、村の勇者達は何人も山へ行つたきり帰つては来ない。したがって、神がいないとは思っていても、むしろにとつてあの山は危険な場所、つまり『禁断の地』というわけじゃ。」

「なんだか納得のいかない話ではあるが。」

「お若い。もし、この話を信じなされるなら、一度あの地へ行く事をご承知くださらんか。わし等はもうどうすることも出来ぬ。村人でもない、旅人の貴方様にこんな頼みをするのはどうかと思うが、貴方様はご自身の大切なお人が倒れていらっしやるのじゃろう？この村には生憎薬草はひとつもない。大切なお方をお助けするには、あの地に出向くしか方法は今のところなからう。そのついでに、村を助けてはくださらんか。」

「なんとも、自分勝手な言い分だと思った。しかし、この村人の言っていることもまた、真実。しばらく考え、自分の仲間達にも相談したいという思いに駆られ、私はこの村を後にした。」

村を出、外の新鮮な空気に触れ、私の頭は冴えてきていた。ガラドの居る掘建て小屋に戻り、事の次第を皆に告げ、意見を求めた。

母は私に冷たい水を差し出してくれた。この時始めて気がついたのだが、私は村を出るまで、一滴の水も飲んではおらず、とても喉が渴いていた。だが、村の悪臭とも言える匂いに翻弄されたのか、水を差し出されるまで自分の喉が水を欲していることすら忘れてしまっていた。差し出されたカップは、今は無き村で母が愛用していたカップだった。そのカップに口をつけたとたん、唇の上でささくれ立った渴いた皮膚がカップの淵に当たった。水は私の渴いた唇から喉を潤しながら体へと浸透していった。

マキシムは、私がたった1日でそんな情報を仕入れるとは思ってもいなかったようで、かなりびっくりしていた。気を取り直すかのようにゴクツと唾を呑みこんで、私の聞いた伝説を見てみてもいいのではないかという意見を出した。このマキシムの意見には、村の仲間は皆賛成していた。ただ一人、母を除いては。スノウなど大喜びで、まるで子供が遠足にでも行くかのようににはしゃぎまわった。私は結局、スノウと2人で伝説の真意を確かめにいくことにした。

第二章 第四話 山の上での死闘

私とスノウは2人で森に歩いて行った。村人達の聞いた事を確かめるのと同時に、ガラドの為の薬草を取りに行くためである。森に行く前に、スノウが私に耳打ちした。スノウもあの村を見てみたいというのだ。あまり気乗りはしなかったが、私はスノウと一緒に村の長のガランに挨拶をしに行った。スノウも私と同じく、この村の陰気な雰囲気には閉口していたらしいが、私が見たときは違い、軀はすべて墓に埋めて今はきれいに片付けていた。ガランに挨拶をし、これから森に向かって行くことを告げるとガランは私達の為に一振りの剣を用意してくれていた。その剣は、この村が私達にエールを送ることの出来る唯一の品物なのだと言った。恭しくその剣を差し出すと、ガランを初め、村人達が私達を送り出してくれた。

スノウはこの村を見物したいと言ってついて来たが、ものの数分と経たぬ内に気分が悪くなったのか、早く村を出ようと私をせかし始めた。私は剣をスノウに渡すと村を後にし、目的地へと向かった。

砂漠の淵を通っていたため、砂漠の旅とは比べ物にならぬほど楽な旅だった。飲み物や食べ物はないが、時折生えている木々の果実を食べたりしながらの旅だったからである。こうして1日が過ぎようというとき、目の前に山の入り口が見つかった。

「おい。方向はこつちでいいんだよな。1日半歩くと森に辿り着くって言わなかったか？これじゃ、山の中に入っていくようだぜ。ここで合ってると思うか？」

スノウが不安気に聞いてきた。私は太陽の位置や雲の流れ方、そして歩いて来た道を眺めて、確認した。

「ああ。この道で合ってると思う。この辺りには森らしきものはなさそうだから。山に入ってみるか？もしかすると、”山の中の”森という意味だったのかもしれないしな。」

スノウにそう告げると、私はそのまま歩き出した。スノウは、歩き出した私の腕をつかみ、一休みしないかと言った。そういえば、マキシムと村を訪問してからここまで来る間、一睡もしていなかった。気がついたようにそう思うと突然、眠気が襲ってきたような気がした。そして2人はわずかな木陰を探して休むことにした。

高かった日が傾き、夕方の冷たい風が吹き始めた頃私達は目覚めた。体力も回復し、持ってきた食料や水を飲んで生気を養った。夜になる頃には、私達は出発の準備が完了していた。

そろそろ辺りが暗くなってきた。山に入る前はまだ明るかったのに、山に入った途端に急に暗くなったように感じ、私達は後悔した。もう少し明るくなってからの出発の方が良かったのではないか。そんな念が胸をよぎった。しかし、薬草を待っている村人達やガラドのことを思うと、どうしても急がずには居れなかったのだ。暗い山道を物ともせず、私達は懸命に登って行った。

徐々に辺りが明るくなり、朝がやって来た。廻りの景色がはつきりと見えるようになった頃、私達は森らしき場所に来ていた。廻りを見まわすと、今まで無かった木々が私達を取り巻くかのようにして生えていることに気がついた。私達が登ってきた道はここで終わっていた。

森に入ると、太陽が何処にあるのかも解らぬほど木々が生い茂っていた。太陽は木々に阻まれ、私達を照らす事が出来ない状態であるのに、この森の中は何故か不自然に暑かった。まるで、木々が熱を帯び、外気に発散しているかのように蒸々していた。木々に絡まって生えている雑草やつる草が、私達の足に絡み付き、まるで侵入者をこれ以上前に進めないようにしているとさえ思うほどだった。その雑草やつる草を短剣で切りながら歩かなければならなかった。

奥に進むにつれ、ますます蒸し暑くなり、雑草やつる草に交じり茨も増えて来ており、ますます進みにくくなっていた。つる草や茨ツル草を切る剣を持つ手も段々に疲れを見せ、手には早くも豆ができ初め

ており、力が入りにくくなって来ていた。それでも前に進まなければならなかった。

森深く入り、もう体力の限界が近いだろう頃、かすかな地鳴りが聞こえた。それは静かに、そして地に響くような低い唸り声のような気がした。村で聞いた事が思い起こされた。『竜』がいる。そう確かに聞いた。だがこの現世で、神話にしか登場しないような生き物が本当にいるのかにわかには信じがたかった。

注意深くゆつくりと進んでいった。私達の目の前に、森の途中でまるでそこだけ木が切り倒され、誰かがこの場所に住もうとしていたかのような不自然な平原が広がった。そこに竜が居た。確かに居た。神話や伝説の生き物とされるはずの竜が、私達の目の前に居た。なぜだか解らないが、私はこの状況を不思議には思わず、当然のように受け入れていた。スノウは恐れ^{おの}戦き、ギリギリと後ろに下がっていた。目は竜を見つめ、恐怖で顔は引きつっていた。後ろに下がる以外は何も出来ないかのように、口をパクパクさせていた。

竜は私達の事にしばらく気付かず、眠りこけていた。全長何メートル、いや、何十メートルあるのか解らぬほど大きい、今まで見た事も無い生き物が私達の目の前に居た。私はこの竜の廻りを見渡した。竜の背の方向の森を眺めると、そのずっと向こうに山の頂きが見え、そこには一本の背の高い木があった。風に乗って、甘い香りが漂って来ていた。私はスノウを小突き、何とかして竜に気付かれぬように竜の背の方へ抜けようと合図したその時、竜が目覚めた。私達の背に戦慄が走った。竜に向け、ありとあらゆる攻撃をしよう、銃や剣を構えた。スノウは腰に下げた手榴弾を今にも投げつけようとして、左手を腰の辺りに這いずり回せていた。

私たちの行動に気がついたように、竜はゆつくりと私達を睨みつけ、そして大きな体を起こした。目の前に広がるのはすでに竜の体だけになっていた。

「お前達はいつたい何者だ。どうしてここに居る。」

重苦しい、毅然とした声が私達の脳の中に直接語り掛けるかのよう
に響いた。私は最初、誰がしゃべっているのか見当がつかず辺りを
見まわしたが、すぐにその声が竜のものだと気付いた。辺りの鳥達
は竜が寝ている時も今も、変わらずに竜の廻りの木々で囁^{ささや}っていた。
竜の声はどうやら私達以外の者には聞こえないようだった。また、
同じような重苦しい、声が脳に響いた。

「お前達はいったい何者だ。どうしてここに居る。」
同じセリフをもう一度聞いた。いや、聞いたのではない。この竜は
直接私の脳に言葉を送っているのだらう。なぜだかはわからないが、
直感でそう思った。スノウの表情を伺っても、スノウには竜の声が
まるで聞こえていないかのよう、あいつも変わらず戦慄した表情で
ただ後ろに下がることしか出来ないでいた。

「私はこの地に、不治の病を治す薬草があると聞いてきた。今、こ
の山の下の方では疫病が流行っている。その者達を助けたいのだ。」
私は静かに答えた。すると竜は突然、私達の前で体中を天に仰ぐか
のように伸ばし、目もくらむほどの眩い光に一瞬にして包まれてし
まった。眩しくて、私達は光をさえぎるかのように顔を手で覆いな
がらも、なんとか竜の様子を見た。光が次第に消えうせ、眩しさも
無くなった時、私はあつけにとられた。今まで目の前に広がってい
た竜の姿は何処にも無かった。スノウと私が不思議がっていると、
目の前に一人の青年が立つてることに気がついた。その青年はゆっ
くりと歩いて私達の前に来た。

「私は神よりこの地を守るよう言い渡された者。ここには何人たり
とも入れてはならぬと言われている。早々に立ち去られるがよかる
う。」

歳の割りには落ち着いて見られるこの青年は、私達にそう言った。
しかし私は動かなかつた。

「この地に、不治の病を治す薬草があると聞いてきた。君はそれが
何処にあるのか知らないか。」

青年は微動だにせず、私の顔をじっと眺めて言った。

「この地には、不治の病を治す薬草などない。」

私は啞然とした。青年の言葉を今一つ理解できないでいた。『この地に薬草はない？』私の脳にこの言葉が染みこむまでにしばらくの時間を要した。完全に脳に青年の言葉が染みこんだとき、私は愕然として、体中の力が抜けていくのを感じた。自分でも気がつかぬうちに地面に膝を付いてうな垂れていた。

スノウは今だに事の次第を理解できずにいた。立ったまま、私とその青年が話しをしている間も、私がうな垂れた後も、口をパクパクしながら動けずに突っ立ったままだった。

「お前達にこの地に来る理由は無くなった。早々に立ち去れ。」
今度は強い口調で青年が言った。私はこの時急に頭がすっきりしたようになり、青年に向かって叫んでいた。

「では、村の者はどうなる？我らの長はどうなる？このまま朽ち果てるというのか！」

叫びながら、私の頬に熱い物が流れている事に気がついた。興奮はしていたが、頭の片隅では、冷静に事を判断しようとするもう一人の自分がいた。もう一人の自分は残酷な言葉を私に投げた。『この者の言う通りだ。』

青年は冷静に、やさしい光を瞳に蓄え、私をじっと見ていた。そしてふっと微笑むと、私に向って剣を突きつけた。

「では、私と戦うか？その腰にある小さな剣で。私を倒せばお前はこの山の頂きに辿り着ける。だが、もしお前が倒れれば、お前と友人、そして山の下の子やお前の大切な者達すべては悲嘆にくれながら死ぬ事になる。それでもお前は私と戦う覚悟があるか？言っておくが、この地は神の目の届く場所。お前が手にしている穢れた機械は使えぬぞ。」

そう言っただけで青年は私の手にしている銃を指差した。私は驚き、物は試しと横の安全な場所に向って銃を発砲してみた。『カチツ。』という音がして、トリガーが元のさやに収まった。この青年の言う事

にはどうやら間違いはないようだ。そして私は立ち尽くしたままのスノウの腰から手榴弾をひとつ外すと、同じようにピンを外して投げた。手榴弾は地面に軽快な音をたてて転がった。しばらく待っても爆発する気配はなかった。これもダメか。この青年の言う通り、私はここを通りたければ剣だけで青年に打ち勝たなければならぬのだと悟った。

「戦いの前に教えてやろう。本来ならこの地は普通の人間には入ることも出来ないように結界が張ってある場所なのだ。普通の人間はこの場所を知らずに森の中を延々とさ迷い、森の中で朽ち果てるか、諦めて帰るしかないのだ。だが、お前はこの地に辿り着いた。何故だか解らぬが、お前の心の純粹さゆえにこの地に招かれたのかもしれぬ。だが、ここを通り抜けるには私を倒さねばならぬ。私はこの地を人間から守るためにお前達と戦わねばならぬ。お前達にとって私は閉門と言うわけだ。」

青年はそう言うと、また剣を構えた。その身のこなしは人間とは思えないほど素早かった。私は戦いを覚悟した。そしてスノウを見た。スノウはまだ固まっていた。

「スノウ！危ない！隠れているんだ！」
私はスノウに叫んだ。しかしスノウは動かなかった。まるで硬直しているかのような、石にでもなったかのように立ち尽くすばかりだった。

「その者は私の力で体が動けぬ状態になっている。私とお前の戦いに手出しが出来ぬようにするために。だが、目はちゃんと見えるし、息も出来る。事の成り行きを見守るだけしかできぬ。」

「ひとつだけ、お前に慈悲を与えよう。その者の傍で戦ったとしても、目に見えぬ結界によって、その者には傷ひとつ付けることはかなわぬ。安心してかかってくるがいい。」

その言葉を確かめるかのように、青年は風のごとく地面にあった石ころを拾い上げ、スノウ目掛けて思いっきり投げつけた。私があつと息を呑んだ瞬間、投げつけられた石はスノウの体に当たる寸前の

数ミリの地点で弾かれ、力を失ったかのようにポトリと地面に落ちた。これなら、間違つてスノウを剣で突いたとしても、スノウは傷は負わないだろう事を悟った。

私はスノウに渡してあつた、村の長のガランから貰つた剣を手に持ち、覚悟を決めて青年に剣を突きつけるようにして構えた。

「ほう。その剣は、グラムリングではないか。神がその昔、慈悲に於いて人間に与えたもうた名剣のひとつ。なるほど、お前はこの地の人間の強い願いを持ってこの地に来たのだな。よかろう。相手してやろう。さあ、かかつてくるがいい。」
こうして、山の上の死闘は始まった。

青年は人間技とは思えぬほどの素早い動きで私を幾度となく切りつけてきた。私は剣の扱いに慣れてはいたが、この青年の人間業とは思えぬ動きに翻弄され、青年に傷ひとつつけることが出来ずに居た。このままではやられてしまう。村の人たちやガラドの苦しんでいる顔が走馬灯のように頭の中を通り抜けて行った。

青年の剣は鋭く宙を舞い、私を容赦なく攻撃してくる。それをかろうじて避ける。そんな一方的な戦いが終始続くかと思われた。体力がどんどんと磨^すり減り、脂汗だけが流れていた。青年は長い時間の攻撃を繰り返しながらも、息が上がる気配はない。お互いの剣が火花を散らし、地面の雑草がチリチリと焼ける匂いがした。私は何とかしてこの青年の隙を突こうともがいていたが、青年には隙がなく、疾風のごとく目の前を通りすぎているのを目で追うのが精一杯だった。青年の技のキレも素晴らしく、かなりの手練^{てだれ}であることは間違いない。だが、私の体のあちこちをまるでいたぶるかのように切りつけて傷を負わせてはいるものの、決定的な攻撃は仕掛けては来なかった。

どのくらいの時間が経つただろうか。永遠に続く戦いのように思

えた。私の体力が底をつき、肩で息をしている私に、青年は容赦なく攻撃をしてくる。青年の剣に自分の剣が弾かれ、遠くの地面に突き刺さってしまった。もうだめだ。そう思った瞬間、青年は私の首に剣を突きつけ、言った。

「体力の限界が来たようだな。人間とは憐れな生き物よ。残念だが私の勝ちだ。風の精よ。」

青年は私をじっと見つめている。長い時間の戦闘であったにも関わらず、息も上がらず汗もかいていない。私は力の差を思い知らされたようだった。それに今聞いた言葉。『風の精』とはいったいどういうことなのか。私が二の句を告げられずにいると、青年はふつと笑みを浮かべ、私の肩に置いたままだった剣を収めた。私はその場に倒れ、空を見上げて荒く息をしていた。途端に涙が零れ落ち、このまま何も得られずにこの場所で朽ち果てるのが悔しくて、意味もない言葉を青く澄んだ空に向かって叫んでいた。

青年が私の顔の場所まで歩いて来た。そして私の顔を覗き込むようにしてにこやかに笑いかけると、指をパチンと弾いた。その瞬間、風が何処からともなく吹いてきて、私の廻りを取り囲み、風の勢いで私の体は宙に浮いた。そうか。このまま地面に叩きつけられて死ぬのか。私の人生はここまでなのか。そう思いながら覚悟を決めた。風は柔らかな感触で私を満たし、心地よい旋律を奏でるかのような音で私の気持ち着かせた。死とはこんなにも気持ちのいいものなのか、と私は心の中で思った。

気がつくと、私の顔の上に心配そうな顔のスノウが覗き込んでいた。さっきまで痛んでいた体の傷もすべて消えていた。

「なんだか夢を見ていたようだ。」

そう言いながら私は起き上がった。目の前には夢の中で戦った青年が立っていた。

「夢ではない。現実だ。」

青年は言った。

「お前の戦いは見事だった。お前は何か、とてつもなく大きな存在に守られているようだ。わずかで弱い力だが。私にはそれが解る。そしてお前には、苦難を厭わぬ精神力と、仲間や家族を思う強い気持ち、そして大切なものを守り抜く覚悟が出来ているようだ。行くがいい。そして自分の目的を達成させるがいい。」

思いも寄らぬ青年の言葉に、私はとても驚いた。しばらくは何も考えられなかったが、スノウの喜ぶ顔を見て、ようやく青年の言葉が理解出来た。戦いには敗れはしたが、私はこの先も生きていけるのだ。心地よい香りの地面から立ちあがり、再び旅の支度を整える、と、青年が空を見上げて言った。

「お前達の目指している『薬草』とやらは、たぶんあれのことであろう。あれは昼間の内にしか手に入らぬ。日が翳れば忽ち干からびてしまうだろう。それまでの間に持ち帰らねばならぬ。無事に持ちかえることが出来れば、その薬草を一晩煎じれば薬は出来るだろう。だが、先ほども言ったように、『不治の病』を治す力はすでない。それでもお前達は薬草を探すのか？」

2人は愕然とした。やはり青年と戦う前から薬草を手に入れる事は不可能だったというのか？では、いったい何の為に戦った？今までの事が頭に浮かびは消え、フラッシュ画像のように瞬間瞬間に村人や長の顔が映った。考えた拳句、私は意を決して青年に告げた。

「それでも・・・薬草を取りに行く。」

青年は笑みを浮かべ、一人何かに納得するかのようにウンウンと頷くと、私達を森の方へ押しやり、そこで待てと合図した。

先ほど戦った平原の真中に青年は立ち、何かを念ずるかのようによ首を下に下げると、青年の体に光が集まり、目の前で小さな人型の影が大きく変化していった。そう、最初に居た竜は、まさしくこの青年だったのだ。いや、青年が竜だったと言う方が適切かもしれない。初めてこの平原で竜を見た時の、重苦しい地鳴りのような声が

またしても頭にこだました。

「私の背に乗るがよい。」

言われるまま、私とスノウは竜の背に乗った。そして目的地、人間の禁断の地へ足を踏み入れた。先ほど居た平原より幾分背の高い雑草が生い茂っており、廻りは見渡す限り一面水色に透き通っているように見えた。その山の頂上と思われる場所には一本の背の高い木が生えており、木には見事なほどのピンク色の果実が実っていた。

「その果実には手を触れてはならぬ。神の喉を潤すための果実だ。人間が触れるとこの地全体が朽ち果てることになる。お前達の探している薬草はその木の下だ。」

言われるがままに大木の下を見ると、雑草ばかりが生えた場所に、見たこともないような草が少しだけ生えていた。青年が間近に来て教えてくれた。

「昔はもつと沢山の薬草が生えていたのだが、今はここにある5本しかない。この薬草を私はここでもう一度増やさねばならない。3本だけ、持ちかえることを許そう。だが、後の2本は置いて行け。」
青年はそういうと、3本の薬草を大事そうに切り取り、私に手渡した。そして煎じ方も教わった。私は逸る気持はやちを押さえ、青年にお礼を言った。そしてまた青年は竜の姿に変化し、私達を山の麓まで送ってくれた。

竜に何度もお礼をいい、スノウと私は急いで村へと走っていった。この時点ですでに日は傾きかけていた。間に合うだろうか？いや、きつと間に合わせる。そして皆を助けるんだ。二人は物も言わずにただひたすら走りつづけた。

第二章 第五話 長の死（前書き）

キース「作者が、自分のホームペにあげたやつを修正するのに、かなり苦労してるみたいだぜ。なにも考えずにアップするからだよ。ふう」

スノウ「え？そんなにひどかったのか？俺、ぜんぜん気が付かなかったよ」

キース「・・・読者がみんなお前みたいなやつだったら、きっと作者も楽だろうな・・・」

作者「・・・」

第二章 第五話 長の死

私達は疲れを知らぬ者のように、逸る^{はち}気持ちを押さえて帰路についた。手にした薬草を見る暇もなく、ただただ太陽が沈む様子だけを見て走っていた。時間が無い。焦りと疲れのために、動かしている足が途中で纏れ、^{もっ}転びそうになりながらも2人は必死で走った。日はすでに地平線すれすれの場所にあった。

流れる汗が目の中に入り、ろくに前も見えない。体は火照り、思うように動かない。しかし村で待つ人々の事を思い浮かべながらただひたすらに走った。走っても走っても村は見える気配もなく、このままでは間に合いそうに無い。そんな事を頭の片隅で思い浮かべてもなお、2人は止まる事をしなかった。

私は自分の頬に冷たい物が伝っているのを無意識に感じた。それは涙なのか汗なのか、自分でも考えることも出来ぬほどに私は疲れ果てていた。そしてまだ見えぬほど遠くにある村で、いまだ苦しんでいる人々のことを走馬灯のように思い起こしながら、疲れた足を引き摺るように走った。いや、実際にはもう走ることなど出来ていなかったのかもしれない。私は無意識に同じようによたよたと走っているスノウの腕を掴んでいた。その時初めて私達は立ち止まった。そしてスノウの腕を掴んだまま、私は目を瞑り、空に向って叫んだ。まるでなにかに撞りつかれたかのよう。

『お願いだ！間に合わせてくれ！村に急がなければいけない！』その瞬間、この願いを目に見えぬ誰かが聞き届けたかのよう、強い風が2人を取り囲んだ。あまりの強風のため体が飛ばされるのではないかと思うほどの凄まじい強い風だったにも関わらず、私達の居る場所はなぜか平静そのものだった。風だけが、私達の廻りで旋回しているかのようだった。

ふたりの行く手を阻むかのような強風はほんの数秒で、私達の頭の上に乗るかのように吹き流れ、空の彼方に消えて行った。私達はまたすぐに走り始めた。日はすでにその体の半分を地平線の下に落としてしまっていた。再び私の胸に焦りが蘇ってきた。体はすでに言う事を聞かず、休ませろと言わんばかりに動く事を拒否していた。意識だけが体を動かしているかのように感じた。

ほんの数分走っただけで目の前に村の明かりが見えた。私は安堵した。安堵と同時に、体がまた以前の気力を取り戻したように言う事を聞くようになったように思え、それから村までの距離は、たった今村から出た若者のように晴れ晴れとした気分で走り抜けることが出来た。

村の入り口に着くと、村人が一斉に私達の到着を喜んでくれた。私はすぐさま村人に炉と鍋と薪の用意を言付け、ガランの家に向かった。

ガランは驚きのあまり、椅子から落ちそうになりながらも、涙を流して私達を出迎えてくれた。私はガランに薬草を見せて言った。

「これが幻の薬草だそうです。」
ガランは嬉しそうに、そして大事そうに私の手の上の薬草に触り、私の手を包み込むようにして私の手の上に顔を埋めて感謝の気持ち述べていた。

「この薬草は、聞くところによると日が没すると萎れてしまい、薬草としての役割を果たさずに枯れてしまうそうです。今、村の者に炉と鍋の準備をお願いしました。すぐに煎じなければなりません。」
私がそう伝えると、ガランは面を上げて私を見た。その顔は期待に胸弾ませているようであった。

「すべては貴方様におすがりするしかありません。どうか村の者達をお助けください。」

ガランが私にそう告げると同時に、村人がガランの家の前まで来て炉の準備が出来たことを告げた。私達はガランの家を出、炉に行き、

薬草を煎じ始めた。山の上の竜に教えてもらった事を思い浮かべた。

「まずは弱火で一晩じっくり煮こむ。その後に完全に冷ます。その間、鍋の中に入っている薬草には絶対に手を触れてはならぬ。完全に冷めたら薬草を取り出し、天火に干して乾かし、完全に草が乾いたらまた一晩煮る。これを3日繰り返し返す。単純だが根気の要る作業だ。途中で水が蒸発して、水かさが少なくなつたとしても、絶対に水を後から足してはならない。」

山の上で聞いた言葉が脳裏で再現された。注意深く火を強くしすぎないよう、焦げ付かぬようにかき混ぜながら煮た。最初の一晚は私が煮たが、村人が代わる代わる私の傍に来ては、私の作業を眺め、手伝い、私を休ませてくれた。村についてから今までずっと私とスノウは休む暇もなくあちらこちらと行ったり来たりし、まだ病気がかかっていない村人達に用事を頼んだりと忙しく動き回っていた。村までの道のりを走り通した疲れや息切れを癒す時間を、ここで初めて親切な村人達から貰った。その時間を利用し、私たち二人は揃って村を出た。ガラドに報告をするため、自分達の村へ帰ろうとしたのだ。私とスノウは再び走り出した。

森の中の自分の仲間がいる村へようやく帰って来た。私はすぐさま、長の居るテントに行った。ガラドは憔悴し切っており、意識も絶え絶えに、ようやく息をしているように見えた。

私が傍に寄るとガラドは私に笑いかけてくれた。まるで私のできた事すべてを解っているかのような、私を誇らしく思っているかのような微笑だった。

「長。もうしばらくの辛抱です。もう少しで薬が出来あがるんです。」

「そままで言うと私はその先の言葉が出なくなってしまう。言いたい、伝えたい事は沢山あるのに、胸が詰まってしまい、言葉に出せ

なかつたのだ。頑健で無骨だったが優しい、たくましい長だったが、今は病のせいでやせ衰え、骨と皮だけの姿に変わり果てていた。私の目の奥が熱くなり、まぶた瞼を押さえようとしたりした時、後ろに居たスノウが慰めるかのように私の背をポンと軽く叩いた。スノウのその行動が私の意識を覚醒させてくれたかのように、なぜか肩がふつと軽くなった気がして、病床にいるガラドにやっと笑顔を向けることが出来た。私はガラドに一礼し、母の元に向った。

久しぶりとも思える我が家テントだがは、何故か懐かしい空気が辺りを充滿している気がした。母は元気だった。母が唯一気兼ねせずに居られた友人のマーサは砂漠越えの長く苦しい旅の間に力尽きた。大半の仲間を失ったが、母は以前と変わらず元気だった。口が利けぬ代わりに、きめ細やかな気遣いと優しい態度で皆に接していたため、今では廻りからとても親切にされる事が多くなったようだった。手痛い裏切りを受けた男達は皆気のやさしい者ばかりで、自分にとつても友人と思える者が多かったせいもあるう。ガラドの事以外では、今現在この村の住民を悩ませる要因は無かった。

母の元気そうな顔を見て安心し、再びガラドのテントへ向かう途中、マキシムが不安そうに私を見つめていた。マキシムは私の手を取り、無事に村に帰って来れた事を喜んでくれた。だが、まだ薬は完成していない。完成するまでは本当の意味での安心は出来ないと改めて思い知らされるようだった。

すでに夜の冷たい風が吹き、空には幾つもの星が瞬いていた。今日は村に残ると言うスノウに別れを告げ、再び母の居るテントに戻り母にキスをする、薬の様子を見にガランの村に戻った。

村は静かだった。まるで人が一人も居ないかのように。しかし、皆は安心したせいか、夜が更けてきたせいか、各々の家に帰りゆくりと久しぶりの安堵の床についていた。ただ、私を休ませるため

にと、薬草が入った鍋の番をしてくれた村人以外は。

村人はすでに夢現ゆめうつになり、船を漕いでいた。すっかり夜も更け、月が明るく周囲を照らしていた。私は薬番をしてくれた村人を起こし交代すると、床へと誘った。それから私は私が、ひきつづき煮立たせないよう細心の注意を払い、朝まで薬を煮続けた。

夜が明け、スノウが眠そうな目を擦りながら私の傍へ来た。交代するといふのだ。私はそのありがたい言葉を素直に受けることにした。スノウと交代する前、少し話しをした。スノウは、山からの帰り道の事で不信に思っていることがあるといふのだ。

「最初は思い違いかとも思ってたんだが、昨日一晩考えてもやっぱり腑に落ちなくてね。おかしいと思わないか？行きには途中で休憩したけど、この村から一日半かけて歩いてようやく山についたんだぜ。帰りはどう考えたつても日没までに村に戻れるような時間はなかったと思う。それなのに、風が吹いた途端に村が見えた。それでもしやと思っただが、もしかして俺達は風にこの村の近くまで『運ばれて』来たんじゃないのか？」

このスノウの問いかけに、私はなにも答えられなかった。山の上の青年が言った言葉が胸をよぎる。『風の精』……一体あの青年はなぜそんな言葉を口にしたのか。私と何の関係があると言うのだろう。そんなことを考えながら、薬草を持って帰ってきてから始めて私は自分のベッドに横になった。精神的にも肉体的にもすでに限界を超えており、長く眠るつもりはなくなるとも、瞼がついに重くなり、深い闇の中に意識が落ちていくのを感じた。

山の上の青年に言われた工程がすべて終わるまではとても長く感じた。たった三日のことなのに、まるで一年煮続けるのではないかと思わせるほど長く感じた。その間にも、村人は次々と死んでいくのを見なければいけなかったのがさらに辛かった。もう少

し持ちこたえてくれれば・・・もう少し早く薬が出来あがってくれば・・・焦りと憤りを押さえきれなかった。

「あと少いで、貴方様の苦勞も実る時が来るようですな。」

ガランが私に話しかけてきた。まるで私の感じている焦りや憤りを知っているかのように、敬意を表したような眼差しだった。

このときになってようやく私は忘れていたことのひとつを思い出した。山へ行く前に渡された剣グラムリングのことだ。青年の姿の竜が『その昔神が人間に託した』ものと言った。それが本当ならば、これはこの村の宝物のはずだ。私は自分の腰にある重くそして立派な剣を恭しく取り出し、汚れを出来る限り取り除いてガランに手渡した。

「いやいや、それは貴方様に差し上げましょうぞ。この老いぼれが持っているより、むしろが出来ないと思っておったことを成し遂げ、今まさに村の救世主となるうとしているお方に使っただけのほうに剣にとつても誉れと言えましょう。」

そう言うとガランは再び剣を私に差し出した。この数日の間しか使っていないかったが、なぜか愛着と言うか、離れ難い存在になりつつあった剣だ、私にとつても有難い申し出であることに違いはなかった。ガランの真剣な眼差しを見つめ、なにか決心したかのように、私は深々と礼をしてまた元の鞘に剣を収めた。

ようやく薬が出来あがる日がきた。村人も、そしてマキシムも、皆が鍋の中を覗いていた。薬はあれだけの期間延々と煮続けたのに、不思議と濁ることが無く、透き通ったコバルトブルーの液体になっていた。日没まで煮続け、その後完全に冷めるまで待てばいいのだ。砂漠に程近い土地とはいえ、夕方から夜にかけては急激に冷える。せいぜい小半時も待てば薬は完全に冷めるだろう。村人達も私達も期待に胸が膨らんだ。

日没になり、ようやく火から鍋を下ろした。これからしばらくは今までのように薬の番をしなくてもいいだろう。私にもスノウにも

急激に安堵が襲って、同時に眠くなってきた。村人達に促され、私達は薬の鍋に蓋をし、村の一室で静かに眠った。

ようやく薬が出来上がった。この薬を病に冒されている人々すべてに一さじづつ与えていく。薬は太陽の下でキラキラと光って見えた。マキシムの勧めでガランの村人達に先に薬を与えていくことにした私は始めにガランの家の地下で苦しんでいる人々に与えた。すぐに効き目が現れるのか、そうでないのかは解らないが、とにかく今、病気を治すかもしれない薬はこれしかない。私は騙されたかもしれないという漠然と浮かんだ疑いの念をすぐさま断ち切り、次々と村人達に薬を与えていった。山の上で出会った青年の言葉がまた新たに思い起こされた。

「この薬は出来上がったから半日しか持たぬ。この世界の空気が汚れ、薬草の効果が薄れてきているためだ。大勢の人間に与えるなら手早く仕事をこなすしかないぞ。」

半日しか持たない貴重な薬。コバルトブルー色で太陽に当れば七色に輝き、すくった時の質感はドロドロとしているようにもサラサラしているようにも感じられる不思議なものだった。あれほどの長い時間火にかけ煮ていたにも関わらず、薬草の破片などはひとつも見つからなかった。そして焦げ付きなども見当たらなかった。私がガラドの村へ行っている間に番をしてくれた村人に再び感謝の念が湧き上がるのを感じた。

病に伏せていた村人は、最初の印象よりも多いように感じた。重い鍋を担ぎ、あちらこちらと転々とし、村人達に薬を与えていく。一さじづつ、苦しそうに寝ている人や、ほぼ意識がない状態の人の口を無理やりこじ開け、薬を一滴残さず流していく。スノウと一緒の作業だったが、大変な重労働であった。

約半数の村人に薬を与えた時点で、すでに太陽が傾いていた。夕日が完全に沈むまでにすべての病人に薬を与えないといけない。焦りと疲れを感じながらも、私たちは病人をなんとか救いたいという

想いだけで動いていた。

太陽が真っ赤に染まり始めた頃、ようやく村人全員に薬を与え終わり、その足でガラドの待つ自分の村へ大急ぎで戻った。薬はすでに底をつき始めていた。だが、後一人分くらいなら残っている。これでガラドを病魔から救えるのだ。

森の中にある自分の村。その一室でガラドが薬を待っていた。ガラドのテントへ入ると、ガラドが寝ている場所のすぐ脇ゆかの床に誰かが倒れていた。マキシムだった。

「いったい、どうしたのです？マキシム殿」
返事がない。私は背筋が凍る程の緊張を覚えた。ガラドが相変わらぬ苦しそうな息をしながらも懸命な表情で私に言った。

「どうやらマキシム殿も病魔に冒されたようだ。キース、は、早くマキシム殿に薬を……」

「しかし長！薬は後一人分しか残っておりませぬ！あなたの分が……」
ガラドは床の中で弱弱しく首を横に振りながら言った。

「キース。マキシム殿は本国に戻って頂かなければならぬお方。そして国の未来を託さねばならない大事なお方。ここでこの方を亡くすことは何があってもあつてはならぬことなのだ……。さあ……。早く……。薬を……!!」

私は迷っていた。マキシムが本国で重要な地位を占めている人物なのは解っている。しかしガラドは自分が幼い頃から慕っており、いわば父親のような存在なのだ。どうにかして二人ともを助けたいが、無常にも薬は一人分しか残っていないのだ。

「キース！！そろそろ夕日が沈む。早く薬を！」
スノウの言葉でいきなり現実に引き戻され、私はガラドのいいつけ通り、マキシムに薬を与えた。匙いっぱいにはすくわず、ちよつと少なめにした。ガラドに少しでも薬を飲んでもらえば、きっとよくなる。根拠のない祈りだけの気持ちであえてそうした。

ガラドに向き直り、鍋に残っている薬を一生懸命すくい取ったが、匙の半分にも満たないほどの量しか残っていなかった。鍋の縁にこびりついている薬を必死にかき集めた。やっとの思いでかき集めた匙半分程度の量の薬をガラドの口元に持っていこうとした。私は是が非でも残りの薬をガラドに飲んで貰いたかった。しかしガラドは再び首を横に振った。

「わしの役目はもう終わつとる。それよりあの子に薬を与えてやりなさい。」

ガラドが指す方向を見ると、ぐったりと横たわった幼い子供が母親に抱かれていた。その子の眼は見開かれてはいたが、正面を見ているのか、それとも見えていないのかさえ定かではない眼をしていた。子供を抱えた母親は目に涙を浮かべながら切なそうに、しかし気丈にガラドに向かって言った。

「そんな、滅相もないことです。長、どうか残りの薬を飲んで良くなってくださいませ。私達のことはお気になさらず……。」
ガラドは私やスノウの顔をゆっくりと見、匙の中身を見て静かに微笑みながら、再び重そうな口を開いた。

「大人一人分はもう残っておらぬ。わしが飲んでも効かぬじやろう。それより、まだ未来のある子供に与えるがいい。」

言い聞かせるかのようににこやかにそう言つと、長は突然床から這い出し、よろよろと立ち上がり、私の持っていた匙を持ち、子供に薬を含ませた。

「ああ……なんとということ……。」

子供の母親は信じられないと言った表情でガラドを見た。母親はその場で顔を両手に埋め、号泣してしまった。ガラドは毅然とした態度で母親を見、病魔に冒されているのが嘘のように、以前と変わらぬ程の気力でその場に居合わせた全員に聞こえるほどの大きな声でゆっくり言った。

「わしはこの子と共にある。いいな。」

言い終わるとガラドの体は地面に崩れ落ちた。周りの見物していた

者達すべてが悲痛な叫び声をあげた。倒れたガラドの体を私とスノウ二人がかりで床へ運んだ。

ガラドは最後の力のすべてを振り絞ってまで、子供に薬を与えたのだろ。とても荒く、しかしとても弱く浅い息遣いで意識はもうないに等しいほど弱り果てていた。

太陽が完全に沈み、辺りが暗闇に満たされる頃、再び長の意識が戻った。そして私に村人を再び集めさせると、弱弱しく、周りに居たものでさえも聞き取りにくいほどのか細い声でゆっくりゆっくりと話し始めた。

「よいか・・・わしは・・・もう・・・長くは・・・無い。わしの・・・後継者はここにいるキースとする・・・村の・・・伝統に則り・・・みなで・・・新しい長を・・・助けてあげてくれ。」

集まった村の者すべてがみな喝采をあげようとした。だが次の瞬間、ガラドは床に倒れ、そのまま動かなくなった。新しい長の誕生の喜びと同時に、偉大な村長であったガラドを亡くした悲しみが村全体を包んだ。外には眩しいくらいの星空であるにも関わらず、一同の心は淀んでいた。誰も見てはいなかったが、その時テントの上で一筋の流れ星が空を駆け抜けて行った。

次の日、ガラドの体は焼かれて骨だけになった。ガランの村で起こった疫病を復活させないためだ。私や私の母アルダ、そしてスノウや、ガラドの身近な人物はもちろんのこと、長を尊敬していたすべての村人は、それぞれガラドの骨を守り袋に入れて大事に持ち歩いた。自分の命よりも、幼い命を助けた偉大なる長ガラドは、こうして村人達の心の中で生き続けたのだった。

第二章 第六話 受難（前書き）

スノウ「なあ、俺はもうこの先登場しないのかなあ？」

伊紋「そうね・・・日頃の行いがよければ、登場することもあるかもね・・・（不敵な笑）」

スノウ「・・・俺はどうなっちまうんだろ？おい、キース！この悪徳作者になんとか言っちゃってくれよお（懇願）」

キース「え？ああ、スノウ、まだいたの？」

スノウ「・・・・・・・・・・」

第二章 第六話 受難

マキシムの死後、私は途方に暮れていた。あまりにも気分が落ち込みすぎていて、迫っている暗雲のことを見逃していた。その暗雲に誰よりも早く気がついたのは、私の口の利けぬ母アルダだった。

母親は、必死に何かが起こるかもしれないことを私に教えようとした。しかし、その時の私は、他の事を考える余裕がなく、母が何を言おうとしているのかさえ考えられない状態だった。あまりにも母親がうるさく思えたので、母親の手を振り切って冷やかな夜の空気を吸いに外へ出た。空はどんよりと重苦しい雲行きで、ますます気が滅入る気がした。

と、突然、雲の隙間から一瞬差し込んだ月の光の先に、何かかうごめくのを見た気がした。私は体の中に稲妻が走った時のような戦慄を覚え、辺りを見回した。

真つ暗闇の中で、かすかに感じる敵意。この時初めて私は、テントの入り口で心配そうに自分を見つめる母親が何を伝えたかったのかを知った。私はすぐさま地面に耳を付け、瞑想でもするかのように目を閉じた。地面の底からは、まるで溶岩が煮えたぎるような重苦しい、多数の蹄の音が聞き取れた。

即座にテントに戻り、住民に自分達の危機がすぐそこまで迫っていることを告げた。女子供はあわてふためき、男達は戦いくの準備を始めた。しかし、何もかも遅すぎた。

私がテントに戻り、戦の準備が整わないうちに、馬の蹄の音がどんどん近づいてきた。すでに地面に耳を付けずとも聞き取れるほどの音だ。男達は準備もそこそこに、敵を迎え入れるために前線に出た。

「女子供は後ろに下がれ！この場所を引き払う準備をしる！子供を連れて森へ逃げる！」

必死にそう命令したが、誰一人『準備』など出来るはずもなく、女は子供を連れ、森へ逃げ込むだけで精一杯だった。私は敵に囲まれながら母親の姿を目で探したが、すでに姿はなかった。心の中でただただ無事を祈るしかなかった。

私は、薄い装備の割りには善戦した。しかしあまりにもこの状況では形勢が不利だ。敵の数が多すぎ、しかも敵のほとんどは馬に乗って速やかに迅速に攻めてくるが、こちらは十分な準備が出来ず、慌てふためき、防具を装備している途中で逃げ出そうとしているものや、丸腰で戦いに挑むもの、地面に転がっていた細い棒つきれを引つつかみ敵に挑むもの、自分達の家族を森へ逃がそうと懸命になっているものがほとんどだった。

夜の闇を縫って時々気まぐれに顔を出す月のかすかな光で、敵兵がエンブレムを着けているのを見た。盾の真ん中で虎が大きく口を開け、その虎にへビが巻き付きお互いを見つめ合っているような、銀で出来た紋章だった。あの紋章はどこかで見覚えがある。幼少の頃忍び込んだ長のテント内にあつた、本棚の中に収められた分厚い本。その本の中にはこちら近辺の地図とマークのようなものがあつた。幼少の頃はわからなかったが、後にあれはここいらの国の境界線と国旗だと知った。幼少の頃はそんないたずらをスノウと一緒にやって毎日のようにやらかしていた。この時もいつも同様、見咎められてはこっぴどく叱られ、お尻が腫れ上がるほど叩かれたので、しばらくは本を見たこと自体も忘れていたのだが。

ここいら一体は、私達が超えてきた砂漠を境目に、私達の育った国とは別の、強大な国の中に入っていた。この国はヴァルキア王国といい、広大な砂漠のほとんどを戦いによって手中に収め、砂漠の向こうに広がる大地をもすでに配下に入れ、その軍事力で他の国を

圧倒していた。元いた国（マキシムが政府官をしている国）も強大ではあったがこのヴァルキア王国ほどではなく、噂では老齡になつた王を傀儡かいらいに、軍事の最高司令官である將軍が我が物顔で振舞っているらしかった。

仲間が次々と殺されて行く中で、私の目の前に一人の敵兵が立ちはだかった。私はかろうじて持つて来ていたグラムリングを手に、目の前に現れた敵兵と打ち合った。敵兵は腕に自信のある人物らしく、その戦闘力は今まで倒してきたどの敵よりもすばやく、そして正確だった。やつとの思いでその敵兵を打ち破ると、今度は馬に跨つた大將らしき人物が私の前に進み出てきた。敵兵の大將はまるでどこかの国の英雄であるかのようで、しかしその目には冷たい光が宿っており、その圧倒的なオーラで私を鋭く睨み付けた。私を取り囲んでいたその他大勢の小者共を萎縮させるほどの迫力で。

「お前はなかなかいい腕をしている。だが、もはや無駄な抵抗と言うもの。諦めて投降せよ。」

冷たく、背筋が凍るような声で、目の前の男が言った。しかしここで諦めるわけにはいかない。相手をキツと睨みつけ、目で「投降などするものか」と訴えた。その様子を敵の大將も察知したのか、突然馬から飛び降り、キース目掛けて剣を振り下ろした。

闇夜の一騎打ちが始まった。準備不足がゆえに相手の一撃でさえかなりのダメージを食らうほどだったが、持ち前のその身の軽さで右に左にちよろちよろと逃げ回りながら応戦した。相手の大將はと言うと、まるで遊んでいるような、相手の実力のほどを試してやろうとしているような戦い方で、口には笑みを浮かべながら、キースの体を少しずつ、次は右、今度は左と切り裂いていった。実力の差は歴然だった。私は相手の攻撃を避けるために動き回り、かなりの体力を消耗していた。動きも鈍くなり始めた頃、キースの剣グラムリングが跳ね飛ばされ、剣ごと体が後ろへ仰け反ってしまった。よ

るよるとよるける私に敵兵の大将が言った。

「お前の実力はその程度か。そろそろ遊びにも飽きた。引導を渡してやる！」

体の大きな大将が剣を振り上げたその時、ほんの僅かな隙を縫って死角に入り込み、大将の剣をグラムリングで受け止め、弾いた。私はこのチャンスを生かしてすばやく敵に切りかかった。グラムリングは大将の横をかすめただけだったが、頑丈に見えた鎧とマントを切り裂いていた。

「なかなかやるな。その度胸に免じて、今生きているものすべてを殺さずに置いてやる。その代わり、おとなしく投降せよ。さもなければ、次こそ引導を渡してやるぞ。残りのものも皆殺した。さあ、今の場で選ぶのだ。おとなしく投降するか、己と村人の命を失うか。ふたつにひとつだ。」

辺りを見回すと、すでに村人のほとんどは敵に捕まっていた。私は殺された大勢の村人の屍を見やり、そして敵の数を見て、もう、この戦いに望みがないと判断した。自分だけが命を落とすならまだよい。しかしこれ以上村人達の命を奪われることは不本意だった。肩を落とし、手の握力が失われ、グラムリングを目の前にほとりと落とした。地面に落ちた剣は心地よい金属片の音をさせてその手から滑り落ちた。空は月と交代で太陽が顔を出そうとしていた。

それからのことは、私はほとんど記憶に残っていないかった。目の前で走馬灯のようにいろいろなことが起こり、気がつけば手足に枷が付けられ、武器も奪われ、逃げることに出来ず、かろうじて生き残れた村人全員が二列に整列させられ、兵隊の後ろを急かされながら歩かされた。砂漠の気温も上がり始め、夜は冷ややかだった空気がだんだんと熱せられるのを感じた。その暑さの中で、私は後悔の念から逃れられずに居た。自分の失態のせいで、多くの村人が命を落とした。そして投降という不本意な結果を受け入れざるを得な

かった自分の不甲斐なさに腹を立てた。振り返り、かろうじて生き残ることを許された村人の安否を確認したくても、囚われの身である今、振り返ることも、歩くことさえ、自分の意思では出来なくなっていた。

陽が上り、やや真上から傾き始めたころ、ようやく一行はある街に辿りついた。囚われの身のものすべて、到着した小奇麗な街にある一角の広場に集められた。自分達は一体どうなるのか。これから起こることは誰も想像すら出来なかった。

捕虜達の苦難はまだ始まったばかりである。広場の真ん中に集められた捕虜達は、この先の運命をおおかた予測はしていたかもしれない。が、それ以上に、自分達を捕らえ、まるで珍しい見せ物でも始まったかのように振舞う街の人々に腹を立てていた。

目の前で繰り広げられている馬鹿騒ぎを前にして苛立ちを抑えることが出来ない元の村人より幾分冷静になっていた私も、この先の自分の運命に抗う術を見つけようとあちらこちらに目をやってはいたものの、目の前をめまぐるしく動く人の波に翻弄され、何も収穫は得られないでいた。

捕虜達の周りでは、奴隷商人達によって繰り広げられる取引がすでに開始され、息つく暇さえなくらい、まるで嵐の海に立った大波が押し寄せ、また引いていくように、何も考えられなくらいの速さで時間と、周りの人々が私の前を通り過ぎていくようだった。

気がつけば、私はひとり取り残されていた。かつての仲間達はそれぞれに奴隷として、新しい主人の元へ連れて行かされた。私はこのときになって初めて自分の母親を目で探した。しかし、時すでに遅く、母はもう私の前から姿を消していた。ただひとつの望みは、母がこの街のどこかにいるかもしれないと言うことのみだった。いや、もしかしたら森の中に逃げて無事なのかもしれない。自分自身の心を落ち着かせようと、必死で良いことだけを考えようとしてい

た。

「お前はいい腕を持つてる。城の兵士として働いてもらう。ただし、一番の下っ端だな。」

私はどうやら、自分を捕らえた得体の知れない、底知れぬ力を持つこの將軍に力を買われたようだ。この、何を企んでいるのかさえ見えない不敵な笑みの意味を、私は直感で感じ取った。この時点では選択の余地はない。断ることなど到底出来ないことだとわかっていた。もし、將軍についていくことを拒んだとしたら、その場で即、殺されていただろう。母の身を案じ、それぞれに奴隷として連れていかれた他の仲間達の身を案じればこそ、この憎むべき將軍についていくしかないことは充分承知していた。

しづしづ將軍の後についていくと、まず城の城主である王の前に連れていかれ、無理やり跪かされ、王に忠誠を誓わされた。そして忠誠の証として、手の平にナイフを当てられ、握らされ、滴った血を献上しなければいけなかった。キースの血を採り、それを羊皮紙に垂らす。血が滴った羊皮紙に無理やりサインをさせられる。それを王が受け取る。これがこの地での（騎士としてではなく、奴隷としての）忠誠の誓いの儀式だった。

どうやら私は、この城の傭兵として雇われたらしい。「雇われた」とは名ばかりで、実際は奴隷なのだ。この日から私は、この城に前からいるいけ好かない連中（ほとんどが兵士だったが）に足蹴にされ、ぼろ雑巾のように扱われ、終始汚い言葉でなじられる生活が始まった。食事の時間の数分だけは、自由になれることが唯一の安らぎだった。が、城の中には常に人が大勢控えており、將軍からの通達なのか、常に監視されていた。その監視の目を潜り抜けてでも、最愛の母であるアルダの行った先と、大切な授かり物である我が剣グラムリングを探すことが私の密かな使命となった。

ある日、食事の時間にふと、中庭から城下町が見えることに気がついた。この城下町のどこかを探せば母は見つかるかもしれない。いや、母でなくとも、かつての仲間の安否をも知ることが出来るかもしれない。遠くを眺めればどこまでも続く砂漠が広がっており、空を見上げれば昼には照りつける太陽とその傍をゆったりと流れる雲を、夜には優しい光の月と満天の星が、まるで私を慰めてくれているかのように感じ、それだけでも少し気持ちが楽になるのがわかった。食事の時間の数分だけ、時々私は自分の気持ちを静めるために中庭に出るようになっていた。ただ、中庭に出る時間を作れば、その日その時間に食事を取る時間などなくなってしまうのだが、冷静な気持ちを取り戻すためにも、そして自分の心を整理する意味でも、この時間はキースにとって欠かせない、つかの間の憩いの時間となっていた。

城下町には、自分と同じように奴隷として引き取られた仲間がいる。ただ漠然とそう感じることで、毎日、毎時間なじられ、足蹴にされ、汚い言葉を吐きかけられ、時には唾をもかけられるような日常に耐える力を与えられたような気がした。思い返せば私は生まれてこの方、心無い人々に足蹴にされながら育ってきた。時には足腰立てないくらいに打ちのめされ、それでも、傍にいてくれたガラドや母、スノウに元気付けられながら今まで生きてこれた。あの時は今が最悪の時だと思っていたが、それがちよつとだけ悪くなったただけだ。そう自分に言い聞かせるかのように、中庭に出てはぼつとした時間を出来るだけ取るようにしていた。

城の兵士達に足蹴にされ弄ばれるだけの日常は、うんざりするくらい長い月日、私に捕りついた。与えられた仕事の量は多く、その日一日いっぴいかけても終わらないほどの仕事を何個も与えられ、休む間も与えられない。少しでも手を休めようものなら、意地悪な城人共に雨霰がごとく鞭を振るわれ、何も物事を考えられずただ与え

られた仕事をこなすのみの毎日が続き、思考も閉ざされたまま、ただ時間だけが目の前を漠然と通り過ぎるだけだった。

ある時、ひとつの事件が起きた。周りの傭兵達の話聞きかじったところでは、どうやら奴隷のひとりが兵士に対してなにか粗相をしたらしいとのことだった。こんな事件は日常茶飯事で、毎日どこかで仲間の誰かが処刑されている。今の私は手も足も出せず、仕事の波に飲まれすぎてまるで自分には関係のない事柄のようにも思われ、いつものように黙々と仕事をこなしていただけだった。手足は痺れ、あれこれ考えることも許されず、腰も折れ曲がり、背中に受けた無数の鞭傷が疼く。今までに体験したこともないほど、私は疲れきっていた。

意識が朦朧とし、目の前が暗くなりつつある時、私の目の前にひとりの男がやってきた。いやらしい意地悪な冷たい声で、わざと周りに聞こえるように大声で叫んだ。

「奴隷が兵士に逆らった！こいつの生みの親らしいぞ！ひゃっははははっ！！」

生みの親と聞いて、私は突然、真つ暗な闇の中に一条の光の矢が突如として降ってきたかのような衝撃を受けた。私の母がなんだって？ここ数日、ただ闇の中を彷徨っていただけの私にとって、脳内覚醒を起こすほどの衝撃だった。

意地悪な城人達は、楽しい宴が始まる前のように、浮き足立って不心得者を見物しようと、城下町の一番広い、比較的整った敷石が敷き詰められた大通りに押し寄せた。私は周りの城人の波に流されるように大通りにふらふらと辿り着いた。体は連日の責め苦で力はなかったが、重たい瞼の奥から必死に真実を見極めようと、目玉だけで罪人を探した。そして見つけた。あの男が言った通り、哀れな母親アルダに間違いないとわかった途端、私の意識は遠のき、その場で崩れ落ちた。目の前にはただ闇が広がるばかりだった。

第二章 第七話 灰色の目の男（前書き）

キース「なあなあ、俺、これからどうなっちまうんだろっな？」

スノウ「・・・さあな。俺が登場して助けてあげられればいいんだろっけど・・・」

（作者を見つめるふたり）

伊紋「・・・ふっ・・・」

スノウ「ありやあ、何も考えてないなきつと。」

キース「・・・」

第二章 第七話 灰色の目の男

気がついた時には、恐ろしい形相で鞭を持った上官の足元にびしよぬれの状態で倒れていた。硬い敷石の上で新たに作られた無数の鞭の傷の疼きを抑えながら立ち上がろうとすると、上官はキースの顔を踏みつけ、睨みつけながら、汚いものに唾を吐くごとく言い放った。

「仕事をさぼってこんなところで寝てやがって！おい！もう一度鞭を食らいたくなかったら起きて仕事の続きをするんだ！お前のような能無しを飼ってやっているだけでもありがたいと思え！」

鞭の傷の痛みには耐えながらのろのろと立ち上がると、上官はまるで楽しんでいるかのように意地悪な目つき・顔つき・口元で私に囁きかけた。

「お前の母親は当分地下牢に入れられるそつだ。処刑になるのもそう遠い日ではあるまい。お前も母親のようになりたくなくなったら、我等に逆らおうなどとは思わぬことだな。」

この言葉は、一見絶対的な権力の前では自分は無力なのだとしめる悪魔の囁きのように思えるが、実際には私に、これまで抱いたことのないほどの怒りの炎を燃え上がらせるガソリンのような効力を発揮した。しかし、今この場で逆らおうものなら、自分も母と時を同じくして処刑されてしまうのは火を見るよりも明らかだった。今まで感じたことのない、狡猾な考えが私の頭の中で縦横無尽に動き始めた。傍からは、洗脳が成功しいまや従順になった飼犬のようになただ黙々と仕事をするだけの奴隷になったと見せかけ、頭の中では始終どうやって母を助けようかと思慮を巡らせるようになっていた。

その日から、私は地下牢への道を躍起になって探した。もちろん

表立って動くのは人目につきすぎるため、食事のわずかな時間を削つての探索となったが、そうやすやすと見つかるはずもなく、以前よりもますます食事を取る時間がなくなつて行つた。それでも諦めず、仕事の合間を見つけてはあちこちと目を走らせ、人の寝静まつた頃を見計らつて起きだしては探索する毎日になつた。睡眠時間もほとんど取れなかつた。以前はそれでも一日に合計して約3〜4時間程度は目をつぶつて横になる時間があつたが、今はその時間も探索に費やし、連日の残酷な仕打ちと山のような仕事に振り回され、疲れ果て、それでも諦めずに城中を探索し、誰の目にも触れずに密かに地下牢にいる母にせめて声だけでも掛けられる場所を探した。そして見つけた。

城というものは得てして複雑に出来ているものだが、影に押しやられる奴隷ならではの通路というものがあり、またその通路の先には、通称豚小屋と呼ばれる奴隷の詰め所があつた。豚小屋は城の北側に位置し、近くには下水が流れ、常に悪臭が漂い、じめじめとして肌寒く、人間が住めるような場所とは到底言えないような場所だが、奴隷にとっては憎むべき兵士や城人がいない、静かな我が家同然である。この我が家に毎日毎晩帰つてこれる奴隷などほとんどいないが、たまに出来た時間で久しぶりに帰つてみると、意外にも単純な筋道の場所に豚小屋があることに気がついた。そしてその豚小屋の前を走っている下水は地下を流れ、そのまま地下牢への道を示してくれていた。地下水路は意外に広く掘られており、地上に出ている部分は僅かに奴隷小屋の付近と城外の堀に沿つて外へ流れ出る部分だけではあるが、隠れるには絶好の場所に思えた。その地下水路を地下に下り、くねくねと折れ曲がる水路を辿つていくと、城の西側に途中で城中の下水と流れが合流する場所があつた。その場所から壁に穿たれた穴を抜けて外に出ると、城壁と深い堀の間に、ひとりの大人がやっと通れるくらいの細い堤があつた。城の南側は城門があるが、東西側は城の中ほど辺りから北側に向けて頑丈な鉄柵

があり、その先は堤防のような形に掘られており、その堤防に敵侵入防止用の深い堀と、それに沿うように下水が並んで流れる場所があった。下水は堀の溝に流れるどぶ川と合流し、外の世界に流れて行っていた。城東側の土地の低くなっている場所の程近くに、目的地である地下牢はあった。窓らしきものは、頑丈な鉄柵がついた小さな高窓のみだった。

数箇所ある高窓から、たったひとつの当たり窓を探すのは容易ではない。しかし人の気配がする窓はたつたひとつしかなかった。私は注意深く慎重に、もし万が一自分の勘がはずれて母のいる部屋でなかった場合のことを考えながら人の気配のする高窓の鉄柵めがけて数度小石を投げた。小石は細い鉄柵に当たり、にぶい音を立てながら中の人に自分の存在を知らせた。

すると不思議なことに、私が投げた小石がそのままこちらに帰ってきた。母のいる場所ではなかったのか？といぶかりながらふと投げ返された小石を見ると、小さく彫り物が施されていたのを発見した。小石は、自分達の以前住んでいた土地で使われていた文字で不器用に「安心して」とだけ書かれていた。当然この辺りの人間にその文字は読めない。これを読めるのは、自分と母と、哀れにも奴隷として働かされていて、かろうじて生命を保持できている元の村人のみ。つまり自分の仲間だけなのだ。私はこの暗雲広がる街に連れこられてから初めて、人間らしい感情で涙を流した。その涙は当然のことながら悲しい涙ではなく、嬉し涙だった。

母は私が幼い時期にも、こうしていつも声の出ない口の代わりにいろいろなものを使って「安心して」と言っていた。私が辛い時や苦しい時、母は私にいろいろなものに書いてこの魔法の言葉を伝えた。母としてはきつと、自分のことは心配すると言う意味を込めてこれを小石に掘ったに違いない。「なんとかしなければ」。私は心の中でこう思うたび、疲れきっているはずの体に活力が沸いてく

るように感じた。今までの抜け殻のような自分ではなく、まるで別の人格が取って代わったかのように。それからと言うもの、心の拠り所は城の中庭ではなく、いつも母のいるこの牢屋になった。牢屋の壁越しに母と呼吸を合わせるだけで、ひと時の安らぎを得られるような気がした。私にとつてこれは新しい日課となった。自分の粗末な食事をちよつとだけ残しては、母への差し入れにしていた。僅かだが、自分は食べられるだけまだいい。母はこれよりもっと惨めな食事しか与えられていないか、もしくは食べ物さえ与えられてはいないだろう。母は何も言わなかったが、そうだろうことはだんだんと弱まる母の呼吸や息遣いでわかる。ことさらに母を助けなければと言う思いが強まっていった。

そしてもうひとつの疑念は、母がなぜ牢屋に入れられることになったかだ。それに処刑だつて？ 処刑されるほどの何かを、母はしたのか？ その何かとは？

ある時、食事時にふと見ると、私と同じように城の中で奴隷として働いている一人の男と目が合った。たくさんの荷物を抱え、意識も朦朧としているような足取りで危なっかしく歩いていた。歩いてきたと言う表現が当てはまるならの話だが。千鳥足で、まともな地に足が着いていないようなふわふわとした、今にも倒れそうな表情だった。

思った通り、その男はいきなり私の目の前で倒れた。荷物がどさどさと床に落ちた。物音を聞きつけた兵士が駆けつけ、その男に鞭を振るいながら怒鳴り散らしていた。

「何をしている！ 早く立たんか！ この役立たずが！」
倒れた男は身じろぎもせず、床に突っ伏したまま動かない。

「なんだ、こいつ。もうくたばつたのか？ まだネンネの時間じゃないぜ」

冷たくそう言い放つと兵士はほかの兵士に持つてこさせた水その男に乱暴にかけた。突然水をかけられたことで、いきなり意識が戻

ったのか、その男はのろのろと動き出した。

そういえば、こいつ、どこかで見かけたことがある。漠然とだが私の頭の中にそんな考えが浮かんだ。汚れからか、それとももとなのか、周りの兵士とは違う、浅黒い中にもちよつと黄色味がかつた肌の色で、この重労働で痩せこけ、灰色っぽい生気の抜けた目をした男だった。しかしどこで会ったのか思い出せない。そうこうしているうちに、またしてもその男が床にどさつと倒れ込んだようで、兵士のイライラした怒声が響き渡った。その男はすでに顔面蒼白で、このままだと死んでしまいかもしれない。私は考えとは裏腹にこの男を庇おうと、その男の上に屈みこみ、兵士に懇願していた。

「このままではこの人は死んでしまいます。具合がよくなるまで休ませてあげてください！」

「こいつがここで死のうがなにしようが、お前には知ったことじゃないだろう。お前はお前の仕事をすればいい！あつちへ行つてろ！」

顔面にいきなり兵士の蹴りが飛んできた。顔から生暖かい血が滴り落ちるのを感じた。それでもひるまず私は懇願し続けた。兵士の足元で床に頭を擦り付け、文字通り『懇願』している自分に内心びつくりするほどだ。

騒ぎを聞きつけた上官が現れた。そして傍にいた兵士となにやらこそこそと話を始めた。この上官は私を奴隷として引き取ったあの憎むべき將軍より言い渡され、私を監視する役目を引き受けた將軍付きの兵隊のひとりで、將軍に媚を売ってのし上つたいけ好かないやつだった。名をラウドと言った。

「おい、余計なことをするな。お前、俺を殺す気か？」

顔面蒼白な倒れた男から発せられた言葉とは到底思えないことを耳打ちされ、私は男の方に顔を向けた。途切れ途切れに、ゼイゼイと激しい息遣いをしながら男は私を睨んでいた。睨みつけながら必死に立ち上がろうとするその男に私は自分の肩を貸そうとしたが、男は私の手を振り切り、弱弱しくよろよろと再び立ち上がり、目の前のラウドに一礼してその場を立ち去ろうとした。

ラウドは憎らしい顔をこちらに向け、灰色の目の男と私のやり取りを見て不敵な笑みを浮かべて、わざとらしく言った。

「なるほど。確かにその男はそれ以上動けそうもないな。ではこうしよう。こいつの代わりにお前がこいつの仕事もすると言うのなら、こいつに休息を与えてやってもいいぞ。」

冷笑を帯びた口調でラウドは言った。

「いや、俺はまだ働ける。休息などいらねえ。」

まるで私からの施しなど受けなくても言うように、灰色の目をした男はつつけんどんにそう言った。

「こいつは休息はいらぬと申しておる。せつかく俺様が珍しく情けをかけてやるうと言っているのに、馬鹿なやつだ。だがこれでは交渉は決裂だな。」

「この人の分も働きます。だから助けてあげてください。」

私は後先考えず、ついこう口走ってしまっていた。思考より先に口が動いてしまったのだ。言ってしまったから、自分がなにかとんでもないことを言ってしまったのではないかと言う漠然とした不安が急に襲ってきたように感じた。

「俺はまだ働けると言っているだろう！余計なことはするな！お前が余計なことをすれば、俺は確実に殺されるんだ。そうにちげえねえ！」

ブルブルと震えながら私にそう言うと、さっきまでの困憊さは吹き飛んだかのように男は立ち上がり、仕事に戻ると宣言してその場を去った。

「アイツは仲間への思いやりがねえな。ここでアイツが仕事が出来ずに処分されりゃ、ちったあ今よりも広い場所を仲間に提供できるつつーのにな。」

後に残った心無いラウドや兵士達は、せせら笑いながら、まるで面白い芝居を見終わった観客のようにこの場を立ち去った。

男に会ったときに漠然と沸いた考えが再び私の頭をよぎり、一体

どこで見かけたのかと思いついて出そうとしていたが、その場に立ち尽くしていた私に兵士達が仕事に戻れと怒鳴っていたので、きつと豚小屋のどこかで見かけたにすぎないのだろうと思うことにした。それでもしなければ、今抱えている仕事は片付かない。先ほど兵士に蹴られたせいで傷ついた頬から出た血を袖で拭い、また仕事へと戻ることにした。

仕事の合間に地下牢の母の元へと駆けつけるようになってから数週間が経っていた。自分の食べ物を持ち、いそいそと出かける様は、まるで恋する乙女へ通う男のように気分がうきうきと浮き立ち、心が躍った。

そんな幸せな日は、突然終止符を打たれた。いつものように、地下牢の母のいる窓辺へと到着した時、誰かが後から肩を叩いた。まさか、尾行されていたのか？サーツと血の気が引くのがわかった。手にもじつとりと嫌な汗をかいていた。ゆっくり振り向くと、いつぞやの灰色の目の痩せこけた男が立っていた。

「お前、ここでなにをしている？」

私はどう言い訳しようか迷った。この男を以前にどこかで見かけたことはあっても、どこで見かけたのか、味方なのか敵なのかいまいち把握しきれていなかったからだ。このような見知らぬ場所で、しかも自分の現在住んでいる街とはいえ、かつて仲間だったものや自分、そしてこの見知らぬ男さえも、この街で幸せに暮らしているとは言い難いし、むしろ嫌がらせやいじめが横行している真っ只中で、信用出来る人間が母以外でいるのかどうか訝ったからだ。

「なんだ？この前はいらぬ口を利いた癖に、今日はダンマリかよ。」男はそういいながら、自分のポケットから葉巻を取り出し、その場に座って近くの石ふたつを力チ力チと打ち鳴らして火を起し葉巻に火をつけた。葉巻のようだが以前から私が見知っている葉巻とは若干、いや、かなり違った。安っぽいものだが、火をつけた後の匂いは確かに葉巻だった。

私はつい最近まで、生まれ育った村の中でも格下の存在だった。格下の人間は、自分よりも格が上の人間からの許しがなければ、めつたに葉巻など手にすることも無い。そして私をかわいがってくれたガラドは葉巻があまり好きではなく、本国から誰かが取り寄せた上等の葉巻でさえも口にすることがなかった。私が葉巻の形や匂いを知っているのは、私の直属の上司でもあり、私のいた隊の隊長だったマッドが、私やスノウをいたぶる時に吸っていたのを見ていたからだ。

「格下の兵士が落したやつをこっそり頂いたのさ。匂いも安っぽいし味もいまいのだが、葉巻には違いねえ。」
灰色の目の男は、私に見咎められたことなど気にする気配もなく、煙でむせる私の横でぶかぶかと気持ち良さそうに葉巻を吹かしていた。

「ここは俺の憩いの場所だ。最初に見つけたのも俺だ。お前は後からここへ来た。先住人に一言断りくらいあつてもいいだろ？」
突然そんなことを言われ、なんと答えを返せばいいのかわからず、ただ黙ったまま男を見据えていた。

「こんな世知辛い世の中では、こうでもしねえとやっていけねえ。言いたくなければ無理に言うこともねえ。だが、俺のことは今後一切構うな。わかつたらさっさと行ってくれ。」
二の句も告げることが出来ないまま、私はこの場を去った。なぜ？ どうしてあの男はあの場所に？ 一服するだけの場所ならいくらでもほかにあるじゃないか。なぜあそこなのだ？

不安な気持ちを抑えきれず頭の中は混乱して行った。だが、同じ奴隷の身の上で、自分と同じく一時の安らぎをどこかに見出すことをしているのは自分だけじゃないかもしれない。もしかして、ほかの奴隷もみんなそういうことをしているのかもしれない。それに、自分の知らない場所では、辛い立場の奴隷同士、実は助け合っていたのではないか？ 頭の中の自分は、どうやらあの男を信じたいよう

だ。用心するに越したことはないが、それでももし助け合うことが出来れば、こんなに心強いことはない。私にとっても（たぶん）あの男にとっても。まるで自分を無理やり納得させるかのように、そんな理屈が私の頭を支配した。もしかするとこの先、味方になってくれるかもしれない。希望にも似た感情で、私の心は躍った。だがそれと同時に、心の奥底では警報にも似た黒い感情もまた捨てきれずにいた。

しかし、その日からしばらくの間、男とは一切会うことがなくなった。城の中でも豚小屋でも、秘密の地下牢横の通路でさえも。一体どうしたんだろう。まさか兵士に捕まって殺されたのではないのか？せつかく仲間になれるかもしれないのに、なぜあの時躊躇してしまったのか？

気がつくとき、無意識のうちにあの男を目で探している自分がいた。なぜこんなにあの男のことが気になるのか、自分でもわからず戸惑っていた。

終わりの見えない仕事の山の合間に、いつものように母の元へ行き、ふと、母はあの男のことを知っているのかどうか聞いてみたくなった。同時に、かつての村にいた時に教わった、ある種の連絡に使う打音の調子によって話をする方法を思い出した。今で言うところの、モールス信号のようなものだ。母にこの音が伝わるかどうか試しに合図を送ってみた。石壁の向こうからコツコツと返事が返ってきた。私は注意深く周りを警戒しながら、母に壁越しに問いかけた。

『あの男のことを知っていた？いつから来ていたかわかるか？』
壁越しに返事が返ってきた。

『あの男かどうかはわからないが、確かに誰かがこのあたりをうろついていたのは知っている。しかし、あの日以来気配は途絶えている。』

『兵士ではないのか？』

返事の後にさらに質問してみた。

『兵士ではないと思う。兵士なら、まずこんな場所へやって来ない。あの男はここに、ただ迷い込んだだけのようだった。』

兵士ではない。だとしたらやはりあの男だ。ほっと安堵の吐息を漏らし、私は深く息をついた。やはりあの男はスパイではなさそうだ。今度会った時にでも話しをしてみよう。そう思った瞬間、母側の壁からまた信号が来た。

『誰か来る』

信号が来てから逃げる間もなく、ひとりの男が現れた。あの男だ。ゆっくり、まるで足でも引きずっているかのような足取りで近づいてきた。

「よお。またここにいたのか。すると今日はお前がなぜここにいるのか聞かせてもらえそうだな。」

男がそう言うやいなや、男の背後からドカドカと駆け寄る人々の足音が聞こえてきた。兵士だ。

勝ち誇った顔の兵士が数人、男の後からやってきていた。

「よくやった。さて、お前はなぜここで仕事をさぼっていたのか、嫌でも吐かせてやるぞ。こっちへ来い！」

まずいことになった。ここで兵士に捕まれば、ただでは済むまい。私は踝を返して反対側へ駆け出そうとした。しかし反対側からも大勢の兵士が現れ、多勢に無勢で抵抗する間もなく捕まってしまうた。灰色の目の男は、うつむき加減でキースの顔を見ず、黙って兵士の後に隠れた。嵌められた。私はこの男にまんまと嵌められたのだ。それまでこの男を信用しようとしたことを激しく後悔した。やはりこの腐りきった人々の中に居れば、誰でも自分のことだけしか考えられなくなるのだ。わかりきっていたはずの答えを目の前に改めて突きつけられた子供のよう、私は悔しい気持ちを抑えることが出来なかった。

数日前に連れて行かれたばかりのラウドの部屋へまたしても連れて

こられた。私を囲んだ兵士の後ろから、隠れるかのようにあの男もついてきていた。私の気持ち踏みにじった憎らしい男は、私が睨みつけるとそそくさと顔を背けた。

「お前が時々姿をくramsすのをわたくし達は知っていた。この男は、僅かな休息と引き換えにお前の行方を我々に教えたのだ。怨むならこの男を怨むがよい。」
変に高飛車な、嫌味っぽい高い声でせせら笑いながらラウドは言った。

「この男は、僅かな食料と休息の時間の代わりにお前を売ったのさ！薄汚い野郎だ！」
兵士の誰かがそう言うと、まるで漫才か落語でも聞いた時のように他の兵士達は一斉にどつと笑った。

「約束通り、お前にはしばしの休息をやるう。」
そう言うと、ラウドは男を掴んでいた兵士に向かって顎を突き出して合図をした。男を掴んでいた兵士は待ってましたとばかりに頷くと、一歩さがった場所で自分の腰の刀をさっと取り出した。

「待てい！」
振り上げた瞬間、背後から声が響き、刀が宙でピタリと止まった。

声の主は、私や仲間を捕らえたあの憎むべき相手だった。黒い甲冑に身を包み、全身からは初めて会った時と同様の威圧するオーラを放っていた。將軍はツカツカと前に進み出て来ると私の前に立ちはだかった。突然の將軍の登場に戦きながら、ラウドはサツと將軍のやや後ろに控えた。

「緊急の任務が出来た。その者二名にやらせることにする。」

將軍直々のお言葉だ。周りの兵士達がざわついた。ラウドが媚び諂いながら將軍に言った。

「あの・・・、ラーズ様・・・。なぜ一介の奴隷にラーズ様直々の重要な任務を任されることにしたのか、お考えをお聞かせ願えますか？」

將軍はラウドになにかを耳うちすると、それまでの恐れ戦いた表情が一変し、また元のニヤニヤ笑いに戻った。

「わかりました。なるほど。」

ラウドがそう言うと、周りに居た兵士がわけがわからないと言った状態ですらにざわついた。ラウドが兵士達に一瞥をくれてやると、兵士達は途端に静かになった。自分より上の人間に逆らうことがどういうことなのか、ここにいる一般兵士達が一番よくわかっていた。

第二章 第八話 地獄の中での助け（前書き）

スノウ「どうやらキースと一緒に作者も（文字の）砂漠の中でわけわからなくなってきたようですよ。」

キース「俺、このまま死んじゃう?」

伊紋「……ヒヒヒヒッ……」

スノウ「……だめだこりゃ。」

キース「（汗）読者の皆様は、こんなやつなど気にせず、よい新年をお迎えください。次はたぶん来年にアップすると思います。」

（スノウとキースにずるずると引き摺られていく伊紋）

第二章 第八話 地獄の中での助け

將軍の部屋へ連れられていくと、そこはラウドがいた部屋よりもずいぶん立派な作りで、部屋でさえも格の違いを見せ付けられた思いだった。目の前には玉座のようなものがあり、入口から玉座までの床にはふかふかの絨毯が花道のように敷かれていた。

私達は、玉座の目の前にひざまづかされた。後からは裏切り者の灰色の目をした男と、その男を急ぎ立てるかのようにラウドとその部下数名が入ってきた。扉を閉めるやいなや、玉座にゆったりと座った將軍ラースが言った。

「お前達の任務は、ここから三日ほど北東の方角にある都に、ある使いをすることだ。」

そして説明を始めた。この都を出て北へ向かうと砂漠があり、その砂漠の淵を通るように東に進んでからまた北へ向かうとあるエレドアと言う都の神殿に向かい、そこにいる巫女に貢物を渡すことが任務のようだ。ただし、砂漠は死の砂漠と言われるほど人々に恐れられており、この都の者は誰一人として行こうとする者はいないらしい。淵とはいえ、砂漠の領域に行くのだから、死を覚悟しなければならぬほどきつい場所のようで、言葉の端々で「生きて戻れたら」という言葉を含んだ言い方をされた。そして、巫女に無事貢物を渡せたら、即座に帰ってくるようにとのことだった。

「もしお前達が任務の途中で逃亡したり任務を遂行せずに戻ってきた場合は、エレドア神殿に貢物を渡せなかった場合も含むが、それなりの処罰を受けてもらうことになる。もっとも、途中で二人ともくたばってしまえば話は別だがな。」

後に控えていたラウドとその部下がにやにや笑いをしているのを背中で感じ取った。

「処罰の内容を説明しておく、キース、お前は地下牢にいるお前の母親を即刻処刑する。お前自身は終身地下牢で過ごすことになる。そしてお前は」

そう言つて、灰色の目をした男に向かってラースは言った。

「ラウドの報告だと、お前は以前ラウドの部下のものを盗み取つたらしいな。葉巻だつたか……。その罰として、二度と奴隷達が兵士や城下町の人間の物を盗むことのないよう思い知らせるため、公衆の面前で百の鞭打ち刑を執行することにしよう。それとも今すぐ『休息』を与えてやる方がいいか？」

嫌な含み笑いをしながら、ラースは言った。ラースの言う『休息』とはつまり、処刑のことだ。死んでしまえばもうここでコキ使われることも、辛い労働に耐えることもなくなるからだ。

「しかし、見事お前達が任務を遂行した暁には、それらすべての処罰を免除することとする。もちろんキース、お前の母親も地下牢から出してやるぞ。」

ここまで言われたらやるしかない。母親をあつ薄暗く汚く、陰気臭い場所から救い出せるのならなんでもしてやるうじやないか、そんな気持ち支配していた。任務遂行の期限は一週間、それまでに戻らなければ即座に刑を執行することだった。私の横にひざまづいている灰色の目の男も、同じように感じているに違いない。今まで生気がなかった目につつすらと光が宿っていた。

次の日の早朝からの出発とあつて、その日の午後からは今までの仕事の一切が免除となつた。次の日の準備をするためだ。しかし持ち物を準備しようとしても、倉庫番が意地悪をして必要なものを出してくれない。予定していた持ち物の半分以下しか準備が出来ずにこの日は無情にも終わってしまった。

早朝起きてみると、冷え冷えとした薄曇りの空から弱弱しく、新しい太陽が顔を覗かせ始めていた。この都から数キロ離れた場所には砂漠があるというのに、なんだか肌寒く、冬の気配が辺り一面に漂っていた。

門のところ、灰色の目をした男が立っていた。昨晚はゆっくりと久しぶりに自分のベッドでまどろんでいられたようで、体には今までになかった生気が宿っているように見えた。

「そういえば、まだ名乗ってなかったな。」

開口一番灰色の目の男は言った。

「俺の名前はオソだ。よろしくな。キース」

そう言いながら、右手を差し出した。この男を信用してはいけな。だがこれからの長い旅の行程をこの男と過ごすことになるのだ。私は黙ったままオソの手を取って握手をした。

城の大きな扉の前で、門番から『貢物』を渡された。一メートル四方の大きな箱で、箱の背には担ぐための帯がついていた。そしてくれぐれも、巫女に手渡すまでは箱の蓋を開けたり、中を見てはいけないときつく言われた。長い行程で一番の重荷になるのはこの箱だろうと安易に想像がついた。

「お前はまだ俺のことを許しちゃくれないだろうな。当たり前さ、俺はお前のことを売った男だ。だが、この任務の間は仲間だ。今までは仲間なんてものは必要ない、むしろ信用出来るやつなんかいないと思っていたが、お前は悪いやつじゃない。俺の勘がそう言うてるぜ。」

警戒されているのがわかったかのように、にこやかに笑いながらオソは言った。私はオソのその言葉を聞き、この任務の間だけは、つ

まらない感傷は心の中に閉まっておけばいい、と自分に言い聞かせた。

「しかし、なんでこんな簡単な任務を、ご大層に俺達にやらせようというんだ？この砂漠のせいか？確かにこの砂漠はこの城のやつらからは忌み嫌われているからな。だが、俺はこの砂漠を渡ってここまで来た。いや、この近くまで来た。だからさほどやつらよりはこの砂漠を恐れちゃあいない。」

「そして捕虜になった。この近くの小さな村や町では、都の兵士共が気まぐれでやる奴隷狩りがたまにあるのさ。たまたま運悪くこの近くの村に来たときに俺はやつらに捕まった。それまでもずっとひとりだったし、親も兄弟もいねえ。生まれた時すら誰一人として俺の周りにはいなかった。それこそ、かっぱらいやゆすり、たかり、なんでもしたさ。そうしなきゃ生きていけなかったからな。この世に生まれたことを呪い、俺はこの世に生を受けたことを恨んで生きてきた。ちゃんと自分の親が居て、愛情たっぷりで育ったお前とは違う人種さ。」

そう言うオソの目は、どことなく寂しそうに見えた。これも芝居なのだろうか。しかし芝居を打ってるにしてはあまりにもこの男は純粹すぎるような気がした。

「俺は、確かに親はいる。しかし母だけで、その母親は口が利けない。俺が育った村はゲリラの村で、この砂漠のはるか西側の奥にあるジャングルにあった。父親は知らない。生まれた時からいなかった。戦争で死んだのかもしれないし、どこかへ行ったまま行方知れずになったのかもしれない。」

「同じ村の人間でさえも、いいやつと悪いやつがいた。俺はその悪い元の仲間に裏切られてこのヴァルキア王国に来た。そしてあの悪魔のような将軍に捕まったんだ。」

なぜか私はこの時、自分のことを素直に話す気になった。単なる世間話程度ならば問題はないだろう。

「そうか。しかし、生みの親がいるってことは、少なくとも俺よりは幸せだと思っぜ。」

ゆるゆると上る朝日の新鮮な光を浴びながらのんびりと歩きながらふたりは語り合った。この男は根っからのワルではないのかもしれない。私はオソに対する疑念が自分の中で少しづつ溶け出しているのがわかった。しかし心の奥底では、相変わらず「信じるな」と言う声が聞こえた。どこまで信用すればいいのか、この長い道のりで図ることにした。

日の出とともに出発し、最初は今までの監視された息苦しい生活から開放された安堵とすがすがしい朝の陽気に足取りも軽やかだったが、陽が空高く上るにつれ、段々と背中中の荷物が重く感じられ、暑さで体力が削られていくのを感じた。帽子もなく、服は今までの薄汚れた奴隷服しか着るものがなく、強い日の光を遮るためのマントすら支給して貰えなかった。当然靴もなく、短く針のように刺々しい草の上を歩くしかなかったが、夜の間冷やされた草が足に心地よく、ちくちくした痛みにもなんなく耐えることが出来た。食料も水も僅かしかなく、ふたりで分け合って食べたり飲んだりした。背中の荷物はふたりが代わる代わる担ぐことにした。

「もう少し先を西に曲がったところに村があるはずだ。そこで水くらは調達しよう。」

途中で休みを入れつつ、約四時間ほど、自分達の身の上やら城での不平やらを話ながら歩いて行くと、オソの言った通り、草むらが剥げたような道とも言えないような道がうっすらと見え、砂漠の方へ行く道と西の方面に向かう道に分かれた場所があった。うっかりしていたら見落としてしまいそうなその二股に分かれた道を西の方面

にオソに導かれるようにして進んで行った。

分かれ道から約三キロ進んだ辺りで、目の前にうつすらと村らしきものの影が見えた。まるで陽炎のように陽の光と、陽が高くなるにつれてあがっていく気温と湿度のせいか、はたまた自分の疲れのせいかわからない。幻でも見ているようにゆらゆらと揺らめいて見えた。

「たぶんここからだいたい一時間くらい歩いた先に村があるはずだ。俺達は昨日言われたように任務に期限を設けられているし、そうあちこちに道草を食ってる時間もねえ。だがここで水を充分調達しておかねえと、任務途中でふたりともおっ死んでしまうことになるぜ。」

確かにこの僅かな水と食料では、この先何十キロ、いや何百キロあるかわからない都に徒歩で歩けるものではない。いまだに心の奥底では「オソを信用するな」の声があったが、ここはオソの言う通りにするしか道はないように思えた。

オソの言った通り、約一時間ほど歩いた先に小さな村の入口が見えた。入口には長年雨風に晒され、草臥くたひれたみすばらしい木で作られたアーチがあった。アーチの近くには門番が立ち、侵入しようとする者に対して警戒しているようだった。私達が門の近くまで来ると、険しい顔つきをした門番ふたりが立ちはだかり、持っていた槍を力チリと交差させて通すまいとした。

「この村になにかご用ですか？見たところ旅人のようですが。」
「私達はこの村よりはるか北東の、エレドアの都まで行く用があるのですが、水と食料が足りなくて困っています。この村で調達してから都へ行くこうと思っっているのですが、通して頂けないものでしょうか。」

私は門番の二人に警戒させてはいけないと思い、素直にそう言った。背の高い門番はふたりを頭のとっぺんからつま先までじろじろと観察すると、怪訝そうな顔をして言った。

「失礼だが、あなた方はあの黒い城・・・失礼、この辺りの者はみなそう呼んでいる・・・ヴァルキア城の方だとお見受けするが？」
門番は、ふたりのよれよれの薄汚れた奴隷服の胸についているワッペンを指して言った。

「この印は、ヴァルキアの紋章。見たところあなた方は兵士ではなさそうですが。」

門番は、丁寧に話しているものの、ふたりをかなり警戒しているようだった。どう説明していいものかわからず、考えを巡らせていると、いきなりオソが目配せをした。

「実は、俺達はその城から逃げてきた奴隷なんだ。見つければ命はない。しかし故郷の母が病魔に冒されていると風の噂で聞き、自分の命を懸けてでも母に会わなければと言う、ただそれだけで兵士の目を盗んで逃げてきたんだ。この者も同じ奴隷で、この地よりはるか彼方のある町にいる妹が今にも命が危ないとの然るべき所からの情報があつて一緒に逃げてきたんだ。あの城の奴隷が憐れと思うなら、どうか水と食料をちよつとだけでいい、分けてくれないか。」

よくもまあこんなまつたく身に覚えのないことをすらすら言えるものだ。嘘八百の話しを、さも本当にそうだったように哀れっぽい表情と態度を露にして演技出来るオソを見て、私は啞然とした。そしてオソを軽く肘で小突いてささやくように言った。

「なんでそんな話を・・・」

オソは一瞬真剣なまなざしを向け、それから小さく頷いた。どうやらオソには何か考えがあるようだった。オソにとってはこんなことは朝飯前なのだろう。私は仕方なくこのオソの作り話に一役買わざるを得なくなつた。

「そうか、そんなことが。幸いここらはヴァルキアの死角になつて

いてまだなんとか暮らしていけるが、最近じゃあこの辺り一帯に疫病が流行っているとも聞く。命を懸けて逃げて来たのなら仕方ない。だが申し訳ないがこの村に入れるわけには行かない。村長からの命令でな。悪く思わんでくれ。」

するともうひとりのずんぐりした人のよさそうな門番が口を挟んだ。「君達を村に入れるわけには行かないが、君達に僅かな食料と水くらはいは分けてあげることにはできる。君達の持つている水筒を渡してくれれば、それに水を入れてきて差し上げるがいかかな？」

につこりと笑う、なんともかわいい感じの男だった。オソは後ろ手に私から水筒をもぎ取ると、演技を続けながら男に水筒を渡した。

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。ふたりなのにひとつだけなのかい？これじゃあいくらなんでも足りなさすぎだろう。オッケー、ちょっと待っててくれ。」

そっくり残すとずんぐりとした門番はその場を最初の、ひよろつと痩せた男へ任せて村の中に入っていった。

「あいつは人がいい。この村も最近続いているこの日照りで、水も底をつきかけている。充分な量がなくとも恨まないでくれ。」

私は肩に押し掛かった重い荷物を一時だけ下ろし、その場で大きく伸びをした。城を出た時よりは幾分温かくなってきた空気を思いつきり吸うと、なんだか体が軽くなったように感じた。

しばらくすると、ずんぐり門番が戻ってきた。手には抱えきれない程の荷物を持っていた。

「ほら、これはうちで余ってたマントだ。これがなきや、この暑さには耐えられんだろうて。そしてほら、近頃うちは村の外には出ないから、うちで干からびていた水筒をひとつあんた達にあげるから、持って行くといい。それと、食料。たいした量じゃねえが、贅沢しなけりやある程度までは持つだろう。」

「しかし、こんなに頂いて大丈夫なんですか？こちらの村も貧しい

生活をしていると聞きました。一介の旅人ふぜいのわたしたちにこんな……」

なんだかとても申し訳なさでいっばいになり、私は門番にそう言った。なんせオソはこの人のいい村人に嘘までついて、自分達の食料や水を調達せしめたのだから。

「なあに、これから先、辛い旅に向かうあんた達に比べたら、俺達はちゃんと家や家族があり、食料もなんとか調達出来ているだけ恵まれているさ。これくらいのことをたった一度くらいしたところで罰は当たるまい。」

ずんぐりした門番は軽快にそう言うと、荷物をふたりに手渡した。ふたりはこのずんぐりとした門番に何度も何度も礼を言い、マントを羽織り、荷物を受け取った。これで当分の間は旅を続けられる。ふたりの顔に安堵の表情が浮かんだ。これから待ち受けている試練とも言える残酷な仕打ちが待っていると知らずに。

ふたりは小さな村を後にし、元来た道に戻っていった。分かれ道に差し掛かった時、もう一度ふとあの親切な村人が居た小さな村に向かって、私は一礼した。

「よし、先を急ごうじゃないか。期限を過ぎれば俺達には死しか残っていないんだからな。」

もうすでに太陽は真上を過ぎ、わずかに西へ傾いていた。ジリジリとした熱気に、夜の間に溜まっていたはずの露も炙られ空気中に蒸発して漂っていた。僅かばかり歩いただけなのに、あっという間に体力を奪われているのがわかった。ふたりの足元はまだ若干草が苔のように生えてはいたが、進行方向に向かえば向かうほど、草はだんだん少なくなり、代わりに熱された砂が地平線の彼方まで広がっていた。ふたりはなるべく砂漠の中には入らぬよう、砂漠を縁取っている僅かな草が生えている場所から離れぬよう気を使いながら目的地まで歩いて行った。

太陽は、楽しげにふたりの旅人の上から灼熱の光を発していた。貰ったマントがなければふたりはとくに体力を消耗してしまっていただろう。しかし、荷物の重さやマントの重さがこれほど気になるとは。まるで子供を担いでいるかのように、荷物はふたりの肩に重くのしかかっていた。

どのくらい歩いただろうか。延々と続く熱砂の上に陽炎が立ち昇り、少し離れているとはいえ砂漠の熱がふたりを襲うかのように感じる頃、ふたりは休憩をとることにした。木が生えているわけでもないので今もなお楽しげに踊っている太陽の光を遮るものもないただっ広だけ場所に、ふたりは腰を下ろした。そして貰った荷物を覗いてみた。中には乾燥した芋やフルーツ、砂糖の小さな塊少々と塩の小さな袋が入っていた。二人にとってはこの侘しい食料ますがこの世のものとは思えぬほどのご馳走に見えた。ふたりはまず、自分達が持ってきた薄汚い水筒の中身から口をつけ、カラカラに渴いた唇を潤した。まだまだ先は長い。ここで一気に荷物を減らしてしまうのは賢い方法とは思えず、私はぐびりと一口水を飲み、オソへ手渡した。オソは我慢の限界とばかりに水をゴクゴクと飲み始めた。

「おい、そんなに最初から水を飲んでしまえば、この先困ることになるぞ。その辺でやめておけ。」

半分意識が飛んでいたのが、今の一言でハッと気がついたかのようにオソは一瞬身じろぎ、それからゆっくりと私を見つめ、そして自分の手元にある水筒に目を移した。

「あ、ああ。そうだったな。すまん。」

「だいぶ具合が悪そうだな。大丈夫か？」

そう聞くとオソはしばらくの間水筒を見つめたまま身じろぎもせずに居た。

「大丈夫だ。この任務はどの道、ふたりで遂行し、無事に城にふたりに戻らなければ、任務が完了したとは見てもらえないだろう。俺

達にはここでのたれ死ぬか、任務を無事に終わらせるか、ふたつにひとつしかないんだ。」

自分に言い聞かせるようにそう言うと、オソは荷物をまとめ始めた。私はオソが相当弱っているのではないかと心配になり、オソの手を掴み、食料袋の中から砂糖の塊をふたつ取り出し、ひとつをオソの手に押し付けて言った。

「これを食べておこう。きっと少しは体力が回復できると思う。」暑さと体力の消耗のせいで空腹感はまだあまり感じられなかったが、私は自分が手にした砂糖を無理やりかじった。口に含んだ途端にさらさらととけ、口中がすつと一瞬さわやかになるような感じがした。それを見てオソも、世にも珍しい食べ物を手にした子供のように、砂糖の塊にかじりついた。

「こんなものでも、ないよりはマシってもんだな。」

悪夢から目覚めた後のような、うつろな表情でうつすらと微笑みながらオソは言った。

太陽はだんだんと西に傾き始め、日の光はますますふたりの旅人を照らし続けた。マントを脱ぎたい衝動に駆られながら、ふたりは黙々と歩き続けた。歩きたびに頭や背中から汗が滴り落ち、落ちた汗は砂漠の熱砂に炙られてジュツと音を立てて蒸発するかのように見えた。だが、今ここでマントを脱いでしまえば、シリシリと照りつける陽の光に体を焦がすことになり、それはそのまま二人の死を意味するとわかっていた。

分かれ道から東へ約二時間ほど歩いた辺りで、ふたりは二度目の休憩を取ることにした。疲れのせいで目の前がぼやけて見え、足は動くことを拒否していたからだ。棒のようになった足を休ませるため、ふたりはまたしてもなにも遮るものがない地面の上に荷物をそつと置いて座った。背後にはまだうつすらとふたりが出てきた城が高々と聳え立っているのが見えた。もうずっと歩いてきたように思えた

が、実際にはまだそう遠くには来ていないらしい。一体、いつになったら目的地に着けるのか、ふたりは訝った。地図もなく、ただ命令された時に聞いた情報だけを頼りに歩かねばならない。本当に目的地があるのかどうかさえわからなくなるほど、ふたりは疲れきっていた。急に眠気が襲ってきたが、この砂漠の暑さの中では到底寝られるはずもなく、ただぼんやりと横になって目を閉じることしか出来なかった。目を閉じるとまぶしい太陽の光が瞼を透かして通ってくるような、真つ赤な世界があった。しばらく赤い世界を見つめているうちに、周りから黒雲が湧き出てくるような妙な感覚があり、そのまま真つ暗な世界に落ち込んでいった。

ふいに、私は足元に何かの気配を感じて目を開けた。目の前には光り輝くまぶしい世界が広がり、一瞬自分の目が見えなくなったような感覚に陥った。目をしばたたかせると、徐々に周りの景色がうっすらと見えてきた。

「動くんじゃない。」

一瞬、誰の声かと訝るほどの危機感と恐怖感の入り混じった声が耳元でささやいた。

「お前の足元にサソリがいる。下手に動いて刺されでもしたら、命の保障はなくなるぜ。」

外気とはうらはらに、私の体全体に内側から寒気が走った。足元をもぞもぞと動く何者かに気付かれないよう、息を殺してじっと通り過ぎるのを待った。感触がだんだんと足の端まで動いていくのを感じた。緊張のあまり、背中にある砂はじつとりと嫌な汗を吸い込んで、肌に吸い付くようなべたべたした感触になっていた。私の目は、覚めるような青空の中に浮かぶ灰色がかつたうす雲に急に興味を持ったかのように、空を見つめたままだった。

やっと足にうごめく感触がなくなり、ほっと胸を撫で下ろした。私は目でオソを探した。オソは私と同じくほっと安堵の表情を見せ、

私の顔を覗き込みながら言った。

「大丈夫だ。だが、まだお前の左側にいる。動くなら右側に動け。」
そう言うと、オソは自分の体を後ずさりさせて私の動けるスペースを空けてくれた。私は即座に右に寝返りをうち、事と次第を把握するために上半身をやっとの思いで起こした。喉はからからで全身はまるで火の中にいるかのように熱を帯び、唇は乾燥のためにひび割れ、砂についていない方の体はやけどをした時のようにジンジンと痛み、砂と接触していた側の体は、汗をすべて吸い取られ、まるでフライパンの中で炙られたベーコンのごとく汗と砂が入り混じったべとべとした気持ちの悪い感触になっていた。汗でぬれた砂は決して冷たいわけではなく、鍋の底から煮詰められたような生暖かさだった。

「どうやらちよつと休みすぎちまったようだ。この後急がねえと時間がなくなるぜ。」

オソの言葉の通り、すでに太陽は西側の方へだいぶ傾いていた。東から生暖かい風が僅かに通り過ぎるのを感じた。空には薄っぺらい雲が足早に流れていた。

「ありがと。」
カラカラに乾いた口をほんのちよつとの水で湿らせてから、私はオソにお礼を言った。まさかオソが私を助けてくれるなんて。オソに對して持っていた疑念がまた少し溶け出すのを感じた。

「見てみる。」
オソにそう言われ、オソの指を指す方向を見てみると、だいぶ遠くになった出てきた城の尖塔が、生えたての筍のようにちよこんと見えた。その尖塔の上からは、黒雲が不気味に被さっており、まるでふたりを威嚇しているようにも見えた。黒雲の影の下にあるせいか、城は不気味に薄黒く見え、なるほど『黒い城』と呼ぶに相応しい身なりをしていた。

ふたりは先を急ぐことにした。地形から言えば神殿のある都まで行

くの、どうしても砂漠に入らなければならぬ場所がある。本格的に砂漠の中を歩くことになれば、きつと今のように易々と進むことは出来なくなる。今まで以上に困難な道を、裸足で歩かねばならない。かかる時間や日数もこの時のために余らせなければならぬ。

夜に近づくにつれ、空気はひんやりと心地よさを増しては来たが、太陽が完全に地平線の向こうへ姿を隠すと、今度は急激に冷え込むようになった。寒さで手足は震え、吐く息は白く、手足を動かすことさえ困難な程になっていった。寒暖の差が激しいところからも、この砂漠は「死の砂漠」として恐れられているのだ。マントは日差しを跳ね返してくれはしても、この寒さは跳ね返してくれそうもなかった。歩く度に体中の間接はきしみ、昼間の熱気が急激に冷やされ、雨が通った後のように夜露が砂や僅かな草にたっぷりしみこんでいた。砂はまだ暖かさが残ってはいるものの、この夜露のおかげで昼間よりも重く、疲れた足に更に押し掛かってきていた。

疲れと寒さでどうすることも出来ず、ふたりは休憩することにした。しかしテントのようないいものは持っておらず、ふたりはこの寒さをどう凌ぐかを模索した。ここには枯れ木や枯れ草もなく、焚き火を起こそうにも薪がなかった。仕方なく、まだ温かみが残っている砂漠の砂をふたりが座れる分だけ掘り、そこへマントに包まって蹲すくまった。そしてまたふたりは深い闇に落ちていった。

ふと、私は寒さで目が覚めた。いつのまにやら眠ってしまったようだったが、星の位置からするとそう時間は経っていないようだった。砂からの温かみが体を包み、その心地よさについてとうとうととしてしまったらしい。横を見るとオソは完全に横になってすやすやと眠っていた。私はオソを揺り起こした。

「夜のうちにある程度進んでおいた方がいいだろう。さあ、もう行かなきゃ。」

私はそう言いながらさつさと身支度を始めた。眠そうな目を擦りながら、冬に暖かな布団から起きだす時のように身震いしながらオソはしぶしぶ起きだした。

ふたりはまた歩き出した。冬の北国のような寒さではあっても、体を動かしている方がまだ寒さを凌げるように感じた。途中に何度か休憩はしたものの、それ以外はただひたすらにふたりは歩き続けた。

夜の時間の小休止では、ふたりは急激な空腹感に襲われ、小休止の度に何かしらを口に含んだが、ふたりの腹は満たされなかった。ふたりは寒さでろくに口も開かぬ状態の中でも、ちびちびと干し肉やら干しフルーツを食べながら歩いた。なにかを口に入れていないと落ち着かなかつた。夜が増すにつれ冷えていく外気も手伝って、ふたりはもはや話をするのも億劫になり、無言で歩いた。

一日目の夜が過ぎ、夜気がだんだん熱を帯びてくる頃、ふたりは何度目かの休憩に入った。疲れはピークに達し、もうこれ以上足も動かすことが出来ない状態だった。ふたりはマントに包まり、そのままあつという間に深い眠りに落ち込んでいった。

ふと、私はなにかにつつかれた時のように急に目が覚めた。しらしらと夜が明け始めていた。星の輝きは薄れ、西の地平線からは太陽が顔を出す予告をするかのように光が漏れていた。

薄暗い中で辺りを見回すと、目の前には一羽の鷲フシが頭の上を旋回していた。鷲はまるで獲物を狙っているかのように旋回しては地上に近づき、近づいたかと思えばまた空高く舞い戻りの繰り返しをしていた。私は何気なくその落ち着きのない鷲の行動をじつと見つめていたが、突然その鷲は私の目の前に舞い降り、まるで何かを訴えるかのような目つきでをじつと見つめた。

一体なんなのだろう。怪訝に思ったその瞬間、どこからともなく声が聞こえた。

「ようこそ、風の精霊殿。」

聞こえるはずの無い声が突如として頭に響いた。いや、耳に響いたのかも知れない。誰の声かと私は辺りを見回した。しかし目の前には一羽の鷲、自分の横にはぐっすりと眠っているオソ以外は誰もいなかった。

「わたしは貴方の来訪をお待ちしていたものです。風の精霊殿。」

信じられないといった表情でもう一度目の前にいる鷲に目をやった。鷲は相変わらず私をじっと見つめていた。きっとこれは夢だ。疲れが見せた幻覚なんだ。目を擦り、頭を振って眠気を追い払いながらまた目の前を見た。まだ鷲は目の前にいて、私の目をじっと見つめている。もはや疑いようがない。この鷲の声なんだ。

「わたしは貴方がここへ来ることを前まえ以って知っていました。生あるものすべての母より教えられていたのです。」

「貴方は今、人々の畏にかかり、大変な試練の時に突入しました。」

しかし、この先にながらうとも、絶対に我を忘れてはいけません。

「
鷲は、私の身に起きていることがすべてわかっているかのような物言いをした。」

「どういうことだ？」

つい、私は相手が鷲だと言うことを忘れて質問してしまった。質問してしまつてから八々と、自分はどうかしてしまつたのかという自責の念に駆られたが、さらに驚いたことに鷲から返事が返ってきた。「詳しいことはわたくしも知りませんのでお教えすることが出来ません。しかし、我が母がこのように伝えろと。『この先にながらうとも、決して我を忘れてはいけません。』と。」

なにがなんだかわからなかったが、とりあえずこの先にかとんでもないことが待ち受けていそうな予感はしていたので、この場はと

りあえず「わかった」と返事をすることにした。返事を告げると驚きは納得したかのように空に再び舞い戻り、ゆつくりとキーズの頭上を旋回し、大空のどこかへと飛び立っていった。

驚が飛び立った後すぐに、またしても急激な眠気に襲われ、私は再び深い暗闇に落ちていった。次に目が覚めたときにはすでに辺りは明るくなっており、太陽が元気いっぱい熱気を放っていた。目が覚めてからもしばらく驚のことをぼーっと考えていたが、なんだか夢を見ていたような感覚になっていた。あれは夢だったのだ。そう思って身支度をしようとしたと立ち上がると思ったその目の前の砂には、驚が現れたのは夢ではなかったと立証させる証拠があった。足跡がはっきりとついていたので。やはりあれは夢ではなく、現実に起こったことなのだ。にわかには信じがたかったが、そんなことより今日これからの旅のことを考える方が最優先事項のように思えた。

前の日と同じように、暑さに翻弄されながら、体力を奪われながらふたりの旅人は黙々と歩いた。辺りに目を凝らしてみても、太陽の輝くような光以外はなにも目に映らなかった。村や町の気配もなく、木が生えている気配もない。なにもない、砂だらけのこの世界にたったふたりだけ取り残されたような寂しさを感じながらさらにさらに歩いていった。裸足の足に焼けるような砂が絡みつき、火傷を負ってズキズキと痛み出していた。足はずでに感覚を失って、本当に足を動かしているのか疑うほどだった。

落ち着かぬ昼間の休憩も程ほどに、ふたりはさらに歩き続けた。意識は朦朧とし、どこをどう歩いているのかさえわからなくなるほど疲れ、暑さでめまいがするほどだったが、この熱砂地獄では休憩することさえままならなかった。水も二本の水筒のうち一本はすでに飲み干し、二本目もすでに半分も残っていなかった。このままふたりは倒れて死んでしまうのではないかと不安に駆られながらも、

どうすることも出来ない太陽の下でとぼとぼと歩を進めるしか道は残っていないかった。

ふと、東からの生暖かい風が頬を撫でた。朦朧とする意識の中で空を見上げると、東側から急速に突き進んでくる黒い雲があった。遠めから見てもわかるくらい、雲の下には雨が降り注ぎ、それまで熱されていた大地は突然の雨を受けてもうもつと水蒸気を発していた。水蒸気は空までのぼり、そこでまた新たな雨雲を作り上げ、どんどん大きく膨らんでいくように見えた。

「恵みの雨だ。ありがたい」

そう言っただけふたりは急に元気を取り戻し、迫り来る雨を僅かでも受けようと荷物をその場に置き、その上からマントをかけ、みすばらしい奴隷服を脱ぎ捨て裸になった。雨はふたりを洗い流そうとするかのように忍び寄り、そして激しい水しぶきをふたりに浴びせかけた。

雨は生暖かかったが、ふたりの身も心も充分潤してくれた。この機会を逃すまいと、ふたりは必死で水筒を天に掲げ、雨を水筒に満たそうとし、さらに手にも掬い取ってはごくごくと飲んだ。

水を受け、ふたりは元気と意識を取り戻した。そして思い出したように持っていた食料にかぶりついた。再び元気に顔を出した太陽に服やマントはあっという間に乾かされ、再び自分の仕事を果たすべく皆さんと光を地上に降り注がせた。

今しがた降った雨は太陽の熱であつという間に水蒸気になり、今度はうだるような熱を放った。恵みの雨と喜んだのもつかの間、雨の残した足跡は、この後しばらく湿気と熱気になってふたりの旅人

を苦しませた。砂漠の砂の表面は雨を受けて重くなり、ふたりの足の運びを遅々として進ませなかった。膝ががくがく痙攣^{けいれん}し始め、もうこれ以上歩けないと思つた時、ようやく太陽は自分の役目を終えたかのようにゆっくりと辺り一面を赤く染め上げながら、東の地平線へ向かつていた。

すでに雨の気配など感じさせないほど熱された砂の上にふたりは蹲^{すく}つた。いつしかふたりは落ち着かぬ浅い眠りに落ち込んでいった。時間が経つにつれ、空気も次第に夜気を帯び、熱が取り去られて涼しくなってきた。まだまだ暑いとはいえ真昼間の暑さから比べたら随分過ごしやすい気温になっていたため、ふたりはすぐに浅い眠りから深い眠りへと落ちて行つた。こうしてふたりの旅人は二日目の夜を迎えた。

二日目の夜を迎え、涼しい間にふたりの旅人はただひたすらに眠り続けた。太陽が東の地平線へ沈んでしまうと、急速に夜気が広がり、ふたりが眠っている間に空は一面の星を散りばめていた。だんだんと気温も下がり、眠っていらなくなるほどの寒気に襲われてふたりは目を覚ました。僅かな食事を取り、残り少ない水を少しづつ飲み、ふたりは再び旅を続けた。昼の間は暑さと熱気で思うように旅がはかどっていなかつたため、比較的過ごしやすい夜になんとか歩を進めて距離を稼ぐ作戦を再び決行した。

暑さの中で体力を消耗するよりは、夜の冷氣の中で歩いた方が体力的にも気力的にも消耗が少ないような気がしたためだ。この作戦はうまくいった。夜はマントを羽織っていても寒さが肌を貫き、眠ることすら出来なかつたが、それなりに距離を稼ぐことは出来た。この辺りからは空の星を見ながら北へ進路を変えてみた。僅かな時間にしか眠ることが出来ず、ふたりは睡眠不足でふらふらと足取りもおぼつかなかつたが、あと一日で、少なくとも目的地近くには行け

るのではという期待から、気力を振り絞って懸命に歩いた。そして辛く厳しかった二日目もとうとう終わりに近づいてきていた。寒さが次第に緩み始め、夜の間の夜気で凍えた体が解凍されていくような、緊張を溶かしてくれるような暖かさが体を包んでいた。ここでふたりはもう一度睡眠をとった。この僅かな過ごしやすい時間帯に休んでおかなければ気がおかしくなっていたことだろう。

三日目も前日、前々日と同じように辛く厳しい暑さの中をただひたすら歩き続けていた。それまでと違ったのは、そろそろなにか、砂以外の物が見えてくるのではないかとの期待から、ふたりはせわしなくあちこちに目をやりながら歩いていたことだった。辺りを見回しても、前日までと同じように、建物らしい影も形も見えない。少し歩いてはまた周囲を見回し、がっかりしてまた黙々と歩き、しばらくしたらまた周囲を見回してまたがっかりする、そんなことの繰り返しだった。

「そろそろなにか見えてきてもいい頃じゃないか？なんでも見えねえんだろう？」

オソは愚痴っぽく言った。

「この任務の説明を聞いた時、確かラーズ將軍は『片道三日』と言ったはず。なのになんでなにも見えないんだ？」

確かに何かが変わる。どこかが狂っている。だがそんなことは億尾おひびにも出さずに言った。

「今の時点で言えることは、夜までの間に何か見えてくる、もしくは到着出来る可能性と、俺たちの足が遅くて遅れている可能性、後は考えたくはないが、道に迷ったかもしれない可能性だな。」

「もうひとつ可能性はある。ラーズが嘘を教えた可能性だ。」

「それもありえるかもしれないな。」

まぶしさで太陽と砂がぼやけて見え、全体に陽炎が漂っているよう

な感覚になりながらも、ふたりは懸命に歩いた。幻覚でもいい、なにか見えやしないかと辺りを見回してもなにも見えない。絶望にも似た感覚と今までの強行軍で体が疲れて痺れて感覚がなくなっても、もうすぐ何かが見える、その期待だけで私達は歩いていった。

やがて暑苦しい昼も過ぎ、段々と空気が生暖かくなり、太陽もいまや遙か遠くに見える東の地平線と空を赤く焦がしながら休みの体制に入っていた。一体何時間歩いたかもわからない。もう体が動けなくなり、ふたりはまだ熱を帯びている砂の上に倒れ込んだ。そしてそのまま死んだように動かなくなつた。

気がついたのは、辺り一面が暗くなり、星々が空に美しく輝く肌寒い夜になつてからだつた。結局、夜になつてもまだ都の姿も見えない。この残酷な現実を目の前に、私達はただ押し黙つたままで座っていた。

とりあえず今のふたりに必要なことは、水と食料なのだと体が激しく訴えていた。ふたりはそのそと動き出し、からからに渴いた喉を潤した。すでに残りも僅かになつた食料を手に取り、口に含んでいる間もずっと押し黙つたままだつた。静かな夜が辺りを満たした。月は細く欠け、新月に近いその姿をうつすらとした衣で身を隠すように、雲がかかっていた。

「とにかく、俺達には先に進むしか道はないんだ。」
まるで自分に言い聞かせるように、オソはぼそつとつぶやいた。その時私は母のことを考えていた。もう何日もろくな食べ物も与えられていないのだろう。一刻も早く戻らねば。そうは思つても、連日の暑さの中を歩き続けて来た体はもう動けないと訴え続けていたし、私も急激な眠気に耐え切れなくなつてきていた。オソはすでにマントに包まり、つい今しがた起きたばかりなのにまたしても横になつて眠つてしまつていた。砂の熱も徐々に取り払われていくのがわか

った。

ふと、意識がなくなっただかと思えばすぐに何かの気配に目が覚めた。なにやらごそごそと蠢くものがある。細心の注意を払いながら辺りを見回した。すると小さくてほとんど気がつかないような体の影の部分に、一匹のサソリがいた。キースは思わず体を仰け反らせた。サソリに刺されたりしたら、それこそ自分はここで屍になるしかないのだ。体全体に戦慄が走った。一日目に感じたあの恐怖とほとんど同じだった。

ところがサソリは身じろぎもせず、どんどん私の方へ近づいて来た。私は言い知れぬ恐怖感からつい迫り来るサソリを追い払うかのよう
に距離を測りながら砂を投げつけた。

「やあやあ、そんなことをするものではありません。」

いきなり、またしても頭の中に声がした。もしやつい数日前の驚なのか？しかし辺りを見回してもサソリ以外の生き物はオソ以外はいないように見え、再びサソリと目を合わせた。

「そう、わたしです。貴方の目の前にいるサソリです。風の精霊殿。」

この苦行の間の僅かな日数で、こう何度も同じようなセリフで、しかも信じがたいことに動物達が自分に話しかけるなんて、まるで夢物語を見ているかのように思えた。だが私自身は、完全には言えないが、目の前の現実を『現実』として受け入れられるようになって来ていた。そして私はハタと気がつき、気になることを思い切って質問してみようと言う気になっていた。

「なぜ私のことを『風の精霊』と呼ぶ？わたしは人間だが。」

その質問はサソリにとってはまるで非現実的な質問だったかのよう
に押し黙り、そして考え事をしているかのようにその場をグルグルと動き回り始めた。動きが止まった時、またしても声が頭に響いてきた。

「なるほど、あなたは人間として生まれて来る時に、何もかも忘れてしまっているのですね。わたしは貴方が何者なのかを知っています。しかし今はその話をするべき時ではありません。わたしはただ、伝言を伝えるように言われて来ただけなのです。」

どうもこのサソリはせつかちなようで、私の質問など聞かなかったかのように次々と話し始めた。

「今現在、貴方はこの地で迷っておられます。あなた方の進むべき道を示してさしあげましょう。明日の朝、空を飛ぶ鷲に注意を細心の注意を払ってください。そこに道が示されましょう。」

「え？君達が手助けしてくれると言うのかい？」

「いいえ。わたし達ではなく、昨日貴方にお目にかかった鷲がご案内を買って出たのでございます。わたしはその伝言を貴方にお伝えするために参っただけのこと。」

息つく暇も与えないほどの勢いでさらに続けた。

「このことは、我が生きとし生けるものすべての母であるあの方はご存知ありません。なのでどうか、このことはくれぐれもご内密に貴方と旅を共にしておられる方にもです。よろしいですか。」

私にとってこの、地獄の旅程の中で手助けをしてくれるものがたとえ人間でなかるうとも居るということはこの上ない励みになった。神は自分を見放したわけではなかった。そんな、今まで思ったこともないような思いが込み上げ、言い表すことの出来ない喜びが胸に滝のように押し寄せた。

「わかった。ありがとう。」

私が礼を言うと、サソリはまたせつかちに「どういたしまして」とでも言うかのように、長く伸びた尻尾を前に倒して挨拶した。

「ああそうだ、忘れるところでした。」

サソリがまた話し始めた。

「もうひとつお渡しするものがございます。今しばらくお待ちくだ

さい。」

そう言うと音もなく地中深くに潜り込んでたちまち見えなくなってしまう。私の瞼が再び重くなつて来た時、サソリが消えた辺りの砂から今度は別の何かが這い出してくる気配がした。なんだろうと訝りながら見ていると、今度はサソリではなく、一匹のスナネズミがピョコつと顔を出した。

「これをお渡しするようにと、貴方のお母上から預かつて参りました。」

何匹ものスナネズミが光る重そうなものを砂の中から取り出した。

それは紛れもなく捜し求めていた神剣グラムリングだった。私は目をパチクリさせてスナネズミを見た。どうしてこんなものがここに？

「貴方のお母上と私達の仲間の一匹が親しくさせていたのだと思います。貴方が旅立たれてから、お母上は貴方の心配ばかりをしております。なにか勇氣付けて差し上げることがあればと、お手伝いを買って出た所存でございます。」

俄かには信じがたいことだった。母はネズミと話ができるのか？

「貴方様のお母上様は、私達と意思の疎通が出来るようです。他の人間のように言葉を話すことが出来ないため、神様のお慈悲でそういう能力を身につけられたのかもしれないね。」

私は、ネズミ達が必死に砂の中から掘り出したグラムリングを手に取り、砂を払いながら二の句も告げられずに、忙しなく動くスナネズミ達をただポカンと口を開けて見るだけしか出来なかった。

「それでは私達は参ります。ごきげんよう風の精霊様。」

ありがとうと伝える暇も与えず、スナネズミは地中深くに戻っていた。なぜ母がこれを？そんな疑問が一瞬湧いたが、体の疲れと、母はまだ無事なのだと言う安堵感で、またしても瞼が重くなり、薄いマントに包まりながら、深い眠りに落ちていった。

明日の朝が勝負だ。明日こそ、きつと目的地にたどり着ける。私は眠りに落ちながらそう自分に言い聞かせた。

心地よいまどろみに身を包まれている時、オソに揺さぶり起こされ、私は現実に引き戻されたような気がして目を覚ました。辺りは完全に暗くなり、僅かだった月さえも、今は厚い雲の後から世界を照らしていた。

「寝すぎた。もう行かなきゃならない。」

ふたりは身支度をして出発した。寒さが肌に染み、動くことでなんとか温かみを体に取り戻したい一身で歩いた。北極星がふたりの背後で輝いており、どうやら今までは、南側に向かっていたことがわかった。夜には星の位置を確認しながら歩いていたはずが、いつの間にか狂わされている。やはりこの砂漠はなにか大きな、目の見えぬ力に支配されているのかもしれない。ふたりは進路を北の向きに変え、なるべく北極星を右上に見えるようにして歩いた。数時間置きに休憩を取りはしたが、なるべく食料は残したままにした。長い長い夜の間、遅れを取り戻そうと必死になって歩いた。私達の背後には、今までの私達の行程を示しているかのように砂の上に点々と足跡だけを残して続いていた。

三日目の夜もそろそろ過ぎようと言う頃、目の前にサボテンが立ち並ぶ場所に来た。今まで草一本、サボテン一本も見えなかった砂漠に、突如として現れた植物にふたりは心が躍った。もしかするとこの近くにオアシスなどが見えるかもしれない。なにより「生き物」の気配が感じられたことを嬉しく思った。

四日目の朝が無情にも明け始めた頃、ふと空を見上げるとふたりの頭上空高く飛びまわっている一羽の鷲が目に飛び込んできた。そして思い出した。夢現ゆめうつに見た光景。鷲やサソリが自分に話しかけてきた事実。随分前にも似たようなことは多々あった。ゲリラの村の近くにいたカラス、そして長の病気を治すために山の上へ行った時に出会った竜の化身。みんなが口を揃えてキースを『風の精霊』と言った。一体なんのことなのか、身に覚えのないことなのに。ふと、

記憶の彼方から声が聞こえた。

『お前さんはきつと、目に見えないなにかに守られているのだろう。』

それは、遙か昔と思えるほど（実際は一年も経ってはいなかったのだが）前に聞いた長の言葉だった。自分は何かに守られている？ 一体なんのことなのか。だが、今はそのことを考えている暇はない。そうだ、思い出せ。あの鷲はなんて言った？ 『これからの行く先を空から示すので着いて来て欲しい』とかなんとか言わなかったか？ 記憶の糸を手繰りながら、輪を描いて飛ぶ鷲の方向へと私達は歩を進めた。

この、私の突然の行動に、訳もわからずにオソは質問を浴びせかけてきた。だが私は、そのオソの言葉などまるで耳に入ってはおらず、ただ黙々と、そして今までにないほどに足早にオソの前を歩いた。私のその行動は、オソから見たらまるで、私が何かに執り付かれたかのように思えたことだろう。サソリの言葉が蘇る。『誰にもこの助けのことは話してはならない。』ならばこのまま何も言わずに行くしかない。

ふいに、私は腕を掴まれ、我に返ったような気がした。オソがものすごい形相で睨んでいた。

「おい！ なんでそう急ぐ？ なにか見つけたのか？ なぜ何も話してはくれない？」

オソの疑問はもつともだ。話したいのは山々だが、話してはならないと言われているためにどうすることも出来ない。私とてきつと、同じようなことをされたら腹が立つだろう。なにか、それと知らせずにつまぐオソを自分についてこさせる方法はないものか。頭の中で思考しながら、空を仰ぎ見た。まだ鷲は空中で旋回している。

「見てみる。あの空で旋回している鷲は、何か俺達に訴えかけているような気がしないか？」

信じられないと言った表情でオソも空を見上げた。確かにふたりの近くで鷺が旋回している。

「ただ、餌を探して飛んでいるだけだろう。」

「しかし、もうずっと同じ場所ばかり飛んでいる。きつと何か訴えかけているんだよ。」

苦し紛れにそう言うと、オソはますます怪訝そうな顔つきになった。「おい・・・暑さで頭がやられちまったか？そんなはずはないだろう。あつちは目的地とはまったく違う方向だ。」

「だが、今私達はたぶん道に迷っている。この暑さが、この砂漠が俺達の方向感覚を鈍らせているのかもしれないし、この土地にはなにか大きな力が支配しているのかもしれない。いずれにせよ、神にでもすがらないと目的地にも着けそうもないと思う。」

まるでオソを勇気付けるかのように、私は言った。ここでなんとかオソを説得しなければますます遅れるばかりだ。頼む！なんとか納得してくれ！神にでも祈るような気持ちで私は心の中でそうつぶやいた。

「確かにそうかもしれない。しかし、神だの何だのと、そんな不確かなものを信じる気にはなれない。」

「まあ、確かにそうかもしれない。だが、どうせ何も見えない場所なんだ。目標みたいな軽い気持ちで着いていって見ないか？もし違っていたら、引き返すことも出来るし。その分時間はかかってしまわうが。」

「おいおい、気がついてないなら言うが、もし帰るのが遅ければそれは即俺達自身の命がなくなることと同じなんだぜ。俺達だけじゃない、お前のかあちゃんもだろ。」

「わかってるさ。だが今は俺の勘が『ついていけ』と言ってる。俺はここで命を懸けて誓おう。お前だけは無事に生きて帰すと。」

「馬鹿野郎！俺だけ帰っても、任務を無事に遂行したことはないからねえ。俺は帰ってから鞭打ち百回だぜ。この鞭打ちで生き残ったやつはいねえ。大概の場合、途中でくたばっちゃうんだぜ！ふたりで

！しかもあと三日のうちに帰らなけりゃいけねえんだってことを思い出してくれ！」

体中をわなわたと震わせ、とうとうオソは怒鳴りだした。奇想天外な発想を持つてる場合じゃない、オソは全身でそう訴えていた。だが私は確信していた。私が取っている行動は正しいのだと。なぜかはわからないがはっきりと感じ取っていた。

「俺の言うことが信じられないのなら、ここでお別れになるな。どの道ここで口論していても、遅れて帰ることになっても、俺達の前には『死』しかない。だったらちよつとは希望がある方向へ行きたい。俺はそう思う。着いて来たくないならオソはオソの思う道を行けばいい。」

私は皮肉っぽく、そして冷静にそう言うと、荷物をまとめてさっさと歩き出していた。オソは困惑しながらも、ここでひとり取り残されるよりは誰かと一緒の方が賢明だと考えたかのように、諦め顔でしぶしぶ後ろをついてきた。

ここからふたりの進路は変更された。右に進路を取り、そのまますぐに鷲が示す方向へ向かっていった。私でさえも半信半疑だったが、陽が高くなるにつれ、道を進むにつれて増えていく草が、私の勘が正しかったことを証明していた。

途中で疲れのために足がもつれ、砂の上に倒れ込んでしまうまで、鷲はふたりを休ませてはくれなかった。まるでふたりの任務のことを何もかも知っているかのように、急げ急げと、時としてふたりの背後まで差し掛かり頭を掠めて威嚇するように飛んだりしていた。ふたりとも、もうどう足掻いても動けないところまで来て、ようやく鷲はふたりを休ませることにしてくれた。すでに足には豆

が出来、その豆が連日の熱砂で炙られ硬くなり、豆のない部分は火傷を負い、僅かな砂の感触にも敏感になっていた。この強行軍で豆はつぶれ、潰れた豆の割れ目には無情にも砂が入り、血と混ざってちくちくと刺した。水はとうになくなっており、唇も乾ききっていてひび割れていた。口の中にはどこからか流れて来た風が運んで来た砂漠の砂が入り込み、体中どこもかしこもジャリジャリしていた。渴きのせいで口を開くことも出来ない。この世の神に愚痴でも言ってみようかと仰向けになったとき、空から何かが降ってきた。

慌てて降って来た何かを手を受けると、それはなんとも言えぬ芳香を漂わせたひとつの真っ赤な果実だった。啞然としているともうひとつ赤いそれが降ってきたので、取り損なうことのないように気を集中させて受け取った。空を見上げると、鷲が頭の上で旋回していた。そうか、この果実は鷲が運んで来てくれたのか。

見たこともないようなその果実をひとつ、オソに手渡し、ふたりは恐る恐る果実にかぶりついた。たとえそれが毒入りであろうとも、今のふたりには喉を少しでも潤せるものがあることが一番重要だった。皮は薄くやわらかく、水分を完全に失ってしまった唇にちよつと触れただけであつという間に中から甘く涼しげで、どこことなく冷たい果汁を出してくれた。ふたりは我を忘れて果実にかぶりついた。果汁は一滴でも無駄にはしたくなく、行儀の悪さなど気にせずふたりは果汁をなめまくった。果肉はさわやかな緑がかつた白で、口に含むとさらさらと溶け出した。果実の中心に行けば行くほど、段々と歯ごたえのある果肉になっており、空腹だったふたりの腹を満たしてくれた。果皮は柔らかくはあつたが、口に含んで噛むとほろ苦さと薔薇のような香りを漂わせ、恍惚とさせた。

「この世に、こんなうまい果実があるとはな。見たことも聞いたこともない果実だが、もしかしてこれは、神話のアダムとエバが食べたという果実なんじゃないのか？」

すっかり気分がよくなり、気持ちも落ち着き、前向きに物事を考える余裕が出来たようになった。たったひとつの果実だが、ふたりの腹の中で膨らんだかのように、完全にふたりの腹を満足させてくれた。

「俺は今まで、神なぞ信じちゃいなかった。だが、この果実の存在だけは、なんだか神が本当にこの世に存在するんじゃないかと思わせるようだ。」

オソの言うように、確かにどことなく神の食べ物かと思うほど、ふたりを満足させてくれた。それまでとは違って代わり、疲れも完全に癒え、手足の痛みも重い荷物を乗せて強張った肩や腕にも、力が湧いてくるのを感じた。

そしてふたりはまた歩き出した。それまでのような辛い行程ではなかった。最初僅かだった草が段々と多くなり、草も灼熱の太陽の下とはまるで無縁だったように、うっすらと露を含んでいるものもあった。風がそよそよと心地よく吹き、息苦しさも薄らいだ。太陽が真上から少しずれ、流れて行く雲の後に隠れた頃、目の前にうっすらと何か巨大な建物のようなものの影が見えた。建物の上の空には、案内してくれた鷲が旋回している。こうしてふたりはようやく目的地を見出したのだった。

第二章 第九話 白の都と陰謀（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

【お断り】

文章中に出てくるラクダは現在この地球上に存在するラクダと姿形は似ていますが、まったく別の生物と言う設定になっています。したがってこの小説内に書いてあることを実際に行っても、ラクダは言うことを聞いてくれることはありませんのでご了承ください。

第二章 第九話 白の都と陰謀

その建物の群集は高い塀に囲まれ、遠めから見ても真つ白でとても美しい都だった。人々が暮らしている様子が伺える場所では、白い煙が細い糸のように立ち込めていた。

目的地がはつきり目の前に現れたことで、私達に再び気力が湧いてきた。もうすぐ四日目の夜がくる。早くあそこに着かなければ。すでに疲れて悲鳴をあげていた足を引き摺りながら、ふたりは歩を進めた。

こんもりとした丘の上に立つその都は、遠目から見ればあとちよつとで着く場所のように大きく見えたが、歩いていくうちにそれが妄想であることがわかった。行けども行けども門の影すら見えず、まるでふたりを遠ざけているようにさえ思えた。辺りはだんだん薄暗くなりつつあり、空にはうっすらと月や星が見え始めていた。ふたりは休むことも考えずに出来うる限りの速さで歩いた。果実を食べたことで滋養と強壮は得たものの、ここまでの長い道なのですでに体力も限界に近づいてきていた。

辺りが真つ暗になり、星々が元氣よく輝きだし、空気も夜気で湿り始めたころ、ようやくふたりは都の門に到着した。

高く聳え立つ壁の間に剝り貫かれたように出来た門は、無情にも分厚い扉が閉まっていた。ふたりは夢中でどんと扉を叩いて叫んだ。

「お願いします！中に入れてください！長い道のりを歩いてここまで辿りついたのです！」

門の隅の小さい戸口から、ひとりの男が剣を腰に携え、松明を持つ

て現れた。

「これはこれは、こんな夜分に旅人か。しかし運が悪かったな。この門は夕方にはすでに閉じられ、明日の朝まで開かぬ。明日の朝またここへ来るんだな。」

「この、周りに宿すらない場所に放り出され、私達はどこで一晩を明かせばいいのでしょうか。せめてどこか夜露が凌げる場所だけでもお貸し願えませんでしょうか。」

「気の毒だが、今日は入れてあげることが出来ぬ。最近は何かと物騒だしな。夜露を凌ぐだけなら、この壁沿いを東方面に行ったところに、その昔使っていた無人の小屋がある。汚い場所だが、まあ、一晩くらいは過ごせることだろう。」

門番は汚い身なりのふたりを怪訝そうに見ながら言った。

「随分と辛い旅をなさったようですな。しかし決まりは決まり。運悪く門が閉まる前に都に入れなかつた者はみな、その小屋で一晩を過ごしている。すまないが明日の朝また来てくれ。明日朝日が昇る頃には門も開くのでな。」

そついうと夜の寒さにぶるぶる震えながら、門番は元来た小さい戸口から姿を消した。ふたりはしぶしぶと言われた通りに壁沿いに歩き出した。程なくして掘つ立て小屋が見えてきた。

戸はすでに朽ち果て、僅かな風に煽られて不気味にギイギイと音を立てていた。壊れかけた戸をこじ開けて見ると、中にはその昔、馬小屋として使われていたような風情を残したまま、あちこちに藁わらの山があつた。ランプもなく、あちこちガタが来て穴が開いており、その穴から外の弱弱い月明かりが見え隠れしていた。屋根も穴だらけで、穴からはちよつとだけ顔を出した気まぐれな月が見えた。

ここにあるものと自分の手持ちの物とでなんとか寝床をしつらえようと悪戦苦闘している時、ふいにオソが言った。

「そついえばよお。聞こう聞こうと思つていたんだが。」

私は手を動かしながら、顔だけオソの方へ向けた。

「その、腰にかかっている剣。ヴァルキアを出る時にはそんなもの持ってなかつたよな？」

私はなんと説明すればいいのかわからず、ただ黙々と作業を続けた。「そういえば、お前のおふくろさんが捕まった原因がなんだか知ってたか？」

いきなり話が飛躍するものだと訝りながらも、私はなんとか平静を装いながら答えた。

「いや、知らない。」

オソはさらに続けた。

「俺が聞いた話じゃあ、なんでも城の宝物倉かどこかから、一振りの剣を盗んだらしいぜ。随分と大胆なことをしたものだ。盗んだものを売ることだって、あの街では出来ないぜ。一体何のために盗んだんだろつな。」

オソのこの言葉に、なんだか挑発されているような気がして段々腹が立ってきたが、無理やり自分の感情を押さえつけた。今ここでオソと言い争っても仕方のないことだ。それより今は無事に任務を終わらせることだけを考えるんだ。そう自分に言い聞かせた。

簡単な寢床をなんとか設^びえ、私は寢床に寝転^びがった。オソもすでに自分で乱暴に作った寢床で寝息を立てていた。それにしても、さつきオソが言った言葉。母アルダは、宝物倉から剣を盗んで捕まったって？その剣はもしかやこれか？自身の危険を顧みず、なぜ母はこれを盗みに入^りったのか。それ以前に母はこの剣の存在を知っていたのか？次々と疑問だけが頭の中で浮かんでは消え、消えては浮かび、答えの出ない押し問答の渦の中、私は落ち着かぬ闇へと落ちていった。昼間の熱を吸い取っていたのか、藁はふんわりと暖かだった。

次の朝早くふたりは目が覚めた。遠くで鳥がけたたましく時を告げた。ふたりは残りの僅かな食料で軽い朝食をとって、再び門へ向か

った。

この日も雲ひとつない快晴で、夜の間に冷えた空気を太陽が急激に暖めていた。門につくとすでに扉は開かれており、昨日夜番だった門番が快く出迎えてくれた。門番はふたりの顔を見るなり愉快そうに言った。

「やあやあ、どうやらゆっくり休まれたようですね。昨日とは顔色が違う。」

ふたりの胸に小さくついている紋章を見て、門番の顔色が引いた。そしてふたりにささやくように言った。

「どうやらあなた方はヴァルキア城の使いの方らしいですね。この都では、黒い城の人間はあまり歓迎されませんぞ。常に我々兵士の目が光っていることをお忘れなく。」

「ところで、こちらの都には神殿があると聞きました。神殿はどちらの方角にありますか？私達はその神殿に用があるのです。」
私がそう言った途端、近くに居た兵士がわらわらとふたりの周りを取り囲んだ。

「ほう。あなた方は神殿にご用が。一体どんなご用があるのか、出来れば伺いたいものですな。」

周りの兵士も青い顔をしてふたりを怪訝そうに見つめた。

「私達は、この品と書状を神殿の巫女殿に渡すようにと言付かって来たのです。」

私はそう言つて、城を出る時に渡された書状と肩にかけていた箱をおろした。この箱を渡される時に、くれぐれも扱いには気をつけるように、決して巫女に渡すまでは箱を開けないようにときつく言われていたものだ。ここまでの道のりで一番重荷になっていたのはこの箱だ。そつと下ろすと肩や腰、膝までもが喜びに打ち震えた。

「ちよつと、その箱の中身を拝見させていただきましたきまずぞ。」

「巫女殿に渡すまでは、箱を開けるなときつく言われました。」

私とオソはふたりに箱の上に覆いかぶさるようにして必死で抵抗し

た。

「しかし我々の検査を受けなければ、神殿に行くことさえ出来ませぬぞ。」

そう言うと、ほぼ無理やり箱をあけ、中身を見た。中身は花を生けた籠かごだった。世にも珍しい、見たこともないような花が籠かごいっぱい生きてあり、ふたりの長い辛い行程の中でよくここまで耐えたものだと思えるくらい、仕舞った時のまま行儀よく入っていた。

兵士はなにかまじないにでもかかったように身じろぎもせず立ち尽くし、そのまま静かに箱の蓋を閉じた。

「見たところ、なにも怪しいものはなさそうだ。しかし、神殿へはこちらから報告させていただく。この書状は私たちが預かる。ここから真つ直ぐ、高台のてっぺんに神殿はある。この重い荷物はすまぬが君達で運んでくれたまえ。」

そう言つと兵士の一人が書状を持って神殿の方面へ駆け出していくのが見えた。

ふたりは、兵士の指す方角を見て愕然とした。この重い荷物を持って、坂道を延々と登らなければならぬとは。それでも行くしかないのだ。決意を新たにし、ふたりは再び重い荷物を肩にかけてその場を立ち去った。

門から神殿のある方向へ真つ直ぐ行くと、延々と続く階段があつた。何段登れば頂上に着くのか想像もつかない。荷物の重さで異常に強張った体に鞭打って再びふたりは歩き出した。

急な坂に続く階段は、砂漠の上を歩く時より辛く感じた。目の前に目的地があるのに、もう目の前に見えているのに近づけない。この都を発見した時のような、嫌がらせとも思えるほどの道を、重い荷物を代わる代わる担かぎながらふたりは必死で歩いた。つい先ほどまで緩やかな朝日だった陽光が段々きつく、痛く感じるようになった。

休憩を挟みながら歩いて、何段と登らないうちにすぐに体力が尽きてしまう。壊れかけのゼンマイ仕掛けの人形のように、登っては休み、休んでは登りを繰り返していた。時間は無情にもどんどん過ぎて行つた。飲むものも飲まず、とはいえふたりの荷物にはもう一滴の水も残っていないが、食べるものも食わずにゆっくり、しかし確実に頂上を目指した。石壁に囲まれた家々の横を通つていするためか日陰に入れば涼しく快適だったが、日向は石壁に反射した陽光が意地悪くふたりを照らし、時間が経つにつれ暑く、息苦しくなつてきた。

陽が、周りにある建物の屋根を通り越し、空で元気に二人を照りつけるようになった辺りでようやくふたりは頂上らしき場所についた。そこは今まで見たどこの景色より神秘的で、まるで天国に舞い降りたようだった。円形の真ん中に丸く柔らかな形の低い塔のようなものがあり、その中心に向かつて十字を描くように端から真つ直ぐに石畳が敷かれ、石畳がない場所は青々とした芝生に覆われていた。きよるきよると辺りを見回しながら、ふたりは真ん中にある低い塔のようなところに来た。日陰に入るとなんとはいえぬ心地よさがふたりを包んだ。空気はひんやりと冷たく、ふたりの火照つた体を優しく冷やしてくれた。風がそよそよとそよぎ、芝生の温かな、そして鮮烈な香りが辺りを満たしていた。ふと東側に目をやると、そこには大きな建物が建っていた。近づいてみると、扉の上には大きな十字架が石壁に浮かぶように彫られており、その下には分厚い木で出来た頑丈な扉があった。恐る恐る扉に手をかけると、重い扉が中央から二つに割れ、重苦しい音を立てながら開いた。

真つ白な壁で囲まれたこの教会は、天井に程近い場所の壁にはステンドグラスがはめ込まれ、光が色とりどりになつて床に落ち、幻想的な雰囲気を醸し出していた。中は木製の長いすが行列をなして置かれており、百メートル程先には三十センチほどの台のようになつ

たステージ状の場所があり、その中央に、木製の教壇が置かれていた。教壇の前にはひとりの女性が従者らしきふたりの女性を従えて立っていた。白い衣を身にまとい、天女のような風貌で静かにふたりを出迎えた。ふたりは前に進んで行き、女性の前で立ち止まった。

「ようこそいらっしやいました。招かれざる客よ。」

従者と思しき女性が口を開いた。

「こちらにおわすお方が、我がエレドアの都にしてただひとりの巫女フィーナ様であらせられます。」

「これはフィーナ様からのお言葉です。即刻そちらの荷を持ち、あなた方の主の元へ帰られよとのことです。」

「ちよつと待つてください！」

あまりにも一方的な言い方だったのが気に障ったのか、もしくはせつかくここまで苦労して来たのに、最後の最後で任務が遂行出来ないと思つた焦りからか、オソがいきなり口を挟んだ。

「巫女様。我々はこの長く辛い砂漠を越えてここまで来ました。私達はこの任務をただの仕事として受けて来たわけではありませんし、ヴァルキアの兵士でもありません。私達はあの城で奴隷として囚われの身でございます。この任務を遂行出来なければ、私達は殺されてしまうのです。巫女様は情け深い方だとお聞きますが、私達をここで帰されることは、私達を死地への旅に向かえと仰つていふのと同じことなのでございます。どうかお慈悲を以つて、よくお考えくださいませよう。」

フィーナの後に控えていたふたりの女従者が、腰に携えた短剣の鞘に手をかけながらふたりに進み出ようとしたその瞬間、フィーナは横に手を伸ばしてふたりを制した。そしてなにやら従者にささやくと、ふたりは納得が行かないといった表情を浮かべながらその場を立ち去った。

私は、重い荷物を背から下ろしながらフィーナを見つめた。その立ち姿はまるで本当に神の使いでもあるかのように清楚で美しかった。フィーナは始めオソの顔を見つめ、そしてその視線を私へと移し、長いこと物思いに耽っているかのような表情で見つめていたかと思うと突然にこりと微笑んで言った。

「なるほど、あなた方の仰ることは本当のことのようですね。しかもかなり長く辛い日々を送ってこられた。」

「わたしは、あなた方がここへ来ることを存じておりました。そしてあなたが来ることも。」

私の目をじつと見つめながらフィーナは言葉を続けた。

「辛い試練があなたを待ち受けているのが見えます。しかし決して自暴自棄になつてはいけません。」

この巫女のセリフをどこかで聞いた。なぜそんなことを……。フィーナは言葉を続けた。

「あなたの試練は、同時に我々の試練でもあるようです。あなたに免じてこの荷は納めることに致しましょう。」

そう言つて手を二・三度パンパンと叩くと、先ほどの従者のひとりが現れた。

「この荷は、決して開けてはなりません。中身には手を触れてもなりません。しかし、このような場所に置いたままにはしておけません。どこか人目の届かぬ場所へ置いておくように。」

そう言い付けると、従者は手伝いの者を探しに場を立ち去った。強面の従者とはいえひとりの女性。この重い荷物を容易に動かせるはずもない。

さらにフィーナは続けた。

「あなた方に残された時間はあまりにも少ない。闇があなた方に近づいているのが見えます。そして（私を見て）貴方のおかあさまにも。」

フィーナはふたりを手招きし、自分についてくるように言った。ふ

たりは導かれるようにしてフィーナについていった。教会の入口とは反対の方向に小さな扉があり、そこにふたりは案内された。

小さな扉をくぐると、そこには信じられないような光景があった。この都の周りには草も木も枯れ果て、小動物でさえサソリ以外には存在しないと思わせるような、この世の地獄とも思える砂漠が広がっているにも関わらず、この場だけは草木が生い茂り、目の前には大きな滝が轟々（ごうごう）と音を轟かせて迸り落ちていた。池には睡蓮が咲き乱れ、滝から池に落ちている水際には、うつすらと虹がかかっていた。空気は清涼で涼しく、木にはふさふさと葉が生い茂り、甘酸っぱい香りの花が咲き乱れ、見た目にも青く涼しげな小さな実がなっていた。池の真ん中には、テラスのようにテーブルと椅子が置かれていた。フィーナは池の真ん中の椅子にふたりを誘った。テーブルにはガラスの細くすらすらと長いグラスがふたつあり、フィーナはそのグラスに滝から流れ落ちたばかりの水を汲んだ。透明な水がなみなみと注がれており、太陽の光を受けてきらきらと光っていた。ふたりは石で出来た椅子に座った。太陽に長時間当たっていたはずなのになぜかひんやりと冷たかった。不思議な光を放つ水の入ったグラスをフィーナから手渡され、ふたりはきらきら光るその液体に口をつけた。すると果実酒のような芳香とふうわりとした酔い心地に包まれた。体中の力が抜け、ふたりは即座に冷たい石のテーブルに突っ伏したまま深い眠りに落ちていった。

ふと目覚めてみると、目の前には美しい巫女が座っていた。太陽の光を受け、まるで後光が背から出ているような雰囲気を持った女性だった。この土地の人間にはほとんど見られない黒い美しい髪と、神がかり的な青い目をしていた。

「あなたには、初対面とは思えぬ、不思議な懐かしさを感じます。フィーナは静かに語り始めた。

「わたしは、生まれながらに水の加護を受けています。そのため、

この何も無い、死地のような砂漠の中に居ながら、ここには水が溢れています。この水は都中を流れ、人々の喉を潤しています。」

「実はわたしは、あなたがここへ来る数日前に、この地ではほとんど見られない小鳥に、あなたが来るとの知らせを受けておりました。」

「ファイナは不思議な、それでいて優しい青い目で私を見つめていた。」

「その小鳥は、どうあなたに私達がここへ来ると告げたのですか？もしかしたらそれはわたしではなく、別の誰かかもしれないのに。」

ファイナはにこりと微笑んで付け加えた。

「いいえ。あなたですわ。あなた自身はお気づきではないのかもしれませんが、あなたの額には僅かに星が見えます。その星の中心には、古い文様で風の印があります。」

驚いた表情で私は自分の額を手で探った。そのしぐさを見て、ファイナはまるで冗談でも聞いたかのようにコロコロと笑いながら言った。

「触っても手にはなにも感じられませんわ。きっと、魂に刻まれた不思議な文様なのでしょう。なにか神がかり的な、特別な何かを持った私達にしか見えないものなのですわ。」

同じ人間からこのような言葉を聴くことになるとは。今までのように動物達から頭に直接語りかけられ、『風の精』と言われても、夢を見ているような感じで現実味がなかったが、自分と同じ人間のしかも巫女からこのような言葉を聴くと、なにやら突然夢が現実になったかのように感じられた。

「お会いできて大変嬉しいですわ。風の加護を受けられし者よ。」

「一体、なんの話しかさっぱりわかりません。わたしはそのような者ではありません。私は単なるヴァルキアの奴隷で、今は任務を期限内に終わらせなければ殺されるだけの、儂い命しか持たぬ、力もない、任務遂行期限が押し迫っていることに怯えているだけのち

つばけなただの人間でしかないのです。」

「その期限はいつなのですか？」

たとえ嘘を言ったとしてもすべて見破られてしまっただろうことを自然に悟ったように、私は正直に話し始めた。

「今日で城を出てから早五日目です。二日後、いやあと一日半後、それよりも短いかもしれない。私達がヴァルキアを旅立った日から七日目までです。それまでにここにいるオソと一緒に、ふたり揃って帰らなければ、わたしの地下牢に閉じ込められている母と、ここにいるオソは・・・そうは聞かされてはいませんがたぶんわたしもでしょう・・・厳しい罰と称して殺されることになります。」

うつむき加減でそう話すと、フィーナは深いため息をついて言った。「なるほど。あなたを覆っている不気味な闇は、ますます色濃くなって来ています。わたしの見たところ、あなた自身は城に帰っても即殺されたりすることはないでしょう。しかしお母様が処罰と称して殺されるのであれば、わが身を切り裂くに等しい苦しみを味わうことになりますね。」

ふたりはしばし、なにも口を利こうとはしなかった。長い沈黙が流れた。ふうわりとした涼しい風が流れた。それとほぼ同時に、フィーナが一大決心をしたように突然立ち上がり、奥にある建物の中に消え、しばらくして戻ってきた。

私はオソを揺り起こし、まだ目を擦っているオソにも急ぎ帰り支度をするように言った。オソは何がなんだかわけがわからないとブチブチ文句を言いつつも、自分が寝すぎたことを少しばかり後悔しているような表情で帰り支度を整えた。

「あと一日半では到底ここから城まで戻ることは不可能でしょう。あなたの中に見える闇は、あなたが思っているより早く、あなたを満たしてしまうかもしれませぬ。残酷な運命が待ち受けていることは間違いありません。あなた方の運命の前に、私は巫女でありなが

らなにもなす術がありません。しかしそれでも私はあなた方に、僅かながらでも手助けをしたくなりました。」

そう言うとフィーナは突如、両手を天に仰ぐように広げるとなにやらブツブツと呪文のようなものを唱えた。辺り一面に咲いた草花がザワザワとそよぎ、そして何事もなかったかのようにまた再び静寂に包まれた。

「これで、あなた方がここにいた時間は戻されました。この神殿の領域に入った時からほんの数分しか時は流れてはいません。」

一体なにが起こったのかわからず、オソと私はふたりでキョロキョロと周りを見た。フィーナが言った通り、ここでかなりの時間を費やしてしまっただけなのに、太陽はまだここへ来た時と同じ位置にあった。フィーナが言った。

「どうか、これから起こるであろう過酷な運命に抗ってください。そしてたとえどんなことがあるとしても、我を忘れてはいけません。我を忘れればそれはそのままあなた自身の破滅になります。」

これほどまでに何度も同じ忠告を受け、私は、一体この先なにがあるのか、漠然とした恐怖に身を包まれた。

三人は来た時と同じ教会の中を通ったが、キース達が死ぬ思いでやつとここまで担ぎあげた荷物はとうに姿を消していた。きつとどこか別のところへ移されたのだろう。あまり深く考えずに、残り僅かな時間を惜しみつつふたりは大急ぎで駆け出した。教会の前まで見送りに来てくれたフィーナに礼と別れの挨拶を交わし、石段を駆け足で降り、門まで来て驚いた。門には、今まで私達が見たこともないような大きい、こぶがふたつ背中についた生き物が居た。

「フィーナ様よりラクダ二頭をあなた方にお貸しするようにとのことで、準備しておりました。」
門番のひとりが言った。

ふたりは不安だった。今まで馬にさえも乗ったことがないふたりが、こんなとてつもない大きい生き物に乗れるかどうか、ましてや意のままに乗りこなすことが出来るわけがないと思った。

「心配なさらぬよう。この生き物は昼夜問わず歩き続けることが出来ます。もしももう少し早く歩かせたいなら生き物の首の辺りをポンポンと軽く二・三度叩いてください。そしてもし、もう少しゆっくり歩かせたいなら、頭から首の後辺りを撫でてください。それだけ覚えていれば止まることなく歩き続けるでしょう。もし止めたい場合は、首にかかっている手綱をゆっくりと引いてみてください。止まってくれます。」

見送りに来てくれたフィーナが言った。

「このラクダは我が都で生まれ育ち、とても丈夫で辛抱強く、たくましい生き物です。そしてとても早く走ることが出来ます。この賢い生き物は自分達でひとりでここへ戻ってこれますから、あなた方の城の近くまで来たらそこで乗り捨てて行って頂いて構いません。このラクダに乗っていけば、早ければ明後日の昼過ぎまでには城に着くことが出来ましょう。」

そしてふたつの皮の袋をふたりにひとつづつ手渡しながらこう付け足した。

「この袋には、ラクダの大好物が入っています。時々はこれを袋ごと飲ませてあげてください。こちらの言うことを聞いてくれます。」
この、ラクダとか言う生き物が好きなものが入っているとと言う袋は、ラクダの背に取り付けてある荷物用フックにかけられた。ふたりは都の兵士にこの大きな生き物に乗せてもらった。

「では、お急ぎなさい。ごきげんよう。」
兵士のうちのひとりが、フィーナの言葉を聞くや否や、ラクダの尻を思いつきり叩いた。ラクダはゆっくりと、しかし確実に歩き始めた。その後ろでフィーナや兵士が手を振っていた。ふたりは再び地獄の砂漠の横断行を始めた。

「……しかしあなたはやはり、運命の流れには逆らえないのでしょうかね……。」
その場を立ち去りながら、フィーナは独り言を呟いた。

ふたりの乗った生き物は歩き続けた。暑さも寒さも気にしないように、ひたすら歩き続けた。そのスピードはまるで馬に乗って走っているのではないかと思わせるほどに早く、そして足並みは正確だった。昼間の暑さで生き物の体からは湯気が出ており、鼻息も荒くなつたが、歩行スピードは衰えることを知らないかのようだった。

ふたりが用を足したい時だけ、教わった通りに生き物に歩くのをやめて貰い、降りて食事をしたり用を足したりした。ただし止めた時には必ずこの生き物に敬意を表し、たぼんたぼんとした皮の袋の口を開け、生き物に与えた。中には何が入っているのかわからなかったが、なにやら異様な匂いが立ちこめ、到底ふたりの口には合わないだろうことがわかった。

ふたりは昼夜問わず、一日のほとんどを生き物の上で過ごした。空を見上げると、今まで歩いてきた時より太陽が自分達に近づいたようにジリジリとした光がふたりの体を焼いた。エレドアを出る時に貰った真新しい白いマントを羽織って暑さを凌いだが、空気がもうもうと熱気を帯びて息苦しくなったため、昼間だけは教えてもらった通り、生き物の頭から首の後を撫でてスローペースにしてもらった。その代わり夜はちよつと早めのスピードで歩いて貰い、昼間にスローになった分の距離を稼いだ。夜は行き同様、昼間とは違って変わって寒さに身が凍るかと思うほどの気温だったが、白いマントは夜の外気をも遮断してくれ、体の下では疲れを知らずに歩いてくれているラクダの体温が非常に暖かく、こぶの間は安定感があったため、ふたりはぐっすり生き物の背の上で眠ることが出来た。

気がつくくと、進行方向には暗雲立ち込める空の向こうに不気味に黒く聳え立つ城がうつすらと見えて来ていた。空には早くも朝日が立ちこめ、夜の間にも冷やされた空気がだんだんと熱気を帯びてくる頃、ふたりは休憩をとることにした。久しぶりとも思える地面の感触はなんだか心地よかった。生き物の背から降りてもなお、生き物の上に乗っているような感覚で、ふたりはしばらくの間はふらふらとした足取りで休憩する場所を確保した。地面は、砂漠の淵に來たと見え、僅かに黄褐色の短い草がところどころに生えていた。

砂漠を抜けた安堵からか、はたまた久しぶりの地面の上に座ったせいか、ふたりは急激な眠気に耐え切れず横になった。ところが私がまんじりともしないうちに、なにか鼻息の荒いものに息を吹きかけられたような感触があり、それと同時になにやら冷たいものが私の頬にくつつついては離れ、離れてはくつついてを繰り返していた。

なにかに無理やり叩き起こされた時のような不機嫌さで私はしぶしぶ目を開けた。するとあの生き物の真っ黒な丸い目が目と鼻の先にあつた。そして目が合うと生き物はひんやりと冷たい鼻を、『もう起きろ』と言わんばかりに私の体の下に潜り込ませようとした。

私は、これはきつと報酬をくれと言う意味に違いない。そう思っ皮の頭陀袋すだぐくろを取り、生き物の鼻先に袋の口を開けて突き出した。しかし生き物はその袋の中に首を突っ込もうとはしなかった。そしてまたしても声が聞こえた。

「あなたは急がなければなりません。」

「なんだって？」

私は慌てて言った。この私の「なんだって？」は、生き物が言ったことに対しての反論ではなく、しゃべるはずのないと思っていた生き物がまたしてもしゃべったことに対しての疑問符だった。

「まさか、またしても・・・お前も私と話が出来るのか？」
つい、すぐ横でオソが眠っていることを忘れて生き物に声をかけた。
しかし生き物からはその後なにひとつ返事が返ってこなかった。相
変わらず黒いまん丸な目で自分を見つめているだけだった。

確かに私はヴァルキア城が見えただけで気分が以前より楽になつて
いた。しかし今は急がなければならぬ時なんだ。私は生き物に対
する疑問を振り払うかのように頭を振って現実に立ち戻ろうとした。
すぐ横ですやすやと眠っているオソを叩き起こし、また生き物の上
に乗って旅路を急ぐことにした。この生き物は、立つと二メートル
くらいの高さになるが、人間が乗ろうとするとたちどころに膝を折
って座り、人間が乗りやすい高さまで身を沈めてくれた。

荷物を生き物にくくりつけ、いざ出発となった時、ふと後方を見る
と、エレドア方面からなにやら黒い煙が立ち昇っているのが見えた。
あれは一体なんだろう・・・？

「おい、あれは一体なんだ？」
私はオソを小突きながら叫んだ。まるでどこか大きな場所が燃えて
いるかのような黒煙が空高く渦巻き、明け始めた空を濁していた。
遠目から見ても、どうやら都が燃えているようだった。私はなんだ
か背筋がぞつとした。自分達が都を出てから一日と経たぬうちに都
はなにか大変な事態に巻き込まれたのではないかと思った。まさか・

・
「あんなでつかい都では、火事なんて珍しいことじゃないんじゃない
いか？気にすることはない。先を急ごうぜ。」
お気楽顔でオソはあくびをしながら眠そうに言った。本当にそんな
のか？水の加護を受けている巫女のお膝元で？私は言い知れぬ不安
でいっぱいになった。しかしここまで離れてしまった後では、自分
達にはもうエレドアに戻ることは出来ない。ヴァルキア城は刻々と

近づいているのだ。自分達が帰るべきところが。

なんとか気にしないようにと思っても、どうしても目が都の方面に向かってしまう。漠然とした不安に駆られながらもなんとかふたりは歩を進める決意を新たにした。とにかく、明日の夜、しかも門が閉まる前に城に着かなければ、母とオソは処罰と称した死刑になるのは確実だ。人質を取られている以上、自分達のやるべきことは城になんとしても期日、期限までに帰ること。それだけだと自分に言い聞かせた。

「なるべく、あの分かれ道辺りまで急いで、分かれ道辺りでこの生き物を都に帰せるようにしよう。この賢い生き物を城にまで連れていくことは出来ないし、連れて行ってもこいつらには辛いことになるだけだろうしな。」

オソは言った。オソはどうやらこの快適な旅が気に入ったらしく、この生き物とはなるべく別れたくないような感情が芽生えていたのかもしれない。しかしあの城のことは自分達が一番よく知っている。もし城まで連れて行くものならきつと、この生き物は乱暴に扱われ、再び都に帰ることも叶わずに土に返ることになりかねない。都の親切にしてくれた人々の恩恵をこんな形で裏切るのは本意ではないことは、オソも私も充分にわかっていた。

ふたりは再び前進した。刻一刻とヴァルキア城は不気味さを放ちながら黒々とした姿を露にした。自分達の『帰るべき場所』とはいえ、外から見るとなんだか威圧されるような感じがして、帰りたくない気持ちも段々と膨らんでいくのがわかった。城に近づくにつれ、砂漠の熱気が少しづつ薄れ、急いでも暑さで息が苦しくなることもなくなってきた。むしろ私は背筋がゾクゾクするような、なんだか異様な不安が胸を締め付けるように感じた。一体この不安はなんだろう。あの、エレドアの方面からあがっている煙が原因だろうか。それとも……

期限最終日、太陽がふたりの真上に来た辺りで、ようやく行きに出会った分かれ道に到着した。ふたりは最後の休憩を取り、ラクダに好物の入った頭陀袋の中身をあげて、さよならを言った。ラクダはふたりがさよならと言つと、言葉がわかったような、寂しげな視線を投げかけてゆっくり、ゆっくりとふたりの顔をちらちらと見ながら元来た道を戻っていった。

ふたりはまた、自分達の足で進んで行かなければならなくなった。生き物に乗っている時は思った以上に距離を稼げていたからまだいい。人間の足はあの生き物よりも何倍も遅いのだ。覚悟を決めてふたりは今まで休んでいた分、自分達の足を働かせようと早歩きで先を急いだ。

急いでいるのに、時は刻々と過ぎて行き、まるで自分達は進んでいないのに時間だけが素通りしているような感覚だった。それでも急がずにはいられない。たとえこの先地獄が待っていようとも。

太陽が役目を終えたように段々と西に近づくにつれ、ふたりは城の上部に人だかりが出来ているのを見て取れるようになった。なにやらわいわいと騒いでおり、まるで祝杯でもあげているような感じだった。

「少なくとも、俺達の帰還を喜んでくれるわけではなさそうだな。」冷静にオソは言った。確かにそうだ。たかが奴隷が任務を無事に遂行し帰還したからと言って大手を振って迎えてくれるような人間はこの城にはいない。そんな当たり前のことも、ここ数日城から離れていた間に記憶の彼方に消し去っていたように思えた。

辺りが暗くなりかけていたちょうどそのとき、ふたりはようやく城

にたどり着いた。まだ門は開いたままだ。だが門の前にもなぜか人だかりが出来ていたのはふたりとも驚いた。

「へえ。この人間も、いいところあるんだな。」

のんきそうにオソは言つと、にこやかに門を通ろうとした。すると目の前に門番が立ちふさがった。

「この城は、お前らのような汚らしいヤツが来るところじゃない。」

「あの、私達はラーズ様の命令で任務に出ている、今日ここに帰ることになっていました。任務は遂行しました。ラーズ様のところへ報告に行かなければなりません。」

すると、態度のどかい門番がなにやらひそひそと話しあつたかと思つと、突然ふたりを縛り上げて言つた。

「ほう。お前達が。あの任務をなあ。任務の話は上から報告が来ている。お前達は縛り上げてラウド様の所へ連れてくるようにとの言いつけだったからこうしたまでだ。ほら、ぐずぐずするんじゃない。お前達はこの先どうあがいたって地獄しかねえんだからよ。」

いやらしい声でケタケタと笑いながら門番は言つた。ふたりは両手を縛られて、まるで罪人のように城の大通りを練り歩く羽目になった。周りの兵士達はみんなニヤニヤと嫌なうすら笑いを浮かべてこちを見てささやきあっている。

乱暴に引つ張られながらふたりはラウドの元へ連れてこられた。ラウドはふたりの匂いが耐え切れないと言つた表情で鼻にハンカチを当てながら言つた。

「お前達が任務を遂行してくれたことをまずは喜ぼう。我々の計画はうまくいった。」

「どついつことですか？」

城に近づくに連れて湧き上がってきた不安の正体が知りたくて、つい私は口を挟んだ。ラウドはニヤリと笑いを浮かべ、話し始めた。

「さすがはラーズ將軍殿だ。あの忌々（いまいま）しい巫女を亡き

者にするために、あのような綿密な計画をなあ。爆薬が仕掛けてあるとも知らず、あの女は貢物を受け取ったのだろう？見る、白の都と謳われたエレドアが崩れ去る様を。」

自分の背後の窓に寄り、ラウドは愉快そうにケタケタと笑った。私はすべてを理解した。自分達があの死の砂漠を横断させられたのも、エレドアからの帰りに背後に昇った黒煙も、すべてはあの水の都を滅ぼす為だった。

「それでは・・・私達はあの白い都を潰す為に・・・あのような任務を・・・。」

「そうだ。あの貢物は中の花に触れるだけで爆発する仕掛けがしてあったのさ。お前達は本当によくやった。褒めて遣わそう。これで心置きなくエレドアを潰せる。民も我らヴァルキアの傘下に喜んで入ることだろう。」

汚い・・・。なんて汚いやり方なんだ・・・。私の額が激しく痛んだ。と同時に突然、部屋の中に稲妻のような大きな光が降ったかと思うと、私の体を中心につむじ風のようなものが湧き上がり、一瞬にして周りに居たラウドや兵士、立てかけてあった勲章のついた盾やランプ、タペストリー、はたまた机までもが壁に叩きつけられた。オソも壁にべったりと背中を付けて震えるしかなかった。周りの兵士達はみんなこの一瞬の出来事に度肝を抜いた。

「ダメ！いけない！」

その時ふいに私の中に誰かの声が響いた。その声を聞いた途端に私は我に返った。そうだ、何度もこの旅の間に聞いたじゃないか。『決して我を忘れてはいけない。』

私が冷静になると同時に、それまで壁に叩きつけられていたありとあらゆるものがドサドサと床に落ちた。ラウドは何が起こったのかわからず、ただその場に立ち尽くすばかりだった。

「捕らえる！」

やっと状況を把握したラウドが周りの兵士に命令した。そして私と

オソは再び捕らえられてしまった。

「なんてやつだ。これはラーヌ様にご報告せねば。」
そう言うとラウドは近くにいた兵士に命令し、報告に行かせた。

ラーヌは憤怒の顔で私達の前に現れた。

「お前が行った行為は許しがたい。よって今すぐに処刑してやる。」
一時の怒りが、私の運命を決定付けてしまった。フィーナが言っていたのはこのことだったのか。後悔の念が私を支配した。私の命はここで終わりか？私は結局母を助けてあげることが、スノウやその他の元の仲間達にも、そしてここまで支え、助けてくれたオソにも何もしてあげることが出来ずに朽ち果てるのか。知らずと悔し涙が零れていた。

私は処刑場へ引き立てられることになった。どこか遠くでこの一部始終を見ているオソの運命はどうなるのだろう。そして私をいつも見守ってくれていた母は、私を失った後にどうなるのだろう。そんなことばかりを考えながら、私は人ごみの中引き立てられていった。周りを取り囲んでいる野次馬のほとんどは兵士で、その兵士の隙間から青ざめた顔のスノウの顔も見えた。私の脳裏にそれまでのことが走馬灯のように浮かんでは消えた。ゲリラの村でスノウとした数々のいたずら、青年時代の戦争、隣に住んでいたマーサの豪快な笑い顔、母の笑顔、つい今しがたまで一緒に辛い旅を支えあって乗り越えてきたパートナーであるオソ、あの清しい水の都にいた暖かい人々、辛い運命に何とか打ち勝つ力を与えてくれた巫女フィーナ。そして、幼少時代にどんないたずらをしてもどんなに厳しく叱っていても、最後にはちゃんと許してくれ、青年時代には支えになり、さまざまなことを教えてくれた偉大なる村長のガラド。すべての人々の思いを、私は裏切ってしまうのか。

気がつくとい私は処刑場にいた。目の前には、そこで幾多の人が処刑

されたであろう面影が残ったギロチンがあった。ラウドが私の傍に近づいてきて言った。

「見る。お前の母親だぞ。最後の時にここへ連れてきてやったんだ。ありがたいと思え。まあ、あの母親にもすぐ後を追って貰うことになるがな。」

ニヤニヤと、いやらしい顔を近づけているラウドなどまるで目に入らないかのように、私は目を上げて前を見た。哀れな母が青ざめた顔で目の前にいるのが見えた。母はラースに捕らえられ、身動きすら出来ずにもがいていた。

「お前はたいしたやつだ。あの砂漠を超え、期限までにここまで帰ってこれたのだからな。しかしこれはなぜお前が持っていた？」

ラースの手には、私の大事な剣グラムリングが握られていた。

「この世のものとも思えぬ輝き、そして炉に入れただけではその輝きを失わず、斬っても曇りひとつも付かない。これはまさに私が持っているにふさわしい剣だと思わないか？」

ラースがそうい終わらないうちに、囚われの身のはずの母が突然ラースの手に握られていた剣を奪い取ろうとした。ラースと母が揉みあいになり、周りに控えていた兵士も母を取り押さえようと集まった。

結局母は捕まってしまい、剣もラースの手に握られたままだったが、母はその揉みあいの中にラースからも兵士からもしこたま殴られ、鞭打たれて倒れこんでしまった。

「やめろおおおおおっ！！」

縛られ、鎖に繋がれたままで私は必死に抵抗した。しかし人間に鎖など切れるはずもなく、無常にもがちゃがちゃと響く音が聞こえるだけだった。しかしその瞬間、信じられないようなことが起こった。私の周りにまたしてもつむじ風が吹いたと同時に、私を繋いでいた鎖が瞬時にして切れたのだ。つむじ風は鎖と同時に、私の背にあった私を縛り付けるための壁をも一緒に吹き飛ばしてしまっていた。

自由になった私の周辺には、粉々になった鎖の破片と石壁の破片が無残に散らばっていた。

再び自由になった私の手足は、母を目の前で痛めつけられて怒りに震えていた。私は母の許へ駆け寄ろうとしたが、グラムリングを手にしたラーズに阻まれてしまった。

「なるほど、面白い。」

ラーズは、まるで新しいおもちゃを発見した時の子供のように、無邪気な顔つきで言った。ラーズは立ったまま剣を構えていった。

「この城の責任者は私だ。お前の大事な者を助けたければ、お前は私を倒さねばならん。お前に私が倒せるかな？あの時とまた同じことになるのではないのか？」

挑発するようにラーズは言った。しかしその瞬間、ラーズの手からグラムリングはガチャリと鈍い音を立てて床に落ちた。ラーズの右手は焼け爛れ、僅かに煙を上げていた。その落ちたグラムリングをすばやく手にし、私はそのままラーズにかかっていった。母親はオロオロとその場を行ったり来たりしていた。何か言いたいが出ない。その葛藤からだろう。

ラーズと私の戦いは、いまや互角だった。今まで眠っていたすべての力が私の怒りに呼応して呼び覚まされていくのを感じた。もはや私には、周りの人々の言葉も耳に入らなくなっていた。静寂の中でただ目の前のラーズと私が打ち合う剣の金属音だけが響いていた。

戦いの最中、突然子供の泣き声があった。ラーズに追い詰められた私のすぐ後の壁で、先ほどのつむじ風で砕けた壁の一部が頭に当たったよう、頭から血を流して泣いている子供がいた。最初にその子供の存在に気がついたのはアルダだった。アルダはなんとか戦いに巻き込まれないように近づいて、子供を助けようと画策していた。

この激しい戦いを避けながらアルダは子供に近づき、安全な場所に誘導しようとしていた。が、同時にラーズの長剣が鋭く突き進んで来ていた。私の後ろには子供を抱えた母アルダがいた。ラーズは私の後ろなど見もせず突進してきた。私はグラムリングでラーズの剣を受け止めた。その瞬間、ラーズの力が僅かに勝り、私の体は支えが利かずに後ろに倒れてしまった。倒れた瞬間私の体は母にぶつかり、母は腰から下の部分を私の体と地面に挟まれて動けなくなってしまうた。怯んだ私に再びラーズは切りつけ、私がその切っ先をよけた瞬間、子供が倒れた。子供はラーズの剣をまともに胸に受けてしまっていた。

目の前は血の海と化した。子供は斬られたと同時に気を失って目を見開いたまま倒れていた。衝撃を受けている私の目の前で、ラーズがまた襲ってきていた。私はまた剣を構えようとしたが一瞬出遅れてしまった。斬られる！そう思った瞬間、私の目の前にアルダが立ちはだかった。そしてそのまま肩折れた。

「かあさんっ！！！！！！！！！！」

私は母親を抱きかかえた。

「かあさんっ！しっかりしろ！かあさん！！」

私は必死に、母に目を開けてくれるようにと叫んだ。母親は涙でぐちゃぐちゃになった私の顔を見つめ、弱弱しく頭を横に振っていた。まるで怒りに任せて突進していた私をたしなめているかのように、いけないことをした子供に向けて言っているかのように首を横に振ると、そのままカクンと頭を落とした。

その瞬間、私の中で何かがパチンツと弾けた。今まで感じたことのない、激しい怒りが私を支配した。黒く激しく、そして熱い何かが私の体中を駆け巡り、猛獣のような声を出して叫んでいた。

その時傍にいた兵士は、まるで私の体だけが巨大化したように感じ

たと言う。そしてその瞬間すべてのものが巨大な竜巻に巻き込まれたと言う。兵士も奴隷も男も女も子供さえも、城のすべての壁が崩壊し、一瞬にして瓦礫の山があちこちに散乱した。

もうその後は誰一人としてこの城の中心の出来事を詳しく語る人間は存在しない。城の外壁まで飛ばされた人々や周辺の村や都の人々は、まるで大きな遠吠えのような、それでいて悲痛な魂の叫びを聞いたかと思うと、城の真ん中から空高くうねりながら渦巻く竜巻が城の中心辺りから空に向かって伸び、まるで空に吸い込まれたように忽然とその姿を消したと言う。後に残ったのは瓦礫の山だけだった。

第二章 第九話 白の都と陰謀（後書き）

この回で、第二章地上編はおしまいです。
次は第二章地獄編です。

第二章 第十話 地の底にて（前書き）

スノウ「とうとうお別れだなキース」

キース「うん。短い人生だった。。。」

スノウ「これからは俺に任せて、安心して成仏してくれ（南無）」

キース「・・・お前、俺を追い出そうとしてないか？」

スノウ「してないしてない。『これからは俺が主役だ！』なんてこれっぽっちも思っていないよw」

キース「・・・」

第二章 第十話 地の底にて

しばらくの間、私は闇の中を漂っていた。なにも見えず、なにも聞こえず、なにも感じず、暑さも寒さも、喉の渴きや空腹感も、なにもかも感じずただ漂っているだけだった。目も見えず、耳も聞こえず、体を動かすことも出来ず、宙に浮かんでいるのかそれとも寝そべっているのか、うつぶせなのか仰向けなのか、それすらもわからず、何も感じないこの空間に私はいた。

そう、あれは夢だったのだ。私が今まで体験してきた過酷な運命、あれは全部夢だったんだ。夢でよかった。私がそう思った次の瞬間、今までなにも聞こえなかった私の耳に、誰かの声が聞こえたような気がした。いや、声ではないのかもしれない。どこかで微かに悲鳴のようなそうでないような、自分の周りでは何かの声があった気がした。気がしただけなのかもしれないがその声がなにか悲痛な叫びのようにも思え、この時やっと、私は自分の意思で周りを見てみようと思つた。

そう決心した瞬間一瞬にして闇は消え、私は元のヴァルキア城の中にいた。周りには瓦礫が積まれており、今までの荘厳な城は跡形も無く消え去っていた。その場でゆっくりと見回してみると、そこには無残に切り裂かれた私の死体があり、私の死体は母の亡骸なきがらを抱くようにして倒れていた。私と母の亡骸の傍には、無残に胸を横に切り裂かれ、すでに息をしていない子供もいた。ラースとラウドの亡骸もあつた。もう姿形がわからぬほどにズタズタに切り裂かれた二人の遺骸いがいは、かろうじて生き残った兵士や奴隷に囲まれていた。

私の中に突如として戦慄が走った。そしてこの事実が私の頭に浸透するまでにしばらくの時間を要した。私は一体何をしてしまったの

だろう。結局は、私が守りたかったものすべてを守れずに死んでしまったのか。何も感じなかったはずの数々の感情や怒り、そして記憶が私の中で蘇り、その時初めて泣いた。私と母の骸むくろの前で思いつきり声を出して泣いた。一体、私は何のために生まれてきたんだろう。一体、私は何のためにあの地獄で耐え抜き、生きてきたんだろう。

どれだけその場で泣いていただろう。時間などどれだけ経ったのかもわからないほど長い沈黙の中で、私はただひたすら泣いていた。止め処なく流れていく涙もそろそろ尽き果てるかと言う頃、私の背後から誰かが来た気配がした。私は後ろを振り向いた。

そこには、眩しく光輝く一人の女性が立っていた。もしかこの人はフィーナか？漠然とだがそう思った。それほどにフィーナに似通っていて、そして美しかった。女性は静かに私に近寄りながら言った。「ようやく私の姿が見えるようになりましたね。あなたが悲嘆にくれている間は、そしてあなたが自分以外のものを見ようとしなければ、永遠にこの暗闇から逃げ出すことは出来ませんでした。気がついてくださってよかったです。」

光輝く女性にそう言われ、私は言葉を返そうとしたが、喉に何か詰まったような感覚でしゃべることが出来ない。声が出ないのだ。無理に声を出そうとすると今度は声のない咳が出るばかりで、思うようにしゃべることの出来ない悔しさでいっぱいになった。

「無理にしゃべろうとしなくても構いません。私はあなたのここでの行動を一部始終見ていました。なのであなたが疑問に思うことにお答えできるかもしれません。」

女性は言葉を続けた。

「あなたは、お母様を殺されたその怒りで、我を忘れて無意識に力を使いました。その力は私も存じ上げない不思議な力ですね。その力はまだ不完全だったのでこの程度の被害で済みましたが、不完全

のまま力の一部を解放したためにコントロールが出来ず、その力の大部分があなたに跳ね返りました。そしてもうすでにご承知の通り、あなたは死んだんです。」

そう、私は死んだ。自分のズタズタになった骸を見た瞬間に悟った。大事だったものすべてを守ることも出来ずに。また私の頬に涙が溢れるのがわかった。

「あなたはまだ、ここから動くことは出来ません。あなたの気持ちはまだ完全に治まっていないからです。心配事がありなのでしょう。どうぞゆっくりその場で成り行きを見守っててください。私はこの場にあなたと共にいますから。心の整理が出来たらまた声も出るようになりましょう。その時には私に質問なりなんなりしていただいて構いません。そのために私はここにいますのですから。」

言われた通り、私はその場でその後の成り行きを見守った。どうやらヴァルキアの大半の兵士は私の起こした竜巻で命を落としたようで、しばらくして様子を見に来たのも、忙しくあちこちを見て回るのも大抵が奴隷だった人々だった。そしてその中にはスノウの姿もあった。そうか、スノウは無事だったのか。よかった。そう思った瞬間また涙が溢れてきた。

「あの者はきつと、この城を再建してくれるでしょう。私の師匠が守護霊として憑いているようですから。」

見るとスノウはあちこちで無残に壊れた場所に蹲り、または立ったまま身動きも出来ない人々になにやら言いつけたりして片付けようとしているように見えた。だが傍にいる女性の言うように、スノウに守護霊がいると聞かされても、私の目にはなににも映らなかった。

「今のあなたの目には、あの者の背後にいる霊の姿は見えません。霊的レベルの差です。あちらのお方はとても高いレベルの方なので。私でさえ、かろうじて見えているだけで完全なお姿は見えていません。ただ、以前私はあの方から一時修行を受けたことがありますので、その立ち居振る舞いやオーラでそう感じるだけなのです。」

「霊的レベルとは？」

この時初めて私は自分がしゃべれるようになったことに気がついた。声が出た。新しい発見を見つけた時のようになったか気分が高揚とじていくのがわかった。

「ようやく声が出ましたね。いや、早い方なのかもしれません。私の時はもう少し時間がかかったように思い起こされます。」
女性は優しく私に笑いかけながら言った。

「霊的レベルとは、魂のレベルのことです。生まれただけの魂はまず中間の地点のレベルにいます。そこからありとあらゆる修行を経て、霊的レベルを上げていく必要があるのです。生前に良い行いをしたものは霊的レベルが上昇し、悪い行いをしたものは下降するシステムになっていきます。私も詳しいことはまだわかりませんが、聞くところによると霊的レベルは全部で八段階あり、そのひとつひとつの段階の中にもさらにさまざまな世界があります。あなた方のわかりやすいように言えば、たとえば一段階（中間の地点ですが）の世界があなた方が生きていた世界で、その中にさまざまな国が点在しているようなものです。あなた自身は今生に於いて世界の一部を見たに過ぎませんが、生前の世界には実にさまざまな世界があるのです。言葉も違えば考え方も違う、肌の色も髪の色も目の色も違う人種が沢山います。霊界もそんなようなものです。一段階の中にも業の^{カルマ}違いで違う国に住んでいる住人が沢山いるのです。そして上や下にも沢山の世界がある。簡単に言えばそんなところですね。」
「なんだか雲をつかむような話だ。混乱する私に女性はさらに付け加えた。」

「まあ、すぐに理解しろと言うのも酷な話ですね。これから段々わかっていくことになりますからご安心ください。」

「つこりと微笑むと、女性はまた静かに視線を目の前の世界に戻した。」

女性の目線に導かれるように、私も視線を生前の世界に戻した。その途端に目に飛び込んできたものは、私の骸の目の前で、生き残っ

た兵士が今までのように奴隷達に向かつて鞭を振るっている姿だった。私の中にまたしても黒い感情が沸きあがってきた。激しく強い、憎しみの怒りだ。

私の中に憎しみの感情が蘇るやいなや、突然傍にいた女性が悲鳴をあげて空に飛び立った。見ると私の体の下からなにやら黒い煙のような、それでいて人のような、手のような顔のような、憎しみのこもった正体不明のものが次々と湧き上がってくるのが見えた。そしてあつという間に私の体を包んでしまった。

黒いものが頭の中に直接語りかけた。「憎いなら殺せ」と。甘く、それでいて冷酷な冷たい感情が私を満たした。私はその黒いもの言うことに即座に従いたくなかった。が、その時、私の骸の傍にあったグラムリングが突如として光を放った。私はその光を浴び、突然現実に引き戻された。そして黒いものの正体を見た。

その黒いものは、さまざまな憎しみを背負った霊であった。私を仲間に取り入れようと地の底から蘇ってきたのだ。私は自分の目の前にいる醜く汚い霊に嫌悪感を抱くと同時に恐怖を感じた。この黒い霊に引き込まれてはいけない。私の心の中の誰かがそう言った。私は必死で黒い影に取り込まれないようにと抵抗したが、すでに私の体はその黒いものに捕らえられており、身動きできなくなってしまっていた。

「やめてくれ!!」

悲痛な叫びと共に、私は必死で抵抗した。とその時、またしてもグラムリングが以前よりも強烈に光りだし、その光におびえるかのよう^{おの}に、黒い影は私の傍を離れ、地中深く戻っていった。息も荒く私が戦^{おの}いたままでその場で動けずにいるのを見て、女性が空から舞い降り、また私の傍に来て言った。

「ああ、一時はどうなることかと。よく追い払えましたね。」

「あの黒い影は一体・・・？」

私は息を整えながら女性に聞いた。

「あの影は、生前に悪い行いをしたものが、いまだその呪縛から離れることが出来ずに、地中深くで彷徨っている霊達です。この場合の悪い行いとは、先ほどお話したカルマのことではなく、人殺しや強姦、盗み、たかりと言ったすべての悪行のことを指します。」

「それがなぜ今、私の前に現れたのです？」

「あなたは先ほど、強い憎しみの情に己を支配されました。その激しい憎しみの感情に呼応して、地の底から蘇ってきたのです。」

「つまり、私がその、いわゆる『悪霊』を呼んでしまったと、そういうことですか。」

女性は静かにコクリと頷いた。私は自分の足元を見た。そして先ほどの黒い影の出てくる様や醜い感情や表情を思い起こし、背筋がゾツとした。

「しかし、あなたはあの悪霊達に打ち勝った。自分の力で、自分に湧いた憎しみの情を捨てたのです。これはとても意義のあることです。」

私は一部始終を思い起こしていた。あの時私は確かに聖剣グラムリングに助けられた。私は自分自身の力で憎しみを抑えたのではない。そしてもしその場にグラムリングがなかったら、私はとつくに地の底へと引き摺られていったことだろう。グラムリングに対する感謝の気持ちと同時に、自分自身の情を自分自身で抑えられなかった自身のふがいなさを恥じた。

「そう。その感情こそがあなたのこれからの糧。あなたはこれから自分自身を見つめ直さなければなりません。」

女性は静かに、まるで私の中に沸きあがった感情がわかるかのよう

に言った。

「あの剣は、どうやらあなたの感情に呼応する働きがあるようです。ね。あなたの中で、ほんのちょっとだけでも黒い影に対して恐怖心が湧いたことでその力の一部が開放され、さらにあなたが強く『黒

い影から開放されたい』と念じたおかげで、剣もまた光を強く放つたようです。『ごらんささい。』

そう言うとき女性は下界（生前の世界）を指差した。先ほど奴隷を痛めつけていた兵士は、グラムリングの放った光を浴びて我を忘れて放心したままその場に立ち尽くしていた。奴隷はスノウに助けられ、放心状態の兵士はその場にいた奴隷に縛り上げられていた。

「あの光には、邪気を払う力があるようですね。すばらしい剣です。」

「

いまだ地面に転がったままのグラムリングを見つめ、女性は言った。私はその聖なる剣を手に取ろうと近寄って手を伸ばしてみたが、私の体は剣をすり抜けてしまった。

「霊となってしまうた今では、いくら聖なる剣といえども、地上にあるものに触れることは出来ません。」

女性が私の行動を見て悲しそうに言った。それならばなんとかして私の知らない人間に持っていかれないようにしなければと、近くで作業を続けていたスノウに近寄った。そして言った。

「スノウ。俺の代わりにお前がグラムリングを持っていてくれ。頼むっ」

スノウは何も聞こえなかったかのように、他の人間に声をかけられそちらへ向かってしまった。私はスノウの周りを漂いながら、必死で叫んでいた。すると、何かに気がついたかのようにスノウが私の骸のあった場所へと歩いてきた。やっと私の声が聞こえたのだ。ほつと安堵の気持ち湧き上がってきた。

ところがスノウはまたしても他の人間に呼ばれ、踝を返して元の位置へ戻ってしまった。なんでなんだ。どうして声が聞こえないんだ。激しい憤りに私はその場で悔しがった。女性は私の悔しがる姿を見て近寄り言った。

「人間には私たちの声は聞こえません。あの剣はきつと悪いように取り計らわれることはないですよ。なんせこの大地の女神ガイア様

のお作りになつたものなのですから。」
私はこの時、自分の忘れていた何かがある気が突然思い起こされるかのような胸騒ぎを感じた。だがそれが一体なんなのか、この時の私には知る術もなかった。

私の骸は母の骸と一緒に丁寧に運ばれ、その体を焼かれ、残った骨はスノウやその他の残った心優しい人間達の手によつて手厚く葬られた。後に墓の前には、『この地を呪縛から救った英雄の眠る墓』と彫られた墓石が置かれた。一見大惨事にもみえるこの状況を作り出してしまった私に対し、なぜスノウがこのような文句を墓石に彫らせたか。それは私はその時知ることにはなかったのだが、どうやら生き残つたもののほとんどが心優しい人間だった現実を見て、これはきつとキースが悪を退治してくれたのだと、一人の正しい心を持つた人間がこの地を平和に導いてくれたのだと、その時生き残つた人間すべてが感じたからだったのだ。一人の英雄が自分の身を犠牲にしてまでもたらしてくれた平和をみんな守っていいこうじゃないか。そんな願いが込められていたようだ。

「そろそろ、私たちもここを離れる時が来たようです。」
私にずっと寄り添っていた女性が言った。その女性の言葉を受け、私は決意にも似た心持ちで、女性に導かれながらその場を離れることにした。

キースの魂が去つた日の夜、一人の男性がキースの墓の前に来た。スノウだった。スノウはただ一人、その場で声も立てずに泣いていた。スノウの腰で、あの聖剣グラムリングが月の光を受けて鈍く光っていた。

女性が先頭に立ち、ふたりはテクテクと歩いてその場を離れた。不

思議なものだ。なぜ私たちは霊体となったというのに空に浮かぶこともせずにこうして歩いているのだろう。次第に手足の感覚も生前と同じように感じる事が出来るようになり、本当に私は死んだのかと訝るほどに生気が満ちていくようだった。そして冷静に見てみると、霊体が二人で歩いて行く様はなんだかシユールで滑稽に思えた。

しばらく歩いて行くと、とある場所で女性はいきなり立ち止まった。そして私の方へ向き直り言った。

「ここからはあなたにとつて、更なる試練とも言える過酷な事態が待ち受けています。まずはあなたをあるお方の所へ案内します。いいですか。決して他のことは考えないでください。そして私の手を決して離さないでください。私の手を離れてしまった場合、あなたは亜空間へと飛ばされてしまいます。それはあなたの、魂の滅亡を意味します。しっかり握っててくださいね。」

そう言うとき女性は私の手を力強く握り締めて目を閉じた。私も釣られるように一緒に目を閉じた。その瞬間私達の体は地中深くへと吸い込まれた。二人のいる場所だけぽっかりと穴が空いたように、二人は足元から吸い込まれ、その勢いに翻弄されながらも、必死で女性の手を離すまいと力を込めた。落ちている間中、私の耳元では気味な声があちこちから響いていた。

どのくらいの時間が流れただろう。そろそろ女性を握る手が痺れ、感覚がなくなり始めた頃、ようやく私達の足は地面についた。今まで下に落ちていたはずなのに地の底に着いた時はドスンと落ちるような感覚ではなく、何かに守られてでもいるかのようにふうわりとした感触で軽くストンと落ちた。恐る恐る目を開けてみて驚いた。そこは地の底に切り貫かれた空間のようで、その空間には鍾乳洞を思わせる柱が立ち並び、あちこちで怒号や悲鳴が響き渡り、目の前にはガランとした空間だけがあった。どこかで火を焚いているかの

ような轟きと地鳴りとも思える不気味な響きが常に足元の地面の下から響いていた。

ふたりは再び歩き出した。あちこち見回してみても、城や建物のようなものはなにひとつ見られず、目の前を歩いている女性以外の人間の気配もしなかった。

しばらく歩いていくと、目の前にはパツクリと大きく口を開けた大きな穴があった。その中は真つ赤な溶岩のようなものに満たされ、そこからこの世の物とも思えぬ唸りがこだまとなって響いてきていた。

穴のすぐ傍に一本の背の低い木があり、枯れた木のように葉もつげず、まるで燻されたように真つ黒だった。その木には、一羽のカラスが羽を休めているかのようにとまっていた。

「お待たせいたしました。連れて参りました。」
女性はカラスの目の前まで来て止まり、丁寧にお辞儀をして言った。その言葉を受けるかのように、カラスが一声鳴くと、目の前にひとりの男性が現れた。背が高く、肌も目も土気色をしており、髪は漆黒のような黒で、髪一本一本から光が発しているかと思えるほど輝いていた。そして着ている服も真つ黒で、手には自身の身長のご二倍はあるかと言う長い鎌を携えていた。鎌は異様な迫力を放ちながら不気味に鈍く光っていた。

女性は、自分の役目はここで終わったとも言おうように、目の前の男性に一礼をして元来た道を歩いて去っていった。後には私一人が男の前に取り残された。その異様な雰囲気を持つ目の前の男性に圧倒されながら、この後私の身に一体何が起こるのかを頭の中で模索していた。

「私はこの地を収めるもの。名はウリエル。その地方で呼び方は様々だが、閻魔えんまと言われる場合もあるしスサノヲともオシリスともまたヤコブと言われることもある。お前にはこの屍天使してんしウリエルの方が親しみやすからう。この地で罪人を裁くのが私の仕事だ。」
大きく見開かれた黒い瞳を私に向け、鋭く睨むかのように見つめてから言葉を続けた。

「お前は生前、多くの者の命を殺めた。その罪は重い。しかし同時に
お前は地上で出会ったほとんどの者に愛され、慈しまれた。結果的にお前は多くの人間を殺めてしまったが、その根源は愛するものを守ろうとする綺麗な心からだ。したがって罪は減じられることになる。」

そうだ。私は悪者であろうとなかろうと、多くの人間を死に追いやってしまったのだ。自分でもわけのわからないその力で。あれほど強烈であれば破壊的な力になるうとは。死の直前に感じたコントロールの利かぬ己の力にいまさらながら恐怖を感じた。

「なるほど。お前は自分のしたことの重大さがわかっているようだ。お前のその額にある紋章はまさしく風の紋章。その力の一部がお前が激しく怒った時に現れた。」

ウリエルはその長い指、長い爪で私の額を指差した。

「風の紋章は、そのものの霊力が高まった状態でないとコントロールが利かぬ。風がそうであるように、激しく強く吹くこともあれば、そよ風のように穏やかなこともある。それをコントロールするためには、お前自身の霊力をあげる必要がある。今までの生はすべて、お前の持つ霊力をあげるための修行だったのだ。しかしお前は使い方を誤った。その罪をお前はこれからのさらなる試練で悔い改めねばならぬ。」

そう言つと、ウリエルは自身の羽織っていた真っ黒なマントを翻した。

私はウリエルの力で、先ほどとはまったく別の場所へと飛ばされたようだった。その地の地面は硬く棘々としており、私の素足にチクチクと刺さった。左右両側には高い山が聳え、その険しい絶壁はこの地から逃げようとするものを阻むかのように立ち塞がっており、正面には地下へと墮ちこんだ断崖があり、断崖の下には赤く燃える溶岩のようなものがボコボコと不気味に泡を立てて沸いていた。断崖の先には細く長く、奥へと続く岬があり、その岬の先には光る何かがあった。周りはすべて、自分と同じようにこの地に飛ばされ、生きる屍のようになった人々があり、その人々は岬の先の光る場所へと導かれるように向かっていた。

私は最初、この人々がどこへ向かっているのか確かめたくなり、人々の波に乗って岬まで歩いて行つた。その距離は、行けども行けどもまだ着かぬと思うほどに遠かった。地面の棘が足に刺さつて思うように歩けず、岬までの距離の長さで僅かに漂う瘴気で体はすぐに疲れ、人混みの多さにうんざりしても、それでも前に行くしかなす術はなかった。

岬に近付くにつれ、周りの人々は先を争つて後に続く者達を蹴散らそうと躍起になっていた。しかしそんな人々もすぐに後から来た者達に邪魔をされ、最後尾に戻されていた。私もなんとか争いの少ないような場所を狙って進んでいくが、どうしても前にいるものと後ろにいるものに邪魔をされて最後尾に戻されてしまい、なかなか前に進めずにいた。

気が遠くなるほど、何度も何度も岬へ行つては戻され、また岬へ戻ることを繰り返した。光るものの正体もわからず、ただあの光だけを求めて歩いた。足はすでに地面の棘と岬の手前での激しい争いの中で傷つき、傷から流れる血は固まってまた新たな傷を作ってはまた血を流し、体は疲労でくたくたになり、争いに巻き込まれた時に

叩きつけられ、全身至る所傷だらけだった。それでも、あの光に向かえばなにかいい事が起こるのではないか、そんな漠然とした希望から、黙々と歩き続けた。

何百回と同じように岬へと歩き、ある時ようやく光の近くまでたどり着くことが出来た。そこで初めて私は光の正体を見た。そこには燦然と輝く水晶があった。しかし水晶に近付けば近付くほど争いは熾烈になり、力の強いものが弱いものを蹴落とすことに夢中になっていた。中でもとりわけ他の人々よりも体の大きなふたりが水晶の手前に立ちはだかり、お互いに助け合うことなどせず後に続く人々を業火の中へと蹴落としていた。だが後から来るもののほとんどは、その狭い岬の縁で足を滑らせ、轟々と沸く真つ赤な業火の中へと消えて行つた。そして業火へ落ちたものは二度と帰ってくることはなかった。完全なる魂の死を目の当たりにし、私は恐怖で震え上がった。

何度も邪魔され何度も傷つきながらもまた岬へ来ては戻され、戻つてはまた岬へと向かう、終わることのない旅を繰り返すうち、私はひとりの女性と思しき人物に目が行つた。その人は、私と同じく何千回、何万回と岬へ行つては戻され、戻つてはまたすぐに岬へと、懸命に何かと戦っているかのように黙々と歩いていた。私の目にはその姿が、意地悪な男共に囲まれながら必死で生きていた母アルダを思い起こさせた。

何万回同じ場所を行ったり来たりしただろう。ある時目の前に、あの女性の姿があった。健気に岬まで来ては争いに巻き込まれそうになっっているその女性を見て、私はなんとか手助けがしたくてたまらなくなつた。その時から私はその女性に気がついた時は、後ろから合図して争っている人々の隙間から前へ行く道を教えたり、またある時は目の前で争っている人々を私の方へ注意をひきつけて道を作

ってあげたりした。女性は始めはなぜこんなことをしてくれるのかと困惑した表情をしていたが、次第に私の気持ちを察したように、私の示す道を迷うことなく進んで行ってくれるようになった。

似ても似つかぬ姿にも関わらず、どこか母を彷彿とさせる雰囲気を持つ彼女を助けながらの行程は、ひとりの時よりずっと私に活力を与えてくれた。何度も何度も行っては戻り、戻ってはまた行くことの繰り返しだったが、彼女を助ける度に、いつも心配ばかりかけ、また私のせいで死に至らしめることになってしまった母を助けてでもいるかのように感じていた。

一体どのくらいの時間が流れたのだろう。もう時間など考えられないくらいの長い時を、この地の底で過ごした。体中どこもかしこも傷付き薄汚れて服も地面に叩きつけられた時の衝撃で破れ、足はとつくに感覚をなくしていた。それでも私はひたすら歩き続けた。彼女の後を追ってただひたすらに。

第二章 第十一話 その後（前書き）

【作者より】

ここからの話は、私のサイトには載せていない部分です。

初めてこの作品で感想を頂きました。ありがとうございます。
こんな下手な文に付き合ってください本当に感謝感謝です><

この物語はまだまだ続きます。頑張って執筆しますので
よろしくお願い致します。

第二章 第十一話 その後

どのくらい時間が流れたのか、何回岬へと行ったのか、そんなことももはや考えることもなく、ただひたすらに水晶に向かつて歩く日々が永遠に続くかと思われた。ここから抜け出したい気持ちはあったが、どうすれば抜け出せるのかもいまだ見出せないまま、時間だけが流れていくようだった。いや、ここではもしかすると時間さえも止まっているのかもしれない。昼もなく、夜もなく、食事も睡眠も取ることなく水も欲しいとも思わず、ただひたすら歩くだけの日々。確実なのは私の素足に刺さるささくれ立った地面の棘の痛みと、目の前を同じように歩いているひとりの女性の存在、ただそれだけだった。

ある時、私は長い時間をかけてようやく何百回目かの水晶の前に来た。あの女性も一緒に。目の前では後に続くものと立ち塞がる二人の男が激しく争っていた。岬は、先へいけば行くほど狭くなり、ふたりの男が立ちはだかっている場所には僅かな隙間しかなく、両側は断崖になり、断崖の下にはまるで私達に手招きするかのような業火が滾たぎっていた。私達は争うことに夢中になっている大男達に気付かれないようになるべく身を低くして近付いた。そして女性に囁いた。

「きつと君なら、あの大男達の間をついて向こうへ行ける。援護するから、俺が合図したらあの隙間から向こうへ行くんだ。」

女性はその言葉を聴いて、信じられないといった表情をし、それから首を横に振り、目に涙を溜めながら言った。

「ダメ……。あなたが行かなきゃ。ずっと私を助けてくれたあなたがああ水晶を取らなきゃいけないわ。今度は私があなたを助ける番よ。私がなんとかしてあのふたりを離れさせるから、あなたが行って。」

私は女性にわざと厳しい顔つきを作った。

「それはダメだ。下手すれば、君はあの業火へ投げ込まれてしまうよ。そうなたら二度と這い上がることは出来なくなる。それに見てごらん。あの大男の股座またぐらの辺りに隙間がある。あそこは俺では通れない。君しか行けないんだよ。」

そこまで言うと、すぐ後ろでも熾烈な争いが始まったため、私はなんとか前の男の股座辺りに彼女を押し出した。

チャンスは来た。私達の後ろで争う者達に気を取られた目の前の大男は、身を低くしながら大男の足元近くまで来ていた私達を通り越し、後ろの争う者達をなぎ払おうと大きく振りかぶったその瞬間を見計らい、彼女を大男の股座に空いた隙間から向こうへ押し出すことに成功した。

彼女は水晶へ向かって走り出した。大男はやつと女性の存在に気が付き、彼女を掴もうと手を伸ばそうとしたが、それを私が阻止した。「早く行くんだ！行って水晶を手に入れるんだ！」

そう叫んだ瞬間、今度は私が大男に捕まれてしまった。必死に抵抗したが、大男の方が私よりも遙かに力が強かった。首を鷲づかみにされ、息が出来ないと思った時、女性は私を助けようとするかのように踝を返してこちらへ向かってきた。私は戻って来た彼女に襲い掛かるうとしたもう一人の男を蹴り倒し、首をすごい力で握っている男の手を振りほどこうと力の限り男のありとあらゆる場所にパンチを入れた。大男が怒りの形相になった。そして……。

私の体は宙に浮き、遠くには先ほどまでいた岬が見えた。女性が私を見てなにやら叫んでいる。大男は女性を掴んだままで勝ち誇ったように大笑いしている。

私の体は、大男によって業火へと投げ込まれてしまったのだ。だが私はそんなことはお構いなしに女性に向けて叫んでいた。

「どうして！どうして水晶を手に入れなかったんだ！俺のことなど構わず、水晶を手に入れていけばよかったのに！！俺を助けようとなんてしななければよかったのに！！」

私は、悔しかった。あと少しであの女性は水晶を手に入れることが出来た。それなのに。結局私はなにひとつやり遂げることが出来ぬまま死んでしまうのだ。しかも今回は完全なる魂の死。もう蘇ることも何も出来ない。この世から抹消されてしまうのだ。地上に於いてもこの深い地の底でも、結局私は大切な人になにひとつしてあげることが出来ぬままで終わるのだ。

業火が私の背に届くかどうかと言う時、突然私の体は光に包まれ、宙に浮いた。そしてゆっくりゆっくりと上昇していった。どこからか声が響いた。

「お前は自分のことを顧みず、他人を助けようとした。その心に免じて、生前の罪を許そう。」

ウリエルの声だ。そうか、私は死なずに済んだのか。ほっと安堵の息が漏れた。自分の身は助かったようだが、彼女は……。急に岬のことが気になり目をやった。

私の罪が許され、光に包まれて上って行く様を見、そしてウリエルの声を聞き取った岬にいた大男は、その手に掴んでいた女性を放し、道を譲って女性を水晶に導いてくれた。女性が水晶に手を触れた瞬間、道を譲ってくれた人間達も皆光に包まれ、罪を許されて天に召されて行った。女性は水晶を無事に手に取り、同じように罪を許されて天に召されて行った。

気がつくくと、私は再びウリエルの前にいた。地の底で受けた傷はすべて治っており、ここへ初めて来た時と同じ状態に戻っていた。

「お前は結局は水晶を手に入れることは出来なかったが、あの水晶

こそは自己犠牲と譲り合いの象徴であり、お前が成した行為と同じものなのだ。本来なら、一人ひとりが譲り合えば誰しもが簡単にあの水晶を手に行うことが出来る。それが出来ずにいたのは、一人ひとりが自分のことしか考えることが出来ず、譲り合う気持ちが起きなかつたせいなのだ。それを気付かせる試練だったのだ。」

「それでは、私は・・・。」
私がウリエルに質問しようとした瞬間、ウリエルが手を挙げて遮った。

「これでお前の生前の罪である、未知の力を解放して多くの人間を犠牲にした罪は消えた。これからのお前はこの国とは別の国へ行つて貰うことになる。」
そう言うときにした大きな鎌を上から下へまるでなにかを斬る時のような動作をした。

ウリエルの鎌で斬られた空間に穴が開いた。

「さあ、あそこをくぐるのだ。そして行くのだ。次の段階へ。」
言われるがまま、私は未知の空間へと入って行った。

まるでトンネルを抜けた時のような、眩しい光を受けて私は未知の空間へと辿り着いた。そこは前にいた場所よりはいくらか明るかったが、雨が降る前のようなどんよりとした明るさだった。私はここで何をすればいいのかわからず、呆然と立ち尽くしていた。

一人の男性が私に近付いてきた。体格は小柄でちょっと太った人だった。その人は、私の案内役らしい。案内されるがままについていくと、大広間と宿舎が一体となったような建物の中に私を連れて行った。その建物は私が入った建物のほかにも沢山並んでおり、中には細い通路の両側に沢山の小さな扉が並んでいた。廊下の一番奥、私が入った扉の真正面には一際大きな扉があり、そこがどうやら大

広間のようだ。案内役の男性は、私をその中のひとつの小さな扉に案内した。

男性の説明では、ここでしばらく霊的な治療と講義が行われるらしい。この地はウリエルの居た階層から見るとひとつ上の階層で、生前宗教的なものを何も教わらず、知らずに生きていた人間（霊）が一時的に入る場所なのだそうだ。この階層にはこのほかにも幾多の国があり、まずはここへ入り、ある程度の時間が経った頃にまた別の国へと移動することになるらしい。

私は部屋へと入った。そこは狭い部屋で、ベッドと机と本棚くらいしかなかった。窓は机の置いてある方面の壁にあったが、相変わらず空は太陽も月も見えるのかと訝るほどに、まるで分厚い雲が覆っているかのように見えた。

ここでの生活は私に、今まで知らなかった物質界（地上）のことを教えてくれた。そしてもちろんこの霊界のことも。霊界は、物質界（地球）を挟んで上下両側に四階層つつあり、今私がいる場所は物質界のすぐ上の第一階層なのだそうだ。そして霊的レベルがあがると、その次の階層へと向かうことが出来るのだそうだ。そして物質界を挟んで下は、いわゆる地獄と言うもので、地獄も上から第一階層から第四階層まであり、ウリエルがいた場所、私がついこの前まで居た地の底らしき場所は物質界のすぐ下の第一階層だったらしいことがわかった。地獄の第四階層とは、宗教でよく伝えられる地獄で、悪魔が住むと言われている場所にはほぼ同等のものだと言うこともわかった。

私は今まで、宗教と言うものの存在すら知らずに生きてきたが、ここで宗教に関してもいろいろな知識を得ることが出来た。天地の始まりから神の存在、悪魔の存在まで、ありとあらゆることを教わっ

た。そしてここで得た知識は、魂の記憶となるため、転生する前に忘却の川の水を飲んでも忘れずに残っているらしいのだ。よく人が『良心』という言葉を使うが、そういうものはここで学んだことが魂の記憶として残っているからで、生きている時に意識せずとも、どこかで思い出すことが出来るらしいのだ。

しばらくの間、私は霊的治療（どこを治療しているのかわからないが）を施されながら過ごした。霊的治療とは、治療師なる人物が私に手を翳すだけなのだが、それでもなんだか体が軽くなったような感覚でとても心地よいものだった。ここを出るまでの期間、毎日この治療を受け、日を追う毎に本当に宙に浮くほどになった。

しばらくすると、私の前にいつぞやの案内人が現れ、私は別の国へと向かった。そこは第一段階の中はあるが、なぜか以前居た場所よりも明るく、前は分厚い雲がかかったようになっていた空も薄雲だけになったかのように、ゆったりとした光に満ち溢れていた。あちこちに木や草花が咲き乱れ、空気も清涼で仄かによい香りが漂っていた。

ここで、私の家（部屋ではなかった！）に案内された。この家は家と呼ぶに相応しく、一軒家で、以前居た部屋の数倍広く、まるでどこかのお金持ちの家のように、ゆったりとしたリビングにゆったりとしたソファが置いてあり、シンプルではあるが風呂も完備されており、ベッドも前の時より幾分ふわっとした感じの眠り心地が良さそうなベッドだった。玄関も広く、机も綺麗で広く、なにもかもが以前とは違っていた。

違うことがもうひとつあった。ここでは、『仕事』があるというのだ。仕事の内容は、地獄へと降りていき、そこで苦しみの中から這い上がりたいと切に願っている人々を救う仕事だというのだ。私は

(不謹慎だが) なんだか他の国や階層を見てみたい興味があったし、生前働くことが身についていたために何もせずじつとしているこの生活に少々嫌気がさしていたこともあって、この仕事を快く承諾することにした。それに、この仕事をすれば、霊的レベルも上がるらしい。ウリエルの言葉が思い起こされる。ウリエルはあの時確かに『霊的レベルをあげれば、自分の力をコントロールすることが出来るようになる』と言った。ならばあの悲しい惨事を繰り返さないためにも、自身を鍛えねばならないのだ。

案内人が、仕事の手続きをすると言い残し、どこかへと向かった後、私の前にひとりの女性が現れた。そう、私が死んでからすぐに私をウリエルのところまで案内してくれたあの女性だ。

「無事にここまで来ることが出来たのですね。」

そういうと、女性は強く私の手を握った。まるで『よくやった』と言ってくれているようで、くすぐったい嬉しさがこみ上げた。

「ありがとうございます。ところで……。」

私はこの女性に、ある質問を投げかけた。

「私が死んだ後の、元居た国が気になります。地上へ降りるわけには行きませんか？それと、母にはどうしても会いたい。会って謝りたい。母はどこにいるのかご存知ありませんか？」

女性は俯き、困ったと言うような表情をしてから答えてくれた。

「あなたのお母様は偉大な方の方です。あなたの今いる場所よりひとつ上のランクの国にいらっしやいます。ただ、今はまだあなたはお母様に会うことは出来ません。霊的レベルが低いせいです。」
「まただ。また霊的レベルだ。私はそれまでの高揚とした気分が沈んでいくのを感じた。」

「ただ、もうひとつの方はなんとかなりそうです。地上へ降りることです。この国まで来たあなたなら、私の力で一時的に地上へ送ることが出来ます。その場で目を瞑ってください。」
「そう言うと、女性はなにやら呪文のようなものを唱え始めた。私の

体が光に包まれ、気がつくとその懐かしいヴァルキア城にいた。

私は、かつて知ったる城の中を漂った。以前は飛ぶことが出来なかったのに、今はちゃんと普通の霊のように飛べた。壁を気にすることもなく、障害物も気にせずにあちこち見て回った。ヴァルキア城は以前の騒々しさなど微塵もなく、奴隷の姿も見当たらず、平和そのものに見えた。城下町も同じく平和のようで、あちこちから子供の笑い声が響いていた。どこもかしこも小奇麗になっており、壊れた瓦礫もはやどこにも残ってはいなかった。

私が城へ戻ると、スノウが城の中から出てきて空を見上げているのが見えた。スノウはあれからこの城の中心となって復旧に尽力したおかげで、今では出世して誰からも一目置かれる身になっていた。スノウの背後から、見慣れぬ女性と、スノウの子供らしき男の子と女の子が現れた。

「おとうさん。なにしてるの？」

男の子はスノウに聞いた。

「ああ、キース。ちよつと昔を思い出していただけだよ。」

キースと聞いて、私はまるで自分が呼ばれた時のように驚いてしまった。どうやらスノウは自分の子供に私の名前をつけたようだ。くすぐったいような照れくさいような不思議な感じだった。

「あのお墓の前の石の人？この国を救った英雄？」

「そっだよ。」

スノウは優しい目をキース少年に向け、抱き上げ、また物憂げに目を空に向けた。

スノウの背後からまた別の男性が現れた。今度は兵士のようなだった。「將軍殿。エレドアの国から使者が参っております。お目通りを願いたいと。」

兵士がそういうと、スノウとスノウの家族は城の中へと戻っていつ

た。エレドアだつて？そういえばあの後エレドアがどうなったかも気になるところだ。私はそのままふわふわとエレドアへ向かった。

あれほど遠く感じたエレドアも、あっという間に行く事が出来た。ヴァルキアとエレドアの間広がる砂漠は相変わらず強い太陽の光に照らされていたが、今の私には太陽の暑さもまったく気にならなかった。

エレドアにつくとすぐさま私は神殿へと向かった。フィーナの安否が気掛かりだったからだ。エレドアの町並みは相変わらず小奇麗で、以前は気がつかなかつたが、街の中心には小川があり、神殿から心地よい音を立てて流れていた。小川の先には池があり、池には噴水があり、気持ち良さそうに水を噴出させていた。

以前の記憶を頼りに、聖堂の奥の扉から向こうへ行こうとしたが、なぜかその扉だけは通ることが出来なかつた。何度体当たりしても扉を貫通することが出来ず、仕方なく屋根へ飛び移って空からの進入を試みたがそれも阻まれ、一番奥の壁から中へ行ってみることにした。

この試みは成功した。壁をすり抜け中を見ると、そこは以前通された水溢れる庭ではなく、大きな石像が部屋いっぱいその体を広げていた。

その石像は美しい女性で、長い髪を足元まで垂らし、優しそうな柔らかない表情をしていた。片手には杖を持ち、もう片方の手は空から降ってきた何かを掬うかのように手のひらを上にし、柔らかな衣を身に纏い、肩から腕にかけて長く細い、それでいて軽そうな衣を絡めていた。

しばらくその石像の美しさに気をとられていると、石像の正面、私の背後の扉が開いた。そしてひとりの女性が不思議そうな顔をして入ってきた。それはまさしくフィーナその人で、まるで私の姿が見えているかのようにまっすぐ私に向かって歩いてきた。

「まあ、こんなところでお会いするとは。」

フィーナは記憶通りの優しい、透き通るような綺麗な声で言った。

「キースさん・・・でしたわね。お久しぶりです。」

私は戸惑った。確かにフィーナは私の顔をじっと見つめ、そして私の名を呼んだ。死んでからすぐに会い、私をここへ連れてきてくれたあの女性が言ったじゃないか。『人間には霊は見えない』と。なのになぜ、フィーナは確信の顔で私を見つめているのだろう。

「ふふ。私は昔から、あなたのような方を見ることが出来たのですよ。これもここにおわす水の神シヴァ様の思し召しなのでしょう。」
そういうと、フィーナの目線は私を通り越し、私の後ろにある石像へと向かった。

「あの子のことが気になっていらしたのですね。残念ながら、私はあなたの姿は見えますが声は聞こえません。なのでどうぞそのことは察してくださいね。ここからは私の独り言ですから、お聞きになるもお帰りになるもあなたにお任せしますわ。」

フィーナはそう言うと、語り始めた。私とオソがこの街を出た後、触らないようにと言いつけていた『貢物』を、次女の誰かがつい箱を開けてしまった。箱を開けた瞬間、何かに捕り憑かれたかのように中にあつた、花を生けた籠を箱の外へ出してしまった。あの花にはなにかさうなるような呪文でも掛けられていたのだろう。次女が花を箱から出した瞬間、その花は爆発し、聖堂と神殿の一部（生前私とオソが寛いだあの池のあつた場所）を破壊されてしまった。それと同時にその真下の、フィーナの家族が住んでいた家も半分ほど吹き飛んでしまった。幸いフィーナと家族は無事だったが、キッチンが破壊されたことで一時は火事があり、大変な騒ぎになった。フィーナの水の力ですぐに火は消し止めたが、復旧作業には半年かか

ったという。そしてその爆発騒ぎが収まるかどうかと言う頃、遠く
の空に蠢くものを見つけた。それはヴァルキア城の辺りから沸きあ
がり、空へと届くほどの巨体をくねらせ、空に上っていったという。
それからしばらくしてヴァルキアからの使いが再び訪れ、和平を結
びたいと言つて来た。最初はフィーナも疑う気持ちもあつたらしい
が、その使いが言うには『ヴァルキアはこれから変わるだろう。傀
儡となつていた王も何かのまじないを掛けられていたようで、それ
まで將軍だつたラーズの死と同時に王は正気を取り戻され、新しい
將軍には城の復旧に尽力したスノウが就任した』とのことだつた。
フィーナは半信半疑でヴァルキアの方角を眺めてみたら、今まで城
の上空にあつた黒い雲がかき消されており、空から明るい日差しが
降り注いでいるのを見て、ヴァルキアがやっと呪縛から開放され、
再出発の日を迎えたことを悟つたのだそうだ。そして両国は和平を
結び、現在（驚いたことに私が死んでからもう10年の月日が流れ
ていたらしい）まで何事もなく平和な日々が続いているのだそうだ。
フィーナの独り言をそこまで聞いて安堵し、私は再び自分のあるべ
き場所へ戻ろうとした。フィーナはそのことをまるで察知したかの
ように、私に向かつて言つた。

「さようなら。またいつかお会いするかもしれません。」

神殿から外へ出ると（今度は不思議と屋根から外へ出ることが出来
た）、ここへ導いてくれた女性が私の帰りを待つてくれている。そ
してまた再びなにやら呪文を唱え、私を元の世界（霊界）へと送っ
てくれた。

「随分長い時間、私は地上にいた気がします。手続きをしてくれ
ている方はもう戻つてこられたのでしょうか。」

私が帰り際に女性に質問すると、女性はにこやかに答えてくれた。

「あなたが地上で過ごした時間はほんの瞬きひとつの間です。安心

なさってください。では。」
そう言うと、女性はいずこかへと姿を消した。

私が再び我が家に入ると、程なくして案内人が帰ってきた。手続きはすべて終わり、明日から仕事に入ることだった。責任者はオ
ルソンと言う体格のいい男性で、明日は初仕事だから家まで向かえ
に来てくれるとのことだった。

私は快適な家で明日に備えるべく、家に完備されていた風呂でシャ
ワーを浴びた。不思議なことに、私がシャワーを浴びて風呂場から
出ると、そこにはキッチンと置まれたバスタオルと、綺麗に洗濯され
た作業着のような服が目の前に置いてあった。そういえば以前いた
国での講堂で聞いたことがある。この霊界は精神世界のため、必要
なものがあれば念じるだけで目の前に現れるのだという。なんとも
便利な世界ではないか。暢のんま気にそんなことを考えつつ、ふわふわの
ベッドに横になり、平和なヴァルキアとエレドアの国を思いながら
眠りについた。

第二章 第十二話 救済活動（前書き）

【作者より】

第二章第十話からこの回までは、以前作ったものの修正作業ではなく、

一から物語そのものを組みなおす作業に入っていました。まさかここまで難産になるとは思ってもいませんでした。

話の続きを楽しみにしていた既得な方がもしいらっしゃいましたら、この場を借りまして、大変遅くなってしまったことをお詫びいたします。

第二章 第十二話 救済活動

その日、私は早くから目が覚めた。外はすでに太陽の眩しい光に覆われ、朝の若々しい香りに満ちていた。今日から『仕事』だ。案内人が言っていたオルソンとか言う人物が来る前に支度をしなければ。

私はベッドから抜け出し、暖かい日差しの中で顔を洗ったり髪を整えたりした。身支度がある程度済むと今度はおなが空いてきた。広いリビングの脇にあるキッチンには、数人が座ることの出来るテーブルがあり、そのテーブルの上には朝食が準備されていた。私が今まで見たこともないような芳^{かぐわ}しい果実や、柔らかい口当たりの水やふわふわのパン、綺麗な真白い皿に乗せられた野菜が所狭しと並べられていた。どれもこれも、今まで食べたことの無いくらいとても美味しいものばかりで、夢中になって平らげた。

私が今まで体験したことのないほどの満腹感に満たされた時、玄関を叩く音がした。私はすぐさま玄関を開けた。

「やあ、おはよう。俺は『救援隊』のリーダーのオルソンだ。よろしく。」

オルソンは、全身筋肉質でやや私より背が高く、目の大きな人だった。私はオルソンと握手し、リビングへと誘った。

「早速だけど、俺達の仕事の説明をするよ。」

オルソンは立ったままで私に説明を始めた。『救援隊』の仕事は、主に地下第一階層より下の国へと向かい、そこで苦しんでいる人々を救済するのだそうだ。ここで言う『苦しんでいる人々』とは、生前の行いのせいで地獄の階層へと落ちてしまった人々の中でも、心から悔い、今の苦しみから逃れたいと本気で思っている人のことだそうだ。

「とにかく、実際に仕事をしてみればわかるさ。じゃあ、メンバー

に会わせるから、俺についてきてくれ。」

そう言われて着いていくと、池のほとりに大きな檜の木があり、そこに他のメンバーが居た。

「ここが我々『救援隊』の集合場所だよ。覚えておいてくれ。仕事前はここに集合してからみんなで行くから。それと、今日は初めてだから俺がパートナーだ。逸れずについてこいよ。」

オルソンが軽快に言った。

『救援隊』メンバーとの挨拶も済み、一同は地獄へと向かって行った。今日は第一階層の国を回るとのことだった。一体どんな場所なのだろう。前日までの期待や興味はこの時の私の胸からはすでに失せ、緊張と不安でいっぱいになっていた。

オルソンに導かれるように下へ下へと降りていくと、空は徐々に厚い雲に覆われ、真つ暗で陰気な世界に変わっていった。

「さあ、着いた。」

オルソンがそう言いながら地面に降りた。私も他のメンバーも今日はここで仕事をするらしい。私は辺りを見回して背筋に冷たいものが走るのを感じた。ここには無数の人が住んでいたが、その風貌はまるで乞食かグールのようで、薄汚れた服を着、その服もボロボロで醜悪だった。ある人は暴力を持って他人が大事に持っていたものを奪い、またある人は他人に悟られるのを異常に怖がりながら何か良い物が落ちていないかと地面に蹲つづくまって探っていたりし、またある人は自分の欲望のままに快樂にその身を委ねて生活している、いわゆるならず者の住む町と化していた。ここではすべての人が自分の快樂のためだけに生き、それを悔い改めることなく永遠を過すごしていた。こんなところで果たして私たちが手を差し伸べるべき『悔い改め』ようともがいている人はいるのだろうか。オルソンに着いて街を散策しながら、私はふと不安になった。

「ここにいる人たちは、みんな『物欲』『性欲』と言った『欲』から、死んだ後でも逃れることが出来ずにいる人たちなんだ。よく見てくださいよ。『欲』に縛られた人を。あの風貌を。たぶんこの人たちは物質界で生きていた時、贅沢をしていい洋服を着て、いい家に住んでたんだろ？でも今はほら、どつちかと言うと乞食と同じ風貌だ。この精神世界では、心の貧しいものは見た目も貧しく、心が清い人は見た目も清くと言う風に变化するんだ。」

これが、生前贅沢をして来た人々の姿なのか。そしてこういう人たちは、生前自分の財産を守ることだけを考え、他人に何かをしてあげようとか、他人を助けるために自分の財産を使うと言った行為を嫌がって来たのだ。こういう人たちは、ここで自分以外の人に何かをしてあげようと言う気にならない限り、この地獄からは抜け出せないのだそうだ。私はなんだかこの人たちが憐れに思えてきた。

周りの人々の話すことを聞くと、皆一様に「なぜ自分がこんなところにいるのか」とか「なぜ自分がこんな姿をしているのか」と不平をもらしてばかりいた。そんな声ばかりを聞いて聊ちやうどかうんざりして来た頃、どこかですすり泣く声を聞いた。オルソンも聞き取ったように、その声の主を探してあちこちを見ていた。

見るとその人は、他の住人から逃れるかのように岩の間に身を隠して泣いていた。オルソンが声を掛けると、その女性は涙ながらに言った。

「私は生前貴族でした。息子は私の勧める女性との縁談を断り、別の女性と結婚すると言い出しました。私はどこの馬の骨ともわからぬ女との付き合いを禁じたのですが、息子は承知しませんでした。私は家名を守るために息子を罫に嵌め、結婚したいと言っていた女性には手切れ金を渡し、息子には結婚の意志は最初から無かったと言い渡して無理やり別れさせました。その後息子は行方不明になり、無理やり別れさせた女も行方知れずになっていて、これは駆け落ち

でもしたかと探偵を雇って方々を探しましたが息子は見つからず、ようやく探し当てた時にはもうすでに息子はこの世にはおらず、人伝に、息子は悲嘆に暮れて亡くなったと聞きました。私は当時は、自業自得だと、息子が私を裏切って他の女と結婚しようとなんかするから早くに死んでしまったのだと思っていました。しかし見てください、この住人を。まるで私のようにではありませんか。家に執着し、浅ましく、人の気持ちをも踏みにじり、人をまったく信用しない、まるで生前の私です。こんなところで毎日を暮らすうち、本当は私が間違っていたのではないか、息子は、本当にあの女を愛していたのではないかと思うようになり、そう思い始めると日増しに息子には悪いことをしたとの自責の念しか浮かばなくなり、こうして物陰で息子に詫びていたのです。」

「では、あなたはご自分が間違っていたと、そうおっしゃるんですか？」

オルソンが聞いた。後で聞いたことだが、後悔している人は、その気持ちを素直に『自分から』打ち明けないことには、たとえ私達が助けたくとも、助けることは出来ないのだそうだ。だからわざとこのような遠まわしな言い方をして、意志を確認したのだそうだ。

「はい。私はあまりにも人を信用しなすぎました。そして最愛の息子をも信用せずに死なせてしまいました。私はその償いをしたいと思います。」

そこまで言くと、女性はまた泣き出した。

「では、あなたがここでするべきことを教えましょう。あなたはここで、人のために何かをしてあげるのです。自分への見返りを考えず、ただその人のために何が出来るのかを考えることです。そうすればじきに罪を許されるはずですよ。」

そこまで言くと、オルソンはその場を去った。私はその場になす術も見つけることが出来ずにただ呆然と立ち尽くしている女性の姿をいつまでも目で追った。

「あの女性は、自分から行動しなければならぬ。たとえそれが自

分自身を傷つけることになるうとも。これからはきつとあの女性にとっては辛く険しい道になる。早く上へ上ることが出来るといいが。

「そうか。ただ悔い改めているだけでなく、悔い改め、そしてそれを実行できなければ救い出すことも出来ない場合もあるのか。私はなんだかあの女性やあの国に住んでいる人が気の毒になった。きつと彼女も機会があれば、生前に悔い改めることも出来たはず。それをせずに死んでしまったために、死してもなおその罪に責め苛まれることになるとは。これこそ生き地獄とも言えるのではないだろうか。私が体験した地の底とはまた別の、精神的な苦行が永遠に続くのだから。」

この後別の国にも行ったが、これと言って収穫はなかった。しばらくしてから私達は自分たちの家のある地上第一階層へと戻った。

「さて、今日の仕事はこれで終わりだ。明日もよろしく。では解散。」
オルソンが軽快にそう言うと、私は一目散に家へと戻った。そしてシャワーを浴びた。第一階層とはいえ地獄の領域に入り、体に瘴気が纏わりついたように感じたからだ。全身をシャワーで綺麗に洗い流した後、すっきりとした開放感に満ち溢れた。

次の日も、また次の日も同じ作業だった。二日目からの私のパートナーはリヤンと言う青年だった。リヤンは私よりも前からこの『救援隊』のメンバーで、私よりも少し霊的レベルが高いのだが、自分を高めるためにとわざわざこの苦難の職に就いているのだという。この尊い人と一緒にになり、数々の国で救いを求めている人を探しては助言をする毎日だった。いつしか私は、この仕事を生きがいに変えてきていた。

『救援隊』での仕事にも慣れ何ヶ月かが経った頃、リヤンの提案で

この日はもう少し深い階層まで足を伸ばすことにした。そこは生前にその好戦的な性格で数々の戦争を引き起こした人々が住むという国だった。戦争好きな人の中でもとりわけリーダーになる人は知略も武力も長けていて、圧倒的な恐怖を持ってこの地を支配していた。

私の目の前で繰り広げられた戦争の悲惨さは思わず目を背けたくなるほどで、物質界での最強の武器である鉄砲や大砲などのものにはなく、みんなが手にしているのは一本の剣のみで、大勢がぶつかりあい、殺し合いをしていた。ただ地上と違ったのは、ここではどんなに剣で突かれても切られても死ぬことがなかった。ただ傷つき倒れるだけで、死ぬことも叶わずにただひたすらに戦い続けるだけの亡者達だった。

「なんて惨い……。」

ここでは、男も女も子供も関係ない。ほとんどのここの住人は、戦争で負けても死ぬことがないからと、半ば安心して人殺しを楽しんでいた。だが斬られた人の痛みは普通に感じるらしく、誰かが斬られる度にあちこちから悲痛な悲鳴が聞こえてきた。無残に斬られた人々はあちこちに転がり、のた打ち回り、動くことも出来ずにいた。その光景はさながら累々と転がる死体の山のようにであった。

そんな中で私達はひとりの男が目にとまった。それは生前ヴァルキアの隊長だったラウドの姿だった。私はしばらくラウドを観察していた。私の心は静止したかのように静まり返り、以前の憎しみも起こらず、ただの傍観者に徹していた。なぜ私の心はこんなにも静まり返っているのだろう。自分でも不思議だった。ラウドはこの戦争の国で傷つき、倒れてボロボロになっていた。ただただ毎日を戦って傷つき、まるで死体の山と見紛うばかりの人々の中に転がっていた。

リヤンが立ち止まっている私に気がつき、傍へ寄って来た。

「どうした？あれは・・・知り合いか？」

「昔の、私の上官だった人です。」

「なにかいわくがあるみたいだな。もしかして、今でも君はあの人のことが許せないのかい？」

私は、このリヤンの質問に躊躇することなく答えた。

「いえ、今はなんとも思っていないです。むしろ、あの人がかわいそうだとさえ思えます。」

「そうか。」

二人はラウドをもつと良く観察しようと思つた。ラウドは今にも消えてしまつのではないかと思えるほど衰弱していた。その憐れな姿を見て、私はいつしか涙をこぼしていた。

「君は、昔の因縁はどうあれ今、あの人を助けたいと、そう思うかい？」

私は小さく頷いた。生前は散々苦しめられたが、この地ではラウドも奴隷の一人のように、力の強いものに虐げられて細々と生きていた。そんな惨めな姿のラウドを見て、私は憐憫の情を感じずにはいられなかったのだ。

「そうか。君は成長したんだね。昔何があつたか知らないが、君の今の気持ちを大事にしたほうがいいね。」

リヤンはそう言うと、にこやかに微笑み、まるで慰めてくれるかのように私の肩をポンポンと優しく叩いた。

ラウドは、地面から起き上がることが出来ず、近くに列を成して進む人々に踏まれながらも必死に何かに執り憑かれたかのように全身を震わせながら起き上がるうとしていた。そして顔を上げた瞬間、私と目が合った。ラウドはハツとした顔で私を見上げた。ラウドの顔からサツと血の気が引くのがわかった。まさか生前自分が虐げていた人物にこんなところで出会うとは、そんな表情だった。

「何しに来た。こんな姿の俺を見て、お前はさぞ楽しいだろうな。」

ラウドは生前と同じく嫌味たらしく言った。しかしその言葉には生前ほどの嘲笑はなく、むしろ惨めになった自分が恥ずかしいとでも言いたげな、悲しい響きに思えた。私は、ラウドのこの言葉に反論もせずただラウドを見つめていた。

私とリヤンが見つめる中、ラウドは再び立ち上がるうとしていた。全身傷だらけで、疲れて蒼白な顔をし、それでもまた戦争の列に戻ろうとしていた。私に見られていることで意地になったのかもしれない。

ラウドはよろよろと立ち上がると、また戦争の列へ消えていった。だが私には、いまやはつきりと聞こえていた。ラウドの心の叫びを。心の中で必死に「助けてくれ」と言っているのを。リヤンもその声を聞きつけたからこそこの辺りに来たのだろうし、もしそうでなくても、なにか見えない力で助けを請うものに引き寄せられたのかもしれない。リヤンと私は頷き合い、再びラウドの近くへと寄って行った。

「ここから抜け出したいか？」

私は唐突にラウドに聞いた。ラウドは最初、私のこの言葉が信じられないと言った顔をし、私をまじまじと見つめたまま動かなかった。「ここから抜け出したいか？」

私はもう一度ラウドに言った。ラウドはしばらく私の顔を眺め、リヤンを見た。

「情けを掛けるとでも言うのか。この俺に。」

ラウドは笑ってはいなかった。真剣な顔をし、この地で今の運命になったことに諦めを感じているようだった。

「俺は生前、多くの人間を虐げて生きてきた。人を罫に嵌め、自分の出世のために人々を苦しめ、踏みにじってきた。そして自由に奴隷達をこき使ってきた。しかしここでは俺が奴隷だ。俺は他の力の

強い者に足蹴にされ、なじられ、傷つけられながら生きている。生前とはまったく逆の立場になったってわけさ。どうだい、笑えるだろう？ 笑いたければ笑うがいいさ。」

そこまで言うと、ラウドは小さく笑いながら大粒の涙を流した。

「俺は一体何をやってたんだ。小さな欲望のために人々を苦しめ、陥れ、人々に憎まれてまでも手に入れたかったものは一体なんだ。 たんだ。」

「これからやり直せばいいじゃないか。」

リヤンが言った。

「いいかい。もし君が、生前の自分の行いを反省する気持ちが少しでもあるなら、この地獄から抜け出すことも出来るんだ。君が本気で抜け出したいと願うなら、やり直すことが出来るんだよ。」

ラウドはつとリヤンの顔を見上げ、涙いっぱいの真剣な眼を私達に向けた。そして思いつめたように言った。

「抜け出したい！ 抜け出したい！ 助けてくれ！ 俺を！ 助けられるものなら！ 助けてくれ！！！」

ラウドはそう言うともたうつつ伏せになって全身を震わせながら咽び泣いた。

「いいかい。ここから抜け出しても、あなたを待ち受けているのはここよりも辛い道かもしれない。それでもここから抜け出したいと本気で思うかい？」

ラウドはしばらく泣きながら、リヤンの言った言葉をかみ締めるかのように考え、そして面をゆつくり上げた。

「ああ。俺の出来ることならなんでもすると誓う。」

「その言葉は本当ですね？」

私が再び問うと、ラウドは地べたに正座しなおし、真剣な顔つきで大きく、深く、そして力強く頷いた。それを見た私は、リヤンと二人でラウドを担ぎ上げ、戦争の渦から救い出した。ラウドの体は非常に重く感じ、二人はよろよろしながらラウドを掴んで飛んだ。しばらく飛ぶと、別の救援隊が傷ついた人々を治療していた。私とリ

ヤンは力を合わせてラウドを運ぶと、治療師にラウドの身柄を預けてオルソンに報告に戻った。オルソンの手配で、ラウドは体の治療をした後、悔い改めの国へと向かうことになるらしい。そこで今までの罪を悔い改め、それが出来て初めて罪を許されるのだ。これからのラウドはきつとリヤンが言っていたように茨の道に行くことになるだろう。だがそれを乗り越えることが出来なければ、ラウドにとっての地獄はさらに続くことになる。私は心から、乗り越えて欲しいと願っていた。

私とリヤンはラウドをその場所に残し、その日は我が家へ帰ることにした。地獄の下層へと行ったことで、瘴気を浴びて私の体は疲れ果てており、リヤンがそのことに気付いて私の体を気遣ってくれていたことだった。私はリヤンにお礼を言い、家へと向かった。

家に戻ってシャワーを浴びると、玄関のドアを叩く音がした。急いで着替えをし、玄関の戸を開けた。そこには私を導いてくれた女性がいた。

「あなたに朗報があつて来ました。」

私は女性をリビングへ通し、女性の向かい側に座った。

「あなたは、生前の憎しみを見事に退けましたね。そして心から相手を許し、そして慈悲を与えました。そのことでああなたの霊的レベルが上がリ、お母様に会うことが出来るようになりました。」

私はその報告を聞いて飛び上がった。母のことは片時も忘れたことはなかったが、こんなに早く会えることになるとは思ってもいなかった。嬉しさで思わず顔が緩んだ。

「お母様に会いたいのなら、『会いたい』と強く念じてください。」女性に言われるがまま、その場で私は目を瞑り、『母に会いたい』と強く念じた。すると、今まで私の隣には誰もいなかったはずなのに、いつの間にか母がそこにいた。私は嬉しさのあまり母に抱きついた。母も涙を流しながら私を強く抱擁してくれた。

「親子の対面を見事果たせましたね。では、私はこれで失礼します。あとは水入らずでごゆっくり。」
女性がかき消すように消えると、母は涙を流しながら嬉しそうに私を見た。

「辛かったようね。でも、元気そうでよかった。私はずっとあなたの傍にいたのよ。」

突然のことではびっくりする私を尻目に、母が続けて言った。

「生前はあなたには苦労ばかりかけてしまったから、すごく気にしていたのよ。」

信じられないことだが、確かに母は私の目の前で話をしている。生前は口を利くことが出来ずに散々苦労していたのに。しかもその澄んだ声は女性らしい柔らかい声で、私に安らぎさえ与えてくれた。私はしばらく唾然としてしゃべることも出来なかった。そしてやっと言葉を搾り出した。

「かあさん……。しゃべれるように……。なったんだね。びっくりした……。」

母は柔らかくクスクスと笑った。

「ええ。私は事情があつて生前はしゃべることが出来なかったけど、今はちゃんとしゃべれるわ。驚いた？」

私は幸せそうな母の顔を見て、そして声を聞いて、なんだか心の片隅で凍ったままだったものが溶け出すような、不思議な感覚になった。そしてまた泣き出してしまった。私は母に会いたかった。会って、そして大事なことを言わねばならなかった。頭の中で言葉を整理し、ゆっくりと母に言った。

「かあさん。俺は、俺は、かあさんを死に追いやってしまった。俺のせいにかあさんを……。」

そこまで言つと、言葉が喉に詰まったようになってしまい、思うようにしゃべることが出来なくなってしまった。母は私を抱き寄せ、そっとキスをした。

「いいえ。あなたのせいじゃないわ。あなたは頑張った。とても頑

張ったわ。私は幸せだったわ。あなたのような子供を持って。私の子供があなたでよかったわ。キース。愛してるわ。」

私は小さな子供に戻った時のように、母に顔を埋め謝りながら泣いた。そして再び心に誓った。二度と大事な人を不幸な目には合わせはしないと。決して。決して。

私が泣き止むまで、母は私の傍に寄り添いずっと私の頭を撫でてくれていた。空が夕暮れに染まる頃、ようやく私は涙を拭いて再び母の顔を見ることが出来た。母は生前と同じ優しい表情で、私を愛おしそうに見ていた。

その日の夕食は母と一緒にとった。母が出してくれた食事は、いつもより遥かに豪華絢爛なものだった。私は母とふたりで腹がはちきれるかと思うほど食べた。久方ぶりの楽しい夕食だった。今まで口にしたことのない見事な香りのするワインを飲み、ほろ酔い気分になった頃、母からまた新たな情報が入った。それは私の転生に関することだった。

母が言うには、私はここへ来ていろんなことを学び、そして人々を救うための仕事に従事した。その行いが認められ、転生の準備段階に入ることを許されたらしいのだ。そしてそのことはすでに『救援隊』にも知らせが届いているはずで、明日からは転生するために別の場所へと移動することになるとのことだった。

「かあさんも転生するの？」

思わず私は母に聞いた。母は悲しそうな顔をして首を横に振った。

「私はまだここでやることがあるので、しばらくはここにいないことになりそうなの。でも、私はいつまでもあなたの傍にいますわ。忘れないで。」

そう言うと、母は再び私を強く抱きしめてくれた。

夜も更けた頃、母は自分の帰るべき場所へと帰って行った。この上の第二階層に母はいるとのことだった。そして転生した後に、ここでの教訓を忘れることなく過ごせば、きっと私も、再びこの世界に来た時には母と同じ第二階層へと行けるかもしれない。このことは今後の私の新たな励みになった。

次の日、オルソンと無愛想な案内人が私の家へ来た。

「君は今日から転生準備に入るんだってね。おめでとう。よかったじゃないか。頑張れよ。」

私の手を握り締めながらオルソンは軽快に言った。私はオルソンにお礼とリヤンへの言付けを頼んで案内人に導かれて住み慣れた家を出た。

しばらく歩くと、目の前に大きな扉が見えた。案内人はその扉を開け、私を中へと案内した。そこはまさしく転生前に来た所と同じ場所で、目の前にはレテの川が流れており、レテの川にかかる橋を渡ると川の番人が転生する人すべてに川の水を飲ませていた。

いまや人通りも少ないこの場所に、過去私は何度来たことだろう。どこかで見覚えのあるこの川と番人、そして番人の向こうに広がる神殿の中へ入れば、そこからはもう今までとは違う自分になるのだ。今度は一体どんな人物になるのだろうか。この水を飲んでしまえば、キースと言う人間の記憶はなくなってしまう。それがなんとなく寂しく思えた。

レテの川の番人から透き通るグラスになみなみと注がれた七色に光る美しい水を渡され、しばらく魅入っていると、番人が急かすかのように言った。

「やっぱり記憶を消すことを躊躇ためらわれますか？でも、それを飲まなければ転生できませんよ。さあ、早く飲んでください。」

キースと言う人間の記憶がたとえなくなってしまうたとしても、私はきつと忘れない。この地で会ったいろいろな人々、そして母のこ
とを。私は心にそう強く念じ、渡された水を飲み干した。段々と周
りの景色が薄れていき、私は深い暗闇の中へと落ちて行った。

第二章 第十二話 救済活動（後書き）

次回からは第三章に入ります。

第三章 第一話 嵐の予感（前書き）

長らくお待ちいたしました。第三章がようやく始まりました。
この回も、なかなかの難産になりそうな予感がします^^；

第三章 第一話 嵐の予感

私はずっと、深い深い眠りの中にいた。ここはなんだか暖かくて芳しく、まるで冬の寒い朝に自分の暖かな布団の中にいるような、ぬくぬくとした心地よい眠りだった。ただしそこには光がなく、辺り一面闇だった。一体私は今どこにいるのだろう。ここはどこだろう。どうしてここはこんなに暗いのだろう。まるで地の底にいるかのように、どこを見ても真っ暗闇だった。

ある時、どこかから声が聞こえたような気がした。しかし辺りを見回しても相変わらずの闇ばかりが広がっており、声の主の姿も見えなかった。私は再び眠りにつこうとした。その時、今度ははっきりと声が聞こえた。

「起きなさい。目覚めるのです。」
確かに聞こえた。私は暖かい布団から渋谷々出る時のように、ごそごそと体を動かし頭を擡もたげた。途端に眩しい光が私を包んだ。私はゆっくりと目を開けた。

少しずつ周りの景色が見えてきた。まだはつきりと見ることは出来ないが、ここはどうやら草むらの中らしかった。周りは背の高い草に覆われ、まだ陽も高いはずなのにうつそうとしていて薄暗かった。「やっと目覚めましたね。」
最初に聞こえたのと同じ声の主がまた私に話しかけた。いまだに私はこの声の主の存在を知ることが出来なかったが、今までいた暗闇から抜け出し、空気を感じ、風を感じることは私の気分をうきうきと明るくものにした。声の主が言った。

「感じるのです。この大地の鼓動を。風のさざめきを。太陽の光の暖かさを。水のせせらぎを。そしてその眼で見えるのです。目の前で起こっていることすべてを。」

今の私には、声の主の言っている言葉の意味も理解は出来なかったが、まだひんやりと冷たい空気を感じ、暖かい土の感触を楽しみながら、気分が高揚としてくるのを感じた。

長い長い時間を掛けて、私は目の前に広がる世界をようやく見るこ
とが出来たようになった。周りは杉や檜、檜と言った木々がうつそ
うと生い茂り、樹の間からは太陽が見えた。太陽の暖かな光を浴び
ながら、私は懸命に生長したいと思った。

そう、私は樹になったのだ。ここは山の中腹にある森の中。その中
の一本の樹に生命を宿したのだ。私の魂を宿した木は、先が尖った
幅の広い葉をつける落葉樹の榭かしわの木だ。

草と土と木々の香りや風と太陽の光を浴び、私はすくすくと生長し
ていった。生長すると、それまで自分よりも背が高かった草々があ
っという間に小さくなっていった。

前を見下ろすと、山の麓より数キロ離れた場所に小さな村があった。
寒村ではあったが、人々が慎ましく暮らしている風情が見て取れた。
藁葺きの屋根が立ち並び、あちこちからカマドを使う人々の煙が白
く細く天に上っていた。村の向こうにはこの土地を横切るかのように
川が流れており、それは遙か遠くの山から流れ、村の東に広がる
湾に注がれていた。そしてその川の向こうにも城下町らしきものが
あり、城は三階建てで屋根には瓦が敷き詰められた立派な城だった。

ある夜の、まだ冬の気配の抜けきらぬ冷やかな日に、ひとりの青
年が山を登ってきた。この山は人間達にとっては食料をとる恰好の
場所で、野うさぎや狸、イノシシなどを狩るために列をなして登っ
てくる光景はよく目にした。しかしこの青年はたったひとり登っ
てきた。着ているものも粗末なもので武器もなく、しかも今は夜で、

狩りをするには適当な時間でもない。

私達のような木々は、人間になどめつたに心を開くものではない。人間は木々をただの植物だと思っており、自分たちと同じように木にも命が宿っているなどは露にも感じてはいない。自分の存在を認めない者に自分達のことを知ってもらおうなどと考えないのは自然の成り行きとも言えるだろう。この人間もきつと他の人間と同じだろうと思っただからこそ、私は目の前に突然現れた人間に興味を持つこともなく、いつものように深い眠りに落ちようとしていた。

青年はボ口の着物を着ており、足には草履を履き、細い足でこの山まで登り、汗だくになっていた。そして私の足元（根元）に座り、休憩し始めた。しばらくは木々の間から漏れる月や星の光を見つめていたが、ふいに腰辺りから細く削られたものを大事そうに取り出し、丸く割り貫かれた穴に口を当てた。

青年の吹く笛の音色は実に見事で、キラキラとしたその旋律は空気に溶けて体に染み渡るかのように木々の全身を包み込んだ。一呼吸すると音が空気と一緒に外気へと変わり、それが天に登っていくかのように、空気が一段と清涼になるのを感じた。私の周りの木々達も、小鳥や動物達も、みんながみんな、この青年の音色に聞き惚れていた。

突然、青年の笛の音に混じって地面に落ちた枝がポキッと折れる音がした。青年は演奏を止め、ハツとした表情で音のした方向を見た。目の前には、青年と同じかそれよりちょっと下の年頃の女性がいた。この女性が着ている着物はヤクサのものとは違って小奇麗でキチンとしたものに見えた。とても美しい女性で、気立てもよく働き者の様子が伺えた。青年と女性は顔を見合わせるとすぐに抱き合った。

「ヤクサ！会いたかったわ！」

女性が青年に駆け寄って言った。

「僕もだよイツセ。僕がいつも君に会いたいと思っているのを君は知らないだろうね。」

女性を強く抱擁しながら青年が言った。

「わたしもいつも会いたいと思ってるわ。でも……。」

「仕方ないよ。僕らの親同士は仲が悪いし。でもいつかきつと……。」

「ええ、そうね。いつかきつと、仲直りしてくれるわよね。そうしたらわたしたちもいざれ結婚できるようになるかもしれないわ。」

「そうだ。それまでの間、ここでこうして会おう。なに、あの頑固者達だつてきつと仲直りしてくれるさ。それまでの辛抱だよ。」

二人はそれからしばらくの間、片時も離れることなく抱擁しあっていた。そして私の根元に座り、青年は再び笛を奏でた。先ほどの音色も美しかったが、イツセという女性の前での演奏は仄かに色めき立ち、艶ひたつばさがあった。女性も木々も動物も、再びヤクサの笛の音に浸ひたっていた。

夜も更け、外気が冬の気配を帯びて冷えきった頃、ふたりは名残惜しそうに再び手を取り合った。

「幸せな時間はあっという間に過ぎるものね。寂しいわ。」

「僕達は今日までの長い時間辛抱出来たじゃないか。次に会える日までの間だつて辛抱できるさ。半月後の夜にまたここで会おう。約束だ。イツセ」

「ええ、約束よ。必ず会いましょう。」

イツセはそう言うのと、寂しそうに木々の間を縫って山を下っていった。後に残った青年ヤクサも今にも泣き出しそうな表情を堪え、とぼとぼと山を降りていった。

春になったと言っても、山はいまだ雪を残し、長い冬の気配を残し

ていたため、私達植物は、一日のほとんどの時間を眠りに費やしていたが、その間にも、あの青年は幾度となく私の元へ来ては美しい笛の音を響かせていた。このヤクサという青年の心はいつもイツセという女性へと向いているのだろうことは、ヤクサの吹く笛の旋律で計ることが出来る。美しく切ない旋律は空気に溶け、イツセへと届くのだろう。離れていてもふたりの心は強く結ばれていた。ふたりが逢瀬を重ねる日は限られていたが、会えればいつでも黙ってヤクサの笛の音に聞きほれていた。ただいるだけでふたりは幸せそうだった。ふたりの後ろに隠れてみている人物の存在すら気付かぬほどに。

後ろで見ている人物はふたりよりも数段贅沢な着物を着た一人の男性だった。それが何者なのかは、今の私にはまったくわからないことだった。ただその男性はイツセに熱い視線を浴びせたかと思えば、その隣で幸せそうに愛の調べを奏でているヤクサには嫉妬の炎を燃やした目で睨みつけていた。

しばらくふたりの逢瀬は続いた。毎日ではないが時々会っては愛を確かめる恋人同士は、いつか親の反対も退けてふたり一緒になる夢をここで見ていた。しかしある時ヤクサが得意の笛も吹かずになだ手にとつて撫で擦るだけで、終始俯き加減で物思いに耽っていた。「イツセ。実は今日、お城から知らせが来て、船に乗ることになった。」
「言いにくそうに一言一言小刻みにボソボソとヤクサがやっと話始めた。」

「え？ヤクサが船に？ああ、漁船に乗るの？でもすぐ帰ってくるんじゃない？いつも漁は三日くらいで帰ってくるじゃない。」
「たいしたことじゃないと言った口調でイツセが言葉を返した。」

「いや……。違うんだ。そうじゃないんだ。」
思いつめた表情のヤクサを見て、イツセは訃報を聞く時のような真

剣な表情になった。

「最近、漁船が他の地域の船に襲われるって話を聞かなかったかい？」

「聞いたことはあるけど、それとヤクサが船に乗るのとは何か関係があるの？」

大きくため息をつき、そしてイツセの表情を眺めた後にヤクサが言った。

「その、海賊船をこの界隈の海から追い払うための討伐隊が組まれたんだ。そしてその討伐隊になぜか僕の名前が載ったらしいんだ……」

イツセの顔から血の気が引いた。

「どうして……。ヤクサがそんな力仕事には向いてないってことは、村の誰しもが知っていることじゃない。それなのにどうして……」

そこまで言うと、イツセは泣き出してしまった。

「これを……」

そう言うと、ヤクサは自分が手にしていた笛をイツセの手に握らせた。

「僕はもしかして、生きて帰って来れないかもしれない。これを僕の代わりだと思って持っていてくれないか。」

イツセは声も出せないほどに泣きじゃくっていた。面を上げたイツセの顔は月の光に照らされ、涙はイツセの顔で美しく光を反射させ、蒼白な表情とは裏腹にキラキラと輝いていた。イツセはヤクサから手渡された笛を見つめ、そしてヤクサの顔を見て何度も頷いた。

「その笛は、この山に僅かしか生えていない榎の木の枝で作ったものだ。榎の木は昔から、神が宿る木だと言い伝えられている。君を守ってくれるかもしれない。」

ヤクサがそう言うと、ふたりは目の前にある榎の木である私を仰ぎ見た。私はまだ若木であったが、それでも生長すれば15メートルにはなる。人間よりは遥かに大きい。その私の、夜の風にさわさわ

とさざめく枝や葉を、神に願いが届けとばかりにふたりは見つめていた。

夜も更けた頃、イツセは山を下って家路へと向かった。ヤクサはイツセの姿が見えなくなるまでその場に立って愛おしい恋人の背中を見送っていた。そして私の方へ振り返ると、腰に据え付けてあった鉦なたを手にした。ヤクサは私の傍まで来ると思いつめたような顔でいきなり枝を鉦で切り取った。切られた部分からは樹液が流れ、私も痛み悶えるかのように全身を震わせた。

「ごめんなさい。この木の枝でないと……。笛を、新しい笛を作るのにはどうしても必要なんです。許してください。」

ヤクサは私の根元に正座し、神に謝っているかのように深々と頭を下げた。しばらくは土下座したまま地面に向かってぶつぶつと呟いていたが、その後ゆっくり頭を上げその場で枝を削り始めた。外側を丁寧に削って鑢やすりをかけ、中をキリのようなもので割り貫いた。枝を切った時に出た樹液からは強い芳香が漂い、辺り一面に立ち込めていた。切られた私はと言うと、その痛み能耐えかね、全身の枝と言う枝、葉と言う葉すべてが風もないのにさわさわとざわめき、それはしばらくの間続いた。だが樹液はどうやらその傷も治す効果があるらしく、徐々に痛みも収まっていった。私の痛みが完全に収まった頃、ヤクサの笛も出来上がったようだった。以前持っていた笛は細いものだったが、今回使った枝は幾分太いものだったので、出来上がった笛も太いものになった。

出来上がりを見ながらヤクサは笛の出来栄を観察するかのようじつと動かずにいた。きつとイツセのことを思っているのだろう。そう感じながらふと、ヤクサの体に何やら見慣れぬものがくっついて見えた。あれは一体なんだろう。その物体は目に見えるか見えないかのとても小さなもので、黒く丸い形をしていた。その黒い物体は気にしてみればヤクサの体に無数についていた。しかも

ヤクサだけではなく今まで気にしなかったが、私の周りを飛び回っている無数の虫の足にもたくさんついていた。虫たちの足についた黒く丸い物体は、ヤクサの体に止まった時にヤクサへと移り、それが体へと染み込むように見えた。ヤクサはまったく気がついていないようだったが、私には確かにそれが見えた。虫達はその黒い丸い物体を足につけたまま私の体にも無数に止まり、ヤクサの時と同じように私の体にも幹から、枝から、葉から黒い物体が吸収されていたが、不思議とそれは幹深くまで届く前にまるで私の体の中に流れる樹液に溶かされるかのように徐々に小さくなり消えていった。

しかしヤクサの体には段々その黒いものが蓄積していくのが見えた。私はヤクサにそのことを知らせたいとも思ったが、この段階ではその黒い物体が害を成す物なのかそうでない物なのかがわからなかったために、そして口も利けず動けぬこの体ではどうすることも出来ずにいた。

ヤクサは自分が作った笛を口に当てた。そして低く響く笛を奏でた。以前よりは音色も幾分低めになってはいたが、それでも今までと変わらず美しい旋律を響かせて私達を楽しませてくれた。そして不思議なことにヤクサが笛を奏でた途端、ヤクサの中に蓄積されていた黒い物体も徐々に形を小さくし、消えていった。

演奏し終わると、ヤクサは大きなため息をついた。ここへ来た時とはうって変わったすっきりとした顔つきになっていた。今まで胸に痞^{つか}えていたものが解消されたのだらう。私はヤクサの笛に恍惚となりながら、山を降りていくヤクサを見送った。

驚いたことに、私の枝を切り取って笛にし、それをヤクサが持ち帰ったことで、ヤクサの目線からいろいろなことが見えるようになった。ヤクサが今どんな気持ちなのかもわかるようになった。まるで

遠くのを枝を媒体として受信しているかのよう。今まで見えなかった、見ることが出来なかったものがすべて見えることは私にとってはとても嬉しいことだった。

初めて見る村の光景。そこには木はあまりなく、敷石が敷き詰められた道や家が立ち並んでいた。ヤクサの家は村の外れに位置していた。あまり人目には付かないような場所でひっそりと暮らしているようだった。父親は農業を営んでおり、家のすぐ傍にある田畑を耕して作物を作り、それを母親で街へ売りに行くと言う生活だった。ヤクサは、父親の手伝いをしていたが、山でイツセが言っていた通り、力仕事には向いていないらしく、また、内向的な性格で外へ出ても他の人と関わろうとしない息子に母親も愛想を尽かし、行商に行くのも母親がひとりで出かけていくので、実の息子と言えど、実質的には厄介者として見られているようだった。そんなヤクサが唯一心を開ける相手は幼馴染のイツセただ一人であり、この状況があったからこそ、ふたりの心はより強く結ばれたのだろう。

街へ来てすぐ、私はこの村の人々の様子が気になった。と言うのも、この村の人々の体には山の上で見た虫達の足に取り憑いていた黒い物体の大型版のようなものがあつたからだ。それは虫達の運ぶ小さな物体を、本人の気付かぬうちにどんどん体内に吸収して肥大しており、ある程度育つた黒い物体を持つている人間の足元にはいつも影のように地面の奥底から沸きあがる悪意が取り憑いていた。人間達は誰一人として、自分の足に纏わりついているその黒い影の存在すら気付かずに過ごしているのだ。ほとんどの人間がその黒い影を追い払うことが出来ずにいたが、ただひとつだけ、ヤクサの笛だけはこの黒いものを追い払うことが出来た。ヤクサの神がかり的な旋律を聴くと、どの人間にも癒しが与えられ、それと同時に悪意ある影もすると人間の体を離れ、地中深くへと潜っていった。

ヤクサの笛で癒されることを望む村人は常にいたが、大抵の、いわゆる金持ちつばいとても豪華な着物を着ているような人物や大きな家に住んでいる人物などは、ヤクサの笛を逆に煙たがった。笛など吹いている暇があればもつといういろやることがあるだろうと言うのだ。だが私にだけはわかっていた。その手の人物達の体の中には大きく肥大した黒い物体と、それに呼び寄せられた悪意が足元どころかすでにその人物の背中にまで達して、まるで人間を傀儡として悪意あるものが欲望のままに好き勝手に人間達を操っているのを。

悪意にとり憑かれた人物のひとりにイツセの父親もいた。イツセの親は大きな問屋の旦那で、使用人も数多く使っている大店だ。おあだなイツセは母親を早くに亡くし、入れ替わり立ち代わり出入りする継母に育てられたのだった。父親は家庭には一切関知せず、仕事一辺倒の人物だった。ヤクサはこの父親にイツセとの恋仲を知られてからは、貧乏人の息子がこの大店を狙ってイツセに近寄った汚い男として見られていた。

ヤクサが海賊討伐隊に任命されたと言うニュースは村中に噂となつて広がっていた。そしてみな一様になぜヤクサが？と首を傾げていた。そんな村人達の態度にうんざりし、ヤクサは以前よりも人と関わらないように、人となるべく出会わないようにしていた。

ある日、ヤクサの元へひとりの男がやってきた。いつか山でヤクサとイツセを影から嫉妬の眼差しで見っていたあの男だ。

「これでイツセもお前なんかを相手にしなくなるだろうよ。お前はこの航海中に死ぬんだからな。ざまあみる。これでイツセは俺の物になる。まあ、悪く思うなよ。」

ヤクサは驚いて目の前の男を見た。

「なんだって？」

「飲み込みの悪いやつだな。お前みたいなやつがなんでこの船に乗

れたと思う？それは俺がお上に願ったからに決まってるじゃないか。そして運悪くお前はこの討伐の間に死ぬんだ。俺はめでたくイツセと結婚するんだ。そういう筋書きさ。」

男は意地悪く言った。

「つまり、ダイル、君の奸計だったと、そういうのかい？」

「やっとわかったのか。まあ、そういうわけだ。イツセはお前なんかにはもつたいない美人だ。庄屋の息子である俺と所帯を持った方がイツセも幸せだろう。イツセの父親も喜んで俺を二代目にするだろう。これで晴れて厄介払いが出来たってわけだ。あははははっ。」
ダイルはそう言うのと誇らしげに肩で風を切るようにして去って行った。後に残されたヤクサは自分が陥れられた事実をようやくここで知った。なんとしても生きて帰らなければ。強い決意がヤクサを包んだ。

とうとう航海の日が来た。大勢の人々が港に群がり、その中にイツセと思われる人物もいた。みんな口々に討伐隊の人々にエールを送っていた。ほとんどの人々は体格もよく、武芸にも秀でた人間達らしかった。そんな中でただひとり、ヤクサだけはこの荒くれ共の船で何をするために選ばれたのか訝るほどに不釣合いだった。

航海に出てからしばらくは、街で騒がれていた海賊の『か』の字も見当たらないほど平穏だった。誰しもが、『本当に海賊などいるのか』と訝るほどに平穏が続いた。風も順調に吹いており、雲ひとつない天気が続き、船の上ではみんながみんな、何事も起こらずにこの平穏が続くものと思っていた。

船は北へ北へと進み、国境を越えるかどうかと言う頃、ようやく天気が崩れ始めた。空はどんよりと暗く、黒い雲がたち込め、遠目でもわかるほど黒雲の下では雨が降っていた。その雨雲はどんどん船の方へと足を速め、あれよあれよと言う間に船の真上まで来てしま

った。船員達はみな久々の雨に喜び、甲板の上で飛び跳ね、冷たい雨を浴びて浮かれていた。ただひとり、ヤクサを除いては。

黒雲は辺り一面を暗く染め、波は逆巻き泡立ち、荒れ狂っていた。四方八方見渡しても暗い海面が広がるばかりで、まるで迷路に迷い込んだ時のようにどこになにかがあるのか、自分達の船がどこへ向かっているのかもわからなくなり始めた。激しく降る雨が視界を塞ぎ、船員達の目を狂わせ始めてからようやく、浮かれていた船員達も危機感を持つようになった。船の中にまで荒れ狂った波が押し寄せ、甲板すらも水浸しにしていく。船員達は各々バケツやタイヤを持って船の中に入って溜まった海水を船の外へ掻き出す作業に追われていた。ヤクサは船室の中で始めて見る荒海に酔い、恐怖で体がガタガタと震え、船室の奥で蹲って事が静まるのを待つことしか出来なかった。

まさにこの機会を狙いすましていたかのように、真つ暗な雨の中、遠くに一隻の船らしき影が見えた。人々はみな天の助けとばかりにその船に助けを求めて激しく手を振っていた。徐々に真つ黒な船はヤクサの乗った船へと近付いてくる。そしてその船に張つてある帆が見えるくらいにまで近付いた時、その船が噂の海賊船だと気付いた。海賊船の乗組員達は皆手にナイフを持ち、歓声を上げてこちらの船へと飛び移ってきた。仲間の乗組員が海賊に気がついた時にはすでに多数の海賊がこちらの船に乗り移ってきており、戦いなれた戦士達は皆次々と倒されていった。

船に酔って横になっていたヤクサも、この混乱に気がついたが遅かった。船室の小さな窓から外を伺うと、大多数の仲間が捕らえられており、中には果敢に海賊に向かって行って倒され、その場ですぶぬれになりながら息絶えた仲間も大勢見受けられた。

戦う力も持たぬヤクサにはもはやこの状況を切り抜ける手段はなかつた。もうここでダイルが予言したように死んでしまうのか。そんな絶望がヤクサを支配し始めたその時、揺られた拍子に船室の壁に叩きつけられ、何かが背中当たった。その何かのせいで背中に激痛が走った。ヤクサは苦痛の原因になつた何かを手探りで探した。そこには大切な笛があつた。笛を手にした途端、ヤクサの心の中は急に静まり返り、今までの恐怖さえも忘れさせた。そしておもむろに神に祈るかのように静かに笛を吹いてみた。死を覚悟して、自身へのレクイエムを奏でるかのごとく、力の限り吹いた。

するとヤクサの笛に呼応するかのように、突然黒雲に光が走り、鋭い稲妻が鳴り響いた。ヤクサは雷の音をも気にすることもせず、ただ力の限り笛を吹いていた。無我夢中で。その時、ヤクサ本人は気がついてはいなかったが、ヤクサの左手の甲に光るものを見たような気がした。稲妻の形を模した魔方陣のようなものだった。これが何を意味するのか、私はすぐにわかった。なぜか直感でわかったのだ。あれはまさしく雷の紋章。ヤクサは雷の加護を受けて生まれた人間だったのだ。それは私自身の風の紋章と同じもの、元素の加護を受けた魂だけが宿すと言う普通の人間には決して見ることに出来ない紋章なのだ。

ヤクサの左手の甲の雷の紋章が光り輝いた瞬間、海では異変が起きていた。海賊船に大きな雷が落ち、木っ端微塵に砕け散り、荒れ狂う海の中へと徐々に沈んでいった。自分達の船の異変に気がついた海賊達はそれぞれに仲間の乗る船へと引き返して行った。雷を援護するかのように暴風が吹き荒れ、ヤクサの船に移つたままで自分達の船に戻ることが出来なくなった海賊達もほとんどが海に投げ出された。暴風と荒波によって船が流され、次第に海賊船との距離が広がって行き、完全に海賊船が靄の中で暗い海に頭を上にして沈んでしまった頃、ヤクサは自分達が助かったことを悟った。

海賊船との距離が広がるにつれ、ヤクサ達の乗った船は黒雲の範疇から離れ、次第に明るい陽の光が雲の隙間から差し込むのを感じた。嵐の後の海は、再び平穏を取り戻し、助かった船員達は皆一様にそれぞれの無事を喜びあつた。船室で外の様子がわからなかつたヤクサも、周りが明るくなるのを見て、人々の喜び合う声を聞いて笛を吹くのをやめた。甲板に出てみるとあちこちに戦いの傷跡があつた。樽やロープなどが壊れて散乱しており、惜しくも亡くなつてしまつた人々があちこちに転がつていた。遺体は丁寧に一箇所に集められ、布を上から被せ、海から取つた僅かな塩を布の上に乗せた。これがこの地方独特の遺体安置の方法なのだ。船もあちこちが壊れ、船員達は復路を辿つている間中補修に追われた。ヤクサも補修を手伝つたが、手の空いた時には遺体に向かい、鎮魂曲を奏でた。ヤクサの奏でる笛の音は、死んでしまつた魂も、生き延びた人々の心さえも癒してくれた。旋律は風に乗れ、光に溶けて天に登っていくかのようだった。

第三章 第一話 嵐の予感（後書き）

柏 II 中国原産の針葉樹。

榭 II 日本古来より自生する落葉常緑樹。

かしわもちなどに使われる葉は本来下のものですが、字が難しいために『柏』の字が多く使われたものと思われます。小説内で使われている『かしわ』は、日本原産の落葉常緑樹の方で、小説内では『柏』の字を使おうかとも思いましたが、違いがわかる方から苦情などが来るかもしれないとの懸念から、あえて『榭』の字を使わせていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7898f/>

ガイア

2010年10月21日09時51分発行